LA REKONSTRUO

改造

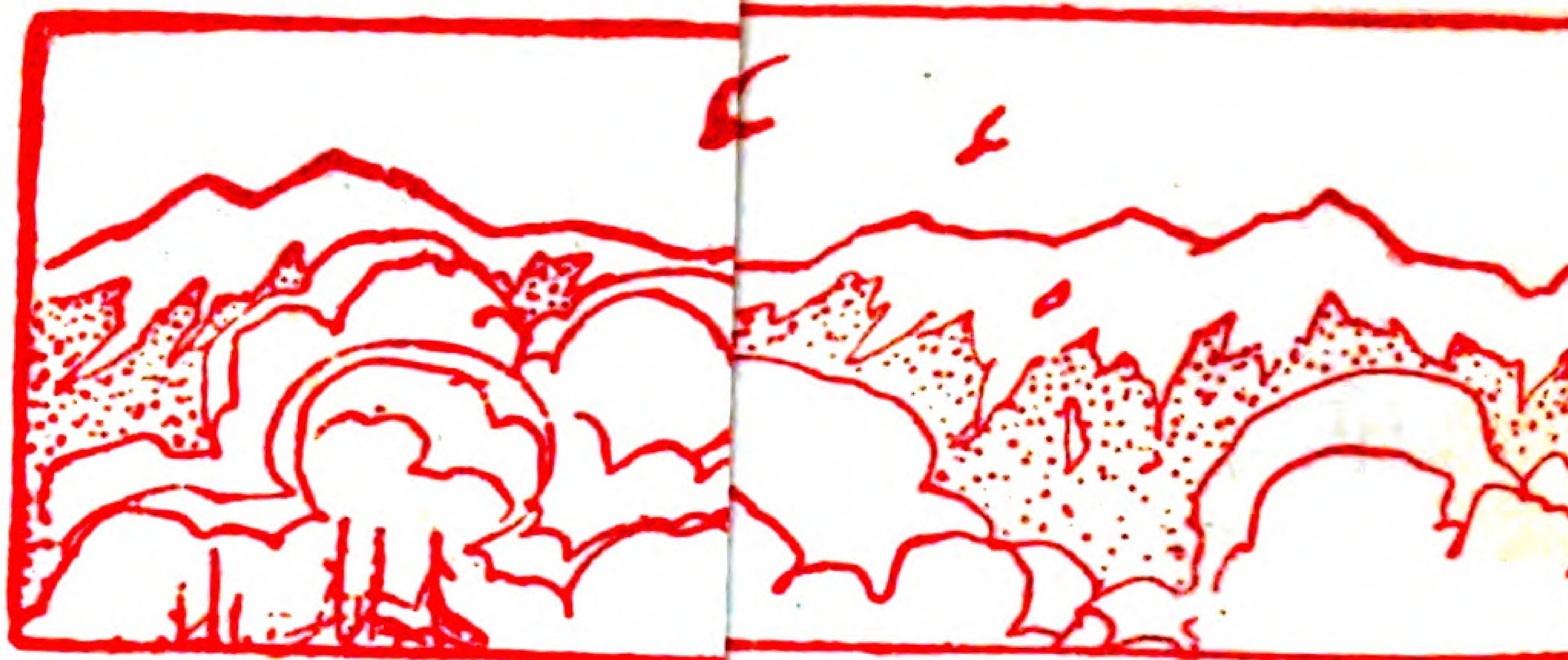
十月号

1922





改造 十月號 目次



石版物色畫〉

第六版 支那文明記

四六判最上製美本
全一册五百餘頁箱入
金貳圓八拾錢
送料十八錢

《史學雜誌評》本書は著者が先に歷遊したる所に據り支那の珍奇なる風俗習慣を描いて精細を極む山東の聖蹟歷代の帝都たりし長安洛陽及武漢南京鎭江蘇州杭州等の名所舊蹟は勿論都市高山大河をも緻密なる觀察を以て流麗なる筆致を揮ふ日本人は多く支那の歷史を知り地名を知り亦支那の詩文に通ぜり此の多少の智識を有して本書に對すれば興味津々として湧くが如し尙卷末には支那の社會事業家族制度國民性論あり內容充實殆んど一の閑文字なく蓋し近來稀に見るの好著なり。

早稻田大學教授 內ケ崎作三郎
新 工藤直太郎

人間文化の出發

四六判上製
金貳圓
送料十二錢

哲學宗教文藝に就いて特異な理解と智識とを有して居る著者が多年の蘊蓄を傾倒し數多の見地より縱橫に新文化を解說評論せる書なり

《內容目次一斑》：人間文化の根本原理　文化發生の階級：人間愛と民衆生活：人間への思想：近代文化と唯物史觀：私有財產の文化的考察：人格の解放と社會主義：人間愛の宗敎的根柢：近代自由主義の限界：社會的不安の諸原因：人間生活の二表現：文藝の民族的基調：知識階級の貧民と人道主義

東京帝國大學教授 島地大等氏序
朝日融溪著

感想 一筋の白き道へ

四六判最上製
正價金壹圓五拾錢
送料十二錢

（親鸞聖人の出現と思想 壹圓八拾錢 送料十二錢 姉妹篇）淋しい[illegible]と歎く前に己の心をみつめねばならぬ悲しいと慨く前に己の心を顧みねばならぬ心の外に世界は無い。自己の心の內にあるものをのみ外界に見るのである。苦悶鬪爭の世に生きてゆかねばならぬ人間は與へられたる「一筋の道」に依てのみ救はれるのである。

東京市神田區保町七番地　大同館發行　振替貯金口座東京八七七貳番

山本有三戲曲集

（忽五版）

山本有三作

天才戲曲家として一作を出すごとに讀者の血を躍らし、そしてその核心をシカと把握して離さないのは山本氏の戲曲である、氏の人生へ對する愛着、舞臺に對する細緻の觀察は篇中の何人をも躍らし泣かさずにはおかない、此書に收められたる五篇の總てが、均しく東都で歡迎せられ、そして舞臺の上では幾萬の人を泣かしめた傑作のみであることは呶々するまでもない「嬰兒殺し」の含蓄多き殺人婦に對する熱情、「坂崎出羽」「津村教授」「生命の冠」に用ゐられた忍從の辛さと困難にはいかなる男兒でも涙ならでは讀むことは出來まい。

内容

津村教授
嬰兒殺し
生命の冠
女親
坂崎出羽守

定價貳圓八拾錢

◇送料六四錢◇
菊判布留製美本

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二



――((改造十月號))――

村芝居への希望

勞農露國と我國と爭はねばならぬ所がどこにある――そう問はれたら誰でも困ることだらう、なぜ十數億の財を糜して戰つた――その良果がどこに現れた――。

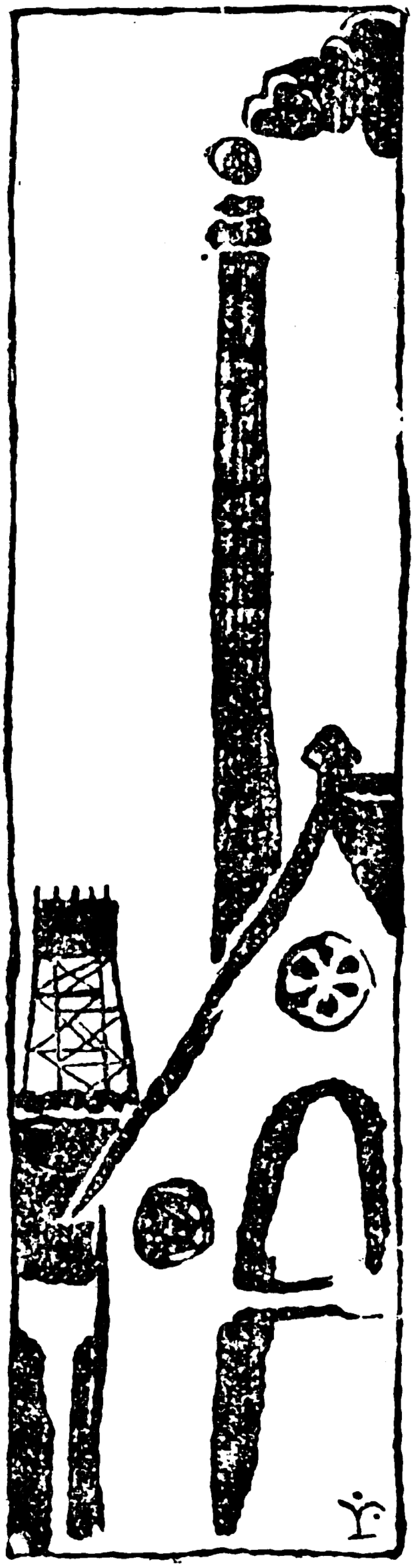
我國民の九割以上は平和を望みつつある、露國との通商再開を希望しつつある、それだのに我全權は會議に秘密會を要請し、そして杓子定木的のことが多いやうに思はれる、かくては公明を尙び、正義に一貫するといふ我國本來の面目を蹂躪するものと云はねばならぬ。

勞農本國及、チタを代表する全權の態度に議すべきものありとしても、我々は何にも彼等は憎惡排斥するほど小人であつてはならぬ、彼が國際の誼を辨へず、國際の禮を乘らなくても我々は馬鹿正直にその誼を徹底的に辨へ、そして飽くまでも眞劍な態度で國際の禮に出づべきだ。近時の英宰相、佛首相等が權謀を弄び、詭計百出して人道、國際道を玩弄しつつあるは我々の不快とし、敵としつつある所だ、馬鹿正直であり、眞劍であり、正義であり、全人的であれば談判に敗亡を招くことはない、たとへ、愚人ども、俗人輩の期待に叛いて一時はそれが批難されてもその論難は正義のため、人道のために甘んじて受くべきだ。

利權問題を圍繞する談判には必らず論難はつきものだ、それを頭痛に病んでの徹底的擬法はなく、人道的救濟の根本策は成り立ち得ない。眞に國民を憶ふ此心があつたならば露國でもヨツフエやヤンソンを代表として出すまじく、また我國も多寡の知れた一局長を特派しないだらう、それはレニンなりトロツキーなり、加藤なりの全責任者が立つだらう、かゝる村相撲を見せつけられつつある兩國民は何だかツマラヌと寧ろ侮蔑の眼を向けつつある、この責任はどこにある。

しかし出來るものなら我政府と勞農政府が國交回復に對する全部の權能を松平とヨツフエに與へて坦懷相許して交涉の進行に努力するのが現在の最大最急の要務だ。

兩國民もこの心で眞面目に後援して欲しい、それでなければまた兩國は今後幾年か國際的に暗夜の行路を續けねばならぬから。



相對性理論

バートランド・ラッセル

物理的世界に關する科學的並に日常の概念に革命を要求する相對性理論は、二つの時期に於て開發せられた、そのうち前者は今日特殊理論と呼ばれ、後者は一般理論と呼ばれる。前說はその當時にあつてこそ驚嘆に値し且つ逆說的(パラドクシカル)に見えたが、後說に比べれば遠い以前のものである。從來の慣例では事の終始を歷史的に說明する、即ち初めに古典的物理學を疑ふに至る經驗的理由――マイケルソン・モーレーの實驗のたぐひ――を述べ、次に特殊理論による此等の難問の解決に及び、更に一般理論に導く純粹に理論的な議論に轉じ、遂にアインスタインの理論が單なる理論以上の或もので

あつたといふ證明を一般公衆に與へた諸觀測——一九一九年の日蝕の際に殊に著しかつた——に達する。余は併し之に反して一般理論を鼓舞した根本的諸觀念の、直接にして非歷史的な解釋を試みやうと思ふ。實際にこの理論を構成する數學的議論は充分に說明せられ得ない、併しそれ等の議論の底に橫はる諸契機は說明せられ得ると思ふ。これが余の試みやうとすることなのである。

二人の觀測者が一事象と看做されるものを知覺する時には、彼等の知覺の間に或種の相似があり、亦或種の差違がある。若し二人の人が第三者の語るのを聽き、且つ彼等の一人が他の一人よりも第三者に近いならば、近い一人は他の一人によつて聞かれるよりも强く稍早い音を聞くであらう。若し二人の人が共に樹の倒れるのを觀て居るならば、彼等はそれを相異つた角度から見るであらう。他の感覺の場合には、相異る人々の知覺の間の差違が常に一層明瞭である。物理學者は專門的に——夢魔に悸えた時はいざ知らず——彼の科學が、眞に物理的世界に起ることに就き報告を與へるもの、乃至少くとも報告を與へ得るものであつて、單に分離せる觀測者の私人的知覺に就いて報告を與へる丈ではないと信じて居る。併て物理學者がこの信念に於て正しいとせられるならば、物理學は物理的過程が總ての觀測者に對して共通に有つて居る諸特徵を取扱ふものでなければならぬ、蓋しかゝる諸特徵のみが物理的事象其自體に屬すると看做され得るからである。これは現象が一觀測者に現はれるまゝに記述せられると、他の觀測者に現はれるまゝに記述せられるとを問はず、現象の諸法則が同一なるべきことを要求する。この單純なる原理が全相對性理論の生成の契機である。

余が同一の物理的過程を知覺する相異る觀測者の知覺間の差違に就いて語る時に、余は種々なる興味や、知性的優劣の如き心理的原因と稱し得可きものに由來する差違を考へて居るのではない。眼さといとか耳ばやいとか云つた樣な生

理的原因に由來する差違を考へて居るのでもない。余は相異る立脚地から撮られた活動寫眞乃至蓄音器のレコードに殘る樣な差違を考へて居るのである。この種類の差違こそ物理的なのであつて、物理學の本來の理論は何れもこれを明かにしなければならぬ。併し同一の物理的事象に關する二つのレコード間の差違を明かにする第一歩は、類似性に外ならぬもの、即ち各々その觀點から見て正確なる二つのレコードの間に共通に存しなければならぬもの、を立てることである。蓋し我々にして之を成し遂げぬうちは、我々は何が物理的事象其自體に屬し何が觀察者の狀態にのみ屬するかを、語り得ないからである。

論じて此處に至る時讀者或は難じて云ふであらう、觀察者の觀點を斟酌するといふ問題は、物理學が總ての時代に於て充分に留意し來つたことである、且つ兎にも角にもコペルニクス以來それは天文學を支配し來つたではないかと。此言葉の中には一面の眞理がある、併し原理といふものは屢々その充分なる結果が抽き出される長い以前に認知せられる。傳統的の物理學の多くは、此原理が總ての物理學者に理論的に認められて居たにも關らず、矢張りこれと兩立し得ないのである。

嘗ては哲學的に考へる人々には不安を起したが、實際に通用する故物理學者には受け容れられた一個の規則があつた。此等の規則は事實上、第二性質は主觀的であるが第一性質はそうではないといふロックの教説(ドクトリン)から生じた規則であつた。この理論に依れば色と音は主觀的ではあるが、根源より知覺者の耳目に至る、一定の速度——場合に依つて音乃至光の速度——で進む波に由つて生ずる。形は知覺の法則に隨つて相異るが、此等の法則は單純であつて數個の目に映つる外形より「眞の」形を推論することを容易にする。更に「眞の」形は物體が我々の近くにある場合には、觸感に依つて之を確めることが出來る。物理的事象の客觀的時間は、事情に隨ひ光、音、乃至神經の流れの傳達の速度を斟酌して時間

を知覺するならば、それから推論することが出來る。これが非專門的な機りにはどんな疑惑があつたにもせよ、實際に物理學者に依つて採用せられた見解であつた。

この見解は物理學者が光のそれに匹敵する速度を取扱ふに至る迄は立派に通用した。其後それが實驗の立證し得ぬ豫想に導くことが見出された。アインスタインの示すところによれば、これは當然先見せらるべきことであつた、蓋し正統物理學の理論に於て觀點に屬するものと事象其自體に屬するものゝ間に引かれた劃線は、實驗が何か誤つたことを示すときに注意せられたに過ぎなかつたけれ共、種々なる矛盾を含んで居たからである。

正統物理學は世界が現代の物理學者が許容するより遙かに堅牢且つ安定に見えた時代に起つた。それは最初に相對的速度の　極めて小なる地球の表面上の事象を取扱つた實際に到達し得る正確さの範圍内では、地球の表面上の相異つた時計と標尺も、若し彼等が綿密に組立てられるならば、時間と距離の測定に適用せられるに當つて一致した結果を生ずる。随つて我々の時空的測定は、測定せられる事物の客觀的特性を表はすと思はれた。しかるに此の考へが、我々と測定せられる事物が極めて小なる相對的速度を有つといふ偶然事に由つて、一つの錯覺に變じて了つた。我々が從來物理的事象の時空的特性と看做して來たものも、大部分は觀測者に依存して居る。その殘餘のものゝみが事象其自體に歸せられ得るに過ぎない、且つこの殘餘のもののみがたまたま先天的（アプリオリ）に眞である或る物理的法則の公式設定に含まれ得るに過ぎない。アインスタインは純粹數學の一用具を手近かに見出した、これは即ちテンソルの理論であつて、彼をして客觀的殘餘の用語に依り表はされ舊法則と近似的に一致する諸法則を見出すことを得しめたものである。アインスタインの法則が舊法則と相違する際にも、彼等が更によく觀測に一致することがこれまでに判明したのである。

客觀的時空の探究中に生ずるたぐひの困難は、地球上の測定よりも天文學に於て容易に理解せられる。遊星の軌道は

道路又は線路の様に空間内に永久に固定せられるものではない。これは種々なる場合に於ける遊星の觀測より推論せられる。水星の軌道は、太陽に相對的にはほゞ楕圓形であるが、地球に相對的には、極めて錯綜した曲線である。水星が某々の時刻に某々の場所にあることを觀測によつて論ずる際には、我々は時刻を地球上の時計に依つて計り、場所を地球上の標尺に基いた計算に依つて計る。時刻の計量に於ては、我々は光の波及する速度を斟酌する、且つ最近に至るまで此方法に依つて、（例へば）金星の子午線通過の開始と或時計の針の或位置との客觀的同時關係を、定立し得るものと考へられて居た。併し乍ら我々がこれでは間違つて居たことが判つた。二つの事件は、正確を保つために當然なす可きあらゆる用心を怠らぬ一觀測者に同時的に現はれるかもしれないが、一方に他の同様に注意深い觀測者が第一の事件が第二の事件に先立つと判斷することもあり得るし、更に第三の觀測者が第二の事件が第一の事件に先立つと判斷することもあり得る　これは三人の觀測者を總てが互に對して相對的に急速に運動して居るものとすれば起ることであらう。それ故に事件の時間的順序は一部分觀測者に依存して居る。それは必ずしも出來事其自體の間の內面的關係ではないのである。

一九二〇年に英語で初めて出版せられた「相對性理論」といふアインスタインの小通俗書は、相離れた事件に關する我々の同時性の判斷が何故に我々の運動狀態に依存しなければならないかを、豫備知識を要求することなしに萬の注意深い讀者に對して明かにした　彼の說明の大意は次の如くである。一列車がその上を一様な速度で走つて居る長い眞直な線路を想像し、且つその線路上の相距る二つの場所に落雷するものと想定せよ。我々は二つの電光の同時的なるや否やを如何にして決定するであらうか。落雷した二點をAとBとせよ。そうすれば總ての觀測者に就いてAに於ける閃光が初めに見られることが起るかもしれない。この場合には我々は此閃光がBに於けるそれよりも早かつたと云ふに躊躇し

ないであらう。或はBに於ける閃光が何處でも初めに見られることが起るかもしれない。この場合には此閃光の方がより早いのである。併しAに近い場所ではAに於ける閃光が初めに見られ、一方にBに近い場所ではBに於ける閃光が初めに見られることも起るかもしれない。これは普通の測定に隨ひ、二つの閃光間の時間が光のAからBに到るに要する時間より少なる時に、起るであらう。この場合には何ものも光より速くは傳はらないといふ事實に由つて一困難が生ずる。他の點では之に類似して居る音の場合には、同一の困難が存しない。何となれば音がそれを超えて聞える短い距離に就ては、光の傳達が實際上瞬間的であるからである。例へば二人が半粁丈離れて互に見える點に立ち、各人が所與の信號によつて短銃を發射すると想定せよ。距離は極めて短い故、各人が二銃の發射を同時に視るならば、其等は殆ど同時的であらう。併し各人は他の一人の報告を彼自身のそれよりも約一秒半も後に聞くであらう。若し何ものも音より速く傳らないとすれば、これは閃光の同時を確めるに事實上存すると同じ困難を、音の同時を確める際に生ずるであらう。音の場合には此等の困難が光の信號を用ひることにより克服せられる。併し光の場合にはそれが或る違つた方法によつて克服せられなければならない、蓋し何物も光より速くは傳らないからである。

二個所A及びBに落雷する線路の例に立歸つて、アインスタインは同時性を定める常識的方法が、長さABの中點Mをとり、Mに於て同一瞬間に見えるならば、二閃光を同時的と云ふに外ならぬことを示した。（同一の場所に於ける事件の同時性に就いてではなく、相異る場所に於ける出來事の同時性に就いてのみ困難が存することは云ふまでもない。）彼の云ふ所によれば我々は之を同時性の定義として採る、即ち二つの事件は正確に彼等の中點に位する觀測者によつて同時に見られるならば同時的である。

これは一見明かな定義の樣に見えるが、奇怪なる結果に到達する。我々は列車内ではなく線路上のM點に位する一觀

測者に對して、AとBに於ける一閃光が此定義に依り同時的であると想定しやう。併し今度は列車内の人々を考察せよ。Aに於ける閃光が列車の後尾の車掌を撃ち、一方にBに於ける閃光が前部の機關手を撃ち、且つスミス氏が列車の中央に坐つて居ると想定せよ。Aより來る閃光は彼に後より追付かなければならぬし、Bより來る閃光は前より彼に出會ふであらう。故に彼はBより來る閃光を初めに見ることになる。この狀態は、二輛の極めて速い機關車が閃光の發した時に平行なる線路上をAとBより出發し、列車の中央に向つて相等しくしかも反對の速度で共に疾走するならば生ずる狀態に、正確に類似して居る。即ちスミス氏がAより來る機關車に出會ふ前に、Bより來る機關車に出會ふことは明かである。故にスミス氏が我々の同時性の定義を受け容れても、線路に對して當て嵌まる時間の代りに列車に對して當て嵌まる時間を用ひるならば、線路上の人々がAとBを同時的と判斷する時にBをAより早いと判斷するであらう。且つ彼が反對の方向に走る一列車内にあつたとするならば、正しく同樣なる理由によりAがBより早いと判斷するであらう。

我々が日常の地球上の現象を取扱つて居る限りは、この背反によつて惹起される困難を度外視することが出來る。含まれて居る距離は小であり、取扱はれる速度は光のそれと較べものにならぬ。更に日常生活に於ては我々は、地球の表面に相對的に固定せられて居る時、物體を固定せられたものと看做すのであつて、「靜止して居る」人々即ち地表に相對的に位置を變へない人々に起ることに測定の基礎を置くより、寧ろ列車内の人々に起ることに測定の基礎を置くといふのは、不合理の樣に見える。併し乍ら物理學に於ては事情が屢々極めて異つて居る「靜止して居る」と看做し得る特種の物體はない。運動は相對的事象であり、二物體の空間的關係の變化であつて、一部は一物體に歸し他の一部は他の一物體に歸するといふ樣に、持分に分割し得ないものである。天文學に含まれて居る距離は屢々極めて大で光もそれをめぐるに數年を要する程である。電子に於て實驗的に觀測せられ得る速度は時に光の速度の半を超える。かくして相對

性理論を實際的に重要なものとする諸の事情が生ずる、實に人々をして初めて舊動力學の理論の論理的缺陷に留意せしめたものは、該學が觀測の結果を說明し得ないといふことであつた。

時間の相對性を說明して後、アインスタインは距離の相對性の說明に進む。矢張り一樣な速度で線路に沿ふて動きつゝある列車の例を採り、その長さを如何に決定す可きかを考へて見やう。若し我々が列車內にあるならば、我々は普通の方法によつてその長さを測定することが出來る。併し若し我々が列車外にあるならば、同時的に列車の反對の二端となる二點A及びBを定め、然る後距離ABを測定しなければならないであらう。我々が列車外にあるならば、我々は勿論同時性をそれが外側の人々に對して現はれるまゝに定義するであらう。併しこれは內側の人々に就いての定義には一致しない。これはAとBの間の距離が列車內の人々によつて測定せられる列車の長さと同一ではないといふことより生ずる結果である。列車外の人々が充分なる正確さを以て測定し得るとすれば、列車內の人々に現はれるより短いと列車を判斷するといふことを事實上示し得るのである。

かくの如く時刻と距離の測定は絕對的ではなくして、事件がそれに起り距離がそれに就いて測られる物體に相對的なる、觀測者の運動に依存するのである。

初めて或る根本的改造の必要を示した實驗的結果は、マイケルソンとモーレーのそれであつた。これは一物體が如何程動いて居やうとも、光の速度は、該物體上の一觀測者に相對的に測られる際に、常に同一なることを立證したものである。この結果は普通の觀念と全く兩立しない。若し諸君が一時間四哩の速力で或道に沿ふて步いて居り、一自動車が一時間四十哩の速力で諸君を追ひ越す（同じ方向に行く）ならば、該自動車の速度は諸君に相對的に一時間三十六哩である。若しそれが諸君に出會ふ（反對の方向に行く）ならば、その相對的速度は一時間四十四哩である。併し光に關し

ては全くそうは行かぬ。光はエーテル中の波より成ると想定せられ、地球はその軌道内をエーテルを通じて動くと想定せられる。若しそうならば、地球上の一點は該點より送り出される光波の中心に止る可きではない。這般の事情は、一匹の蠅が水溜りの表面に觸れ、擴がる輪をなして外方に動く波紋を起す時のそれに類似して居る。此等の輪はその中心を蠅に觸れられた水溜りの一點に有つて居るが、蠅は先へ動いて行つて最早輪の中心には居ない。蠅が水の表面上を動くとしても常に波紋の中心に止る可きであるといふのは、全く不可能の樣に見える。

しかもこの不可能事が、地表の一點より光の信號が送り出される時に、正しく起ることなのである。地球は蠅に相當し、閃光は蠅と水溜の接觸に相當し、外方に進み行く光波は水溜りの上の波紋に相當する。それにも拘らず我々は、我々の地球上の測定に從へば、光の送り出される地表上の一點が依然として光波の中心に止まることを發見した。これは長い間解決せられずに殘つて居た逆說（パラドックス）であつた。特殊相對性理論は之を解くために案出せられ、且つ之を解いたのである。既に述べたことに依つて明かだが、閃光の發出せられた瞬間に偶々速かに通過した彗星上の觀測者は、地球上の觀測者とは別樣に時刻と距離を測るであらう。この差違は特殊相對性理論に從へば、彗星上の觀測者も亦、彼自身を中心とし一樣の速度で外方に擴がると光を看做すが如き、差違に外ならぬ。故に各觀測者は如何樣に運動して居やうとも、總ての方向に於て彼自身に相對的に同一なる光速度を見出すであらう、且つこの速度は他の觀測者が彼自身に相對的に見出すものと同一であらう。この逆說は時間と空間に關する我々の測定の相對性に依つて說明せられる。

アインスタインの事業に魂を入れた相對性原理は、我々が我々の測定の基礎として如何なる物體を採つても、物理學の法則は同一でなければならぬことを云ひ表はす。人類にとつては地球を採るのが自然である。彗星上の人々にとつては（そんな人々があるとすれば）その彗星を採るのが自然であらう。地球上の人々と彗星上の人々は事件の時空間的距離

に關して違つた算定をするであらう。併し此等の差違は物理學の法則に影響することが出來ない、蓋しそれは事件に屬さないで事件に關する我々の見解にのみ屬するからである。若し或る人が青い眼鏡で世界を見、他の人が赤い眼鏡で世界を見るならば、彼等は色に關して別樣に事物を見るであらう。併し此等の差違は彼等が共に記述せんとして居る事件には屬しないであらうし、隨つてかゝる事件の法則にも這入ることが出來ないであらう。同樣に時刻と距離に關する別樣な測定の間の差違も物理的法則に這入ることが出來ない、法則は一觀測者の測定に就いて他の觀測者の測定に就いてと同一である樣なものでなければならぬ。これが相對性原理に外ならないのであつて、自然に關して提出せられるあらゆる法則を試す標準を與へる。若し提出せられる法則が他の觀測者の測定の代入によつて變更せられるならば、その法則は成立不可能である。若しそれが不變であるならば、それが先天的に可能なのであるから、更に經驗的に試して見る丈の値がある。この原理が如何に力強いものとなり來つたかは、驚嘆に餘りある程である。

特殊相對性理論はこの原理を、直線上を一樣な速度で互に相對的に動く物體にのみ適用した。これは主として、エーテルなるものがあれば地球がその中を動きつゝあると考へねばならぬにも關らず、地球上の觀測者によつて測られる光速度が總ての方向に於て同一である、といふ實驗的事實を説明せんとする願望に勵まされたのである。この理論はローレンツ變換即ちローレンツが相對性理論の發案せられる以前經驗的に、それを立證す可き何等の一般的原理もなしに、それに導かれた事柄に到達し且つ總括される。この變換は之をその最も簡單なる形式に還元すれば、長い列車の例に就いて云ひ表すことが出來る。云ひ表はされることは次の通りである、曰く、列車内と列車外線路上の觀測者は、垂直の距離並に線路に直角なる水平の距離に就いては同一の算定をするであらうが、線路に平行の距離並に時間に就いては別樣の算定をするであらうと。vが線路に相對的な列車の速度であり、cが光の速度なる時

$$\gamma=\sqrt{1-\frac{v^2}{c^2}}$$

とせよ。線路上の相異る點に相異なる時刻に起つた二つの事件を採り、列車外の觀測者は二事件間の距離をx時間をtとし、一方に列車内の觀測者は二事件間の距離をx_1時間をt_1とすると想定せよ。然る時は次の式が成り立つ。

$$x_1=\frac{x-vt}{\gamma},\qquad t_1=\frac{t-\frac{vx}{c^2}}{\gamma}$$

若しvがcに比べて極めて小ならば、γは殆ど一であり、隨つて（xが巨大でさへなければ）上式は殆ど普通の動力學のそれになる、即ち次の如くである。

$$x_1=x-vt,\qquad t_1=t$$

併しvが大になるにつれて、傳統的公式からの背離は益々大になる。若しxが大であつてtが小ならば、tが正なる時にt_1が負であるかもしれないこと、即ち問題の二事件をA及びBと呼べば、列車外の觀測者がAがBの前であると判斷するのに、列車内の觀測者はBがAの前であると判斷するかもしれないこと、も亦解るであらう（一方が正しく他方が誤りであると考へてはならない、各々が彼自身の見地から正しいのである、併し事件其自體の間には之に對應する關係がない。若し列車外の觀測者に就いて二事件が同時的（即ち$t=0$）であるならば、$x_1=\frac{x}{\gamma}$が成り立つことも見られるであらう。偖てγはIより小であるから、x_1はxより大であらう。これは列車外の人々が一米と判斷するものが、列車内の人々には一米以上と判斷せられることを意味する。併し若し我々がxとtに就いて方程式を解くならば、我々は

$$x=\frac{x_1+vt_1}{\gamma},\qquad t=\frac{t_1+\frac{vx_1}{c^2}}{\gamma}$$

なることを見出す。即ちx_1とt_1によつて表はされるxとtに就いての公式は、單にvの符號をそれが當然ある可き様に變化することにより、前揭の公式より生ずる。故に列車内の人々が一米と判斷するものは、列車外の人々により一米以上と判斷せらるるであらう。列車内の距離は列車外の人々にはより長く見え、又列車外の距離は列車内の人々にはより長く見える。これは、一觀測者に對して同時的事件と見えるものが他の觀測者には同時的と見えない、随つて一者にとつては單に同時的事件間の距離なるものが、他者にとつては距離と時間經過とに分割せられる、といふ事實に起因する。例へば諸君が列車内の距離を一米の物指で測り、二點abが一米離れて居ることを見出すと想定せよ そうすれば我々は列車内の觀點から見て、二つの同時的事件、即ち物指の一端とaとの符合並に物指の他端とbとの符合を有つ。此等二つの事件に就いては、$x_1=1$ と $t_1=0$ の諸式が成立する。故に前揭の公式に依つて$x=\frac{1}{\gamma}$及び$t=-\frac{v}{c^2\gamma}$、随つてtは零でないのである。測定の仕事は總て二つの同時的事件、即ち我々の物指の二端と測定せられる二點abとの符合を含む故、測定は同時性の相對的性質を享受し、且つ物指の二端が他の觀測者にとつてはaとbに於て同時的でない故、一觀測者にとつて單なる距離の測定に過ぎないものが他の觀測者にとつてはそうでなくなる。

併し乍ら上揭の諸公式がそれに屬する特殊相對性理論には、測定せられることが出來てしかも測定する物體から獨立に見える一つの量がある。先づ上揭の諸公式から次のことが見出されるであらう。

$$x_1^2-c^2t_1^2=x^2-c^2t^2$$

更に一般的に、一體系に於てrとtが二事件間の距離と時間であり、一方r_1とt_1が他の體系に於ける距離と時間ならば、次の様になる。

$$r_1^2-c^2t_1^2=r^2-c^2t^2$$

故に距離rと時間tは共に觀測者に依存するけれども、$r^2-c^2t^2$は、互に相對的なるその運動が一樣な解釋のものなる總ての觀測者に就いて、同一である。若し我々が或る場所から出發して外方に傳はる一光線を考察するならば、光の速度はcなる故光線がt時間內に傳はる距離rはctであり、隨つて光線に沿ふた處なら何處でも$r=ct$且つ$r^2-c^2t^2=0$である。この$r^2-c^2t^2=0$といふ關係はそれ故一光線の二部分、或は光の信號の送出とその受取を連結するものである。若しrがctより大ならば、光は一事件の場所より他の一事件の場所へ、他の一事件が生起した後でなければ傳達することが出來ぬ。よつて、光より速く傳はるものはない故、その一事件は他の一事件に何等の影響をも有つことが出來ない。かゝる場合には二事件が、空間的に分離して居ると云はれる。併し若しrがctより小ならば、光は一事件の場所から他の一事件の場所へ、他の一事件が生起せぬ前に傳達することが出來る。かゝる場合には、一事件が他の一事件に影響し得るのであつて、二事件の分離は「時間的」であると云はれる。二事件の分離が空間的なる時には、彼等がそれに關して同時的である樣な一つの關係―物體が見出され得る。隨つて彼等の分離はこの物體に就いて彼等の距離である。此際には一事件がそれに關して他の一事件の前に來る樣な物體も存するであらうし、一方には他の一事件がそれに關して一事件の前に來る樣な物體も存するであらう。併し分離が時間的なる時には、二事件の中の一つが必ず他の一つの前に來り、且つこの順序は總ての關係―物體に就いて同一である。併し乍らかゝる場合には、一事件より他の事件へ移動することも或る物體に就いて可能である、且つかゝる物體に關しては彼等の空間的距離が零であり、隨つてこの關係―物體に就いては彼等の分離が單に時間の一經過より成るであらう。

併し乍ら上述の全體系は單に特殊相對性理論に屬して居るに過ぎない。今は我々の注意を一般理論に、特殊理論を特別の場合として包容し、且つ一層すばらしい總括的な綜合に外ならぬ一般理論に、轉ずべき時である。

一般理論に於ては我々は、物體の相對的運動が一様な解釋のものであるといふ制約を除き去る。即ちあらゆる想像し得る限りの相對的運動が今や許容せられるのである。一般理論を通俗的に説明するのは、極めて困難であり恐らくは不可能であらう。極めて重要であつてしかもたやすくはない數學的用語が澤山ある。併しその基本的觀念を明かにすることと丈はどうやら出來る。

先づ最初に幾何學が、一つの獨立科學としては存在するを廢め、物理學の中に溶け込んで了つたことは、明白である。此事は既に同時性が相對的であるといふ事實から生ずる。幾何學に於ては一直線乃至一間隔の諸部分が總て同時に存在すると想定される。併し彼等は一觀測者に就いては同時であるとしても、他の觀測者に就いてはそうでないであらう。この困難は、若しそれが單獨に成立するとすれば、克服せられ得ないであらう。併し一直線の全概念は崩壊する。諸君にとつてその部分が皆現に存在して居る直路と見えるものも、他の觀測者にとつてはその部分が次第に存在に入り來る一種の曲路と見えるかもしれない。我々が測定のために必要とする剛體は或る觀測者に就いてのみ剛體なのであつて、他の觀測者に就いては絶えずその總ての次元を變へて居るであらう。或る幾何學が物理學から離れて可能であると我々をして想定せしめるものは、我々の頑固な地球中心の想像に過ぎないのである。

同時性が相對的であるといふ事實は、一物體に關する普通の常識的概念を打ち破る。延長を有する物體は、常識から判斷すれば、總てが同時的に存在する數多の部分より成る。物體が剛體でなければ諸部分の空間的關係は或る時と他の時と同一ではないが、任意の與へられた時には該物體は完全に定まつた形狀を有つと想定せられる。此種の物體の見方は悉く相對性理論によつて亡される。我々は兎角、注意深い測定のためには、生きた鰻よりも一米の物指を使ふ方がよいと考へ易い。これは誤りである。適當な運動狀態にある或る觀測者には鰻も物指が我々に對すると同様に剛體に見え

るであらうし、一方に物指は絶えずのたうちまわつて居ると見えるであらう。かゝる觀測者は事物を誤り見て居るので我々の方がそれを正しく見て居るのであると云ふことも出來ない。かゝる事柄に於ては、見られるものが單に觀測される物理的過程に屬して居るばかりでなく、亦觀測者の立場に屬して居る。空間的測定並に時間的測定は、測定せられる事物の特性を表示しないで、事物の測定者に對する關係を表示する。觀測が物理的世界に關して我々に告げることはそれ故、我々が從來信じて居たよりも更に抽象的なのである。

特殊相對性理論に於て我々は、二つの事件間の間隔が數限りない仕方で一つは空間的一つは時間的なる二部分に分たれること、並に適當なる觀測者を擇ぶことにより空間的乃至時間的部分の何れをも零にし得ることを見た。空間と時間に分割することが任意（或點まで）であるといふ事實は、普通互に全く離れた固定の空間と固定の時間を含むと考へられる平常の運動の概念を打ち破つた。我々は運動しつゝある物體から我々の物理學を始めないで、諸事件から始めることを餘儀なくせられる、この諸事件は何れも、任意に擇ばれた基準の諸事件に就いて、場所及び時刻に相當するものを與へれば決定し得る一位置を有つものである場所を決定するには空間は三次元を有つ故、三個の量（座標）が要り、時刻を決定するには一個の量（座標）が要る。故に諸事件の多樣中の一事件の位置は四個の量（座標）によつて決定せられる、この四個の量は客觀的には空間と時間の座標に區別し得ないものである。一般相對性理論に於ては我々は、一事件の位置が四個の座標の設定により決定され得ることを假定するが、座標の設定に關する何れの一方法にも特に偏して決定しないのである。

日常の物理學に於ては、一事件の座標が地球上でなされた時空的測定によつて獲られる。例へば飛行船が火災に罹つたと想定せよ。我々はこの事件の位置を、飛行船の經度と緯度、その地上からの高さ、及び發火の際のグリニッチ時を

與へて、設定することが出來る。我々が極めて高い速度を含まぬ地球上の事象に注意を制限する限りは、かくして測られた四個の量(經度、緯度、高さ、グリニッチ時)が物理的深義を有つ樣に見えるであらう。併し相對性理論はそれが必ずしもそうでないことを示した。それ故我々は這般の座標に物理的深義を賦與する企てを諦めて、彼等を圖書館の書籍の刻印の樣に便宜上設けられたものと考へる。我々のする唯一の要求は近接する諸事件が近似する諸坐標を有つことと即ち二つの事件が互に極めて近いならば彼等の座標が殆ど異らず、二事件間の分離が任意に設けられる極限より低下する時に、座標の相違も任意に設けられる極限より低下することである。この事は、事件が「近接」なる或る物理的關係を有ち得るといふ假定、並に所與の一事件の近隣に於ける數ケの事件が與へられるならば、或ものは他のものより該事件に近く、可能なる限りの近接にはより低い極限(零以外の)がないといふ假定を含んで居る。座標を設定する際に我々は此事實を斟酌する、併しその他の點では座標は任意であり、何か物理的の深義を有つて居るとは看做されない。

一近隣内では普通物理學も近似的に成立するに相違ない。即ち一近隣内の座標を設定する或る可能なる方法があるに相違ない、そうすればこの方法が採用される際に物理學の法則が傳統的な法則となる。この事は正しく成立しなければばならぬ、何となれば我々は傳統的物理學が近似的に眞なることを知つて居るから。併し精密な物理學の法則は如何なる座標系を採用しやうとも同一でなければならぬ、蓋し座標は規約を表はし物理的事實を表はさないからである。アインスタインを彼の引力の法則に導いたのは此種の考察である。ニュートンの形式に從へばこの法則は、二物體がその質量の積に正比例し距離の二乘に反比例する力を以て互に引き合ふことを主張する。この法則に關する他の總ての困難は度外視して、その所謂「距離」の問題に注意を集めて見やう。これは勿論「所與の一時刻に於ける距離」を意味する積りで云はれたのである。即ち或る瞬間　に於て一物體が場所Aに他の一物體が場所Bにあり、且つ問題の距離が時刻に

に就いて距離ABなることが、想定せられて居たのである。併し同時性は我々の座標の選擇に依存する故、他の座標を採ぶ際には、第一の物體がAにある時に第二の物體がBになく反つて或る他の場所Cにあることを見出すであらう。故に引力の法則は二物體の運動に關して、數多の等しく適法的な規約中から我々の採用するものに從ひ、相異る結果を生ずる。これは或る人が他の人を殺したか否かゞ、彼等が名によつて呼ばれるか姓によつて呼ばれるかに依存するといふのと、同じ樣に不合理である。それ故引力の法則はその傳統的形式のまゝでは正當であり得ない、何となればそれは或る所與の時刻に於ける二物體間の距離を含み、この距離は一つの物理的事實ではなくして一部分は規約に依つて定められる或量であるからである。物理的法則が距離の哩で測られると粁で測られるとを問はず同一でなければならぬことは明かである、而して我々は本質上この同じ原理の一延長に過ぎないことを取扱つて居るのである。アインスタインは座標の選擇から獨立であり、普通物理學の座標で表はされる時にはニユートンの法則に極めて近似する、引力の一法則を發見した。彼は彼の法則の結果とニユートンの法則の結果との三つの微細な差違を指摘した。其等の差違の第一のものは、水星の近日點に關して、アインスタインの法則が天文學者を長く迷はして來た小さな誤差を説明することを示した。アインスタインが彼の理論を發表した時には、これがそれの徵になる唯一の經驗的論證であつた。第二の差違は太陽の如き極めて重い物體の近傍を通過する時の光の屈曲に關するものであつた。光は全く引力に支配されないと考へられて來たが、物理學者はそれが質點から成るとするならば屈曲する丈實際に屈曲するかもしれぬことを承認するに異存がなかつた。併し乍らアインスタインの新しい法則はそれが當然この二倍丈屈曲す可きことを要求した。一九一九年五月の日蝕は、殆ど太陽の後に位する諸星の觀測によつてこの點を試すべき機會を與へた、而して其結果はアインスタインの豫言した通りであつた。これは彼の理論の經驗的證據を供するものとして一般的に受け容れられた。併し相對性理論の

論理的性質を理解した人々は、觀測の結果が如何にあらうとも、引力の法則の古い公式では決して滿足しなかつたであらう。彼等はアインスタインの法則が猶多少謬れることを許容する樣餘儀なくされたかもしれない、併し彼等はニュートンの法則が正しかつたことを決して許容しなかつたであらう。

アインスタインによつて提出された第三の觀測上の試驗は、スペクトルの黑線に關するものであつた。此等の黑線が太陽と星のスペクトルに於ては、地球上に光源を有つものに較べて、赤色の方向に移動せらる可きであるといふのである。今日までの處では此點に關して新理論に贊成し乃至反對する決定的結果が何等獲られない。觀測は困難であり、期待される效果は極めて小である。併し觀測の結果はそのまゝとつても確かにアインスタインの理論に反對はして居ない。それ故彼の理論がニュートンの理論と相違する點に於て正當なることを假定しても左迄謬らないであらう。

相對性理論の驚歎す可き結果の一つは、傳統的物理學の殆ど總ての「大原理」が單なる同語反覆(トートロジー)と變つたことである質量保存は最早眞ではなく、勢力保存の中に吸收せられて了つた。「現代の物理學に於ては、物體の質量は單にその勢力の一部に過ぎず、且つ決して不變の一部ではない。勢力保存は「大原理」であるどころではなく、測定と命名法に關する我々の規約の同語反覆的な一結果に外ならぬ。運動量の保存も亦同前である。傳統的物理學は、相對性と一致するやう修正されたものとして見れば、その明々白々な特徴に於て、先天的にそれでなければならぬものであることが解る。論證は餘り六ヶ敷しいので非數學的な言葉では述べられない。併し大まかに云へば物理學の法則の大概のものは、一碼は常に三呎であるといふ「大法則」の樣なものと云つても差支へないであらう。併し乍ら、この部類には這入らない若干論の如き物理學の新しい部門も存する。此種の部門は舊物理學が同語反覆と地文學の二部分に崩潰して了つたに反し、經驗的法則の眞正の智識を與へる樣に見えるものである。

如何にしてこれ等の結果が獲られるか、又アインスタインの引力の法則の性質の何たるかを、余は出來る丈數學を省いて後日の論文に說明しやうと思ふ。

佛教改造の上より見たる親鸞主義と新大乘運動



木村泰賢

この一二年來、我國の思想傾向は可なり宗教的となり、總じて宗教に對する欲求が盛になつて來た樣である。殊に佛教の方面にあつては親鸞を中心として新しき粧を凝らしたる佛教思想は種々の形で擡頭して來た。而も其等新らしき形に於ける佛教思想は青年士女の間に多くの共鳴者やら渇仰者やらを生じ、少くも現今、日本思想界に於ける一大潮流を爲してゐるといふことである。自分は約二ケ年半の外遊から歸朝した許りであるから、正直の處、未だ其等の事態に關して詳しき理解を有せぬけれども、少くも短日の間に見もし聞きもした限り、自分はこの現象に對して多大の感興を禁じ得ないものである。何だか豫期して來たことの實現されたやうな氣もすれば、亦此間に佛教發達史上、重要なる一階段を示された樣な氣もして、種々の意味に於いて考へさせられてゐるのである。そこで今は特に佛教改造の見地から流行の親鸞主義を眺めてその意義を檢討すると同時に、出來得るならばその濫を避くるの方針を明

にして見たいと考へたのは、即ちこの小論文ある所以である。但し豫め斷つて置くが、本論の目的は飽くまで、大體の傾向を種として自分の感想を述ぶる所にあつて親鸞に關する個々の作物や潮流に對する內容的批評には少しも渉らぬといふことである。

一　佛教の改造運動と流行の親鸞主義

日本の寺院佛教は德川時代の中期以降已に精神的にその權威を失つてゐた。殊にそれが維新の政治的變革と共にその外形的方面に於ても打撃を受くるや、殆ど一時は絕滅するかと思はれた程、その勢力を失墜したのである。乍併、佛教はその教理に於て非常によきものを有すると同時に一般民衆に對しては、歷史を通して、長くその文化的生活と結び付いてゐた關係上、根柢に於ては極めて深いものがあつた。一時極めて危險に見えたる寺院佛教もその後、幾分かづゝ見直ほし來り、之を中心として一般民衆の間に佛教を味得せんとするものゝ漸く多くなつたのも實に右の背景があるからである。殊に近時、佛教各宗が社會事業の方面に於て、種々活動して相當の成績を收めてゐるのは、寺院佛教を實際的に役立たしむる事によりてその教勢を擴張する上に於て效果の尠からざるものがあらう。吾人は之を隨喜するものである。

乍併。極めて率直に吾人の意見を述べしむれば、寺院を中心としての佛教は到底、最早、過去のものたるを免れぬ。歐洲に於ける基督教々會も漸く過去に落謝せんとしつゝあるが日本の寺院佛教は一層、其度の甚しきものがあらうと思ふ。蓋し、現今の寺院佛教は遲きも鎌倉時代の產物で、其早きに到れば奈良、平安の成立に屬しながら、而も、爾來著しき改造を經ざる爲めに、その組織に於て已に古くさく、教理に於て清鮮を缺き、そのまゝの形では現今の複雜なる社會に應し、徹底を欲する民衆の宗教的要求に應ずるに餘りに微溫的となつてゐるからである。こゝを以てか、佛教のよきものを發揮し、そのよきものによりて近代人としての吾等の宗教的要求を滿足せしめやうとするには、どうしても之を

近代人としての立場から改造するの必要がある。その本質的のものを高調すると同時に非本質的要素を洗ひ落し、以て陣立を立直ほすの必要があるのである。これ即ち種々の側から佛教改造運動の起る所以であつて、亦、その改造運動が少くも若き人々より歡迎せらるゝ所以である。

抑々、維新以來、佛教界に起れる改造運動を見るに、未だ之といふべき程、著しく成功したものがないけれども、しかし、種々の形で已に可なり早くよりあつたものである。例へば、大道長安の救世教の如きは所謂、ありがたき方面に於て可なりに成功に近かつたものであるが、不幸にして後繼者に適當の人なく、今日では餘り振はぬ樣になつた。亦、今より約廿四五年前、當時、若き新進の佛教徒たる高島（米峯）杉村（縱横）田中（治六）境野（哲）加藤（咄堂）などの諸氏が中心となつて所謂、新佛教運動を起し雜誌を發行してその主義を宣傳し一時可なりに活潑なものであつたが、今では彼等も追々中老組に入り當年の意氣頓に失せたかの如くに見ゆるものがあるけれども、教界の各方面に及ぼした影響に到りては蓋し沒すべからざるものがあらう。其外、井上圓了氏の早き時代に於ける佛教革新策の如き、清澤滿之氏を中心とした精神主義の如き、はた加藤――高山氏を中心として盛になれる日蓮主義の如き、何れも或る意味に於て、從來の寺院佛教に慊らざる結果として起れる一種の改造運動であつて、而も何れも青年の共鳴をかち得たものであつた。乍併、正直の所、未だ眞に一世を動かすといふまでには何れも到りかねて、以て今日に及んでゐるのである。所詮、佛教の改造問題は目下、その進捗中にあるもので、從つて未だその著しき成果を舉げ得ぬながらも、ともかく、全體の潮流はその方に動きつゝありといふことだけは疑ふべからざる事實である。

然らば、この見地よりしたる近時親鸞流行の主義を見るにその意義いかにといふに、率直に告白すれば吾人は近時流行の親鸞主義を以て、必ずしも深い根柢のある思想的運動の一種と見做すものではない。一時、非常に盛になつた日蓮

主義が國家主義の下火に連れて、少しく下火になりかけたに乘じて、その代償として個人主義の立場より而も文學的興味から擡頭した一時の流行的現象ではあるまいかと思ふものである。乍併、假令、それは一時の流行にせよ、ともかくかくまで盛んな人氣を博し而もその中には流行的親鸞によりて眞に法喜禪悅の境に達したものも尠くはないといふ所から判すれば、矢張、新しき佛教運動の一種、少くもその先驅と見做して然るべき充分の理由があらう。而もその親鸞の人格も思想も必ずしも淨土眞宗の傳へるがまゝのそれではなく、この間に非常の現代化あり、現代人の要求に應じたるものとして割き出されてゐる所を以てすれば教會的親鸞教に對する一種の改造運動と名けて然るべきものがあらうと思ふのである。たゞそは宗教的信仰、自證のためとしてよりは寧ろ文藝的興味より出發したのがその大いに流行するに到つた契機點となつた關係上、稍々もすれば嚴肅さに於て欠くるものゝ尠からざるは大に遺憾とする所ではあるけれども、ともかく一般的宗教的氣分をそゝり立てたといふことは否定し得べからざる事實である。蓋し、現代の如く、靈の光を求めながらも亦、肉の肯定に惱みつゝある時代に當りて、親鸞の體驗と其教へとは特に人心の機微に觸るゝものがあるからであらう。ともかく吾人の最も面白く感ずるのは、たとへそは一時の流行にせよ、流行の親鸞主義は、大體上、種種の點に於て、佛教史上最も大なる革新運動といふべき大乘佛教の興起に極めて類似するものゝあることである。從てその限り現時流行の親鸞主義は、たとへそは佛教思想の一部分ではあるけれども、軈て來るべき佛教の取扱い振りがこれから一回轉せんとする言はゞ新大乘運動の曙光を示すものと見ることも出來る。乍併、歴史を顧みるに昔時に於て大乘佛教の興起は佛教思想をして雄大豐富ならしめたけれども、又之によりて原始佛教の嚴肅にして且つ清新なる風致を害したことも尠くなかつた所を以てすれば、今後の新大乘運動にもまた此弊の伴ふことを吾人は恐るゝものである。吾人は佛教を眞に現在に生きたものに改造せんとする爲には一面に於ては流行の親鸞主義の如き遣方を歡迎するけれども又

他面にありては嚴に之を批判して餘りに脱線せしめざるの必要あるを感ずる。――本論を草する目的はこゝにあるから、以下少しく大乘佛教興起の事情と流行の親鸞主義との類似點を舉げ、更に今後の新大乘運動を健全に規定し行くべき標準に就て述べて見やうと思ふ。

二　大乘佛教と流行の親鸞主義

大乘思想の興起を歴史的に鮮明ならしむることは佛教史の研究に於て最も困難な問題ではあるけれども、極めて大雜把には次の如く之を考へることが出來る。

佛陀の說かれた教に從ひ、その定められた掟を守ることに於ては忠實に努力しながらも、餘りに表面の形式に拘泥し過ぎて却て自由の分を失ふ程になつたのを所謂、小乘と名ける。反之、文句以上に形式以上に溯りて佛陀の自由の精神を捕へんとして起つたのは即ち大乘である。從て之を表面からすれば小乘の方は佛說に忠實であつた限り、所謂傳統主義者で且つ佛教史の初期にありては教會的であつたけれども、大乘の方は何れにといへば自由主義者で而も少くもその起源に於ては個人的であつたといふことが出來る。何となれば言說や形式の裏に佛陀の精神を捕へるには、そこに個人の自由裁量のあつたことを認めねばならぬからである。上の意味に於て小乘教を形式的保守的佛教といひ得るならば大乘教の方をば精神的進歩的佛教と言ひ得やうと思ふ。然らば一體、初期に於て、いかなる種類の人々が大乘運動を起したかといふに、本より種々あつたけれども、特に吾人の注意すべきは、この間に俗人の信者達が大に活動したといふことである。この事は大乘經中でも特に名高い維摩經や勝鬘經などを見れば容易に分ることとである。維摩經は維摩（Vimalakīrti）と稱する極めて見識の高い居士を中心とし、勝鬘經は勝鬘（Śrī Mālā）と稱する信心深き夫人を舞台の中心

に推し立てゝ、佛陀の深意を獅子吼せしめ、それに從て自らを活動せしめたものである。即ち共に俗人にして却て專門家たる僧侶以上に深く佛教精神の眞髓を會得してゐることを明にしたものであつて、此間に於て大乘思想の興起には俗人の預て力のあつたことを暗示するものがある。從て大乘はたとへ、その哲理に於ては小乘より幽玄であるとしても宗教としては小乘の出家主義に對して何れかといへば在家主義であり、小乘の專門的なるに對して寧ろ通俗的なることを特徴とする。これは大小乘に對する通例の見解とは異る樣ではあるけれども、大小乘の性質を能く考へて見る時は當然かと言はざるを得ぬのである。この事は、早い話が、その理想とする所から判じても明である。小乘にありては佛弟子の極意とする羅漢を目標として進むに對し、大乘にありては、佛陀たることと自身を目標としながらも、事實としては寧ろ佛陀の候補者たる菩薩を理想として進む。小乘を一名羅漢乘（聲聞乘ともいふ）といふに對して大乘を菩薩乘といふも實に之が爲めである。然るにその羅漢なるものは出家して初めて達し得る境地なるに對して、菩薩とは、もと成道以前の佛陀に名けた稱號であつて、資格をいへば未だ俗人である 美術上よりしても羅漢は凡て圓頂に描かれ居るに反して、菩薩の相は瓔珞を纏ひ寶冠を戴いた俗士なつてゐるのを見ても此事は明であらう。かくして、この菩薩を理想として進む大乘の通俗的にして人間味に富める者なることもいふまでもない所で、所詮、小乘にありては、佛悟得の境は出家せねば得られずといふに對して、大乘にありては在家のまゝに之を味ひ且つその力用を發揮し得るといふをその立場としたものである。此意味に於て親鸞の非俗非出家主義の如きは、端的にこの精神を顯示したやり方といふべきであらう。とにかく、大乘は凡てに於て豁達自由で、たゞ佛陀の大精神その者に參するを最終の目的とし、區々たる小節には關らざるの方進をとつて進んだものである。從て、佛陀の精神を迎へて解釋するに當つても自己の要求に基き、時代精神の趨勢を參照して、或る意味からすれば創作的に佛陀を取扱つたことのあるのも亦、言ふまでもない所である。大乘經の

多くはその形式に於て可なりに創作的であるが、殊に前に述べた維摩經の如きとなれば一種の巧妙なる戯曲と見れば見得る程、芝居がかつた所のあるものである。かくして佛教はこの大乘運動によりて、その漸く枯渇しかけた所謂小乘佛教に生氣を吹き込み、廣さと深さと情味とに於て大に豐富ならしめたけれども、亦その方向の非常に多岐に渉ることになつたのも亦爭ふべからざる事實である。

是等を整理し統一あらしめんとしたのは實に、龍樹、無著、世親等の大論師達であるが、しかしこゝでは、この問題にまで及ぶの必要がないから略することにする。

以上、略述した大乘思想の特質と現今流行の親鸞主義とを對照せよ。何人もその類似の著しきに驚くものがあらう。

先つ第一に今日の親鸞主義は何人によりて提唱せられつゝありや。改めて言ふまでなくその主唱者といふべきは凡て所謂、在俗の人々ではないか。「出家と其弟子」の倉田氏でも「人間親鸞」の石丸氏でも、又純親鸞主義ではないとしても親鸞に傾倒しつゝある一燈園の西田氏でもその系統に屬する山中氏でも「眞宗世界」の野依氏でも、はた、先之、早くより學術的に親鸞を讃仰しつゝあつた三井氏(甲之)でも富士川氏(游博士)でも凡て所謂、俗人である。而も何れも必ずしも所謂、正統派によつて傳へられたまゝの親鸞を見んとするものではなく寧ろ傳説を離れて自由に赤裸々に、直ちに親鸞の精神なり人格なりを見出さんと努めてゐる所、往昔に於ける大乘運動に似たものがあるではないか。加之、その見方に於て自己の要求に基き、時代精神の色彩を多分に帶ばしめてゐる點に於ても昔の大乘的解釋に似たものがある。例へば「出家と其弟子」には基督教的色彩あり、「人間親鸞」には著しく現代味を含み、三井氏一派のそれには親鸞と國家を結び付けた上にヴント流の見方の加はれる所あり、富士川氏のには現代科學殊にヘッケル流の一元論(モニスムス)と親鸞の思想との一致を見んとする所あるなど、往昔の大乘家が印度教の聖典たる薄迦梵歌(バガヴァドギーター)を通じて佛陀の精神を見、印度哲學

の錚々たる數論派や奥義書(ウパニシヤツド)の思想を透して、佛陀の哲學を解し、乃至、進んでは俗信仰の秘密教(マントライヤ)を通じて佛教を見るといふが如き方法に似たものがあるではないか。殊に現時流行の親鸞は概ね創作戯曲の形で發表せらるゝ所、昔の大乘家が佛陀の眞髓を明にせんが爲めに、維摩、勝鬘、提婆の如き史的人物や、時に種々の佛、菩薩の如き理想的人格を拉し來りて活動せしめ講説せしめた所に非常に似たものがあるではないか。其外擧げ來れば種々の類似點があるけれども、頗を恐れてこの位にして置くが、とにかく上述した所だけでも兩者の間に著しき類似のあるといふことは何人も認定し得べきことゝ思ふ。勿論、往昔の大乘運動は非常に大仕掛のものであり且つ嚴肅なる求道的精神からしたもので、今日の文士が流行を追ひて、稍々もすれば遊戯半分の動機からすると大に異るものがあるけれども、少くも傾向に於て似たものがあると言はねばならぬ。且つ之を往昔の大乘運動からしても、それが今日傳はるが如くに、非常に豐富なる文獻を殘すに到るまでには數百年を要したことを思へば今日の親鸞主義の如きは言はゞ新大乘運動の序幕であつて、今後佛教の、各方面に渉りてかゝる見方の流行を來たし、遂にこの中から、眞に佛教を組織と精神とに於て甦へらしむるものも出でやうと期待し得らるゝものがある。加ふるに歐米に於ける佛教研究の方針を見るに從前は之を古代宗教の一種として、專ら古典的に取扱ふの風習であつたけれども、次第に之を魂の糧とせんとするの欲求起るに及びて現今では經句の裏に佛陀の眞意を捜らんとするの眞面目さを現はして來た。旁々かゝる佛教的取扱ひが相提携して他日一大宗教的潮流になるかも知れぬと思はしむるものがある。前にも述べた如く吾人は現今、流行の親鸞主義を以て必ずしも根柢の深いものと思はぬながらも、亦、この間に深き意義を認めざるを得ざる所以も全く如上の理由に基くものである。

三　新大乘教の資格

前述の經過をとりて、佛教が開展し行くことは大體に於て、佛教自身のためにも、一般思想界のためにも慶すべきことであると吾人は考ふるものである。かくすることによつて、佛教はその間に潛める新しき意義を發揮すると同時に世界が之によつて絕えず佛教から新しき裝に於て魂の糧を得ることが出來るからである。乍併、この傾向を無制限に濫用することに對しては、佛教自身のためにも、將た思想界の健全を計るためにも大に警戒するの必要がある。蓋し、かくの如き方法によつて佛教を改造することは、大體に於て宗教發達の自然に契へるの方法ではあるけれども、必ずしもそれは深みと新鮮味とを加ふるとに限つたことではなく、時に却て甚しく之を低落に導くこともあるからである。現にこの事は已に往昔の大乘運動に於ても表はれたことである。例へば佛教内に於て、たとへそは小なる役目を演ずるに過ぎずとした所で、怪げな鬼神幽魂などの跳梁を許るし、甚しきに到ればラマ教などに見るが如き生殖器崇拜樣のことまでも拒否しかねたのは偏へにこの低落的活動の結果に外ならぬ類である。この意味に於て吾人は常に、大乘佛教に到りて原始佛教の隱れたる玄意が表はれたけれども、亦之に依つて、その最も健全にして且つ清鮮なる氣風が害はれたのを悲んでゐるものである。しかも不幸にして、かゝる傾向は已に新大乘運動の曙光たるべき所謂「親鸞主義」の間にも多少見ゆるものがある。彼等、親鸞を材題とした人々の中には、佛教に關して何等の理解がない許りではなく、親鸞その人に關する智識さへ極めて薄弱でありながら朧ろげなる憶測を以て、無理に怪げなる親鸞を描き出してゐる者も尠くはないといふことである。殊に最も忌むべきは、親鸞が靈の把持と同時に肉の肯定をも許るしたといふことを、よい幸にかなりに劣等なる放縱さへも宗教的に肯定せんとするものもあることである。かくの如きは、自家辯護は暫く措くとしても、遂には靈肉一致とかの名の下に生殖的恍惚狀態を入神の境と許すラマ教的大乘を新に起すの起因とならねば寧ろ幸といふべきである。蓋し宗教的自然主義は最も青年を誘ひ易き好餌であるからである。加ふるに、新しき宗教運動に對

して、日本人として吾等の特に注意せねばならぬことは、我が日本は今尙ほ稍々もすれば驚くべき程非科學的迷信の流行し易き狀態にあるといふことである。西洋にありてもクリスチヤン、サイアンスや所謂交神主義（スピリチユアリズム）などの中には笑ふに堪へたる迷信的要素を含むものあるが、殊に日本にありては、西洋よりも一層、民衆の間に宗教的訓練が欠けてゐる爲めか、少ても吾等の見地からすれば、極めて怪しげなる信仰も相當の人氣を集めて、稍々もすれば物議の種を醸してゐることは、こゝに改めて言ふまでもない所であらう。蓋し、かくの如きは、萬事不安に滿てる現代の欠陥が人を驅りて、少しでも精神的不安を慰するに功驗あるらしきものには殆ど沒批判的に走らしむる結果ではあらうけれども、斷じて欣ぶべき現象ではない。單に所謂「信ぜんと欲する心」の安直なる滿足を以て宗教の能事が終つたとするならば、それは非常の誤りである。更に進んでその所謂「信ぜんとする心」を滿足せしむる所以の內容的價値を吟味してそを高上し純化せしむる所に宗教の文化的價値の存することを忘れてはならぬ。とにかく、現代に於ける民衆の宗教的要求は一方には、所謂、合理的信仰を求むるの方向に向ひながらも、他方には極めて低級なる信仰にも競ひ走らんとするの傾向あることは爭ふべからざる事實である。而もその低級な信仰中には佛敎の名によつてせられてゐるものも從來は尠くはなかつたことを思へば、吾人の最も恐るゝ所は、所謂、新大乘運動の中にも遂にはこの劣等なる信仰運動に一種の背景を與ふるものゝ起るかも知れぬといふことである。若しかゝることにでもなるならば、左なきだに已に可なりに混濁に苦める佛敎は益々その本來の精神から遠くなるのみならず日本の思想界を淨化する上に於て却て一大障礙となるべきである。敢て必ずしもこの事は流行の親鸞主義に限つたことではない。いかなる「主義」の名の下に行はるゝとしても、將來の佛敎運動に於て此事は大に警戒せねばならぬことゝ思ふから、以下少しく、健全なる新大乘運動の備ふべき四五の資格を述べて以て、將來に備へたいと思ふ。

一　新大乘運動はそのいかなる方向に向ふとしても、その期する所は吾等の全人格を擧げてそを統一的に滿足せしむる底のものであらねばならぬ。即ち之を心理學的に云へば、そは獨り情的要求許りではなく、智的要求にも意的要求にも滿足を與へ、而も之を統一し皷舞して光明界に導くを理想とすべきである。宗教の領域は感情にあるから、智的批判の如きは敢て與らずといふが如き獨斷的のものであつてはならぬ。佛陀の宗教的態度の特質は實にこの點に深く意を致した所にあつたことを忘てはならぬ。事物をありのまゝに正視して、その間を貫く不變の法則を見出し、之に依りて吾等の意をも情をも統べて以て最高理想を實現せんとした佛陀のあの批判的態度は、苟も佛教である限り、どこまでもその基調たるべきものである。かくして初めて、從來已に落ち入り亦將來、落ち入るの恐ある迷信やその他の不健全分子を一掃し得べきであらう。この意味に於て吾人は、將來の新大乘運動は、少くもその態度に於て原始佛教に戻るべきを提唱せんとするものである。

二　そはいかに割き出さるゝにせよ、極意に到れば、小なる自己を出發點として大なる自己に醒むるを目標とするか原始佛教より大乘を通しての根柢的信仰であつた。從て將來の新大乘運動も亦、その思想的基調に於てこの埒外に脱するを許るさゞるは勿論である。新大乘運動の役目は寧ろその小自己（有限生命）と小自己に內在する大自己（無限生命）との關係に於て、その間に普遍性と必然性とを求め、以て之を萬人が共通に味得し得るやうに組織立つる所にあるといふべきである。

三　乍併、かく言つたからとて新大乘運動を以て、複雜なる理論によつて佛教思想を現代的に系統立つることのみにありと考へてはならぬ。寧ろその實際化に當つては、出來得る限り單純に出來得る限り容易たるを理想とする。即ち大乘の通俗的にして情味に富めるの特質を益々發揮し行くの必要があるのである。智的批判に堪へ得るといふことゝ單純化

といふことゝ相反するものではない。

四　佛陀は人々悉く佛性ありとの見地より宗教的に四姓の區別を撤した。新大乘運動はこの開放的精神を一層徹底せしむるの必要がある。國民的區別なく男女の區別なく況して大乘運動の特色として僧俗の區別の如きは全く之を撤廢して一切を平等に見て、平等に味得し體驗し且つ之を講說し得る底のものたらしむるに努力せねばならぬ。これ即ち宗教の民衆化であつて、軈て大乘運動が眞にその到るべき所まで到るの目標であらねばならぬ。

五　佛教は初より廣大なる愛と嚴肅なる道德とを以て出發した。特に大乘教となるとその菩薩の理想とする所は全く絕對愛（無緣の慈悲）と完全なる德行とによつて自他を救濟する所にあつた。從て亦新大乘運動もこの精神によるべきは勿論であつて而もこれをもつて徹底的にやるの必要がある。舊大乘に於て觀世音菩薩が三十三身にまで身を現して衆生の苦を救はんとしたのを仰ぐならば、新大乘運動にありては、自らを菩薩として如實に之を實行し實現するを理想とせねばならぬ。銀行にも行け、炭工にも行け、資本家にも行け、勞働者にも行け、監獄にも行け病院にも行け、到る所に行つて、菩薩の行願を實現して——獨り精神的に許りではなく、物質的にもこの地上に極樂を實現するを以て、その理想として活動すべきである。

尙ほこの外、擧げ來れば、種々の條件があらうけれども、ともかく上述の數項は、新大乘運動の是非とも備へねばならぬ資格である。然らざる限りは、たとへそは、自己の滿足を買ひまたは一部の人の喝采を博するものであつても、斷じて精錬された大乘運動と見ることが出來ぬと言はねばならぬ。乍併、注意すべきは上に述べた諸項も要するに、たゞその主なる骨組みのみであつて、そのまゝそれが新大乘運動となるといふ意味ではないことである。之に肉を附し、血を通はして眞に生命あるものたらしむるには、更に之を人格的體驗に移すの必要がある。それ體驗を欠くの云爲はいかに外見的に立派でも遂に宗教の中核に觸れてゐないからである。

法律上から見た日本婦人と英米婦人

高柳賢三

(一)

イギリスに於ける歴史法學の泰斗として、令名高き、Sir Henry Sumner Maine はその不朽の名著たる「古代法論」(Ancient Law, its connection with the Early History of Society and its Relation to Modern Ideas) に於て、『進歩的諸社會の變化は從來身分より契約への變化であつた』(“The movement of the progressive societies has hitherto been a movement *from Status to Contract*”) と道破して居る。この『身分より契約へ』と云ふ法律進化の原則が、如何なる範圍に於て、妥當であるか、ローマ法史の發達にのみ着眼したるジエネラリゼーションでイギリス法史には妥當でないか、又十九世紀――自由を時代精神の標語とした十九世紀のジエネラリゼーションであつて協同を時代精神とする二十世紀から見れば、偏頗なる概論に過ぎないが、メインの使用した『身分』『契約』なる語の正確なる意義如何等の點に就ては學者の間に意見の一致を缺いて居る。今私は是等の議論の渦中に投ぜん事を欲しない。然しながら、此メインの有名なる標語をイタリヤの法律哲學者 Del Vecchio 教授の様に『必然的集團より有意的連結への變遷』(un passagio dall' aggregazione necessaria all'associazi-one volontaria)の意味に解し、『個人人格尊重』の發展を表現する章句であるとすれば、法律學の貴重なる指導原理として今日と雖も尚ほ此意義を失ふたものと云ふを得ぬであらう。殊に婦人の法律上の地位に干する、我國法を顧みて、その改善を企圖するに當つては、頗る有力なる指導原理として働くべき機能を具有する貴重なる法律格言として、尊重すべきものであらう。

ドイツに於ける新カント派の驍將と目せらるゝ Rudolf von Stammler は、その名著『正理法論』(Lehre von dem richtigen Recht, S. 208-211) に於て、『正理法 (das richtige Recht)

の根本原理を要約して

一、個人の意欲の內容を他の意欲の專斷に服せしむ可らず Es darf nicht der Inhalt eines Wollens der Wilkur einesanderen anheimfallen)

二、すべての法律上の請求は義務者が同胞として存在し得るとの意義に於てのみ成立し得べきものとす（Jede rechtliche Anforderung darf nur in dem Sinne bestehen dass, der Verpflichtete sich der Nächste sein kann)

三、法律に依て拘束を受くる者は專斷的に、社會的協同より排除せらる可きに非ず(Es darf nicht ein rechtlich Verbund-ener nach Wilkür von der Gemeinschaft ausgeschlossen sein)

四、法律上の排除力は之に服する個人が尙ほ同胞として生存し得べき意味に於てのみ正當視し得べきものとす（Jede rechtlich Verfügungsmacht darf nur in dem Sinne, ausschliessend sein, dass der Aussgeschlossene sich noch der Nächste sein kann)

の四つとなして居る。氏の修辭の形式は頗る哲學的であるが其個人の意欲の尊重と同胞としての人格の認識を高調する處に於て、法律學上の指導原理としてメインの格言と同種の意義を有するものと云へよう。

男子と女子との法律上の差別的待遇は歴史的に漸次除去されて來た。婦人に關する法律の發達は、各國に於て、婦人々格尊重の發達史であつて、各國の法律は今尙ほその發達過程にあるそして過去に於てその指導原理がメインの所謂「身分より契約に」（最廣義に於ける）でありシュタムラーの所謂『個人の意欲は他の個人の意欲の專斷に服せしむ可らず』『法律に依て拘束を受くる者は專斷的に社會的協同より排除せらるべきに非ず』であつた。そして將來我國の婦人法も亦此根本的指導原理に依て進むべきものであらう。」

（二）

法の理想としては「婦人人格の尊重」が基調でなければならない。「婦人の解放」が目標でなければならない。婦人の資性を最高限に發揮するあらゆる妨害は悉く之を排斥せなければならない。男女の法律上の平等が指導原理とならねばならない。然しながら他面法は現實の生活を規律する規範であつて哲學上の理想、道德上の理想を其儘に現實法に編込む事は出來ない。よし又假に之を敢てしたとするも結局行はれざる法律として終るに過ぎない。法律家が兎角一般世人から時代後れである、過當

に保守的であるとの誹を受けるのは法律家が道德律を以て直ちに法律としても結局は行はれるものでないと云ふ自覺か、其訓練と經驗とから強く働くが故である。法律の性質に通じない非法律家――善意にして且つ社會改善に熱心な非法律家――は、すべて道德的な規範を以て直ちに法律となさん事を要求する。この傾向が最も強いのはアメリカである。アメリカの公衆はすべて道德的に望ましき處を法律となさんと欲する。アメリカの各州の議會には每年數百の法律が通過して法律の過剩生產と云ふ珍現象が現はれて居る。我國に於ても眞面目な社會改良家にしてこの誤を繰返す事が將來ありうるであらうし、現在に於てもその萌芽が見えないでもない、然し又他面法律家中にも之と方向を異にする弊風がないでもない。卽ちその取扱ふ狹き現在の生活上の經驗に執着し、歷史的に發展しつゝある法の理想を忘却して、無意味に總ての改善に就て懷疑的な態度を採る事である、私は非法律家に對しては法律家の眞に困難と感ずる處を理解し之に同情する事を希望すると同時に法律家に對しては、法の理想に對し一層敏感となり、その實現に盡瘁せん事を希望せざるを得ないのである。婦人の法律上の地位と云ふ問題に就ても現實の問題としては非法律家と法律家との間の此種の了解が必要である樣に見える。

婦人に關する法律は永遠なる女性 eternal femine を規律するのではない。日本法は「お花さん」「お梅さん」を規律せんとするに反し外國法は「メリーさん」「ベッテイさん」を規律せんとする。そして「お花さん」「お梅さん」の內容が「メリーさん」「ベッテイさん」の內容と異るに從つて法律もその內容を異にせねばならない。從つて外國の法律をその儘日本法に飜譯しても巧く行はれる筈はないのである。然しながら近頃日本に於ける「お花さん」「お梅さん」の內容は大分に「メリーさん」や「ベッテイさん」の內容に近くなつて來た樣であつて以前の「お花さん」「お梅さん」を規律した法律では不都合になつて來た點も少くない樣に見受けられる。從て「メリーさん」「ベッテイさん」を規律する英米法と「お花さん」「お梅さん」を規律する日本法を比較して見るのも萬更無益の事業ではあるまい、と考へるのである私は此所には英米法がどれ丈の範圍で現在に於ける日本婦人の規範として妥當であるかと云ふ面倒な問題には振れないで只兩者の對照に就て少しく觀察をして見樣と思ふのである。

(三)

日本も英米も共に立憲政體の國と云ふ事になつて居る。立憲國の本質は輿論政治と云ふ事であり、輿論は選擧權の行使に依

る議員代表で發表せられるのが常態である。日本法では殆んど完全に婦人をこの意味での輿論構成から排除して居る。即ち選擧權及び被選擧權が徹底的に婦人から剝奪されて居る。衆議院議員選擧法第八條には「帝國臣民タル男子ニシテ年齡二十五年以上ノ者」でなければ衆議院議員の選擧權が無い事になつて居り同法第十條には「帝國臣民タル男子ニシテ年齡滿三十年以上ノ者」でなければ、衆議院議員となる事が出來ぬ事になつて居る市制第九條には市公民の資格として「帝國臣民ニシテ獨立ノ生ヲ計營ム年齡二十五年以上ノ男子二年以來市ノ住民ト爲リ其市ノ負擔ヲ分任シ且其市內ニ於テ地租ヲ納メ若ハ直接國稅年額二圓以上ヲ納ムル」事を要件となし、そして第十四條に「市公民ハ總テ選擧權ヲ有ス」云々第十八條に「選擧權ヲ有スル市公民ハ被選擧權ヲ有ス」とあるので選擧權被選擧權は完全に婦人から剝奪されてある。町村制第七條、第十二條、第十五條も市制の場合と同樣な規定を置き、町村公民中には婦人を入れないで置いて町村公民と云ふ事を選擧權、被選擧權の資格要件として居るのであるから婦人排斥は町村でも完全に行はれて居る。又府縣制第六條には「府縣內ノ市町村公民ニシテ市町村會議員ノ選擧權ヲ有シ且ツ其ノ府縣內ニ於テ一年以來直接國稅年額三圓以上ヲ納ムル者ハ、府縣會議員ノ選擧權ヲ有ス」「府縣內ノ市町村公民ニシテ市町村會議員ノ選擧權ヲ有シ且其ノ府縣內ニ於テ一年以來直接國稅年額十圓以上ヲ納ムル者ハ府縣會議員ノ被選擧權ヲ有ス」として市町村公民と云ふ事を府縣議員の選擧權被選擧權の基礎として居るから府縣に就ても矢張り婦人が完全に排斥されて居る。婦女をして政治に容喙せしむ可からずと云ふ國策から見れば頗る徹底して居る。只例外として、商業會議所議員の選擧に就て、自己の名で商業工業を營み營業稅を納める者ならば婦人でも選擧權がある事は商業會議所法第九條に「帝國臣民又ハ帝國法律ニ依リ設立シタル法人ニシテ商業會議所ノ地區內ニ主タル營業所又ハ事務所ヲ有シ左ノ各號ニ該當スルモノハ議員ノ選擧權ヲ有ス云々」と規定して居り男子と女子とに依て差別待遇を與へて居らぬ事は「帝國臣民」と云ふ包括的文句を使用した事から明らかである。然し被選擧權となると矢張り「法人及年齡三十以上ノ男子ニシテ二箇年以來議員の選擧權ニ干スル要件ヲ具備スル者ハ被選擧權ヲ有ス云々」で再び婦人排斥が初まつて居る。又女子に與へられた選擧權も自身では行使出來ず必ず男子たる代人を以て爲さなければならぬ事は、同法第十八條に「議員ノ選擧ハ選擧人自ラ之ヲ行フベシ但シ法人女子及無能力者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ代人ヲ以テ之ヲ行フ」とあり商業會議所議員選擧規則第二十二條に「代人ハ帝國臣民タ

ル成年ノ男子ニシテ商業會議所法第十三條ニ該當セサル者ナルコトヲ要ス」とある事で明である。婦人などが選擧場に出入するは不穩當なりと云ふ考に基くのであらうか。

以上の諸法規に現はれた政治は婦女の容喙すべき所に非ずと云ふ國策は、治安警察法第五條で、女子は政事上の結社に加入する事及び公衆を會合する政談集會に會合し其發起人たる事とを禁止する規定に依て遺憾なく徹底させられて居つた。然るに近頃、治安警察法第五條の改正に依て此國策の第一線が突破さるゝに到つた。そして追々と第二線第三線と突破の勢が進んで來るかも知れない。

英米と雖も婦人參政權が完全に確立するに到つたのは最近である。勿論從來と雖も「婦人は政治に容喙すべからず」と云ふ主義は日本程徹底しては居らなかつたが、その完全―殆んど完全なる男女同權が參政權に就て實現するに到つたのは、戰時中婦人があらゆる方面に活動して男子と劣らない能力ある事を示し、ジョン・ブルやアンクル・サムをして婦人にも參政權を與へるのがフェーヤ・プレーぢやと納得せしめた結果である。英國では千九百十八年人民代表法（Representation of the People Act, 1918）に依て「婦人ニシテ年齡三十歲ニ達シ其選擧區內ノ土地又ハ家屋ニ干シ地方團體ノ選擧人トシテ登錄セラレ、資格アル者若クハ其資格アル男子ノ妻タル者ハ其選擧區ノ下院議員選擧人トシテ登錄セル資格アルモノトス」とした。即ち自ら家を構へて居るか若くは夫が年收價格五ポンドの不動産をかりて之を占有して居る三十歲以上の婦人には選擧權を與ふると云ふ事になつた。男子に就ては成年即ち二十一歲女子に就ては三十歲以上と云ふ差別が未だ殘つて居るが然しこの規定の結果約八・八五六・〇〇〇人の婦人が參政權を得て居る樣である。丁度私が英國倫敦に滯在して居る間に此新選擧法の下に總選擧が行はれ私の宿つて居つた家庭の夫人も選擧權を獲得したので、ストーヴ會議にも候補者の品評や政治論に火花が散つたのであつた、又同年制定の法律で婦人の被選擧權も認められて居る（Parliament Qualification of Women Act, 1918）そして此方には「三十歲」と云ふ制限がない。米國では千九百二十年聯邦憲法に第十九修正として「合衆國市民ノ選擧權ハ性ヲ理由トシテ合衆國又ハ各州ニヨリ拒否又ハ制限セラルヽコトナシ」となし參政權に干し男女を完全に平等の地位に置く事とした。かの米國研究者として有名な心理學者ミュンステルベルグが「聯邦憲法の修正に依る婦人參政權確立は君主政體を聯邦憲法修正で米國に輸入せんとすると同樣發生し得可からさる事」（This is hardly more likely to happen than a constitutional amendment

to introduce hereditary monarchy." Hugo Münsterberg, The Americans, (1914) p.573) と云へる豫言が全然外れて聯邦憲法修正に依て參政權に關する男女の差別が撤廢された。

(四)

家庭經濟の内に活動の領域を限定されて居つた婦人が、國民經濟へ干與する樣になつて、婦人職業問題が世界到る處に、喧しくなつて來た。我國でも所謂職業婦人の數は益々增加して來て筋肉勞働、精神勞働の兩方面に益々婦人の活動範圍が廣められて來る形勢である。やがては殆んど全部男子で占められて居る所謂「官吏社會」も婦人に於て侵入せられないとも限らない。

婦人が官吏となる事の禁止は我國法上婦人參政權の禁止程嚴格なものでない。帝國憲法第十九條は「法律命令ノ定ムル所ノ資格ニ應ジ均ク文武官ニ任ゼラレ及其他ノ公務ニ就クコトヲ得」とある。即ち官吏となり其他の公務に就くには「日本臣民」たる事を要求する丈で「日本臣民たる男子」たる事を要求するのでないのだから、少くも憲法上は男女同權である。然し「法律命令ノ定ムル資格ニ應ジ」とあるから法律や命令で差別を置く事は自由であり又實際ある程度まで置かれて居る。

我國法上官吏の任用には四種類ある(1)先づ任用資格に何等の制限のない自由任用がある、即ち親任官(大審院長、行政裁判所長官、會計檢査院長、陸海軍大臣、朝鮮總督、臺灣總督を除く)特命全權公使、辨理公使、内閣書記官長、法制局長官、拓殖局長官、各省次官、内務省警保局長、判任の各省參事官、警視總監、貴族院書記官長、衆議院書記官長は即ちこれである。(2)又詮衡任用と云つて試驗委員の詮衡を經て任用せらるゝものがある詮衡任用の中には一定の經歴例ば二年以上勅任文官若くは高等三等の奏任文官の職に在つたと云ふ樣な事を要件とするものもあるけれどかゝる特別經歴を有せないで宜いものもある。敎官、技術官其他特別の學術技藝を要する文官、學校長、製鐵所長官、海外駐剳財務官、製鐵所次長、專賣局長官、國勢院部長、印刷局長、造幣局長、專賣局部長、千住製絨所長、維新史料編纂事務局長等は即ち之れである(3)第三に官歴に依る任用と云つて官吏として一定の經歴ある者を詮衡を經又は經ずして任用する場合である(4)最後に一番普通なのは即ち試驗に依る任用でこれには一般試驗と特別試驗とがあり一般普通なのは高等試驗(行政科、外交科、司法科)即ち奏任行政官、外交官、領事官又は司法官たる資格を與へる試驗と普通試驗即ち判任文官たる資格を與へる試驗がある。

以上の中で自由任用、詮衡任用に就ても何等の制限を置いて

居らない様であるから婦人と雖も採用せられ得ないと云ふ法律上の支障は置かれてない様である、又高等試驗普通試驗にも女子を排斥したと解すべき文句は殆んどない故、學力さへあれば女子と雖も高等文官試驗や外交官試驗や判檢事試驗に大學出の男子達と競爭するのは毫も法律上差支ないものと解すべきものであらう。尙ほ特定の官吏に就ては女子を排斥して居る法律もあるが此所に之を述べない。

米國の聯邦政府の役人試驗は千八百八十三年の文官法（Civil Service Act, 1883）で規定されて居るが男女に依て差別を置く事がないので每年何十萬と云ふ女子志願者が試驗場に殺到する様である。各州も女子官吏が多い。英國は米國程ではなくとも追々と女子が此方面にまで侵入しはせまいかと思はれる。

官吏ではないが辯護士の方は此國では女子は門戶が解放せられて居らない。即ち辯護士法第二條には「日本臣民ニシテ民法上ノ能力ヲ有スル成年以上ノ男子タルコト」を辯護士となる條件として居る。近頃辯護士法改正の議がある相であるがこの點の改正が企てられるか如何かそれは私には豫見出來ぬ。

此點に行くと米國の方は婦人辯護士は隨分以前から存する。現に私の滯米中私はボストンの女辯護士から婦人倶樂部に招待されて其代償として散々「日本婦人の地位」といふ話題に就て彼より細に入つて油を絞られて了つた。又法廷に連れて行かれてその花やかな辯論振を聞かされた。聯邦裁判所では千九十年から女子辯護士（辯護婦？）の辯論が許され又州裁判所でも大抵婦人辯護士が許されて居る。

英國の方は保守的の國柄丈あつて仲々辯護士となるを許さなかつたが、今年の五月婦人辯護士が出來た。アイヴイー・ウイリヤムスと云ふ婦人でインナー・テンプルから出た男女二十三人の新辯護士中最優等の成績であつた相である。辯護士就職式（Call to the Bar）の晩にインナー・テンプルのトレヂユアラーである　そしてかの有名な英國小說家チヤールス・デイツケンスの息であるエイチ・エフ・デイツケンス氏は一場の演說をなした氏は婦人が動產として取扱れし時代、何等の財產權を有せざりし時代、男子の附屬物視せられし時代から說き及ぼし今日に於ける婦人地位の向上を慶賀し、殊に世界大戰中婦人が彼等自身の努力に依りて世人の偏見の大部分を打破るに成功した事を激賞したる後、今後實社會に出ても努力を繼續して最後の勝利を收められたし、これ自分が壯時ケンブリツチ大學に入學するに當て父チヤールスデイツケンスの自分を激勵した賢き忠言であると云つて感激に滿ちた調子で結んだ。ウイリヤムス孃は之に對し私が辯護士となる事は私一生のドリームであり。又私に

對する私の父のドリームであつた。今其ドリームが實現されて私は喜びの餘り殆んど言ふ處を知らない云々」と述べたと傳へられて居る。

尙ほ婦人職業問題に干連して婦人勞働者の法律的待遇や大正の人身賣買である藝娼妓の問題を英米の婦人勞働者保護立法それから While slavery や vandeville artistes（Music-hall dancing girls）の法律上の地位と比較すべきであるが、此處には之を割愛する事としよう。

（五）

日常生活を規律する大原則を規定した我が民法々典の上では男女平等と云ふ事を原則として採用して居る。勿論婦人が妻と云ふ身分を收得すると、頗る不平等な地位に置かれて居るが、婦人は婦人としてのみの理由に依り、私權の享有行使に就て男子と不平等な地位に居るものでない、と云ふのが民法の主旨である。婦人は女戸主としての家族たる男子の上にも——彼女の夫の上にも戸主權を行使する事を得る。ある場合に子供の上に親權を行使し得る。未婚婦人や寡婦なら單獨で又妻である場合なら夫と共同で養子をする事が出來る。又婦人と雖も自己の名で契約を締結し、財産を取得し、處分する事が出來る。之を「三從」の昔に比すれば民法は婦人を隨分解放したものであると云へよう。然しこれは原則であつて男女が民法上全然平等なものだとは云へないので、例外的規定が置かれて居る。是等の規定にはそれぞれ不平等を是認せしめる相當な理由があるものもあるので私は必ずしも一概に之を不可だとは云はないのであるが、兎に角不平等な規定がある事丈は事實である。その内で顯著なのは相續に干してゞあらう。

我國では英米と異つて相續に家督相續と遺産相續とを區別して居る。家督相續は『家』の存續を目的とした戸主の死亡隱居等の場合に起る戸主權の承繼であり、遺産相續は家族の死亡した場合に起る遺産の承繼である。家督相續は一人相續であり遺産相續の方は數人が均分相續をする事がある。遺産相續に就ては我民法上男女平等である。然るに戸主財産相續と云ふ事になると男女は平等の地位に置かれては居らない。勿論「女子ハ家督相續ヲ爲スコトヲ得ス」と云ふ程極端な男女の不平等は之を認めて居らないのであるが、尙ほ「親等ノ同シキ者ノ間ニ在リテハ男ヲ先ニス」（民法第九百七十條第二號）として男子を先にして居る、家督相續は必ずしも財産相續の觀念丈に止まるのでなく家名相續、戸主權相續と云ふ方面もあるのであるけれど、財産的方面から觀察すれば、財産權の取得資格に就て男女

不平等である事は事實である。封建的な『家ノ存續』と云ふ理想支持の爲めに男女の平等の原則に例外を認めたものであると云はねばならない。

然らば英米の方はどうかと云ふと、英國の方には日本程極端ではないが封建的の色彩が殘つて居る。英國では不動產と動產とを區別し、不動產の方は被相續人の最近親の直系卑屬たる男子に行く、直系卑屬がなければ直系尊屬たる男子、又之もなければ傍系の男子に行く事になる（夫婦ある場合には制限を受ける事があるが）。卽ち『男子及男系優先』(Preference of males and of male stocks) の原則が認められる。然し動產の方はかゝる事はなく男女にかゝはらず分配せられるのである。兎に角英國の長男は財產的には惠まれたる地位にあるのであるが日本程でない。それは優先的地位は土地のみに限られて居るのと日本の樣に遺留分制度が認められて居らないで遺言で自由に處分されて了ふ事があるからである。かの小說などによく出て來る、貴族の息子が女優に夢中になつて、親父から一志で廢嫡される (to be cut off with a shilling) のは之である

米國の相續法は州に依て細則は異るけれども、何れも不動產相續に就く男子及男系優先(Preference of males and of male stocks) の原則は長子相續主義 (Primogeniture) と共に廢止せられて居るのが通例であるから、封建的色彩がとれて男女平等主義となつて居る。

（六）

男女の性を中心とした干係中最も典型的なものが夫婦干係である。我民法は夫婦干係にある婦人を如何に取扱つて居るのであるか。夫婦干係に在る男子と比較してその地位はどうであるか。

（一）婚姻豫約に就て大正四年一月二十六日の大審院の判決で「婚姻豫約ハ適法ニシテ有効ナリ法律上之ニ依リ當事者ヲシテ其約旨ニ違反シテ婚姻ヲ爲スコトヲ拒絕シタル場合ニ於テハ其一方ハ相手方ガ其約ヲ信ジタルガ爲メニ被ムリタル有形無形ノ損害ヲ賠償スル責ニ任スベキモノトス、而シテ其損害賠償ハ違約ヲ原因トシテ請求スルコトヲ要シ不法行爲ヲ原因トシテ請求スベキモノニ非ズ」としたので、形式上はすべての婚姻豫約を何等制限なく認め、之に違反した場合には契約違反に基く損害に賠償を求められる樣に見へるが、其後の各判決は皆同樣と云ふ事實があり貞操を汚された婦女からの訴の場合に限られて居る樣である。少し前の新聞紙が婚姻の約束を破つた婦人に對し男子の方から訴を起さんとしつゝあるとか傳へて居つたが、かゝる

場合の判例は未だ無い様である。

從來の判例から見ると裁判所が保護救濟して居るのは不法に侵された『婦人の貞操』であつて婚約破棄に基く『單純な精神上の苦痛』ではない様である、

英米の方は更に一歩を進めて婚約破棄に基く『單純な精神上の苦痛』にも救濟を與へて居る。所謂「婚約違反の訴」や Breach of Promise of Mariage Suit はこれである。貴族や大金持の息子達が宜く新聞紙で被告などになつて現はれて來る。又かの小說家チヤールデイケンスは Pickwick Papers の內に Bardell 對 Pickwick事件として輕妙に描寫してゐる。ある意味で婦人の精神的安全の法律的保護が日本より厚いとも云へよう。然しながら又他面から考へると英米に於けるエンゲージメント・リングを取交した男女の交際振を日本の婚約後の交際振との差異を考に入れゝば、必ずしも左様とも限らないのかも知れない。英米の判決例にも男子の方から婚約違反の訴を提起した場合は見當らない。私は米國のある法律の先生に男にはかゝる訴權は無いかと聞いたら、先生曰く「アメリカにはそんな野暮な男は居ない。然しながら假にそう云ふ訴があつたとしたら Chivalrousな陪審員は笑ひながら「名義上の賠償」Nominal damages 卽ち五仙と云ふ様な損害賠償を與へよう。少くも僕が陪審員であつたならそう云ふ事にする」と

(二)夫婦關係は畢生間の共同生活を目的とするので期限附とか條件附とかの婚姻を許さないのは洋の東西を問はない。(試驗結婚trial marriage を許す法案がコロラド州で議會に出た事はあるが) 然し法律で規定した重大な理由があつた場合に裁判離婚を許す事も亦洋の東西を問はない。然しながら、日本では所謂協議上の離婚なるものを認めて裁判所のお世話にならず、夫婦の合意丈で別れる事を認めて居るに反し、英米では之を認めない。メインは進化的社會に於ける法律の進化は『身分より契約への進化』であると云うたが身分(Status)の意味を「當事者の自由意志で消滅せしめ得さる干係」の意味にとるならば英米の夫婦關係は Status に近く日本の夫婦關係は Contract に近く、日本の方が一層進歩したる法律階段に立つものと云へよう。況や「當事者の意志」も「當事者双方の合意」でなく「夫のみの意志」で行はれる事が實際に多い相であるから益々日本法は Status の域を脫して居る。英米でもフエミニストの中で協議離婚賛成論者が可成りある、大に日本法を範に取るであらう(?!)

(三)婚姻に依て妻の有つて居つた財産はどうなるのであるか。我民法は所謂夫婦財産契約なるものを認めて、夫婦が婚姻の屆出前に契約を以て任意に婚姻中の財産干係を定むることを得る

事にして居るが、我國ではかゝる水臭い事をする夫婦は少いから大抵の夫婦は法定財産制の適用を受ける。此法定財産制に依ると妻又は入夫が婚姻前から有つて居る財産及び婚姻中自己の名に於て得たる財産を特有財産として有ち續けて所有權には何等變動を生ぜぬことゝして居る。そして財産の監理權は夫（入夫の場合でも）に屬し、その財産の使用收益は夫（又は女戶主）が爲しその代り婚姻から生ずる一切の費用は夫（又は女戶主）にあるとして居る。そして日常の家事に付ては妻は夫の代理人と見做される事になつて居る。

此の仕組も、我舊慣に比べると妻の財産上の地位が著しく改善されて居る。そして必ずしも妻に對し甚しく不公平な取扱をしたとも思へない。然しながら英米の妻は今や「平等」の域を脫して「優越」の地位にまで上騰して居るのだから較べものにならぬ。

英國でも古くは夫婦を同體と見、然もその同體は即ち夫だと見て居つた（Husband and wife were regarded as one person, and that person was the husband）結果、妻の財産中動産は所有權が夫に移り不動産の收益權も夫にあつた。その代り夫は妻を養ひ、妻の婚姻前の負債を支拂ひ、婚姻前の不法行爲に付ても第三者に對し賠償の責を負ふた、

然し千八百八十三年以來の英國では狀況がすつかり變つて了つた。夫は特約なき限り婚姻に依り妻の財産上に何等の權利を取得せぬ。婚姻當時妻の有して居つた財産は不動産動産を問はずその儘妻に屬する。婚姻後妻の取得する財産も又妻に屬する。その代り妻の債務を辨濟し妻の婚姻前の不法行爲から生ずる賠償義務は妻から取得した財産の限度（通常は―）に限られる樣になつた。然しながら婚姻中の不法行爲に付ては妻と共同して賠償責任があり、又妻子を扶養する義務は已然として其儘である。夫が救貧院にでも行く場合でなければ金持の妻君に扶養料の請求は出來ぬ。ある著者は"The present day is a bad time for fortune hunters by means of marriage"と歎息して居る。成程左樣だ。

米國は州に依つて多少異るが大體英國と同樣で、ある州に依ては英國以上「優越」の度を增したものもある。

（四）我民法では妻は取引の自由が著しく制限されて居る。民法は妻を無力者として未成年者禁治産者準禁治産者と並べて規定して居る。そしてある種の法律行爲をするには必ず夫の許可を受くべきものとし、若し無許可で此種の法律行爲をした場合には妻からも夫からも取消す事が出來るとして居る。夫の許可を要するとした理由はそのあるものに就ては經濟上の効果が

重大であるから男子たる夫を保管者とすると云ふ主旨であらう(民法第十四條第一項)又他のものに就ては家庭の圓滿を保護しやうと云ふ主旨であらふ。例へば他人(多くの場合男子ならん)から贈與を受諾するのには夫の許可を要するものとしたのは法律が粋をきかせたのであらう、只粋をきかせるなら內面的に夫が他の女から贈與を受けるには妻の許可(?)を要すとすべきであつたらう(!)。

今日の英米では妻はかゝる制限は少しも受けない夫婦間の義務に反せざる限り夫の許可などはなく、自由に法律行爲をする事が出來る樣になつた。アメリカでは居住する邸宅(family home)の讓渡には妻の同意を要するものとするが通例で或は家具の抵當(Mortgage of household goods)には妻の同意を要すとなし、或は夫の勞銀の讓渡には妻の同意を要するものとして居る。妻の能力でなく「夫の無能力」を認めて居る。このアメリカの先例は追々と日本でも眞似て宜い樣な事實が大分そこらにある樣だ。

(五) 夫唱婦從(Man proposes and the wife disposes)の理は財產に就ては獨立人と同じになつた英米の妻に就ても我國と同じく未だ存する。婦は夫の姓(family name)を名乘り、夫の國籍を取得し、又夫の住居指定權に服する。夫は已然として head of the family であると云はれる。但し結婚しても夫の姓を名乘らぬ女もある。又女は結婚すると Miss so and so が Mrs so and so と變ずるのに男の方は拘束を受けずに已然 Mr so and so で止まるのは不平等でいかぬと憤るフェミニストもある。又最近アメリカの國籍法が改正になつて婦人は結婚に依つて當然夫の國籍を取得すると云ふ主義を廢した。然しこれは必ずしも男女平等と云ふ理由から出來たのではなく、別に實際上の理由から來た樣である。

日本では英米の妻以上に、妻唱夫從の一例がある。女戶主と入夫との關係がこれである。入夫は女戶主の家に入り、その姓を名乘り、入夫が外國人の場合には、女戶主の國籍を取得して日本人となり、女戶主の戶主權に服する。法律上は公認せられたるである。然しこれは「家の保持」と云ふ封建的理想から認めた變態であるから「日本に於ける妻の優越」を外國人に宣傳する材料とするのは少し無理に違いない。

(六) 夫婦相互の間には身分上の權利義務が對立する。それから、この相互間の權利義務の外に、世間一般に對し配偶者の一方に就て權利が成立し得る。相互間の義務違反は仲々法律で干涉出來ぬ。只極端な場合に刑法で罰し離婚を許す位なのである第三者が配偶者の權利を侵した場合にも刑法と不法行爲に基く

損害賠償で保存される。然し親族權の關係は何處の國でも法律に依る保存が困難であるが、英米法は此の點が判例で微より細に入つて定まつて居る。英米法は日本法よりは婦に厚い樣だ。以下その狀況を略說して見度いと思ふ。

（甲）先づ夫婦相互の權利關係から說くと、

（A）夫は妻に對し下の三つの欲求を有つ。

(1)愛情的共同生活(Consortium;society and affection)。昔は妻がこの義務を盡さないと懲戒をなし監禁（Correction）をし監禁をなす事を得る事になつて居り、夫は「自分の親指より太くない棒でなら」妻を打つても宜しい（A husband may beat his wife with a stick no thicker than his thumb）と云ふ諺さへあつた位だが、それは過去の傳說で今では英米を通じてかゝる懲戒權を認めない。それから又配偶者の一方が此義務に違反した場合に「配偶者權回復の訴」（Action for the restitution of conjugal rights）と云ふものを認めて義務違反の配偶者を逮捕監禁したものであつたが千八百八十四年以來『配偶者權回復命令』は只形式丈の問題となつてこの命令に從はない場合には「遺棄」と見て別居を許す前提とするに過ぎない。アメリカには「配偶者權回復訴」なるものは初めから認められなかつた樣である。

(2)勞務（Service）夫は妻から家事整頓のため相當な勞務を提供するを欲求する。以前には妻が之を怠る場合に懲戒の權を認めたが今では身體に手を振れてはならぬことになつた。

(3)貧困な夫は妻から扶養を受くる事を欲求する。然し日本の樣な扶養義務の範圍が廣くない英米法ではかゝる場合に妻の扶養義務を認めないのが原則であつて只英國、加州、北ダコタその他アメリカの數州で認められてる丈である。

以上の內我民法では(3)の扶養義務は之を認め、(1)の同棲義務も之を認める但し強制執行は之を許さない只所謂間接強制が出來ゝる丈であらうか、(2)の勞務請求權は我民法上特に之を認めて居らない。

B次に妻は夫に向つて下の事を欲求する。

(1)愛情的共同生活（Constrium）これは夫の場合と同樣強制方法はない。「配偶者權回復訴」は英國では名稱丈存續して居るが實體は變更して居るのは夫の場合と同樣である。又米國には全然ない。懲戒權や監禁權が妻にない事は昔も今も同じである。

(2)扶養を受くる事(Support)扶養懈怠に基く刑事訴追(Prosecution)や離緣金（alimony）や扶養命令(Orders of Support)などで完全に保存されて居る。

以上夫婦相互の欲求が法律で保存されて居る範圍を見ても妻の地位が著しく夫の地位よりも優越なるかが分る。妻は自分の財產を所有し、使用收益、監理を爲し、然も夫から扶養を受け、且つ夫に對しては扶養の義務がないのが通常であるから確かに日本よりは妻の地位が惠まれて居る。時あつてかPoor Hasband」と同情したくなる位である。

(乙)次に夫婦の一方が他の一方に干し第三者に對し有する權利干係に次で述べると、

(A)夫は妻に干し第三者から下の樣な欲求をする。

(1)妻の勞務を妨害せぬ事。妻の勞務損失(loss of service)はそれが誘拐に基くと傷害に基くとを問はず損害賠償の訴で保存されて居る。

(2)妻の愛情を離隔せぬ事。これも保存されて居る。姦通はなくとも、愛情離隔(alienation of affections)があれば、不法行爲となる。

(3)妻の貞操を尊重する事。これは姦通(Criminal coniersation)と云ふ民事の訴訟で保存されて居る。

(B)妻は夫に干し第三者から下の樣な欲求をする。

(1)夫の勞働力を妨害せぬ事。これは保護されて居る。第三者が夫を誘拐又は傷害等の方法で扶養の義務を怠らしめるに至ると妻はその人に對し、賠償を請求し得る。

(2)夫の愛情を離隔せぬ事。「愛情離隔の訴」(alienation of affections suit)と云つて他の婦人が自己の夫の愛を奪つた場合にその女に對して損害賠償の訴を起す事を許して居る處がアメリカではある。所謂(Husbandseducer)に對する訴である。然しこれは認めぬ州もある、その可否の論が法律家の間に盛である。日本で之を認めたら隨分と訴の提起さるべき筋合の場合が多からう。然し日本法ではかくして得た賠償金は不正行爲の當事者たる夫が「民法ニ從テ使用及收益」を爲す權利を有するに至るのだから(民法七百九十九條)變な結果になる。

(3)夫の貞操を尊重する事。これは英米でも法律で保護して居らない。社會の觀念が未だ夫の貞操を妻の貞操程重く見て居らぬのが理由であらう。フエミニストが大に怒る一點である。第三者に對する夫婦關係の保護に就ては夫の保護の方が妻の保護よりも優越して居る。然し「夫の愛情離隔の訴」などが認められるあたりは流石に米國である。日本の妻は當分左樣な訴を起さずに默して居らねばなるまい。

(七)子の上に行ふ親權に就て夫と妻とは同等でない。民法は第八百七十七條で「子ハ其家ニ在ル父ノ親權ニ服ス」る事を原則として居る。從來英米でも左樣であつたが近頃のアメリカでは

妻の方から大分故障が出て、多くの州では法律を改正して夫婦共同して親權を行ふ事とした。又離婚の場合には我民法では當事者で別段の定めをせない場合、又裁所判が特別の定めをしない場合には子の監護は父に屬する物として居るが（民法第八百十二條第八項）アメリカでは全然子の福利に從て定められる、物としてかゝる夫を先にする推定規定の無いのが多い樣である

（八）離婚原因に就て差別的規定は、一方夫は妻が姦通を爲したるときに離婚の訴が提起する事が出來るが妻は夫が姦通罪に因つて刑に處せられた場合でなければ離婚の訴は起せぬ事として男女不平等である。英國（いんぐらんど丈）では日本と同樣だが今改正論が盛に行はれて居る。アメリカでは夫の姦通も妻の姦通と等しく離婚原因として居る。

（七）

婦人を分つて未婚婦人、妻 及び未亡人（寡婦）とするならば未亡人が世間一般から同情を惹く。殊にアメリカ人は未亡人に對する同情の念が强いと云ふ評判である。議會などでも寡婦年金（widow's pension）となる議員が頗る熱心になるが、母性保險(Maternity insurance)になると熱心の程度が薄らぐと傳へられて居る位である。兎に角配偶者を失つた氣の毒な未亡人を充分に保護する丈のガラントリーを法律も持つて宜い。殊に未亡人相續權に就て之が問題となる。

然らばこの點に就て日本法はどうかと云ふと、その保護が必ずしも厚いと云ふ譯に行かぬ。

我が民法では英米と異つて相續に家督相續と遺産相續と分つて居る事は先きに述べたが。

（一）家督相續の場合の未亡人の地位如何と云ふと、先夫たる戸主に家族たる直系卑屬があればこれが一人で家督相續人となり未亡人は少しも先夫の財産を得ない。又戸主に法定家督相續人たるべき直系卑屬がない場合には戸主は生前の屆出又は遺言に於て誰でも家督相續に指定する事が出來る。この場合未亡人が家督相續人に指定される事はあらうが是は稀であると云はねばならない。戸主に直系卑屬たる家督相續人もなく又指定家督相續人もない場合に民法は被相續人の父又は母又は親族會をして(1)家女なる配偶者(2)兄弟(3)姉妹(4)家女ならざる配偶者(5)兄弟姉妹の直系卑屬の順序で家督相續人を選定せしむる事として居る即ち先夫が入夫とか婿養子で其家の戸主となつたと云ふ場合には未亡人たる家附の女は第一次に選定される權利があるが、未亡人が他家から入つた妻である場合には被相續人の兄弟姉妹の爲めに優先されるのである。

（二）遺産相續、即ち家族の死んだ場合の相續に就ては(1)直系者卑屬(2)配偶者(3)直系尊屬(4)戸主と云ふ順序である。即ち配偶者は第二順位にある。且つ未亡人が相續人である場合には遺留分

として被相續人の財產の三分の一は必ず得られる（民法第千百三十條）

以上の中遺產相續の場合に未亡人を直系尊屬や戶主や兄弟姉妹（全然相續權がない）に先立たしめて遺產を獨占せしむ樣にしたのは一大英斷（？）であるとも云へよう。然しながら家督相續遺產相續を通じて直系卑屬ある場合に全然遺產を未亡人に與へぬのは稍酷である。子が未亡人を充分に世話をすると云ふ古來の美風は其子が先妻の子であり養子である場合に必ずしも守られないのが現實狀況であつて、この點から不幸な運命に陷る未亡人は世間に少しとせぬ。又家督相續の場合に他家から入つた未亡人よりも兄弟姉妹を優先させ、未亡人には遺產を少しもやらぬと云ふのは不公平な嫌がないでもない。

之に反し英國では未亡人の保護は日本より厚い。卽ち

(1)被相續人の不動產の三分の一について未亡人の一生涯之を使用收益する權利をもつ。

(2)被相續人のもつて居つた動產に就てはその內から債務を支拂つた後

（イ）動產不動產を併せて五百ポンド以下ならば全部未亡人に行き、「土地に付ては法定相續人が全部之を取得する」と云ふ原則の適用もなくなる。

（ロ）その價格が五百ポンド以上なる場合には未亡人は五百ポンドとその利息を何人に先つて得る。

（ハ）亡夫に子供がある場合には未亡人は動產の三分の一子供が三分の二を得る。又亡父に子供がないと、未亡人は動產の半分を得、殘り半分が近親の間に分けられる、

勿論英國では遺言や夫婦財產契約で右に變つた定めをする事が自由であるが、無遺言相續の場合の規定は大體右の如くである。日本と比較すると未亡人の地位は能く保護されて居る。米國は州に依て異るが大抵未亡人の相續權を認めて居ないものはない樣である。

（八）

時勢は間斷なく「身分より契約へ」向つて、流れて來た。それ丈でなく英米に於ては少くも私法の範圍內に於ては婦人の地位は騎虎の勢「男女平等」の域を飛越へて「女子優越」にまで進んで來た。男子は今や「女子優越より男子平等へ」と叫ばざるを得ざるに到つた。之に反し我國に於ては公法上に於ても將た又私法上に於ても「男子優越」が牢固なる地步を占めて居る。

然しながら法律はある意味で社會の反映である、英米に於ける法律上の「男女平等」は事實上の「男女平等」に根ざして居る點が多い。我國に於ける法律上の男子優越は事實上のそれに淵源して居る部分が可成りあるのではないか。私は男子が一層婦人の人格を尊敬すると共に婦人が益々覺醒して尊敬すべき人格見識を養成せられん事を希望して止まざるものである。そして近き將來に於て法律上に於ても少くも男女平等の實を擧ぐるに至るを期待せんとするのである。（完）

ボリセヰキの「暴政」とアナーキスト

山川菊榮

はしがき

ロシア革命——あの半未開國の、三億に餘る原始的な民衆を率ゐて世界最初の勞働者共和國を建設した××な少數のプロレタリアの必死の努力、必死の戰ひ——に對して、殘忍と酷薄を極めた冷笑と讒誣を浴せてブルジョア階級の御機嫌を取結ぶのは、小ブルジョア的自稱革命家の間の醜惡な流行である。最近に此醜惡な流行を逐うて全世界のブルジョア及びブルジョアの喝采を博し米國第一流の資本家新聞『紐育ウォールド』から三千弗の御褒美を頂戴した『革命家』にエムマ・ゴールドマンがある。エムマが三千弗でロシアの惡口を賣つたことに就ては、流石に米國のアナーキストらも一言もないと見えて、彼等の機關『自由社會』の中に、あれだけは全くエムマの大失態で、ボリセヰキに何と云はれても返す言葉がないと云つてゐる。

所で此資本主義國で知らぬ者もない人氣者の『革命家』も勞働者の國ロシアでは全く人の數にも思はれぬほど酷い愛想盡しに會つた。昨夏モスコーに開かれた赤色勞働組合インタナショナルの大會にエムマが傍聽を申込んだ時など、I・W・Wのヘイウッド始めエムマを知る英米代議員は、あんな小ブルジョア的反革命家に赤勞の大會を開かせて何にすると許り憤慨してその許可に反對した程であつた。

エムマの報告によると『今日のロシアでは、牢獄の人となるためには、違つた意見を言葉や行爲で現はす必要は少しもないので、『たゞ反對の意見を抱いてゐるだけ』で十分なそうであるが、無政府主義者と吾れ人共に認めるエムマは、『違つた意見を言葉や行爲で』思ふ存分現したに拘らず、非常委員會の餌食にもならねば『牢獄の人』ともならず——全くボリセギキは矛盾してゐる無事にロシアを出て懷かしい資本主義國の懷に歸り、涙と共

にロシアの勞働者獨裁治下での經驗を、資本家新聞に訴へた。

エムマの虛僞や矛盾を指摘する材料は數多い中に、曾て自らアナーキスト團體の組織者であり、一九一九年の初頃にはオデッサでアナーキストの機關誌を發行してゐたアレキサンダー・ナルギンの次の書簡は、ロシアの勞働者の直截なエムマ・ゴールドン觀並びに彼等の眼に映つたロシア革命の意義を窺ふに好都合なので、米國の勞働者新聞『ゼ、ウヲーカー』から玆に記譯することゝした。

革命の裏切者エムマ・ゴールドマン

私がエムマ・ゴールドマンの意見に同意するだらうといふ君の手紙と君の懸念とは、私には侮辱としか思へなかつた。エムマ・ゴールドマンの論文と、エムマがロシアの共産黨員とソヴイエットの施政を罵る權利があるかどうかについて、君は私の意見を問はれた。私は君に對する返事が同時にエムマ自身に對する公開狀として役立つことを希望する。彼女にしてなほ多少恥を知る感じが殘つてゐるなら或は吾々は彼女に羞恥の情を起させることが出來るかも知れぬ。私は一介の勞働者で、勞働者の間に生れ、勞働者の悲慘な運命を體驗し、たゞ勞働者としての物の見方しか知らぬ人間であるから、ゴールドマンやパークマンマのやうなタイプの人間とはテンで合ふ筈がない。僕はゴールドマンのやうなアメリカ流の際物師ではない。私はたゞ仲間の勞働者の利益のために事態を分明にしたいと思つて骨を折る許りである。私は革命家であつて、革命の賣笑婦でもなし、胸の[illegible]るやうなことゝ許り探して歩く人間でもない。殊に一番重要なのは、私は勞農ロシアでエムマと話して見て、たつた三十分の會話だけで、エムマがどんな種類の革命家かといふことを見拔[illegible]一九一七年十一月以來ロシアに起つた變化の意味が到底分るたちの人間でないことを見拔いた點である。

私は此手紙の中に、エムマ——名聲嘖々たるエムマ——は、單にヒステリカルな恥知らずの僞つきにすぎないうちを明かにしたいと思ふ。エムマは勞働者の敵(一階級の敵)であつて、參政權論と少しも違はず、參政權論と同じく、全然勞働者とは無關係なブルジョア的思潮の代表者なのである。

エムマがロシア人だと思つたり、革命家だと思つたりしたら大間違ひだ。エムマは波蘭のジユウだ。それとトロツキーのやうな國際主義者とはたちの違ふ、アメリカ中の大都會で古着屋をやつてゐるあの流儀のジユウで、彼等と同じ心理をもつてゐるのだ。彼女はレーニンの暗殺を企てた今一人の猶太女フアンニア・カプランと同じやうなタイプで、トロツキーを不倶戴天の

仇敵視してゐるジュウの仲間である。

路傍で巡査と格鬪してゐる醉漢や、郵便受箱の中に酢を注ぐ參政權論者を目して革命家とは稱し得ぬと同じくエムマは革命家でない。空景氣の國アメリカで祭り上げられた彼女には、革命の眞面目さを解することが出來ない。吾々ロシア人は、人間としては甚だお粗末かも知れぬ。けれども吾々は革命運動を傷つけぬのには、あらゆる出來事に際してどう行動したらよいかに就て是否の辨別を知つてゐる。實行は吾々に澤山の事を敎へて呉れる、吾々は野人であつて禮には做はぬが、率直で眞面目である。『法主然たるクロポトキンは何故ポリセヰキを攻撃しなかつたか』とエムマは問うて、同時に『それは彼が正直な古い革命の戰士だつたからである』と答へてゐる。クロポトキンがどうして革命の先頭に立ち、組織せられた帝國主義的世界を相手として鬪つてゐる人々に對して、敢て戰ふことが出來たらう？所謂大戰の最中にフランス及び世界の帝國主義に彼の與へた助力の結果を既に目にしてゐた以上、彼はどうして敵に力を藉すことが出來たらう？エムマ自身、自分の論文の中に『彼は（ボリセヰキと）戰ふことは出來なかつた。彼は、古い革命の戰士の或人々のように、革命の敵と結ぶことは出來なかつた。たとへ彼はヨーロッパの新聞に彼の抗議を載せて貰ふことが出來たにしても、反動主義者らはロシア攻撃の材料にそれを利用したであらう。否、彼にはさういふことは出來なかつた』と言つて居る。

エムマは馬鹿なのか、不正直なのか？革命の敵に糧を與へユ戰ひの眞只中にあるロシアの勞働者を攻撃するあの論文によつて自ら自己の罪を摘發することを敢てして居る以上、エムマは馬鹿と不正直の兩方を兼ねてゐるに違ひない。

君の一般的な間違ひは、勞農ロシアに旅行した後もなほ、私がやはり依然と同じ種類のアナキストだと思つてゐる點にある、そんなことがあつて堪るものか。ロシアの偉大な社會主義革命は總ての正直なアナーキストの百人中九十九人までを、クロポトキン流でなく、レーニン流の革命家にしてしまつたように、私をもさう變へてしまつた。といふのは同志レーニンの率ゐる政黨ほどに革命的な、それほど思切つた勞働者黨は世界中に又とないからである。プロレタリアの獨裁を通る外、共産主義に到達する道はない。そして共産主義の社會は、アナーキストの理想たる、□□ないの社會である。

革命に對する二つの態度

ロシア革命――それはたゞエムム流の無政府主義理想の墓場にすぎないの―― 墓掘りたらんことを望む彼女の駄法螺を私は

一つ一つ素破抜いてお目にかける。彼女は全世界が思想や理想の墓場だといふことを發見したといふが、唯一つ間違つた點がある。それは『無政府主義的思想や理想の墓場だ』といふことを言落したことである。ロシア革命は全世界に向つて、革命の事業を遂行するものは民衆ではなく、大衆ではなく、實に階級意識ある革命的少數者だといふことを示したのであるから、これは所謂哲學的アナーキズムの臨終である。哲學的アナーキズムがどう云はうとも民衆又は大衆は自分から進んで何事をもするものでない。彼等は組織され、激勵され、先導され、驅り立てられねばならぬ。それをするのは、革命運動に從ふ階級意識ある分子の仕事である。革命そのものは單にブルジョア階級に對する鬪爭のみではなく、同時に無智な、魯鈍な勞働者や農民に對する鬪爭をも含むのである。

無産階級黨は星の中に棲んだり、未來の美しい夢を描いたり哲學的アナーキストがやるように、國家と權力の批評をしたりして革命を救つたのではない、今日は何をしたらよいか、明日はどう行動したらよいかといふことを明白に計畫することによつて、革命を救つたのである。ロシアのありとあらゆる種類の社會主義者やアナーキストの團體の中で、唯一つ共産黨もしくはボリセヰキ黨のみが、革命が危急に瀕した際にどう行動すべきであるかといふことを知つてゐた。エムマ・ゴールドマンの云ふ通り成程革命はエムマやクロポトキンやプレハーノフや、あらゆる革命のお祖母さんやお祖父さん達にとつては死んでしまつた。けれどもそれは單にロシアのみならず、全世界の勞働者にとつては、現に生きても居り將來益々榮えて行くのである。

ジョン・リードの『世界を震撼せる十日間』の中に、一人の赤衞兵とゴールドマン、バークマン、シャピロ型の一革命家との會話が出てゐる。赤衞兵の云分は只だ一つしかない。『ブルジョアとプロレタリアと、此二つの階級の外ないんだ。ブルジョアのためになることは××者のためにならない。『××××××になることはブルジョアのためにならない。』但しブルジョア的アナーキストの宣傳が勞働者の中で成功せぬと同じように、此時の宣傳は成功しなかつたが。

クロポトキンの破産

ロシア革命は、此世に一般的な人道などといふものはなく、萬人にとつての自由や幸福もなく、吾々は只だ勞働階級のみの自由と幸福との爲に戰つてゐるもので、エムマ・ゴールマンとポール・ミリウコフたるとを問はず、敵を全滅させるために戰つてゐることを明かにした。一九二〇年の始めには、昔の金持の商人

や富豪の群がモスコーの町に立つて、小さな砂糖の塊を皿に献せて賣つてゐるのが見受けられた。彼等は本當に商賣がしたい譯ではなかつた。彼等の目的、唯一の目的は、彼等はなほ商人として存在してゐること、昔の通り特權階級として勞働の必要を免れて居る階級として、生活してゐることをモスコーの民衆及び全世界に誇示する點にあつたのである。たとへ餓死しても彼等は生活の爲に勞働するといふ、恥づべき地位に身を落す氣にはならないのである。

此一事は革命の初めに破産に陷つたクロポトキンを私に思ひ出させる。彼が勞働者に對してした唯一の御奉公は『大衆に干渉するな。何もかも彼等に任せておけ』といふ言葉であつた。ソヴイエット共和國防禦の問題に就て意見を問はれた時、彼はたゞ『民衆に任せて置け』とだけ答へた。けれども民衆は自分では何もしない。ドイツの侵入軍の鐵砲に對して棒切れや石を以て手向ふのは、自殺をするのと變らない、そこで男子を動員して軍隊にも入れねばならず、軍需品工場を運轉もせねばならず、敵の攻撃に對して多少なりとも抵抗らしい抵抗をするには軍隊を組織して武器の使用法などを訓練せねばならなかつたのである。

ロシアの勞働者は混亂と無秩序か、秩序と計畫と組識か、二つに一つを選ぶ外なかつた。社會主義の國家か、思想上の貴族の狂氣沙汰か、二つに一つを採らねばならなかつた。彼等は常識の聲に耳を藉すだけは賢かつた。クロポトキンはスツカリ破産した後、汚ない勞働者の群が自己の運命を自己の掌中に握り、高貴な宮殿をさへ收奪するのを見てから、ドミトロフに姿を隱して恰も昔の相場師がモスコーの町で砂糖を賣るのと同じように、彼はなほ貴族であり、群衆よりも遙かに時代に先じてゐるといふことを示すために、壯烈な鬪爭の最も慘澹たる苦戰の眞最中に、『倫理學』の著述にかゝり始め、音樂や藝術に浮身をやつしてゐた。（何といふ慘めなことだらう！）彼は革命運動の古い功勞者として特別の手當金を受けてゐたが、石油が不足してゐるので、ラムプは只一つしか點せなかつた。ロシア及びシベリヤに於ける何百萬の家々は、革命の間中、石油なしでゐた。革命を成就させた男女は石油がないので、暗闇の中で仕事をしてゐた。當時バクーは英國の遠征軍に占領されてゐたのである。

特別列車を要求したゴールドマン

唯一つゴールドマンの文章の中に眞實のことがある。それは虱の恐怖である。虱の恐怖はクロポトキンをモスコーから逐つた。彼は地理雜誌の挿繪で見たのとは大違ひの、虱の集つてゐる勞働者と心持のよい家を領たねばならなかつたので、荷物を纒

めてドミトロフにゐる今一つの彼の家に引越して行つた。無産階級がその『倫理』、世界的倫理を、諸方面の戰線――其處では赤軍が筆の代りに小銃や大砲を用ゐてゐた――で創造してゐる際に、彼はドミトロフで悠々と倫理學の傑作に筆を染めてゐたのである。

虱の恐さに哀れなエムマは『老大人』を訪ふことが出來なかつた。彼女はロシアで政權を握つてゐる人々、卽ちソヴイエトの代議員同樣な旅行をすることが出來なかつた。代議員らは列車の屋根の上や機關車の上に乘つて旅行した。彼等はロシアの支配者であるにも拘らず、特別列車を命ずることが出來ないどころか、アメリカの鐵道の工夫同樣の苦勞をし食物としては乾いたパンの厚い切れ一つだけであつた。アメリカ流の淑女に對する優遇と紳士的な態度に慣れ、群衆の迫害、監獄生活送還といふような特別扱ひに慣れて來た彼女は、此『老大人』を訪問するといふ、重要な革命的事業を遂行するために特別の注意、特別の車室、特別の列車をさへ要求したのである。

革命の最初から、ロシアは組織的才幹をもつた男女が不足で困り切つてゐた。けれどもエムマには革命博物館のために材料を集めるといふより外の仕事は見當らなかつた。然しこれはゴールドマン、バークマン、シヤピロのような連中にはおあつらへ向の仕事だつた。といふのはあゝいつた屑や廢物は本來博物館向の代物だからである。

エムマはブレスト・リトウスクの話のようなでたらめを革命博物館の爲に集めでもしたのだらうか。ブレスト條約が調印される前に、ウクライナが既に獨逸と單獨講和を結んだこととブルジョアの治下にあつた爲に、單にウクライナがソビエット・ロシアを裏切つたのみならず、獨逸帝國主義者の爲に人間や武器や食糧を供給したことを知らぬ者が何處の世界にあるだらう！ ブレスト條約と共に、獨逸帝國の崩壞期は始まつたのである。最下層の勞働者でも知つてゐる此簡單極まる歷史的事實をすら今まで知らずにゐるほど、エムマは途方もない大馬鹿者なのである。

革命を掠奪と解するゴールドマン

哀れなロシアの農民は恐ろしいボリセヰキのために食物を掠奪された。彼女の哀れな同國人古物商仲間――には革命中投機を行つて射殺された者も多い。勞働者は、革命の權利によつて農民の爲に地主の領地を奪つたのだつたらうか。それとも農民の財産を奪つたのだらうか。勞働者が家畜飼養物を□□して、家畜や穀物を農民の間に分けたのが、正しくないことだつたらうか。否、それは勞働階級の爲に資本家を□□たにすぎない。

エムマ・ゴールドマンが此理を解し得ないのは、古物商のケチ臭いコソ泥的心理のために外ならぬ。革命はペトログラードとモスコーとの町に先づ起つて、勞働者はその大勝利の中に、農民と共に分け取りをした。勞働者は破壊された工場や滅茶々々になつた鐵道の組織を自分らの手に收めた。彼等が工場に留まつて××××するために機械を修繕することは絶對に必要であつた。彼等がその仕事を繼續し、且つ異常の努力をしてゐる赤軍を支持する上に必要な限り、農民から全ての餘剩生産物を要求するのは×××××あつた。石頭のエムマによつて『掠奪』と呼ばれ行動は實際上、双肩に×××××擔ふ勞働者の、適法の報酬だつたのである。此『掠奪』は、エムマの哀れな農民達の心にブルジア的傾向が生長して行つたにも拘らず、最大の困難に當面しながら遂行された、革命時代の共産黨員の最も光輝ある努力であつたのである。

アングロ・サクソンの中には、エムマ・ゴールドマンは淑女であるから、此手紙の中に用ゐられた言葉は甚だ不躾だと云ふ者もあらう。所で吾々ロシアのコムミユニストは男女の間にも民族の間にも、何等の區別を立てない。社會主義の社會では、吾々は平等である。であるから吾々は女であつても構はず、エムマを呼んで僞つきといふのである。

兒童哺育に關するエムマの虚妄

『亡靈』に關する話は徹頭徹尾、僞で固めてゐる。何故なら實際吾々には『參觀用』の學校などといふものはないからである。エムマはエッチ・ヂー・ウエルスが勞農ロシア見聞記に書いたのと同じ話をして聞かせ、自分が實際に見たロシアの話でなく、ウエルスの書いた『參觀用』の學校の話の受賣をしてゐるのである。

ウエルスの話が公表された一週間後、ロシア一流の批評家にして著述家たるコルネイ・チユコフスキーはウエルスの虚言に對する抗議を發表した。チユコフスキー及びウエルスを方々の學校へ案内した文學者達は、ウエルスが考へてゐたほど馬鹿ではなかつたので、ウエルスが彼等に求めたような馬鹿げた詭計をやる氣はなかつた。そして彼等の抗議は、全世界の識者の前にロシアの著述家や新聞記者は、英國やアメリカの際物師とは譯の違ふことを明かにしたのである。ウエルスのでたらめな記事に對する抗議書に署名した人々の中には、非ボリセヰキ黨はあるが、文學を神聖視するように訓練されてゐるので、全然無根の事實を讃めて、文學を恥しめるに忍びなかつた人々も加つてゐる。エムマ・ゴールドマン自身其當時のロシア及びヨーロッパ

の新聞を見たならば、抗議者の氏名及び彼等が虚構の話に反對した論據を知ることが出來るのである。

ヴァンダーリップ、アーサー・ランソム、クレーア・シエリダン夫人及び其他數多くの非ボリセヰキ達は、ボリセヰキの遂行した最も光輝ある事業が兒童ホームや植民地である、といふことを述べて居る。子供の爲にはツアールコエ・セロではツアーの諸宮殿を用ゐたが、農村では木造の家を使用した。それは何處の村にもツアーの宮殿を持つて行くことは不可能であるし、恐ろしい闘爭の最中に宮殿を建てることも不可能だからである。私の妻はモスコーの、ドミエトリフエカ街にある子供の家を見て、それを世界一だ思ひ込んで（勿論さうであり、又『參觀用』の學校でもなかつた）、吾々の子供をそこに預けて置きたがつたが他の學校を幾つも見た後に、それが一番悪い分だつたことを知つたのである。管理の仕方と、責任者が仕事に熱心かどうかといふことと次第で、一切が決るのである。

何事に就ても遣方が、惡いとか不注意だとか、能率が上らぬとかの場合に對する最も手厳しい批難は、共産黨の領袖連の中から起る。彼等は眞實を恐れない。そして彼等自身の行動も亦、他の總ての黨員の行動同樣同じような批評の的となるのである。共産黨の『掃除』（黨員精選の爲め輿論によつて黨員たる價値なき者を除名すること）は黨の役員によつてされるのでなく、黨外の勞働者や農民によつて行はれるのである。世界中に又と黨外の民衆に、黨員の去就を決定させる政黨があるであらうか。

反革命家には不都合な非常委員會

非常委員會はボリセヰキの浮世の最も暗黒な制度として說かれてゐる。吾々の敵が、ありとあらゆる方法で非常委員會の廢止を要求し、此委員會と其活動に對する恐怖を言明するといふことは取も直さず、それが過度期の勞働階級にとつて有用な働きをしてゐる十分な證據である。エムマは反革命黨の爲に共産黨員が一人殺されゝば、非常委員會は十人の生命を取て仕返しをすると云つて居る。所がこんな取引では共産黨員の方で引合はない。一人眞面目な共産黨員は、エママ・ゴールドマンや、バークマンや、シヤピロのような犬猫共の十匹どころか、百匹どころか千匹にも換へ難い價値があるのである。然し非常委員會はそんな恐ろしい仕事の出來る團體でない。さうでなかつたならエムマが革命の仇敵だといふことを知りつゝ國外に去るのを打捨て置く筈がないではないか。スピリドノワに關する長い論文の中で、只一つ實際と符合してゐる點は、スピリドノワがルゼノウスキータムボフ州の知事でなく、徴罰（隊の長であつた）を暗

殺し、このテロリスト的行動の爲にシベリアに流されたといふ點である。彼女はエムマの云ふように『ホンの生きた肉塊』のようになつてシベリアに着いた譯ではない。革命博物館の爲に材料を蒐集してゐたといふ以上、エムマはスピリドノワが流刑の途上、多くのステーションで撮した寫眞の幾つかを見たに相異ない。

其等の寫眞は、スピリドノワが崇拜者の群に圍繞せられ目的地を見失つたからではなく、生來の缺陷の爲にいつも掛けてゐる眼鏡をかけて、微笑してゐる所を示してゐるのである。

勞働者のロシアは、スピリドノワに對してさへツアーの負債を拂はうとはしない。無產階級××潮流を遮る邪魔物は一切合切容捨なく掃蕩される。××××行の必要に適合せぬ人物や信條は、信用を失つて亡びる外ない『革命の祖母』プレシコフスカヤだらうが、スピリドノワだらうが、プレハーノフだらうが、社會革命黨だらうがメンセヰキだらうが、勞働者は遠慮なく放逐する。現にそんな者は皆放逐してしまつたのである。

『殉教者』スピリドノワ

恐ろしいボリセヰキは、勞働者の革命を裏切つた廉で、スピリドノワを監獄に入れたり、軍法會議にかけたりする代りに、神經病の病院へ入れた。これはボリセヰキが革命の最も恕し難い敵に對しての外、力を用ゐないことを示すにすぎない。スピリドノワを殉教者と見せるために、エムマはスピリドノワの行動の結果から出た犧牲者に就ては一言も述べて居らぬ。が、その犧牲者の數は實に何千人に達してゐるのである。

一九一八年の始めには、スピリドノワの命令に依て、獨逸公使ミルバヘが暗殺された。その唯一の目的は獨逸との戰爭の再開にあつたのであるが、それは疲勞し切つた、瓦解したロシアの軍隊の能く得る所でなかつた。これは赤軍の編成以前のことであつた。スピリドノワは共產黨の天下を覆さうとした社會革命左黨の首領であつた。モスコーの街上で三日間戰つた後に、陰謀團は敗北した。何千人の犧牲者の死は、スピリドノワの責任である。スピリドノワと革命的勞働者との間には、彼女が勞働者の味方だと稱することを許さぬ血の河が橫はつてゐる。勿論スピリドノワは自分の手に權力を掌握する氣ではなく、たゞボリセヰキの治世を顚覆すればよいのだと云つて居る。

權力を取る氣はないといふ所を見るとスピリドノワにも常識があるらしい。といふのは、あらゆるものが混沌たる狀態にあり、全國の生活が紊亂し進んで權力を取らうとする政黨が狂人の集團と目されてゐた時代には、權力を執るといふことは、無

から有を作り出し材料なしで家を建てることを意味するからである。此不朽の事業は、ロシアの共產主義者の壯烈果敢な無產階級黨あつて始めてよく遂行され得たのである。壯烈なる狂人！

勞働者と農民との權力に反抗して戰ひながら、自分は權力を取ることを肯ぜぬスピリドノワは、一體誰のために準備をしてゐるのか？恐らくツアの爲にでもやつてゐるのだらう！

『ボリセヰキはロシアの民衆の、解放された權力を堰き止めた』とエムマ・ゴールドマンはクロポトキンから話して聞かされたけれども、吾々はクロポトキンは一九一四年以來彼が無政府的愛國主義者となつて以來、フランスの自由のための偉大な戰ひに向ふ軍隊に參加せよと勞働階級に訴へて以來、實にその時以來クロポトキンはその哲學的無政府主義と共に、勞働者に取つては死人にすぎなかつた者であることを知つてゐる。『民衆は或大事業が彼等の前にあり、彼等はそれに當面し、組織し、方向を定めねばならぬことを知つた』とエムマはその文章の中に書き『ロシアの民衆の、ボリセヰキの桎梏に對する頑強な抵抗は、その一番よい證據である』と云つて居る。ロシアの勞働者が何故ボリセヰキだけを信じてゐるか、何故飢餓の『桎梏』ですら、彼等をして全世界の帝國主義と戰はせ、その戰に成功させて居るか、何故全露大會にはアナーキストは二名しか選出せられず、共產黨員及び黨外の共產黨の同情者が約二千人も選出されたかを解することが出來ぬほどのエムマの愚鈍さが、此言葉の中にすら現れてゐる。成程『思想』の、無政府主義的思想の『墓場』とはよく云つた！

勞働組合に關するゴールドマンの證言

ロシアの勞働組合に關するゴールドマンの報導は實に面白い。エムマは一九一七年七月ペトログラードに開かれた勞働組合の第三回大會には百四十七萬五千四百三十五名を代表する二百十名の代議員が參列したと書いてゐる。これは私にとつても第三回大會の記事を讀んだ誰にとつても初耳である。私は此大會にはオデッサからの代議員として參加した。大會は一九二〇年四月五日より十五日まで開かれ、千六百七十六名の代議員の出席を見た。此中千五百八十八名は共產黨員、三十三名はメンセヰキ、そして二名はアナーキストであつた。斯くいふ私がその二名のアナーキストの中の一人であつたほど、當時の私は馬鹿だつたのである。他の全ての代議員は、黨員ではなかつたが共產黨の同情者であつた。此大會の代議員は七百萬人の組合勞働者を代表してゐた。エムマが革命博物館のために集めた材料の價値は、これでも大に見當がつく。

革命當時には勞働組合は兵營の役を務めた。平時には、それは勞働者の學校となり、集會場となり、講堂となりサボトニク（共産黨土曜日）を組織する場所となる。組合の多くの職分は國家の職分である。何故ならばその國家は勞働者の國家であり、彼等が敵を抑壓する武器だからである。哀れなエムマは勞働者が何故賃銀値上げの爲にストライキをしないか、境遇改善のために戰はないかを解すことが出來ない。エムマの考へる所では、これは勞働者がボリセヰキの壓迫を恐れるからである。ところが實際は、勞働者が生れて始めて、××の爲めに働いてゐるからこそ、かうした行動に出ないのであるのみならず、自分らの賃銀を値上げすれば、投機商人が賣つてゐる商品の値上げをすることになるのである。エムマの陳述によれば、勞働者は六百九十五の工場の中僅かに八十六工場で八時間勞働を得てゐるのみである。中には一日十二時間乃至十八時間働く者がゐる。何故さうであるか。それはボリセヰキが要求するからであるか、又は革命の經濟的必要が要求するからであるか。勞働者は生れて始めて×××運命の支配者となり彼等の革命的感激と常識とは經濟的破壞に對する共同の戰ひに全力を注がしめてゐるのである。彼等は、時間外勞働が××を救ふためであるといふので、時間外勞働の手當を請求することすら肯じない程である。

ツアーの負債返却を迫るゴールドマン

革命的勞働者の眼から見たエムマ・ゴールドマンは、古物商的心理をもつた『亡靈』にすぎない。革命が投機商人を壓迫するといふので彼女は革命に反對する。商品を抱へた小商人が車室の屋根を破つて、既に破壞されて居る運輸組織に致命的打撃を與へるにしても、それに關つてはならぬ。それは個の自由である。勞働者や赤軍が革命のあらゆる問題に當面してゐる一方、穀物が哀れな農民の土地に生えたなり、腐つてしまつた處で手を出してはならぬ。バークマンやシヤピロは、戰ふよりも、自分のことでさへあれば、喋るのが好きだから彼等には兵役を免除せよ！

これが革命についての所謂哲學的な無政府主義の理想である。フランスの銀行家のやうに、エムマはスピリドノワに對するツアの負債を皆濟せよと要求する。更に、自力を迫害したカリフルニアの群衆に對する貸までも取立てようとする。エムマはロシアの勞働者の前に勘定書を展げて、敬意と崇拜とでその負

價を仕拂へと迫り、小ブルジョア根性を發輝して、資本上に利子までも要求したのである。

此手紙の始めの方に私はエムマがレーニンやトロツキーの如くロシアの革命の偉大な指導者のような國際主義者ではなくて偏狭な國民主義者であることを明かにした。ブレスト條約に對する彼女の言草はそれを一番よく證據立てゝゐる。階級意識ある全ての勞働者が、たゞ革命の救濟とよりほか解せぬ場合のことを、彼女は恥辱と考へてゐる。全ての國家主義者同樣、エムマはブレスト條約を以て國辱だと稱してゐる。革命運動に參加する正直な人間は誰一人、クロポトキンでも古い革命の戰士のうちの誰でも、世界最初の勞働者共和國に關する僞と惡意で捏ね上げられた讒誣を以てブルジョア階級を支持し、ブルジョアの汚れた仕事を意識的にやつた者は他に無いのに、エムマだけはそれをやつた。して見ればエムマはアナーキストですらもありはしない。彼女はイスカリオテのユダの立派な相續人である。只だ違つてゐるのは、ユダは銀三十枚を受け、エムマは三千弗貰つた點である。』

新刊紹介

□**戀愛合戰**（宇野浩二。新潮社發行。定價貳圓五拾錢）

□**一日の糧**。中澤靜雄氏の短編集「日本社發行定價一圓八十錢

□**日本の民家**（今和次郎著）『この小さい本は、なるだけどんな人へでも興味を持つて田舍の生活や家屋のことを知つてもらへるやうにと心掛けて書いたものである。』（鈴木書店發行定價貳圓參拾錢）

□**マルクス派經濟學と唯物史觀**（桝本正三郎譯）クローチェの原著を譯す。（日進堂發行。定價貳圓貳拾錢）

□**華府會議の眞相**（小松緑著。中外新論社發行。定價參圓）

□**最後の一線**（アルツイバアセフ著。長岡義六譯。新潮社發行前編後編壹圓八拾錢宛）

□**太陽の沈みゆく時**（橘外男著。日本醫院發行。正價金貳圓）

□**赤と黒**（スタンダールス。佐々木孝丸譯。新潮社發行。前編貳圓五拾錢）

□**午前の愛撫**（稻瓜健著）詩集。（九十九書房發行。定價壹圓八拾錢）

□**日の下に**（細田民樹著。新潮社發行。定價貳圓）

□**野口米次郎詩論**（野口米次郎著。玄文社發行。定價貳圓參拾錢）

□**彼の結婚とその後**（武者小路實篤著。新潮社發行。定價貳圓）

□**日本勞働年鑑**（大原社會問題研究所編。同人社發賣。定價參圓）

□**宗教經驗の哲學**（ロイス著。加藤榮彦譯。叢文閣發行。定價貳圓五拾錢）

□**日本童話寶玉集**（楠山正雄編。冨山房發行。下卷定價三圓八十錢）

レニンの後繼者、リコヴの面影

リコヴと彼の妻とベーピイとが、帝政時代には鐵道監察官の乘用であつた汽車の居間に坐つてゐた。そして彼等の正面には、かの有名なオペラ界の天才、シャリアピンが坐つてゐた。リコヴは四十前後の年輩の中肉中脊と云つた方だ、その眼は親切さうな青い色をして、そして金色のヴアンダイク式の髭を貯へてゐた。彼の職業は機械技師だ、だから彼の物靜かな態度なり様子は、どこかその職業にふさはしい所がある、が、その話し振りは、何と云つても今の露西亞に於ける役人のタイプそのまゝだ。

リコヴは伯林で大手術を受けて歸つて來る所であつた。そして最早殆んど常態に復してはゐたが、感心なことには、汽車中でも、普通の旅行者の食べるような辨當で辛抱してゐた。即ち、チーズの外には、パンと普通の固いソーセージしか食べなかつた。これが一ケ月も前に大手術を受けた人の食物とは、どうしても思へなかつた、途中から彼等と同乘してこの有様を見せられて聊か驚かされた亞米利加の一辯護士が、リコヴ夫人を顧みて云つた。「われ〳〵西洋人の體質では、とてもこんな食物では辛抱できませんね」と、そしたら彼女が莞爾として答へるには、「露西亞人は「仕事に對して熱心だ」といふ强壯劑を服してゐるからどんな粗食でも堪えられます——」とのことであつた。

また汽車が雪のために埋もつて立ち往生をした時に、リコヴは乘客中の誰よりも先きに降りて。雪かきをした一人であつた。そして機關車が全く動けるようになるまで外にゐた。所が汽車に再び乘るには、雪の堤防を下りる必要があつたのだ。そこでリコヴは彼のオバーコートを尻の下に端折り鋤は頭の上に翳して、そしてまるで小學校の子供でゝもあるかのように、大きな聲で笑ひ且つ叫んで興じ作ら滑つて行つた。この露西亞の眞面目な執政官の愉快氣な人間味のある遊戯は、亞米利加人にとつては、全くの驚異であつた、といふのは、こういふことは、舊式の亞米利加人の私生涯には往々にして見られるとなんだけれど、今では不幸にして、何所のオフイスに於ても殆んど見られないとだからた。露西亞人は畢竟、彼等の將來に對しても恐怖を懷かず、又その過去を恥ぢないからこそ、こういふ跳犬が出來るのだらう。

リコヴが雪かきに使つた鋤は、單に木で出來た小細工のものであつた、又た鐵道線路から、數歩の向ふには一軒の百姓家があつて、そこにリコヴが指したものを、見ると、ソリが一つあつて馬が二頭繫がれてゐたがその、ソリとても、軸と車とは、麻製の紐で結びつけられてゐた、即ち、鋤にしろ、ソリにしろ、鐵の切端すらも使はれてはなかつた。リコヴがソリを指したときに云つた——

「われ〳〵は、貧乏と戰ふことゝ、あんな器具の材料と、そしてこの鐵道みたいな運輸機關とに滿足するように訓練されつゝある時だ。が、そのうちに、豐富な石炭が出るようになるだらう、今の所、われ〳〵はその鑛脈がどれだけあるかをも知らないけれど。ほんの暫し待てばよい、平和となつた曉困苦に對する習慣とそれから西洋人が持つ以上の對人的の信仰を以つて、われ〳〵は、屹度、西洋の凡ゆる天才と、その成築とに打ち勝ち得るであらう。」

シャリアピンは亞米利加で非常な名聲を博して、今まさに、故國に歸るところであつた。彼は紐育では資本家のため、莫斯科では共産主義者のために歌ふのだ。否本當は矢張り人間のハートに歌つて聞かせるのだ、そして結局は資本家だらうが、共産主義者らだらうが、同じ人間であることに變りはない。そしてこの同じ人間のハートが、利益の異なる人だちの衝突から解放されて、一つの團欒の中に持來たされるものなら、それは恰度彼等がこの偉大なる歌劇界の名星に對して捧げてゐる賞讃に對する一致と同じいものを彼等の相互間に把握することが出來たときであらうといふことには、リコヴも同意であつた。（饒平名）

collapsed into two portions, tautologies and geography.

How these results are obtained, and what is the nature of Einstein's law of gravitation, I will attempt to explain, so far as is possible without mathematics, in a subsequent article.

approximated closely to the Newtonian law. He pointed out three minute differences between the results of his law and those of Newton's. The first of these, concerning the perihelion of Mercury, showed that Einstein's law explained a small discrepancy which had long puzzled the astronomers. At the time when Einstein propounded his theory, this was the only empirical argument in its favour. The second discrepancy concerned the deflection of light when passing near a very heavy body, such as the sun. It had been supposed that light was not at all subject to gravitation, but physicists were willing to concede that it might be as much deflected as if it consisted of material particles. Einstein's new law, however, required that it should be deflected twice as much as this. The solar eclipse of May, 1919, afforded an opportunity of testing the point by the observation of stars nearly behind the sun, and the result was as Einstein had predicted. This has been generally accepted as giving an empirical proof of his theory. But those who have understood the logical nature of the relativity theory could never have been satisfied with the old formulation of the law of gravitation, whatever the results had been. They might have been compelled to admit that Einstein's law was still more or less wrong, but they could never have admitted that Newton's was right.

The third observational test proposed by Einstein concerned the dark lines in the spectrum. These ought to be somewhat displaced towards the red in solar and stellar spectra as compared with those which have a terrestrial source. So far, it has not proved possible to obtain any decisive result either for or against the new theory as regards this point. The observations are difficult, and the effect to be expected is very small. But the results of observation, such as they are, are certainly not adverse to Einstein's theory. It may therefore be pretty confidently assumed that the theory is right where it differs from that of Newton.

One of the disconcerting results of the theory of relativity is that almost all the "great principles" of traditional physics turn out to be mere tautologies. The conservation of mass is no longer true, but has been absorbed into the conservation of energy. (In modern physics, the mass of a body is merely a portion of its energy, and by no means a constant portion.) The conservation of energy, so far from being a "great law," is a tautological result of our conventions of measurement and nomenclature; so is the conservation of momentum. Traditional physics, as amended to agree with relativity, is seen to be, in its broad features, what *à priori* it must be. The arguments are too difficult to be set forth in non-mathematical language. But one may say, broadly speaking, that most of the laws of physics are like the "great law" that there are always three feet to a yard. There are, however, newer portions of physics, such as the theory of quanta, which do not come under this head, and appear to give genuine knowledge of empirical laws, while the older physics has

and suppose them assigned conventionally, like press-marks of books in a public library. The only stipulation we make is that neighbouring events shall have neighbouring co-ordinates, i.e., if two events are very near together, their co-ordinates are to differ very little, and the difference of co-ordinates is to diminish below any assignable limit when the separation between the events does so. This involves the assumption that events can have a physical relation of "neighbourhood," and that, given a number of events all in the neighbourhood of a given event, some are nearer to the given event than others, and there is no lower limit (other than zero) to the possible nearness. In assigning co-ordinates, we take account of this fact; but otherwise the co-ordinates are arbitrary and are not regarded as having any physical significance.

Within a neighbourhood, ordinary physics must hold approximately. That is to say, there must be a possible way of assigning the co-ordinates in a neighbourhood so that, when this way is adopted, the laws of physics become those that are traditional. This must be the case because we know that traditional physics is *approximately* true. But the *exact* laws of physics must be the same whatever system of co-ordinates we adopt, since the co-ordinates express conventions, not physical facts. It is this consideration which led Einstein to his law of gravitation. In its Newtonian form, this law asserts that two bodies attract each other with a force directly proportional to the product of their masses and inversely proportional to the square of their distance. Neglecting all other difficulties about this law, let us concentrate our attention on the question of the "distance" which it mentions. This, of course, was intended to mean "distance at a given time," i.e., it was supposed that at a certain instant t the one body was at a place A and the other at a place B, and the distance concerned, as regards the time t, was the distance AB. But since simultaneity depends upon our choice of co-ordinates, we shall find, when we choose other co-ordinates, that when the first body is at A the second is not at B, but at some other place C. Thus the law of gravitation will give different results for the motion of the two bodies according to which of many equally legitimate conventions we adopt. This is as absurd as it would be if the question whether one man had murdered another were to depend upon whether they were described by their Christian names or their surnames. Therefore the law of gravitation cannot be right in its traditional form, because it involves the distance between two bodies at a given time, which is not a physical fact, but a quantity to be assigned partly by convention. It is obvious that physical laws must be the same whether distances are measured in miles or in kilometres, and we are concerned with what is essentially only an extension of the same principle.

Einstein discovered a law of gravitation which was independent of the choice of co-ordinates, and which, when expressed in the co-ordinates of ordinary physics,

which all exist simultaneously; if the body is not rigid, the spatial relations of the parts are not the same at one time as at another, but at any given time the body is supposed to have a certain perfectly definite shape. This whole way of looking at bodies is ruined by the theory of relativity. We are apt to imagine that, for careful measurement, it is better to use a mètre rod than a live eel. This is a mistake. To an observer in a suitable state of motion, the eel would appear as rigid as the rod does to us, while the rod would appear to be constantly wriggling. Nor can it be said that such an observer would see things falsely, while we see them truly. In such matters, what is seen does not belong solely to the physical process observed, but also to the standpoint of the observer. Spatial measurements, and temporal measurements likewise, do not reveal properties of the things measred, but relations of the things to the measurer. What observation can tell us about the physical world is therefore more abstract than we have hitherto believed.

We saw that the interval between two events, in the special theory of relativity, may be analysed into two parts, one spatial and one temporal, in an infinite number of ways, and that it is always possible to make either the spatial or the temporal part zero by choosing a suitable observer. The fact that the division into space and time is arbitrary (up to a point) destroys the usual conception of motion, which, as ordinarily conceived, involves a fixed space and a fixed time wholly separate from one another. We are compelled to begin our physics, not with bodies moving, but with events, any one of which, with reference to arbitrarilly selected standard events, has a position which can be fixed by giving what would have been regarded as place and date. To fix the place requires three quantities (co-ordinates), because space has three dimensions; to fix the date requires one. Thus the position of an event in the manifold of events is fixed by four quantities (co-ordinates), which are not objectively distinguishable into spatial and temporal co-ordinates. In the general theory of relativity, we assume that the position of an event can be fixed by assigning four co-ordinates, but we do not decide in favour of any one method of assinging the co-ordinates.

In every-day physics, the co-ordinates of an event are obtained by spatial and temporal measurements effected on the earth. Suppose for instance that an airship has caught fire. We can assign the position of this event by giving the longitude and latitude of the airship, its height above the ground at the moment, and Greenwich time when the fire began. So long as we confine our attention to terrestrial occurrences in which no very high velocities are involved, it will seem to us as if the four quantities thus measured (latitude, longitude, height and Greenwhich time) had physical significance. But the theory of relativity shows that this is not strictly the case. We therefore give up the attempt to attach physical significance to our co-ordinate,

or the sending of a light-signal and the seeing of it. If r is greater than ct, light cannot pass from the place of the one event to the place of the other until after the other has taken place; therefore, since nothing travels faster than light, the one event can have no influence upon the other. In this case, the two events are said to have "space-like" separation. But if r is less than ct, light can travel from the one event to the place of the other before the other occurs; in this case, the one event can influence the other, and the separation of the two is said to be "time-like." When the separation of two events is space-like, a reference-body can be found with respect to which they are simultaneous, so that their separation, for this body, is their distance. In this case there will be bodies with respect to which one will be before the other, while there will be other bodies with respect to which the other will be before the one. But when the separation is time-like, one of the events is definitely before the other, and this order is the same for all reference-bodies. In this case, however, it is possible for a body to move from one event to another, and in reference to such a body their spatial distance will be zero, so that for this reference-body their separation will consist solely of a lapse of time.

This whole system, however, belongs only to the special theory of relativity. It is now time to turn our attention to the general theory, which includes the special theory as a particular case, and is a much more tremendous and all—embracing synthesis.

In the general theory, we remove the restriction to bodies whose relative motion is one of uniform translation; all imaginable relative motions are now admitted. It is very difficult, perhaps impossible, to explain the general theory in a popular manner; there is a great deal of mathematical technique which is essential and far from easy. Nevertheless something can be done towards making its fundamental ideas intelligible.

To begin with, it is evident that geometry, as an independent science, ceases to exist, and becomes merged in physics. This follows already from the fact that simultaneity is relative. In geometry, the parts of a straight line or a circle are supposed to exist all at the same time; but if they are at the same time for one observer, they will not be so for another. This difficulty, if it stood alone, could be overcome. But the whole conception of a straight line collapses. What appears to you to be a straight road whose parts all exist now may appear to another observer to be any kind of curve, whose parts come into existence successively. Rigid bodies, which we need for measurement, are only rigid for certain observers; for others, they will be constantly changing all their dimensions. It is only our obstinately terrestrial imagination that makes us suppose a geometry separate from physics to be possible.

The fact that simultaneity is relative destroys the ordinary common-sense notion of a body. An extended body consists, for common-sense, of many parts

point of view, but there is no corresponding relation between the events themselves.) It will be observed also that, if the two events are simultaneous for observers outside the train (i. e. $t = 0$), we shall have $x^1 = \frac{x}{\gamma}$. Now γ is less than 1, so that x^1 will be greater than x. This means that what people outside the train judge to be a metre will be judged by people in the train to be more than a metre. But if we solve the equations for x and t, we find

$$x = \frac{x^1 + vt^1}{\gamma}, \quad t = \frac{t^1 + \frac{vx^1}{c^2}}{\gamma}$$

That is to say, the formulae for x and t in terms of x^1 and t^1 result from the previous formulae by merely changing the sign of v, which is as it should be. Thus what people inside the train judge to be a metre will be judged by people outside the train to be more than a metre. Distances inside the train seem longer to people outside it, and distances outside the train seem longer to people inside it. This is due to the fact that what appear to one observer to be simultaneous events do not seem to be simultaneous to the other observer, so that what, to the one, is a mere distance between simultaneous events is divided, for the other, into a distance and a lapse of time. Suppose, for example, that you are measuring distances in the train with a metre rod, and that you find two points a and b to be a metre apart. We have then, from the point of view of the people in the train, two simultaneous events, namely the coincidence of one end of the rod with a and of the other with b. For these two events, we have $x^1 = 1$ and $t^1 = 0$. Thus by our formulae $x = \frac{1}{\gamma}$ and $t = \frac{v}{c^2\gamma}$, so that t is not zero. Since every act of measurement involves two simultaneous events, namely the coincidence of the two ends of our measure with two points a and b of what we are measuring, measurement shares the relative character of simultaneity, and what is a measurement of mere distance for one observer is not so for another, since the two ends of the rod will not, for the other observer, be *simultaneously* at a and b.

In the special theory of relativity, to which the above formulae belong, there is however one quantity which can be measured and appears to be independent of the measuring body. It will be found from the above formulae that

$$x^{1^2} - c^2t^{1^2} = x^2 - c^2t^2$$

And, generally, if, in one system, r and t are the distance and time between two events, while r^1 and t^1 are the distance and time in another system, then

$$r^{1^2} - c^2t^{1^2} = r^2 - c^2t^2.$$

Thus although the distance r and the time t both depend upon the observer, $r^2 - c^2t^2$ is the same for all observers whose motion relative to each other is one of uniform translation. If we consider a ray of light starting from some place and travelling outwards, then, since c is the velocity of light, the distance r that the ray travels in the time t is ct, so that anywhere along the ray $r = ct$ and $r^2 - c^2t^2 = 0$. This relation $r^2 - c^2t^2 = 0$ is thus what connects two parts of one light-ray,

to the events, but only to our view of them. If one man looked at the world through blue spectacles, and another through red spectacles, they would see things differently as regards colour; but these differences would not belong to the events which they were both trying to describe, and could not therefore enter into the laws of such events. Similarly the differences between different measures of times and distances cannot enter into physical laws; the laws must be such that they are the same for one observer's measures as for another's. This is the principle of relativity, and it affords a test of any proposed law of nature. If the proposed law is altered by substituting another observer's measures, it is impossible: if it is unaltered, it is worth while to test it empirically, since it is *à priori* possible. It is amazing how powerful this principle has proved.

The special theory of relativity applied this principle only to bodies moving relatively to each other with uniform velocities in straight lines. It was inspired chiefly by the desire to explain the experimental fact that the velocity of light, as measured by observers on the earth, is the same in all directions, although, if there is an aether, the earth must be supposed to be moving through it. The theory leads to, and is summed up in, the Lorentz transformation, to which Lorentz was led empirically before the relativity-theory was invented, without having any general principle by which to justify it. This transformantion, reduced to its simplest form, may be stated with reference to our long railway train. What it states is as follows: Observers in the train and outside it on the line will make the same estimates of vertical distances and also of horizontal distances at right angles to the line, but will make different estimates of distances along the line and also of time. If v is the velocity of the train relatively to the railway, and c is the velocity of light, let us put

$$\gamma = \sqrt{1-\frac{v^2}{c^2}}$$

Let us take two events at different points of the line and at different times, and suppose that the observers outside the train make the distance between the two events x and the time between them t, while observers in the train make the distance x^1 and the time t^1. Then

$$x^1 = \frac{x-vt}{\gamma}, \quad t^1 = \frac{t-\frac{vx}{c^2}}{\gamma}$$

It will be seen that, if v is very small compared to c, γ is very nearly unity, and (unless x is enormous) the above formulae become very nearly those of ordinary dynamics, namely

$$x^1 = x-vt, \quad t^1 = t.$$

But as v becomes larger, the divergence from the traditional formulae becomes greater and greater. It will be seen also that, if x is large and t is small, t^1 may be negative when t is positive, i.e., if we call the two events concerned A and B, the observer outside the train may judge that A is before B, while the observer inside the train judges that B is before A. (It must not be supposed that one is right and the other wrong; each is right from his own

The experimental result that first showed the need of some radical reconstruction was that of Michelson and Morley, which proved that, however a body may be moving, the velocity of light, as measured relatively to an observer on that body, is the same. This result is quite incompatible with ordinary ideas. If you are walking along a road at four miles an hour, and a motor-car passes you (going in the same direction) at forty miles an hour, its velocity relative to you is 36 miles an hour; if it meets you (going in the opposite direction), its relative speed is 54 miles an hour. But in regard to light the matter is quite otherwise. Light is supposed to consist of waves in the aether, and the earth in its orbit is supposed to move through the aether. If so, a point on the earth ought not to remain at the centre of the light-waves sent out from that point. The case is analogous to what happens when a fly touches the surface of a stagnant pool and causes ripples to move outward in widening circles. These circles have their centre at the point of the pool that has been touched by the fly; but the fly has moved on, and is no longer at the centre of the circles. It seems utterly impossible that, if the fly moves over the surface of the water, it should remain always at the centre of the ripples.

Yet this impossibility is just what happens when a light-signal is sent out from a point of the earth's surface. The earth corresponds to the fly, the aether to the pool, the light-flash to the contact of the fly and the pool, the light-waves travelling outwards to the ripples on the pool. Nevertheless we find that, according to our terrestrial measures, the point of the earth's surface from which the light has been sent out remains the centre of the waves. This was a paradox which remained long without a solution. The special theory of relativity was designed to solve it, and did solve it. As we have seen, an observer on a comet which happened to pass swiftly at the moment when the light-flash was emitted would have measured times and distances differently from a terrestrial observer. The difference, according to the special theory of relativity, is just such that the observer on the comet will also regard the light as spreading outwards with uniform velocity from himself as centre. Thus every observer, however he may be moving, will find the same velocity of light relatively to himself in all directions, and this velocity will be the same as another observer would find relatively to himself. The paradox is explained by the relativity of our measures of spaces and times.

The principle of relativity, which has inspired Einstein's work, states that the laws of physics must be the same whatever body we take as the basis of our measurements. For human beings it is natural to take the earth; for people on a comet, if there were such people, it would be natural to take the comet. The people on the earth and on the comet would make different estimates as to the spatial and temporal distances between events, but these differences cannot affect the laws of physics, since they do not belong

that which would arise if two very fast engines started from A and B on parallel tracks when the flashes occurred, both travelling with equal and opposite velocities towards the middle of the train; it is obvious that Mr. Smith would meet the engine from B before the engine from A. Therefore if Mr. Smith accepts our definition of simultaneity, but uses the time appropriate to the train instead of that appropriate to the railway, he will judge that B is earlier than A when people on the railway line judge that A and B are simultaneous. And if he had been in a train travelling in the opposite direction he would have judged, on exactly similar grounds, that A was earlier than B.

So long as we deal only with every-day terrestrial phenomena, the difficulties raised by this discrepancy can be neglected. The distances involved are small, and the velocities concerned are not comparable with that of light. Moreover in daily life we take objects as fixed when they are fixed relatively to the surface of the earth, and it would seem absurd to base measurements upon what happens to people in trains rather than upon what happens to people "at rest," i.e., not changing their position relatively to the earth's surface. In physics, however, the conditions are often very different. There is no privileged body which can be taken to be "at rest," motion is a relative occurrence, a change in the spatial relations of two bodies, which cannot be divided into shares, one due to one body and the other to the other. The distances involved in astronomy are often so great that light takes many years to traverse them; the velocities which can be observed experimentally in electrons are sometimes more than half as great as that of light. Thus conditions arise which make the theory of relativity practically relevant; indeed it was the failure of the old dynamics to account for observed results which first made people aware of the logical flaws in the theory.

Having explained the relativity of time, Einstein proceeds to explain the relativity of distance. Considering still our train which is moving along the railway with uniform velocity, let us consider how we should determine its length. If we are in the train, we can measure its length in the usual way. But if we are outside the train, we shall have to fix two points A and B which are opposite the two ends of the train *simultaneously*, and measure the distance AB. If we are outside the train, we shall of course define simultaneity as it appears to people outside. But this does not correspond to the definition for people inside. It results that the distance between A and B is not the same as the length of the train measured by a person in the train. It can in fact be shown that the person outside the train, if he could measure with sufficient accuracy, would judge the train to be shorter than it appears to the person in the train.

Thus the measurements of times and distances are not absolute, but depend upon the motion of the observer relative to the bodies on which the events take place or the distances are to be measured.

must depend upon our state of motion. The gist of his exposition is as follows. Imagine a long straight railway, along which a train is travelling with uniform velocity. Suppose lightning strikes two distant places on the line; how shall we determine whether the two lightning-flashes were simultaneous? Let the two points struck be A and B. It may happen that, for all observers, the flash at A is seen first; in that case we shall have no hesitation in saying that this flash was earlier than the one at B. Or it may happen that the flash at B is everywhere seen first; in that case, this flash is earlier. But it may happen that, at places near A, the flash at A is seen first, while at places near B the flash at B is seen first. This will happen whenever, according to ordinary reckoning, the time between the two flashes is less than the time taken for light to travel from A to B. In this case there is a difficulty, owing to the fact that nothing travels faster than light. In the otherwise analogous case of sound, there is not the same difficulty, because the transmission of light is practically instantaneous for the short distances over which sounds are audible. Suppose for example that two people stand in sight of each other half a kilometre apart, and each fires a pistol at a given signal. The distance is so short that the short will be as nearly as possible simultaneous if the two men see them at the same time. But each will *hear* the other's report about a second and a half after his own. If nothing travelled faster than sound, this would create the same difficulties in synchronising sounds that in fact exist in synchronising light-flashes. In the case of sound, these difficulties are overcome by the use of light-signals; but in the case of light they must be overcome by some different method, since nothing travels faster than light.

Returning to our railway track which is struck by lightning in two places A and B, Einstein suggests that the common-sense method of determining simultaneity is to take the middle point M of the length AB, and call the two flashes simultaneous if they are seen at M at the same moment. (It is to be observed that there is no difficulty about the simultaneity of events in the same place, but only about that of events in distant places.) We will take this, he says, as the *definition* of simultaneity. Two events are simultaneous if they are seen simultaneously by an observer situated exactly half way between them.

This seems an obvious definition, but it leads to curious results. We will suppose that to an observer situated on the railway at the point M, but not in the train, the two flashes at A and B are found to be simultaneous by this definition. But now consider the people in the train. Suppose that the flash at A strikes the guard at the end of the train, while the flash at B strikes the engine-driver in the front, and suppose that Mr. Smith is sitting in the middle of the train. The flash coming from A will have to overtake him, while the flash from B will be coming to meet him. Therefore he will see the flash from B first. The case is exactly analogous to

the world seemed far more solid and stable than the modern physicist will permit it to be. It was primarily concerned with occurrences on the surface of the earth, whose relative velocities are very small. Within the limits of accuracy practically attainable, diferent clocks and foot-rules, on the surface of the earth, if they are carefully constructed, give concordant results when applied to the measurements of times and distances. Accordingly it was thought that our spatio-temporal measurements expressed objective properties of the things measured. This has turned out to be an illusion, due to the accident that we and the things measured had a very small relative velocity. What we have hitherto regarded as the space-time properties of physical occurrences are in large part dependent upon the observer; only a residue can be attributed to the occurrences in themselves, and only this residue can be involved in the formulation of any physical law which is to have an *à priori* chance of being true. Einstein found ready to his hand an instrument of pure mathematics, the theory of tensors, which enabled him to find laws, expressed in terms of the objective residue, and agreeing approximately with the old laws. Where Einstein's laws differed from the old ones, they have hitherto proved more in accord with observation.

The kind of difficulties which arise in the search for objective space-time can be apprehended more easily in astronomy than in terrestrial measurements. The orbit of a planet is not permanently marked out in space, like a road or railway; it is inferred from observations of the planet on different occasions. Relatively to the sun, the orbit of Mercury is approximately an ellipse, but relatively to the earth it is a very complicated curve. In arguing, from observation, that Mercury is in such-and-such a place at such-and-such a time, we estimate the time by terrestrial clocks, and the place by calculations based upon terrestrial measures. In estimating the time, we allow for the velocity with which light is propagated, and it was thought until recently that in this way we could establish an objective relation of simultaneity between (say) the beginning of a transit of Venus and a certain position of the hands of a certain clock. It turned out, however, that we were mistaken in this. Two events may appear simultaneous to one observer who has taken all due precautions to insure accuracy, while another equally careful observer may judge that the first event preceded the second, and a third may judge that the second preceded the first. This would happen if the three observers were all moving rapidly relatively to each other. The time-order of events is, therefore, in part dependent upon the observer; it is not altogether and always an intrinsic relation between the events themselves.

Einstein's little popular book, "The Theory of Relativity," first published in English in 1920, makes plain to any attentive reader, without requiring previous knowledge, why our judgment of simultaneity as regards distant events

whole relativity theory.

When I speak of the differences between the perceptions of different observers perceiving the same physical process, I am not thinking of differences due to what may be called psychological causes, such as diverse interests or intellectual attainments. Nor am I thinking of differences due to physiological causes, such as keener sight or better hearing. I am thinking of such differences as remain in cinematograph or gramophone records taken from different standpoints. Differences of this sort are physical, and any proper theory of physics must account for them. But the first step in accounting for the differences between two records of the same physical occurrence is to establish clearly what are the *likenesses*, i. e., what there must be in common between two records each of which is accurate from its own point of view. For until we have done this, we cannot say what belongs to the physical occurrence itself, and what belongs merely to the situation of the spectator.

At this point the reader may exclaim that the problem of allowing for the spectator's point of view is one of which physics has at all times been fully aware, and that, at any rate since Copernicus, it has dominated astronomy. There is some truth in this, but principles are often acknowledged long before their full consequences are drawn. Much of traditional physics is incompatible with the principle, although it was acknowledged theoretically by all physicists.

There existed a set of rules, which caused uneasiness to the philosophically minded, but were accepted by physicists because they worked in practice. These were, to all intents and purposes, the rules which followed from Locke's doctrine that secondary but not primary qualities are subjective. Colours and noises, in this theory, are subjective, but are due to waves which proceed with a definite velocity — that of sound or of light as the case may be — from their source to the eye or ear of the percipient. Shapes vary according to the law of perspective, but these laws are simple and make it easy to infer the "real" shape from several visual apparent shapes; moreover, the "real" shape can be ascertained by touch, in the case of bodies in our neighbourhood. The objective time of a physical occurrence can be inferred from the time when we perceive it by allowing for the velocity of transmission — of light or sound or nerve-currents according to circumstances. This was the view adopted by physicists in practice, whatever qualms they may have had in unprofessional moments.

This view worked well enough until physicists became concerned with velocities comparable to that of light. Then it was found to lead to expectations which experiment failed to verify. Einstein has shown that this ought to have been foreseen, since the line drawn in the orthodox theory, between what belongs to the point of view and what to the occurrence itself, involved contradictions, though these were only noticed when experiment had shown that something was wrong.

Orthodox physics arose at a time when

The Theory of Relativity

By

Bertrand Russell.

I.

The theory of relativity, which demands a revolution both in scientific and in every-day conceptions of the physical world, was developed in two stages, of which the earlier is now called The Special Theory, while the later is called the General Theory. The earlier theory seemed at the time amazing and paradoxical, but it has been left far behind by the later theory. It is customary to expound the whole matter historically, setting forth first the empirical reasons—such as the Michelson-Morley experiment—for doubting the classical physics, then the solution of these difficulties by the special theory, then the purely theoretical arguments which led to the general theory, and finally the observations—notably during the eclipse of 1919—which, to the general public, afforded the proof that Einstein's theories were something more than *mere* theories. I propose instead to attempt a direct, non-historical exposition of the fundamental ideas which inspire the general theory. The mathematical arguments which actually constitute the theory cannot be properly explained, but I think their underlying motives can be. This is what I shall attempt.

When two observers perceive what is regarded as one occurrence, there are certain similarities, and also certain differences, between their perceptions. If two men both listen to a third man speaking, and one of them is nearer to him than the other, the nearer one will hear louder and slightly earlier sounds than are heard by the other. If two men both watch a tree falling, they see it from different angles. In the case of the other senses, the differences between the perceptions of different people are ever more evident. The physicist professionally believes—whatever he may fear in moments of nightmare—that his science gives information, or at least can give information, about what really occurs in the physical world, and not only about the private perceptions of separate observers. Now if the physicist is justified in this belief, physics must be concerned with those features which a physical process has in common for all observers, since such features alone can be regarded as belonging to the physical occurrence itself. This requires that the *laws* of phenomena should be the same whether the phenomena are described as they appear to one observer or as they appear to another. This simple principle is the generating motive of the

ミイラになりかゝつて

武林無想庵

親子三人路頭に迷ふ氣で、おツかなビツクリ歸朝して見たところ、惡運まだ盡きず、まんまと改造社の山本君に買被られて、まさか一枚について、十圓もくれなかつたが、書きたまるそばから、どし／＼持つて行つてくれて、さうして相當に高い稿料を拂つてもらつたので、とにかく、まア、干乾にもならず、この半年は無事に濟んだ。すべて宏量な山本君のお蔭だ。さういふ人は、死んだ養父母を除いては、私には一人もなかつた。無想庵の名の起源であるところの、昔の京都新聞の堀江純吉氏も一年ほど私の生活を保證してくれた事があるが、同氏は當時あまりに不遇な生活狀態にあつた。が、堀江さんも私を買被つてくれた一人だ。それからもう十五年もたつが、それ以來の買被り手は、何と云つても、山本君の外にはない。從つて、目下の私自身の生活にとつては、山本君は日本に於ける唯一の知己であらねばならぬ。──Mousieus Berton, celui qui peut tout pour moi, q uin'a qu'un mot à dire, Monsieur Berton, le dieu de ma vie actuelle‥‥と、まア、云つたやうなものだ。

◇

世の中に××××××××××れないかぎり、私は讀書と旅行との外は、生きてゐても絕對に何もしたくない。特權者や資本家の道具になるのが厭だからだ。又所謂積極的に自ら進んで特權者や資本家になるのが厭だからだ。さうしてマルクスの云ふやうな××××××××後でなければ、いつまで待つて見たところで、世の中は必ず帝國主義に結びついた資本家連の獨擅場で終始しつゞけるにきまつてゐるからだ。

◇

が、讀書と旅行にも金が要る。金を得なけりや物も食はれぬ。馬鹿々々しいが止むを得ない。讀書と旅行とを犧牲として、自分ながら價値のない原稿勞働を續けて、先づ米を買ふ金から除

き出さなければならぬ。これも誰ゆゑ？　みんな、みんな、資本主義制度のなす業だ。A bas le capitalisme！……日本の金が早く××××××やうになればいゝ！

勿論、圓ばかりぢやない、法も、磅も、弗も、一切の貨幣がだ……

◇

近い將來の階級戰爭はもう目に見えてゐる。斥候戰や前衛戰は到るところで既にボツボツ開始されてゐる。讀書だの、旅行だのと、そんなノンキな事を云つてゐる時代ぢやないかも知れぬ。たとへインテリゲンツイアであるところの私と云へども、同じく時代の潮流に乘つて、アンリ・バルビユッスの所謂、le couteau entre les dents で終始すべきであるかも知れぬ。「熱風」の人々や、『種蒔く人』のタワーリシチ等と、進んで行動を共にすべきであるかも知れぬ……いや、無論、共にする氣ではゐるのだ。ペン先だけなら、或はもうしてゐるかも分らないが……

◇

『筆をすてゝ戎軒を事とす。』――それは大昔の話だ。今日では筆が即ち戎軒だ。戰ふ爲のペンだ。戰ふ爲の口であるやうに、戰ふ爲の四肢五體であるやうに。何となれば、我々の近き將來には、×××××××外には、人生に於ける一切の何物をも決して期待する事が出來ないからだ。

◇

×××××××は我々人類にとつては唯一の目標だ。が、その歷々指呼する事の出來得る目標に到達するまでには、そこに人類生活にとつて×××××××權力の『やり取り』といふ一大難關が横たはる。さうして露西亞を除いたら、×××××××いかなる國土に於いても、今日では恐く資產階級者の手中にある。無產階級者は先づ彼等の手中からそれを奪ひとつて了はうとする。そこで前代未聞の萬國的世界的國際的の階級戰となる。それが恐らく人類生活に於ける戰爭といふものゝ終りであらう……結局、確實にその××××××××××××××××××××××……十字軍といふ長い〳〵戰爭もあつた世の中だ。或は何百年つゞく戰爭であるか分らない、が墓一つ造るのに、又寺一つ完成するのに、やつぱり何百年もかゝつた時代もあつた事を思へば、×××××××××　いくら長い×××たところで、それが決して人類史の恥辱にも何にもならぬ事は保證する。失ふところは×××××

◇

たとへ資本主義でも共産主義でも、政府を造つてゐる間は、權力が要る。從つて軍隊が要る。警察が要る。さうしてその軍隊や警察を組織してゐるものゝ大部分は、いつも必ずプロレタリアに限る。現今の日本のやうな、純ブルジョア政府にしても、その政府を構成しつゝある役人のうちで、一番人數の多いのは、勿論、判任以下だ。判任以下は一括して之を無産階級と云つてもいゝわけだ。

◇

たとへば大杉君を檢束してるのだか保護してゐるのだか分らぬが、とにかく大杉君と殆んど寢食を倶にしてゐるやうにきく、恰も野枝氏と同じ關係になりさうな刑事諸君は、決して大杉君が稼ぐ原稿料だけの報酬をもらつてはゐなからうと思ふ。大杉君はアナキストであつて、マルキシストではないから、或はプロレタリアではないかも知れぬが、ブルジョアでないだけは確からしい。マルキシストから見たら、無論、大杉君をプロレタリアの一人として見ても差支はなからう、して見ると、プロレタリアであるところの大杉君をば、大杉君より生活程度の××か私にはどうもよく分らぬ。

◇

軍隊も警察も、それが必要であるかぎり、必ずそれが一般民衆、即ち一般民衆の大部分であるところのプロレタリアの保護機關であるべき筈だ。云ひ換れば、權力といふものゝ、人間生活に必要である間だけ、その權力を應用して、一般民衆に向つて出來るだけ相互扶助を行はしめる任務を持つたものだと思ふ。決して委托された權力をいゝ事にして、無暗に同類のプロレタリアを壓迫すべきものではないと思ふ。下士以下の兵士、判任以下の刑事、さうした職務に就くべく餘儀なくされてゐる人々は、一日も早く自分もまた××××××××××××××××××××××××。さうして×××××××××ばならぬ。

◇

中尉か少尉が『前へ！　オイ！』と號令をかける。軍曹や伍長が前方の敵を見ると、敵は大抵の場合やつぱり同類の××××××××××××にならぬ方が本當の人情だ。そこで直ち

に、『×××××××』をやる。とそこには大抵尉官佐官將官といふ×××××スペシアリストがゐる。さうしてそれ等は決して××××××ではない。寧ろ大部分プロレタリアの敵だ。戰爭といふものは敵を殺すのが本來の目的だ。

◇

『赤軍のうちへ、我々が、厳格なる監査の下に、それ等の奉仕を受取りつゝあるところの舊軍隊の將軍等の二三が云ふ。――かゝる秩序紊亂中にあつて、君等はいかなる軍紀を要求し得るかと。我々は彼等に答へる。――君等はどうだつた？　如何なる價値で君等は軍紀を得て來たのか？　ツアリが秩序階級の最高位にゐたのだ。その次には貴族があつた。××××××××つてゐたのだ。それが君等の奴隸だつたのだ。それが君等の爲に働いてゐたのだ。それが自分等自身の利益を犧牲にして君等に奉仕してゐたのだ。×××××××××××××××××××××××××……君等の誇る軍紀とはそれだつたのだ。が、我々は今全くそれとは異つた軍紀を欲する。兵士は皆各××××××××。勞働者は××××××××××××××。我々が採用すべく努力しつゝある軍紀とはそれだ。』

『或者は我々に向つて云ふ。――君等は舊將軍等を列內へ呼び入れて恐くないのか？　と。我々は答へる。――この世の中の一切事には兩面がある。我々は軍事教育者たるわけにゆかないから、それが爲に餘儀なく彼等に依賴するまでだ。が、我々は彼等に警告を與へる。我々は彼等に向つて明白に云ふ。――茲に君等の新しい主人がある。即ち、××××××、××××××は資本階級に對して如何に××××××、その方法を學習すべく、君等の奉仕を必要とする。』

これは四年前モスクワでやつたトロツキイの演說の一節だ。

◇

好き放題に讀書と旅行とが出來ない腹癒せに同時に、××君からの、中間物を書けといふ注文をいゝ幸ひに、かうしたデタラメを書きはじめたわけだ。創作にしろ、中間物にしろ、(私にはその間に別に區別はつけられぬが、)どうせデタラメより書けぬ私だ。勿論、私自身といふ人間が元來デタラメに出來てるからだ。さうしてとても一生デタラメ以上には出られぬ人間に相場がきまつて了つたからだ。いつまで生きられる一生ぢやない。かまふものか、デタラメで通してやれ……

女房をとられた腹癒せでもあるまいが、辻潤君が近頃しきりにダダ主義なるものを發揮してゐる。辻君は我輩より學問のある弟のやうな氣がするから、辻君のすることは我輩は何でもすきだ。從つてダダは大贊成だ。殊に辻君の推奬して措かぬ高橋新吉君なる詩人の詩は面白い。『解放』で黒田禮二氏の譯してゐるトラアの戯曲と同じ程度で面白い。辻君の『浮浪漫語』中にある「フアンタジア」とか「刹那」とか、又ヒエネカアの飜譯とかいふやうなものと、やつぱり同一程度で面白い。高橋新吉氏が詩人なら、辻潤君も立派な詩人だ。丁度、中西伊之助君が小説家なら、大杉榮君も立派な小説家だと云へるやうに。丁度、宮本武藏が昔立派な畫かきであつたと、同じやうに、トロツキイやルナチヤルスキイが今日やはり一家をなした小説家戯曲家であると云へるやうに、要するに辻君は詩人だといふ事がわかればそれでいゝのだ。

◇

ミルトンも詩人だつた、さうして裏切つた女房を許した。ヲスキンも藝術家だつた。さうしてミレエズに寝取られた女房を許した。藝術家や詩人はいつの世の中だつて一人殘らず自由戀愛主義者にきまつてゐる。さうして自由戀愛主義者は必ず共産主義者であるべき筈だ。辻君と大杉君との關係は今の露西亞なら、平々凡々の事實だ。さうして法律でまでさうした關係を人生の當然事として認定してゐる。私はまだ大杉君に遇つた事は一遍もないが、辻君の話に徴すると、辻君は滿腹の敬愛をもつて大杉君を褒めたゝへてゐる。それをきいた時、私は何とも云はれず嬉しかつた。—— Si chun était- comue moi, tout irait bien.

と、辻君は日本人だから佛蘭西語では云ひさうもないが、このモアはたしかに辻潤君だ。さうして一切の共産主義者のモアだ。

◇

將來の日本はどうなるだらうと、偉い人達がしきりに心配してゐられる。しきりに大邸宅を賣却したり、日比谷公園で水を撒いて見たり、五九郎にも出來ない喜劇をやつて、日々ブルジヨア新聞の社會面を賑はしてゐる。偉い人達の心配といふものは、まア、その位の結果となつて現れるのが關の山だ。もともと伊藤博文といふ茶目が製造した××××××××××だか

らね。××が出來て、×××が出來たのは、足輕共が大名の眞似をしたかつたお茶番だ。麻布市兵衞町の名前の起りを張扇の講釋師が面白さうに喋つてゐやうなものなのだ。將來もヘツタクレもあつたものぢやない。

◇

「金々先生榮華の夢」には、金持がどうしても金がたまつて困り、『さて、何としたものだらう?』と、立錐の餘地もない千兩箱の間から、命から〳〵膝を容れられるだけの座席を發見して夫婦差向ひで溜息をつくのが、黃表紙のオチとなつてゐる。『資本主義の行きづまり』だ。黃表紙作者はマルクスと同一意見だつたと見える。

◇

この期に及んで、グズグズ迷つてゐる奴は愚だ。×××××××××××××××、我々人類は悉くその唯一×××向つて、猛突として猪突すべき時代だ。×××××が分らないなら、×××××飛んで行つてきいたら分る。片山さんといふ今迄に生まれた日本人のうちで、一番偉い日本人がそこにゐる勿論、日本語で澤山だ。

◇

片山さんの『自傳』を讀んだ時には淚が出た。幼時、圓朝の『鹽原多助』を讀んで、どうしても淚が留らなかつた事を覺えてゐるが、それ以來の淚だ。第一、そんな立派な人間が日本人のうちにもゐた事をば、今日までまるで知らなかつた自分自身の愚がつく〴〵と省みられて、本當に穴の中へでもかくれたいやうな氣持がした。一年や二年、人生と惡戰苦鬪する位なら誰でも出來る。六十年の奮鬪は一寸眞似が出來ぬ。さうして老いてます〳〵大事業を双肩に擔つて立ちつゝある風貌は、全く渴仰するに足る。かういふ人の存在が明瞭になつただけでも四十年うなされつゞけた我輩の迷夢はサラリとさめた。

◇

女房が贊成しさへすれば、我輩は一家を擧げて、いつでも露西亞へゆく。さうして片山さんの草履取りとなつて、釋迦に於ける槃特の如く敎へを受けたい。決して英雄崇拜ぢやない。理窟では分からぬ眞理を體得したいからだ。人間は何の爲に生まれた?　たゞ眞理を體得する爲に生まれたものだ。それより外には生存の意義はない。絕對にない。

◇

千九百二十年のサロンド・オトンヌで、私はダヾイズムの或る線畫を見た。一面に不思議な蒸汽機關の横斷面のやうなものがナスりつけられてあつた。さうしてその蒸氣とも覺しきものを指さした矢の先へもつて行つて、一言、Russie と書いてあつたその時に、私は成程と思つた。さうして前號所載の片山さんの文章を讀んで、その成程が一層確實にされた。藝術と、經濟とその間にどういふ關係があるのだらう？ そんな疑問を起す奴はよつぽど安本丹だ、なぜ？ なべも蓋もあるものか。どつちも人間が本當に生きる爲の表現だからだ。

◇

『アメリカはきつとやる。』――新聞を見ると、なるほどやつてゐる。

『佛蘭西は死んでゐる。』――二年巴里で暮らしたが、なるほど死んでゐたやうだ。

『賣名ならブルジョアへ行け。』――ヅシンと腦天へ響いた。なるほど、我輩は賣名の爲に、ブルジョア日本へ歸つて來たものだ。一言一句、片山さんにはウソがない。さうして我輩は亂言暴語を賣物にして、改造社から多大の原稿料をせしめてゐる。

◇

好き放題に讀書と旅行とをさせてくれりやア、原稿なんぞはグラチュイで書く。グラチュイで惡けりや、ロハで書く。ロハもグラチュイも同じ事だ。が、書物はロハでは手に入らぬ世の中だ、船にも汽車にもロハでは乘れぬ世の中だ。宿屋も料理屋もロハでは食はしてくれぬ世の中だ。千九百年までのクラシツクでさへ、それを讀破するには、一人前の力で五千年もかゝるさうな。一時間五十哩のエキスプレッスに乘つて、太陽のコロナ停車場へ着くまでには、二百何十年とか掛るさうな。たとへ世の中が變つて、凡てがロハになつて見たところで、高が五十年とか六十年の命ぢやア、讀書も旅行も、希望の九牛の一毛すら堪能は出來つこない。さう考へると、二の宮の、中平家の、この一室にかうやつて、かうしたデタラメを書きつゞけながらこのまゝミイラになつて了つても、別段、こんな世の中に執着は殘りさうもない。

◇

こゝらが恐らくロマン・ローランとアンリ・バルビュッスの意

見の岐れるところであらう。一體、ロマン・ローランは十四年の戰爭が始まると、Au dessus de la mêlée を書いた男だ。さうして戰爭が終ると、Clerambault を書いた男だ。クルランボオは露西亞の獨裁政治には反對意見を持つてゐたやうだ。階級戰爭などはとても認められさうもない詩人として描かれてゐた。Baissous ordents などに於けるジャン・クリストフとは大變なちがひだ。さうして賣國奴（ビフェイスト）と疑はれて、その筋から暗殺される結末にしてあつたが、その小説の構想だけを見てもロマン・ローランが今ではいかに消極的退嬰的悲觀的の詩人であるかといふ事がよく分る。

◇

それに反して、バルビユツスは恐ろしい闘士だ、或る批評家は當年のヴイクトル・ユーゴーにまで比較して論じてゐた。戰爭が始まると、アンチミリタリストのソシアリストでありながら、Cette guerse est une guesre sociale qui fera faire un grand pas――peut-être le pas définitif――à notre cause… Si J'ai failr le sacrifice de ma vie et si je vois avec joie à la guerre, ce n'lst pas seulement en tant que Français C'est surtout en tant qu' homme と絶叫して、歩兵の一兵卒として戰場に赴いた男だ。ロマン・ローランとは始めつからまるで立場を異にしてゐる。さうして、le feu を書き、Clarté を書き、眞正面から堂々と共産主義を宣傳しつゝある男だ。グルツプ・クラルテが所謂勞働者教育味を失つて、即ち持越しのブルジョア味を擺脱して、それがボリシエヰキと呼應する政治運動に化しつゝあるのは、當然の歸趣だ。プチイ・ナポレオンに極力反抗したユーゴーなどより、私にはバルビユツスの方が一層勇ましく見える。

◇

そこで我輩だが、我輩は無論クラルテ組だ。即ちバルビユツス黨の一人で終始したい覺悟は出來てゐるのだが、殘念ながら今のところぢやア、意久地なく女房の尻に敷かれて暮らしてゐる。茶臼生活でウンウン唸つてゐる有樣だ。さうしてそろ／＼もうミイラになりかゝつてゐる。ハテ、どうしたものであらう？……

賣淫の文化的研究

増田抱村

一、賣淫の定義

賣淫現象は社會問題として、種々の方面から論じ得る性質を有つてゐる。或は倫理的方面から賣淫行爲の人生價値を批判するとも出來やう、或は國民保健問題上より賣淫と花柳病毒との關係や、賣淫の解剖的器質變化と出生率との關係に就いても論じ得やう。或は社會制度として賣淫婦の存在を是認すべきや否や警察行政上之を如何なる限度に於て取締るべきか。または文化發達と賣淫の消長との關係を史的過程よりも論じ得やう。このやうにいろいろの方面から論じ得るものであるけれども、私は玆で經濟學純理の上から賣淫を觀じ度いと思ふ。

賣淫と云ふ英獨佛語の Prostitution と云ふ言葉はラテン語の Prostituere から來たもので、此の譯語として利益の爲めに婦人が身を委ねる The offering of the body of a women or gain と云ふ意味を有するのである。その前頭語の pro「代りに」若くは「爲めに」と云ふ意味を持つてゐる。また tuere は stao「支へる」と stead「人の體を横へる役に立つ場所」との二つの語義より成つてゐるのである。佛蘭西語に於ても前頭語 pro は「爲めに」若くは「代りに」と云ふ意味を有するので、この語が賣淫と云ふ語の成分となつたのは、pro oise et focis 即ち「神の爲めに」若くは「彼女の家の爲めに」と云ふことから、se prostituer「身を繋がせる、ぐ」と云ふ言葉が用ひられるやうになつた。また獨逸語に於ても、前頭語 pro は kontra と同意義でこれは「對して」又は「爲めに」と云ふ意味を有し、konto 即ち「勘定」と云ふ語から來たものである。また stitue は statte「場所」の語から來た statt「代りに」と云ふ意義を有してゐる。また statte と同意義である場所と云ふ語の stelle の動詞たる stellen「置く」と云ふ意味を有してゐる。「勘定づく」konto = kontra = pro で「働く代りに」statt dass sie arbeitet「自分のからだを置く、提供する」stellen =

stationieren と云ふ意味で prostitution と云ふ語が出來たので、結局利益の爲めなら誰れにでも身を委ねる gewerbsmässige との意味を有するのである。

語義の上よりこれだけ申しますと、賣淫と云ふものゝ大體の觀念が得らるゝことゝ存じますが、猶諸家の定義を擧げますなら、ギヨーに依れば賣淫とは貨幣を得る爲めに性關係の行はるゝ行爲である。イー・リチャードに依れば賣淫とは貨幣の獲得の爲めに、最初に來るものに自分の身を公然委ねる行爲である。ボンゲルに依れば賣淫とはその行爲の性質に於て經濟事情の爲めに結婚するのと同じものである。アルビアンに依れば賣淫とは貨幣の獲得の爲めに多數の男に選擇することなく、公然と自分の身を委ねる行爲である。レーに依れば賣淫とは貨幣を得る目的を以て、女が如何なる男に對しても自分の身を委ねる行爲である。シユランクに依れば賣淫とは貞操を賣りて貨幣を獲得する行爲である。ハヴエロック・エリスに依れば賣淫とは金錢を得るために雜多な人々に自分の身を一時提供する行爲であつて、而も、それが慣習的に行はれるものであると云ふのである。ボンゲルの如きも賣淫婦を肉體を賣る女であると爲し、而もその性行爲に於ける賣買を職業化するものであると云ふた。エリスやボンゲルは賣淫行爲の繼續と云ふことを重く見てゐる。レーの如きもその一定の報酬を得る爲めに淫行を何回となく繼續しなければならぬ。相手は同一人でもよいと云ふのがレーの賣淫に對する見解である。また佛のパラン・ジユシヤテレーも或行爲が賣淫と云はるゝには、淫行が或一定の報酬に依つて營まるゝものでなければならぬ、即ち淫行の對價たる報酬を目當とする行爲でなければならぬ。その淫行が度々繰返さるゝ持續的のものでなければならぬ。而してその淫行が客觀的認識を要する、即ち警察官吏に現行を發見されて罰せられたる行爲でなければ嚴格なる意味に於て賣淫と云ふことが出來ぬ。賣淫はそういふ性質のものであると云ふのがパランの見解である。併し乍ら私の見解としては、必ずしも慣習的でなくとも、繼續的でなくともよい。かつて警察官の爲めに發見せられて、淫行が現行犯として所罰せられなくともよい。淫行を社會的に供給してゐさへすれば、それだけで立派な賣淫である。但しレーの云ふたやうに淫行が一定の報酬に對して營まるゝことを要する。けれども只一回だけ報酬の爲めに性交あつても、それでも賣淫である。リユースに依れば賣淫とは、生計の道を有たないものが性行爲を手段として生活して行くものであると云ふたが、必ずそうのみ見なくともよい。他に正業があつて、小便錢取と云ふ意味で一回性交を遂げても、それでも賣淫である。

獨逸のブロスの如きは正式の結婚者卽ち夫婦間の淫行でない限りは、他の者との性交は之れを賣淫と見ると云ひ、シュラングの如きも人身を以て不貞の商賣をするのが賣淫であると云ふたけれども、賣淫の定義を下すものは賣淫の目的を逸し去ることは出來ない。必ずしも職業化しなくともよい。性交が慣習的繼續的でなくともよい、一回でもよいのである。それからきた賣淫の性質として無差別的に雜多なものに性を委ねなくともよい。單一なる女が或時代に於て單一なる男にのみ金錢を獲得する目的で身を委ねても、それでも立派な賣淫である。ワートンの如きはその法律辭典に於て賣淫婦を定義して、賃子を得る爲めに雜多な男と性交する女であると云ひ、羅馬のアルピアンの如きは金錢を得る爲めに選擇なしに、公然身を委ねるものとして賣淫を觀じた。彼は女子がその性交を許すものは、相手が單一でなくして多數の男に對してゞなければならぬ。女が一人の男に身を委する場合は、たとへ貨幣の獲得を目的としても、それは賣淫でないと云ふのである。女が貨幣の獲得に於て單一なる男に對してのみ性交を許す場合は、それは賣淫でないと云ふことは、獨逸のリスワの如きも之を主張してゐる、エリスも賣淫の行爲を論ずる場合に於ける要點として第一に相手が雜多であると云ふこと、第二に繼續的に行はれることを擧げてゐるが、これは見解の相異であつて、必ずしも此の二點に限定する必要はない。若し是等二つの點に於て賣淫の性質を決定しやうとするならば、それは形式に拘束したるもので賣淫の眞精神を逸するものである。ギヨーの云ふたやうに賣淫は、金を獲る爲めに爲されたもので、金を離れて賣淫はないのである。若し貨幣と云ふ觀念を離れて賣淫を觀ずるものあらば、それは眞に賣淫を知つてゐる者でない、エヂンバーロのロバート・ワンドローの如き一八四二年に出版せる「女子の賣淫」に於て貨幣價値を離れ宗教的に罪惡視せられてゐる姦淫と同樣に賣淫を觀じて、一男女の不義の性交を以て斷じたる如き甚だしき謬想であると評せざるを得ない。それで私は次のやうに定義し度い。賣淫とは貨幣價値を獲得する爲めに、性交を許す行爲であると。

それ故私の定義としては、エリスやパランの說のやうに、淫行が反覆して行はれ、職業化しなくともよいし、またアルピアンのやうに必ずしも多數の男子に對して女子の身を委ねるものでなくともよい。リユースのやうに全然一定の職業を有してゐないものでなくても、賣淫と言ひ得るのである。賣淫行爲が職業化しても、せなくともよい。賣淫の對象が單一であつても、雜多であつてもよい、性交に依りて貨幣價値が獲得されたならば、それは立派な賣淫であると云ふのが私の主張である。例へば

チパアトメントストアの女賣子がプラチナの指環を貰ふことを條件として、某所でその重役に性交を許したとすれば、その性交が只一回であつても、斯る淫行は立派な賣淫である。パランより見るならばかゝる性交は賣淫であるまい。淫行が慣習的に相手をお構へなしに反覆して行はれないから賣淫でないと云ふけれどそれは間違である。彼女は性交を條件として、貨幣價値を獲得してゐるから性交が只一回たけでも賣淫したものである。そのやうな性交が只一回あつたゞけでも、その婦人の一生涯に賣淫行爲があつたと云ひ得るのである。得たものは一個の指環であるけれども。貨幣を以て評價することの出來る交換價値を有する經濟財である。プの經濟財を得んが爲めに、相手に對して短時間性交を許したとすれば自分の貞操たる性交と經濟財とを交換したもので、賣買行爲で賣淫であるからである。それ故に一生を通じて只一回の淫行であつても、賣淫と云へ得る場合がある。

史上の例でありますが、ナイル河畔。紅帳綠裡風薫ずる所、イジプトの社稷に萬斛愛別の涙を濺ぎ、毒蛇を以て白い胸を刺して逝つたクレオパトラは、紀元前三十一年アクチユスの海戰に大敗して自殺したアントニユースとの間に、美しいローマンスのあつたことは世人のよく知つてゐる所である。才色双絕せるクレオパトラが、まだ妙齡の花の頃、シーザーとの間に於ける淫行はやはり賣淫であつた。シーザーがポンペイウスを追擊してイジプトに至つたとき、イジプトではトロミユス十二世十二歲とその姉のクレオパトラとの王位を爭ふてをつた。丁度そういふときに羅馬の常勝將軍シーザーがイジプトにポンペイウスの後を追ふて乘込んで來たものであるから、時こそよしとクレオパトラはシーザーに見事な贈物を奴隷に荷せて送り届けさした。シーザーが自分の面前で、その贈られた大きい包を開かせると中から花はづかし楚々たる姿のクレオパトラが現はれたので、シーザーと彼女と握手するに至つた。これはクレオパトラの政策であつて、彼女が濃密なる情交は何を意味するかと云ふに、彼女がイジプトの社稷を司配する王位を繼承せしむることを條件として、シーザーにその芳醇なる肉體を自由にさせたのである。十七歲のクレオパトラは自分の貴い貞操を提供して、イジプトの王位を得た。彼女の認めた最大價値は王權であつた。彼女に取りて王權は司配力を有し、且つ幾多の收益を伴ふ最大なる經濟財であるから、この獲得を條件として、性交を許したものである。シーザーとしては彼女との性交を自分が經驗することは、イジプトの社稷よりも欲望の强度に於て大なるものがあつた。彼等は性交を通して各々異れる欲望を滿足せしめた點に於

て貨幣を以て評價し得る價値を交換したのである。この意味に於てクレオパトラは賣淫をしたものであつた。それ故に賣淫と云ふものゝ思想には、次の諸概念を包容してゐるのである。

二、賣淫の經濟單位

賣淫の經濟單位は、賣淫の主體であつて、卽ち賣淫を爲す個人である。賣淫の主體は女であるが、必ずしも女と限つたことはない。男もその主體たり得たことは例へば德川時代の陰間の如きはそれで、報酬を得る爲めに、女子の色欲の慰藥に供せられた。このやうな陰間を要求した當時の需要者は、未亡人とか獨身女とか妾になつてゐるものとか御殿女中とか性慾の强い奥方や内儀と云ふもので、是等の女共は賣淫の客體であつた。今日に於ても俳優の如きは德川時代の陰間の用を爲すものもあつて、資本家階級の婦人の性慾を滿足さしてゐるものもあつて、この需要に應ずる者は貨幣の獲得を目的としてをりますから、かゝる場合に於ける行爲は男子の賣淫である。併し乍ら是等の男子は賣淫を以て職業としてゐない。むしろ副業と心得てゐる者である。性慾を滿足せしめて、その代價として收入を得、それに依りて生活を立てゝゐる賣淫者は男子よりも女子である。現代文化國に於ける賣淫の經濟單位を凡て女子であると言ひ得るのである。經濟單位として認識すべき對象を求むれば、女子の色彩が濃厚となるのである。

アウグスト・フオレルの思想に依れば、現代の結婚を金に依りて左右せられてゐる。結婚の眼目を金に存するやうになつた男は妻を買ふて、その間に出來た娘を賣つた。女は妻に賣られて、婿を買ふのであると云ふた。このやうに考へて見ますと現代の結婚生活の多くは、單に社會制度の結婚方式と云ふ鑄型に依つて拘束せられて、相互に生活の爲めに賣淫してゐるものと觀ぜられるのである。英のバアナアド・ショウの名著「結婚」の思想を通して觀じ、また佛のブリユウの「デューポンの三人娘」の作品を通じて觀じるなるば、既婚の女と賣淫婦との區別は、たゞ社會制度としての結婚の鑄型に依りてのみ僅に色別が立てられるに過ぎなくなつた。この意味に於て賣淫の主體としての婦人は、經濟生活に於て昔も現代も將た將來に於ても文化的生存として分離し得ないものである。但し公娼制度の牢獄の下に留置せられてゐる、女を賣淫さしてをいても、彼女自らが賣淫の經濟的主體ではない。賣淫の經濟的主體は彼女等を酷使するスウエッチング・システムの樓主であり抱主である、賣淫者としての公娼を經濟單位でなく、賣淫制度の雇主の奴隷である。賣淫の經濟單位としての婦人を、彼女自らが賣淫を自由職業とな

るものである。この點に注意を拂つて戴き度い。

經濟單位とは自己の自由意思を以て貨幣若くは貨幣を以て評價し得る財を獲得せんが爲めに行爲するものであつて、その行爲に依りて得たる收入を自分で自由に所分することの出來る者でなければならぬ。然るに公娼の收入は實際に於て樓主抱主の收入となるので、賣淫者としての娼妓の自由所分を爲すことを許されない。公娼と樓主との關係を雇傭契約の上に立つ雇主と勞働者との關係と見るよりも、賃借關係の上に立つ債權者と債務者との關係に立つものである。民法の精神より觀ずれば賃借關係を債權債務の關係として別に存し、之が爲めに個人の行爲はその自由を拘束されないものでありますけれども、法律思想のない彼女等は貸借關係は人身も拘束し、借金を返濟せぬ限りは、身の動きが取れないものとして觀念してゐる。そのやうな次第で公娼は賣淫者であるけれども、經濟單位ではない。賣淫の主體が經濟單位となる場合は、賣淫を自由職業と爲す婦人のことで、自分で自由に賣淫して、その收入を自分で自由に消費する。そこに賣淫者の經濟單位としての位置が存してゐる。この場合に賣淫者は經濟行爲者である。無資産者として最小の勞力を以て、最大の効果を收めんとして、情交と引換る交換價値を享有し得る所に、賣淫の經濟的可能性を認めねばならぬ。

賣淫婦人の多くは無資産者階級に屬するものであることは社會問題を研究するものに取りて特に注意を拂はねばならぬものである。一九一二年に米國のラッセル・セーヂ協會より發表したもので、ソフォニスバ・ピー・ブレッキンリッヂとエヂス・アボット兩女史の研究があるが、シカゴで調査した所に依れば賣淫を爲した少女と家庭の經濟程度との關係に於て、次の數字を示してゐる。

	少女數割合
極貧者家庭	六八・八
貧困者家庭	二一・〇
中流家庭	七・六
資本家階級	一・三

斯くの如く貧民階級より一番多くの賣淫婦を出してゐる。マイナーに依れば米國に於て一番多くの賣淫婦の出るのは女中、會社及劇場給仕、女子店員等の階級から、次位は女工、電話交換手から、第三位は書記、速記者、裁縫師、帽子製造者である。そして賣淫を營む前に於ける彼女等の給料は最低のもので、一千人の賣淫を爲すものゝうち五百八十四人が賃銀勞働者で此中百七十人の下婢給料の平均率は一週三弗六十九仙、七人の不熟練看護婦の平均給料は一週五弗三十五仙、工場、商店、事務所

等の雇員及び電話交換手の平均給料は一週六弗三十五仙、女工の六割五分は一週六弗以下、商店の現金係、包裝係は一週三弗より四弗外交員の平均給料は一週十二弗、事務員及び劇場勤務員は三十一人の率を示めし、平均一週六弗より六十五弗の所得を示してゐる。斯くの如く低額の所得であるから、文化生活を爲さんが爲めに彼女等は甚だしく經濟的に壓迫されてゐるから之を脫せんとして、努力と所得との關係に於て賣淫の道を採つたのである。最近の傾向に依れば賣淫の主體は過去に於けるが如く誘惑せられ若くは强迫されつゝ賣淫をしてゐる者が漸減して有意的に、此の生活を採つてゐることは、最も注目に値するのである。彼女等は賣淫と云ふ形式に於て經濟生活をしてゐるものであるから、倫理的見地のみに立つて論斷し去るは輕卒である。

彼女等は最早昔の如き物でなくして人である。昔日本武尊の東征の時、賊將の娘イチカヤ姫を斐ノ國の領主に賜つた。また後醍醐天皇は勾當內侍を新田義貞に賜つた。イチカヤ姫や勾當內侍は人としてよりも、物として取扱はれたのだつた。然るに現代の婦人は何うかと申せばイヴセンの「人形の家」のノラのやうに妻として生くるよりも、又母として生くるよりも、先づ人間として生きねばならぬと要求するやうになつた。現代に於ける賣淫の經濟單位としての婦人は、實にこの人間として生きねばならぬとの理想を追求してゐながらも、經濟的壓迫に依り、財の獲得の爲めに自己の貞操を否定するに至つた。換言すれば貞操の倫理的價値よりも財に對する交換價値をより以上高く認めねば、經濟上自己の文化的生存を確保することが出來なくなつた。これを現代社會制度の下にそう爲すべく經濟的に運命つけられた結果である。貞操の倫理的價値が維持せらるゝ世界は、經濟的にその生活が保證せられたる境遇に於て見出さねばならぬ。若し無資產者にして自己の努力に比し交易行爲に於て所得の良好なるものなしと觀じ、自己の貞操を以て交換價値の獲得の方便と爲す場合には、經濟の前に道德と云ふものが何等の權威もないことになる。即ち交換價値に於て貞操價値は財の貨幣價値よりも遙に輕視せられたわけである。彼女の經濟生活に於て財の價値は貞操の價値上に重要視せられてゐると云ふことを生存上第一に財の價値は重要であつて、貞操の倫理價値はその次位に置かれるやうになつた結果で、現代社會制度の缺陷を暴露したものでなければならぬ。社會缺陷としての賣淫を防止する政策としては、先づこの賣淫に於ける經濟單位を打破し、價値生活に向つて覺醒せしめなければならぬ。それが爲めには無資產者階級の婦人の生活を經濟的に保證してやらなければな

らぬので、社會的政策上の解決に待つべきものである。此の點に關しては他日稿を起し度い。

三、賣淫は生産なりや

經濟學上の見地に於て賣淫を論ずる者に取りて重要なる――根本的問題がある。それは賣淫は生産行爲であるか何うかと云ふ命題これである。これは其信ずる所の生産學說の如何に依りて議論の別るゝ所で興味ある問題であると共に、經濟學に於ても實は困難な研究題目であるのだ。

生産の要素として土地、資本及び勞働の三種を擧げてゐることは古くより經濟學者の間に唱へられてゐる所の者で古典學派の通說となつてゐる者である。この分類法は要素の說明としては無難のものであるから、今日に於ても日本などで生産の要素といへば、此三種に限られてゐるものとして、一定不變的に說明してゐるものが可なり多い。アルフツド・マーシャルは是等三要素の他に企業組織を加へて生産の運用を說明してゐるし、ワグナーは土地、資本、勞働の他に國家を重要視して生産の要素を說き、ブレンタノーは生産の要因として意思を擧げ、更に要素として土地、資本、勞働の他に國家と文化とを說いてゐる。それ故に生産の要素として土地、資本及び勞働の三者に固定して考へるのは、よろしくない。シーガーの如きは人と自然とを以つて生産の二大要因であると斷じたのは痛快である。これは全く見方の問題で、生産の要素と云ふものは實際に於て混淆して、截然分ち難いものであることを頭に入れてをらねばならぬ。チードの如きは古典學派に從つて土地、資本、勞働の三者に分つたけれども、生産上の位置としては是等三者を平等に見てをらない。彼は凡ての生産は人間の勞働に依つて起るものであるから、眞に生産の能動因子 Agents de la production と稱し得べきものは勞働ばかりであると云ふてゐる。彼はこのやうな新らしい見方をして、生産の要素を土地資本及び勞働の三者に分類し固定的に考へるのは、古典學說の誤謬に陷つてゐるものと說いた。例へば土地が生産要因として勞働と同視するの誤であることは、土地は耕作や排水等に依つて一層生産的要素となつてもこれは勞働の結果であるから、二者を生産的位置として同樣に見るのはよろしくない。勞働の産物たるかゝる土地は、また資本たるものであると云ふのである。チードはまた面白いことを云ふた。人體の器官は自然の産物で、生産の要素となり得る場合がある。例へば聲樂家の咽喉の如きはこれであると云ふのである。環女史に取りてその咽喉は、彼女の唯一の資本であると云ひ得るのである。がその咽喉も、彼女の藝術的勞働

が加へらるゝのでなければ、生産的要因とはならないのである。此の學說に依れば賣淫婦の Sexual organs は、醫業家に於ける咽喉と等しく、また彼女に取りて資本であると觀ぜぬわけには行くまい。

然らば生産を如何に解釋すべきか。

正統學派に依れば自然物に加工して財を製出して、その財の存在高を增加することを生産と解釋してゐる。此の學派以前のフイジオクラット學派に依れば生産と云ふ語を農業勞働、獵漁業及び鑛業勞働のみに限つて、其他の勞働は生産的でないと說いた。例へばグルネーの如きは人間の目的に有益なる粗生品の數量を增加する勞働のみ眞に生産と稱し得べきものであると說いて、生産力を農業に歸した。グルネーに依れば商業は既存の富を一方より他方に移轉し、之に依りて生じたる效用を收益するに過ぎない。商人の所得は一も自分で創造したる財源より獲得したものでなく、農業者の餘剩たる所得より出たものであるから、商業の勞働は非生産的のものであると爲し、一國の富を眞に增加するものは、生産費を控除して餘つた農産物(鑛産も)であると說いた。ケネーも亦富の唯一の本源を農に歸し、商業及び工業勞働を以て不生産的のものであると說いた。その後アダム・スミス現はれて工業勞働をも生産的であることを力說し、一國の富の存在高の增加と云ふことを以て生産であると說いたので、正統學派では商業も亦生産行爲であると說くに至つた。ジョン・スチユーアート・ミルは勞働は生産と不生産の二種に分ち生産勞働は富を産出する勤勞であると爲し、不生産勞働を以て有形の富を生ぜぬ勤勞であると說いた。ミルはそしてこういふことを云ふた。例へば玆に一人の友の生命を助けた勞働ありとせば、この勞働は生産的行爲であるか。此の友が若し生産勞働者である場合にはその行爲に於ける生産がその消費より大なる者であつた場合に彼を助けた勞働が始めて生産的行爲となると說いた。それ故にミルに依れば僧侶の如きは、若し罪惡人をして悔悟せしめて生産勞働者たらしめない限りは、生産的であると云ふことは出來ないこととなる。これは單にミルの誤謬ではない。生産の定義に關する當今の經濟思潮は次の如きものである。生産とて外界の物質に技術的加工をして、新なる財を製出するとであると說くもの。また營利を目的として物に加工する技術的過程であると說くもの。それからまた人間は財を創造することは出來るものでないから、財の效用を增加せしむるに過ぎない、但し此の場合に於ける效用は、社會的效用の意味に於て生産を說くもの是等の說である。

生産と云ふ名辭の中には技術的加工と云ふことゝ營利と云ふ

ことゝそれから効用と云ふ三つの觀念が包含せられてゐるから、その各々の立場に於て生産を說き得るのである。ハアヴアート大學のチヤーレス・ジエー・バロック敎授の如きは、生産とは人間の欲望を滿足せしむる爲めにものの形態若くは關係を變更させる事を意味するものであると云ひ、遂に生産を効用の創造であると云ふた點に於てコロンビア大學のシーガー敎授と一致してゐる。アダム・スミスやチードは營利も生産も區別なく農工商を生産と說きチードの如きは自由職業に從事する人々の勞働をも生産であると斷じたのは卓見である。說を爲すものは農工に於ける如く物の品質若くは形態を變化せしむる勞働のみを以て生産であるとし、商業の勞働を生産でないと主張するものがある。商業は物の位置を變化するに過ぎないもので、その位置の變化に依りて貨幣を獲得する營利行爲であつて生産でないと云ふのである。併し乍ら此の說は農に於ける自然要件と技術的加工とを重要視するものであるが、それのみを以て生産を說くのは甚だ古い見方で我々の取らざる所である。例へば石屋の前に奇石があつて相當に交換價値が附與せられてゐる。彼は此の石を海岸若くは深山より都會に運んで來たものでかゝる勞働は位置の變化に過ぎないが、此の行爲は生産であるか消費であるかと云へば勿論生産である。バロックの說に依れば位置の變化に依りて石に財としての効用が附與されたものであるから生産である。運輸の勞働の生産であるとは此の理由である。また品質形態及び位置の變化なくとも生産たり得ることがある。それは時の効用の適用であつて、例へば冬季に氷を貯へておいて夏季まで持こらへる場合には、時の經過に依りて生産となり得るのである。葡萄酒の貯藏の如きもその好例である。このやうな場合に於て生産を說明するには、單に技術的過程のみを以て觀じてはならない。

生産には此のやうに時の生産、位置、原始的生産、技術的生産と云ふのがある。原始的生産とは新なる財を得る方法として外界の自然に人力を加へて之を採取するものでフイジオクラツト學派の主張する農、鑛、漁獵業に於ける生産である。技術的生産とは既存の生産物即ち材料に加工して、その形態を變更せしめて効用を增加せしめる工業的生産である。この他に營利行爲を生産であると斷じなければならぬ。先づ營利なるものゝ定義を下せば營利とは經濟的交易に依りて財を獲得する行爲である。然らば何故に營利が生産であるかと云ふに、財の效用を獲得するには技術的經過のみに依つてはいけない。若し加工行爲のみに依れば使用價値を獲得するけれども、交易經濟の發達したる今日に於て效用を收容するに必ずしも加工のみに依らなくと

もよい。これはその一の理由であるが、他の理由とした生產には費用を投ぜなければならぬが、この費用價値よりも生產物價値が大なる場合に經濟行爲となり得るのである。換言すれば生產物の價値が費用價値の上に出づるのでなければ、技術的生產が眞に經濟的生產であると言ひ得ないのである。卽ち交易經濟制度の下に在つては交換價値の獲得と云ふことが眞の生產となり得るのである。營利行爲が生產であるとの理由は此處に存するのである。

そこで賣淫行爲が生產であるか否かを考へて見ねばならぬ。賣淫を爲す婦人の parties sexuelles は、チードが聲樂家の咽喉を生產の資本であると云ふた學說に依れば之を生產の資本であると言ふことゝなる。そして彼女は之を利用して貨幣若くは貨幣を以て評價し得るもののパロック教授の所謂 Matters を獲得せんとするのである。但し此の場合に於ける彼女の目的は直接自己の欲望を滿足せしめんとする效用の享有よりも寧ろ、生存に要する交換價値の獲得である。自己の所有に屬する資本たる性的機關を用ひて營利行爲をしてゐるから、賣淫は生產であると言ふ學說上の歸結を得る。貨幣若くは貨幣を以て評價し得るものを獲得することを目的とする性交は卽ち賣淫であつて之に要せられる勞力は生產勞働であると言ひ得る。

そこで玆に面白い問題がある。婦人が白粉や化粧に要する行爲を生產であるか、若くは消費であるかと云ふこと是である。普通の婦人に取りて化粧に要せらるゝものは消費であるが、賣淫を爲す婦人に取りては生產である。それは飯を食ふのと同じことだ。職を有つてない女、夫が出勤した後に横になつてごろ〳〵してゐる女が飯を食ふことは消費行爲であるが、職業ことに筋肉勞働に從事してゐる女が飯を食ふ事は生產である。食はれた飯は品質と形態が變化するので消費されたと思はれるが飯の中に包含されてゐる營養素は攝取されて、身體が唯一の資本である筋肉勞働者に對して直接資本化する過程であるから、彼等が飯を食ふことは消費でなくして生產である。賣淫を爲す婦人が白粉をつけたり化粧する行爲をそれ自ら效用を增加し資本化する理由で消費でなくして生產である。但しその理由に於て交換價値決定の上から考へねばならぬ。スタンレー・ジエヴオンスが唱道した無差別の法則 The Law of indifference と云ふのがある。この法則は一定の時に同一の市場に於て建てらるる價格は同種の物品に對しては常に唯一の價格あると云ふのである。同種の物品が澤山いろ〳〵とあつて、是を取るも彼を取るも差別のない場合には、その一に對して他に對するよりも高き價を拂ふことがないから、常に同一の價格のみが維持せられる

と云ふのである。即ち同種の多くのものの中に或ものが優れてある場合には、此のものに對してのみ同一の價格が破られるわけになる。賣淫を爲す女が化粧するのは、同種の他のものよりも、より多くの交換價値を決定せんとするもので、無差別の法則を打破して差別的に關する效用を增進して、之に依りて高き交換價値を獲得せんとする技術的過程であるから生產行爲である。賣淫を爲さぬ婦人に於ては化粧をすると云ふことは特種の交換價値を獲得するに要せらるゝ技術的過程でないから生產でなくして消費である。化粧の爲めに夫の汗で得た給料や收入の中から化粧品代を支拂ふわけになるから純然たる消費行爲である。

賣淫は經濟學より觀ずれば斯くの如く生產行爲であるが然らば如何なる種類の職業であるか、工業に屬するか商業に屬するかと云ふに、其いづれに屬せざる自由職業 Professions liberales に屬するものである。元來この自由職業の勞働は生產であるか何うかに就いては從來最も甚だしい議論の題目となつたものであるけれども、チードは之を立派に生產であると明言してゐるのは當然である。例へば手足を切斷する外科醫の勞働は生產であるが、判決を下す裁判官の勞働は生產であるか。增上寺に於て讀經する僧侶の勞働は生產であるか。東京市の方面委員制度の爲めに努力する社會事業家の勞働は生產であるか。法廷に於て殺人强盜犯人を辯護する辯護士の勞働は生產であるか。然り是等自由職業の勞働も亦生產である。チードが是等の勞働を生產であると斷ずる論點は二つある。一は此種の勞働の勤務の形式に於て效果を造るから生產であると云ふのである。他の一の理由は社會組織の內部に於ては分業の法則に依りて各々の勞働の間に相互關係を生じ引離して單獨に考へることが出來ないから非物質的勤勞と雖も社會の物質的財の生產に全然關係が無いと云ふことは言ひ得ないと云ふのである。チードはセリグマンと等しく社會的效用と云ふ見地に立つて、自由職業の勞働を生產であると說いた。翻つて賣淫を爲す婦人を觀ずるに、賣淫を以て生活してゐるものがあるとすれば、彼女は自由職業に屬するのである。從つて彼女の勞働は生產であると言ひ得る爲めには二つの點から說明し得る。第一、夫婦關係を離れて一般性欲の需要に對して、滿足を供給する點に於て社會的效用を附與するものである。第二、性交行爲に依りて貨幣若くは貨幣を以て評價し得る交換價値を獲得する營利勞働である。賣淫の主體に於ける勞働は是等二つの理由に於て生產である。

賣淫を爲すものは、それ自身に於て勞働者であるから、彼女

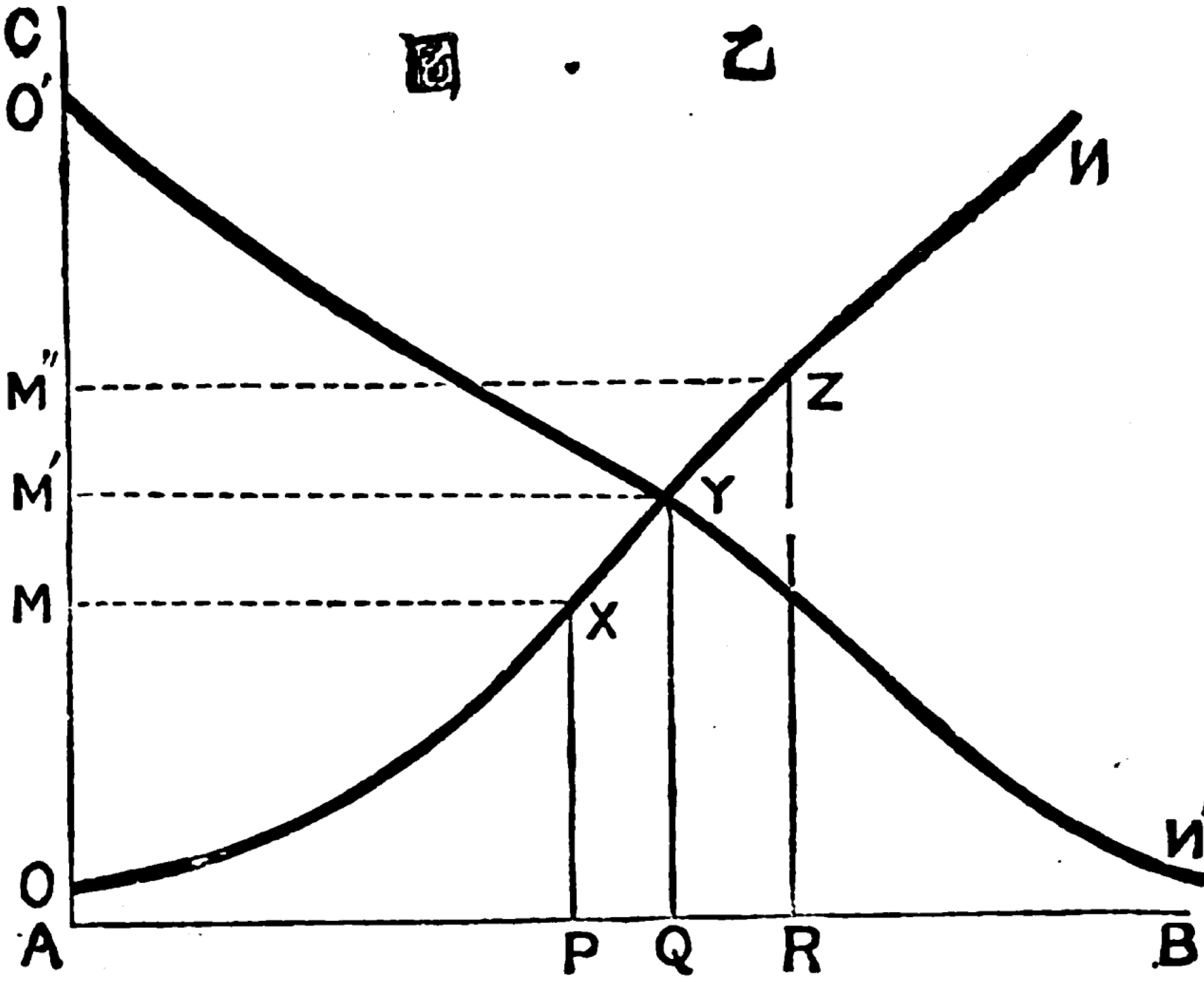
は資本家階級に屬するものでない。勞働者階級に屬するものであるが勞働效程に於て智識才能を要するものでないから精神勞働者でなく、資本として性的官能を利用するものであるから肉體勞働者である。車力等の如く筋肉力のみを以て效程を增進するものでないから純粹の筋肉勞働者ではない。オペラダンサーやシンガーや女優、寄席、藝人、藝者等も亦、肉體勞働者であつて、若し賣淫と云ふことを離れて彼女等を觀ずれば、彼女等の勞働の生產的であることを營利と效用との二つの觀念を以て說明すべきものである。

四、賣淫と價値生活

賣淫は人間の行爲である。行爲とは或目的觀念に基いて神經系統が必要なる刺激を受けたときに、精神作用と肉體作用との組織的運動に依り、その目的に到達せんとする短時間の生活過程である。而も賣淫に於ては性的機關を中心とした行爲である例へば一婦人が親の生活を安定にする爲めに、金が欲しいと思つてゐる。自分の行爲に依りて貨幣獲得の念が盛んになる場合には、貨幣と云ふ目的觀念が、行爲に於ける德性に對する評價よりも强大になつて來る。獲得行爲に於て公法に抵觸せない限りに於て、如何なる道程に依るべきか。彼女はそういふことを考慮に入れるに違ひない。この觀念が强くなりますと、貞操と云ふ觀念に打勝つに至るのである。かゝるとき一人の男が女の肉と交換に貨幣を出すと云ふことになれば、この貨幣獲得の爲めに自分の肉體を他に許すに至るのである。この場合に於ける精神と肉體との聯合的運動の過程たる性交が、賣淫の行爲になるのである。それ故に賣淫は性交を離れて、目的に到達することが出來ぬものである。貨幣若くは貨幣を以て評價し得るものを得ると云ふ目的を達する爲めには、相手の要求するやうに何うしても性交を許さなければならぬ。何となれば賣淫は交換行爲であるからである、

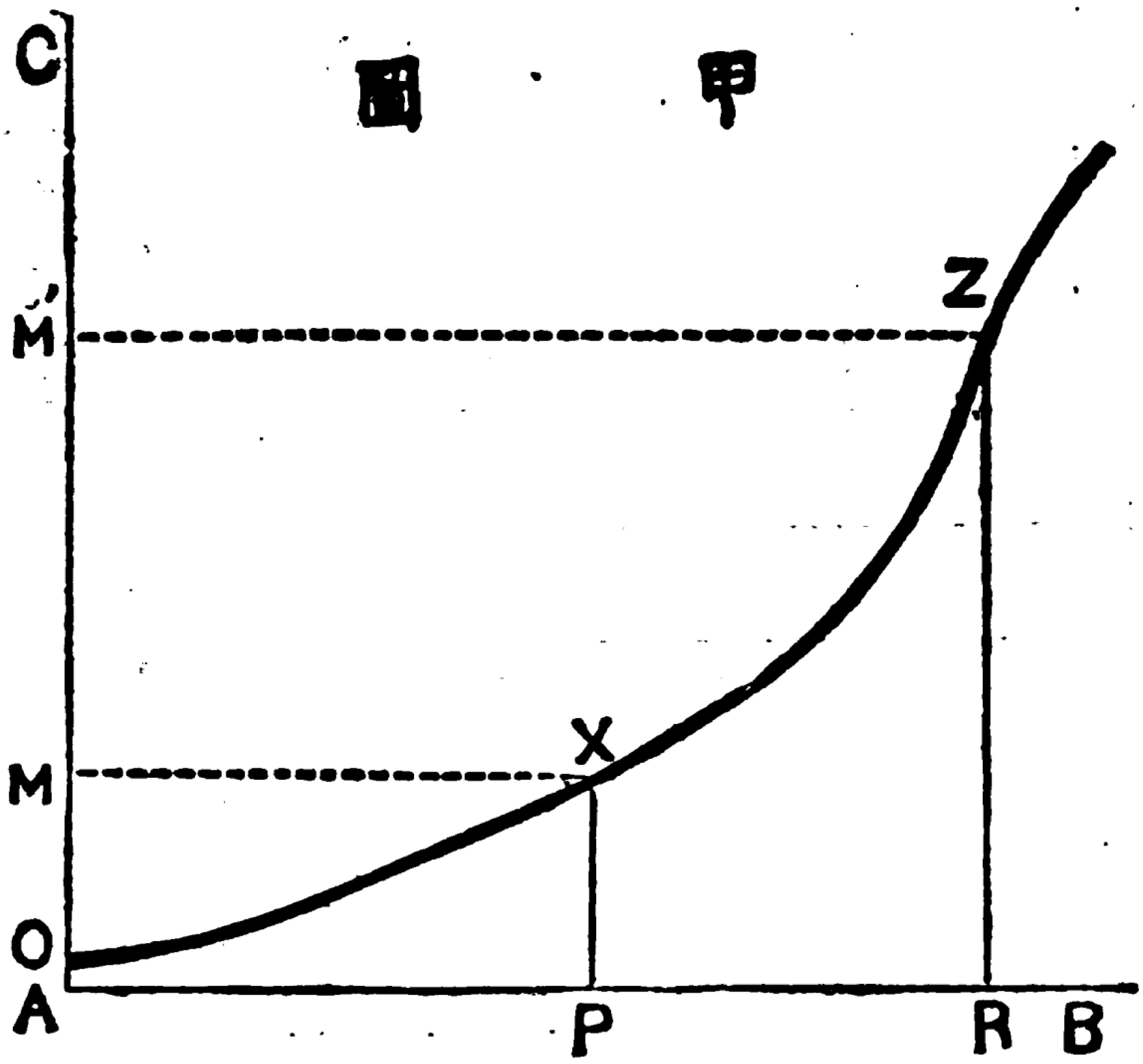
現代に於ける賣淫の主體は多くは婦人であるが、婦人が賣淫を爲すに至りたるは、貞操價値よりも貨幣價値を重く認識した結果である。賣淫を爲す婦人は自已の貞操を代價物件よりも低く評價し、また婦人の貞操を自由にして性交を經驗せんとする男子は、代價物件をその性交よりも低く評價して始めて交換行爲が行はるゝのである。現代の文化生活に於て過去に於けると著しく賣淫の行はるゝのは如何なる理由であるか、それは婦人の貞操上の性交とその代價物件とに對する主觀的價値判斷を各々異にするから、交換行爲として賣淫が行はるゝのである。それ故に婦人の生活が經濟的に壓迫を感ずるほど賣淫が行はれ易

いのである。更に賣淫の成立に關する價値論上の考察を圖解すれば、甲圖に於てAB横線は婦人の自己の性交に關する貞操價値を表示するものとし。AC垂線は男子の交換物件としての貨



幣に對する主觀的價値を表示するものとする。婦人はABに於ける自己の貞操上の性交價値を價値物件に對して主觀的に低く評價し最低限度としてAP、を取るに反し、男子は貨幣價値に對し婦人との交換滿足を高く評價し、AC上に於て最高限度としてAmを取る。けれども實際の場合に於ける交易條件としては賣手とした婦人はAB上に於ける評定價値をARとし、買手としてこの男子はAC上に於ける評定價値を、Amとして交渉するので、兩者に於ける主觀的評價上の差異の上を移動する軌跡はXZの上にある線を以て示すことが出來る。即ち甲圖に於て婦人に對して提供せんとする貨幣評價の男子の最高限度はAM即ちPX線上に於けるX點であり、貨幣價値に對する婦人の貞操評價の最低限度はAR即ちmZ線上のZ點であるから、兩者の異れる主觀的評價の交叉點は、乙圖に於けるY點である婦人が自己の貞操を男子に對して最高に評價せしめんとする心意は軌跡ON線に於て表はれ、男子が之を最低に評價せんとする心意は軌跡O'N線に於て表はれてゐるから、交換價値の決定はON線とON'線との交叉點Yに於てである。軌跡上に於けるY點は女子が貨幣價値に對し自己の貞操より高く評價するに從つて、反對にZ點を遠ざかりX點に向つて接近せんと移動するのである。然るに男子が婦人に對する性交上の欲求に就き貨幣價値よりも高く評價するに從つて軌跡上のY點がX點を遠ざかり、Z點に接近し行くのである。これは何故であるかと云ふに男子が婦人に對する性交上の欲望滿足に對する評價の最高限度

が上昇し、婦人にありては貞操に對する評定價値の最低限度が低下したる結果である。それ故に交換價値の決定點は、此の兩



限界の間を往來して、その外に出づることはない。これ賣淫問題に對する價値論上の經濟的一原則である。

賣淫と云ふ行爲に於ける目的は、自己の貞操上の道德價値を低く認識し、之を以て交易資料として高く認識したる貨幣價値を獲得せんとする所にある。從つて交換價値に於てバランスを取るときは、貞操道德價値を低く貨幣價値を高く評價されるから、此の兩者を交易する場合にはより高く評價されたる貨幣價値が交換行爲に於て要せられたる費用を控除した殘額だけ、利益として獲得されるのである。賣淫が經濟行爲たる論理の基礎は實に此處に存するのである。例へば米國に於て賣淫を爲さざる前に於ける女子の工場に於ける勞働所得は一週四弗五十仙に過ぎなかつたものが、賣淫を爲せる土曜日の夜だけの所得が三十五弗より四十弗を示めしてゐるし、キネマの歌女が給料一週六弗を得てた者が、賣淫を爲してから一週の所得百五十弗を示めしてゐる。賣淫の目的は貨幣價値である。而も貨幣そのものでなく、貨幣を以て評價し得る交換價値の獲得である。交換價値の獲得の必要なる理由は、自己の生存を確實にせんが爲めである。彼女は經濟的根抵に於て生存が危ぶまれてゐる。生きると云ふとそれ自身が價値である。それ故に生存を經濟的に安定せんが爲めに、彼女は生存を要せらるゝだけの交換價値を獲得せねばならぬ。然るに貨幣はそれ自身に於て交換價値を有してゐるから、先づ貨幣を獲得して之れに依りて自己の生存欲を滿足せしむる効用を得やうとするのである。然らば人類の文化的

過程に於て經濟組織が貨幣制度を否定する時でなければ、貨幣價値の獲得を動因として起る賣淫現象を消滅せしむることが出來ないと觀すべきか。私はこれに對して否と答へ度い。たとへ貨幣制度が廢止せられても、彼女の生活を安定ならしむるに足るだけの財に對する司配若くは文化關係に於る自己所分を許されぬならば、このやうにして生きんとを欲せぬ彼女としては生存財と生存楠とを獲得せんが爲めに、貨幣以外に於て更に新なる交換價値を獲得せんとするに至るであらう。從つて賣淫現象は社會制度が不完全である間は之を消滅せしむることが出來ない性質のものである。何となれば賣淫は生存せんが爲に交換價値の獲得行爲であるからである。

人間の生活は價値の上の生活である。價値とは生存欲望を滿足せしむるもの丶重要の認識程度である。我々が何物に對しても價値を認めるとなつたならばそれを我々の死の時である。或物に對し欲しいと云ふ欲望の起るのは、その物に對して價値を認めたからである。物に對して價値を認めるから之を得る爲めに交換物件として貨幣が必要となるのである。貨幣そのものが目的でない。或物若くはものに於て貨幣を以て評價し得る自己生存所要の價値を獲得せんが爲めである。貨幣が目的でなく貨幣價値が目的である。交換價値が目的である。この意味に於て賣淫も亦價値を認識する人生である。賣淫者を以て道德犯罪なりと罵倒し去る者あらば、それを輕卒なる論者であつて、私は賣淫を爲す者と共に、泣かねばならぬ。賣淫の背景には經濟的危機が横つてゐる。何となれば彼女を無資産者であるからである。賣淫は無資産者階級に於ける現象であることは一九二〇年にニューヨルク・センチュリー會社よりミネソタ大學のマーベル・ラシュ・ファーナルドやカーネギー協會の副會長ペアーツレー・ラムル等の公表したる所のものであるとは、社會問題研究家の知る所であらう。賣淫は價値生活であるが故に罪惡視すべきものではないけれども、併し乍らそれは經濟學純理の見解である賣淫は價値生活であるけれども性交を以て貨幣價値を獲得せんとする交換行爲であり且つ「最小の勞力を以て最大の効果を得べし」との經濟法則を餘りに適用したる點に於て、勞働生活として排斥すべきものである。併し乍らそれだけ經濟生活の道程にあるものであるから、若し賣淫より人生を救濟せんとせば他に職業を授け、彼女の勞力に應ずるだけの作業に從事せしめ、而もその勞働所得額をして生活の安定を得せしめてやらねばならぬ。而して彼女を厚生ならしむるに足るだけの所得額を支給し得るものとして、之を企業家に求むべきか若くは都市または國家に求むべきかは分配論上困難なる問題であつて、現在社會

制度下の經濟組織に於ては實行が至難である。けれども現代の賃銀制度を改造して分配享有額を增進せしむると共に、他方に貧民教育を向上せしめて、女子に於ても技術才能を高めしむるならば、勞働生活に於ける經濟的苦痛より脫せんとして賣淫の淵に陷る者を、輕減せしめ得やう。これは政策上の予が見解である。古い支那人も云ふた「衣食足りて禮節を知る」と。若し賣淫者の境遇を資本家階級の地位に變ぜしむるならば、彼女等は好んで賣淫をするものではない。今日資本家階級の娘や妻が賣淫を爲さぬのは、性交と引換に貨幣を獲得する必要ないからである。然るに賣淫婦人には物財の資本と云ふ者を擁してをらない。彼女等は無資產者であつて、肉體力も男子に比し薄弱であり技術的手腕もなく、且つ事務的智識も有してをらないとすれば「最小の勞力を以て最大の效果を獲る」方法として自己の貞操價値と交換に貨幣を獲得せんとするは極めて陷り易き道である。彼女等が文化生活に於て、經濟價値を追求することは資本家階級の者と異る所がない。資本家階級の子女が絹の衣類を欲すれば無資產者階級の子女も亦之を欲するのである。資本家階級の子女だけ絹の衣類を着、無資產者階級の子女が之を着ることが出來ぬのは如何なる理由であるかと云ふに、所得額の多寡に依るのである。換言すれば貨幣價値の所有額の多少に依るのである。生存上財に對する價値の認識は、賣淫者に於ても資本家階級の者に於ても變りはない賣淫は價値を追求する人生である。この價値は經濟價値である。經濟價値の享有を追ふ文化生活の一形態として彼女の人生を觀じるのでなければ、賣淫の眞相を捕捉することが出來ない。從つて賣淫の經濟的眞相を認識するのでなければ、社會問題としての賣淫現象を解決することが出來ないのである。

自叙傳（五）

大杉榮

去年の九月號から連載しはじめて、十二月號で第一篇の終りとして一旦切りあげたのだが、怠けてゐて中々あとを書かないので、又切りに督促されて、先月號にはずつと飛んで最近の出來事の『お化を見た話』を書いた。が、それではやはり書きにくい。又、始めにもどつて、以前の續きの第二篇から書き出す事にした。

前の方を見ない人や、見ても忘れて了つた人には、前號のやうな多少獨立したものの方が讀みいゝのだらうが、書く方の僕にはそれでは困る。

で、前の方はまあどうでもいゝとして置いて、續いて御愛讀を願ふ。

第一篇は、僕が幼年學校で氣ちがいのやうになつて、遂に學友等と喧嘩して傷を負ふて、退校されて父の家の越後の新發田に歸つたところで終つたのだつた。

一

父に連れて歸られた僕は、病氣で面會謝絶と云ふ事にして、毎日つい近所の衛戍病院に通ふほかは、もと僕の室にしてゐた離れの一室に引籠つてゐた。

此の面會謝絶と云ふ事は僕自身から云ひだしたのだが、父と母とはそれをごく廣い意味に採用して了つた。離れには八疊と六疊とあつて、奥の方の八疊は父の室になつてゐたのに、父はまるで其の室にはいつて來なかつた。母も僕の室に來る事はめつたになかつた。そして、女中共は勿論妹共や弟共にまでも堅く云ひつけて、決して離れへはよこさなかつた。

『兄さんは少し氣が變なんだからね。決して離れへは行くんぢやないよ。』

これはあとで聞いた話なんだが、母は皆んなにさう云つてゐた。そして小さな妹共や弟共は、其の恐いもの見たさに、よくそつと離れに通ふ椽側まで來ては、何にかにあはてゝばた〳〵と逃げだして行つた。

ていのいゝ座敷牢にあつたのだ。

が、飯だけは母家の方へ行つて皆んなと一緒に食つた。皆ん

なは默つてじろ〳〵僕の顏を見てゐるし、僕も默つて食ふだけ食つて自分の室へ歸つた。

　僕の頭の中にはもう、學校の士官の事も下士官の事も、學友の敵味方の事も何んにもなかつた。從つて又、それに附隨して起つて來る兇暴な氣持もちつとも殘つてゐなかつた。幼年學校の過去二年半ばかりの生活は、又其の最近の氣ちがひじみた半年ばかりの生活は、たゞぼんやりと夢のやうに僕のうしろに立つてゐるだけであつた。そして其の夢がまだ幾分か僕を陰欝にしてゐた。が、僕の前には、新らしい自由な、廣い世界がひらけて來たものだ。そして僕の頭は今後の方針と云ふ事に就いて充ち滿ちてゐた。

　學校での僕のお得意は語學と國漢文と作文とだつた。そして最近では、學課は大がいそつち除けにして、前にも云つたやうに當時流行のロオマンテイクな文學に耽つてゐた。そして僕は其の作物や作者の自由と奔放とに窃かに憧れてゐたのだ。

『君等は軍人になつて戰爭に出たまへ。其時には僕は從軍記者になつて行かう。そして戰地で又會はう。』

　僕は軍人生活がいやになつた時、よく學友等とそんな話しをした。が、あながち新聞記者にならうと云ふのではなく、たゞぼんやりと文學をやらうと思つてゐたのだ。そして戰爭でもあれば、從軍記者になつて出かけて行つて、『人の花散る景色面白や』と云ふやうな筆をふるつて見たいと思つてゐたのだ。

　僕は先づ高等學校にはいつて、それから大學を出ようと思つた。そして其の前に、どこかの中學校の上級にはいつて、其の資格を得なければならないと思つた。が、それには、もう英語を殆んど忘れて了つた僕は、どこかフランス語をやる中學校を選ばなければならなかつた。そして其の中學校は學習院と曉星中學校と成城學校との三つしかない事を知つてゐる。

　僕は其の夏東京で買つた『遊學案内』をひろげて見た。そしてそれの中學校の上級にはいるためのいろんな豫備學校のある事が分つた。中學校の五年の試驗を受けるには僕の學力はまだ少し足りなかつた。で、僕は先づ直ぐに上京して、どこかの豫備學校にはいつて、そして四月の新學年にどこか都合のいゝ中學校の試驗を受けようと思つた。

　うちへ歸つて二三日の間に、これだけの事はすつかりきまつた。あとはもう、時機を見て、それを父に話すだけの事だ。

　僕は其の時機が直ちに來るだらう事も、又父がきつとそれを承知するだらう事も、樂觀して、默つて其の時の來るのを待つてゐた。そして終日、離れの一室に籠つて、近い將來の東京での自由な生活を夢みながら、自分の好ききらひには構はずに、い

一人で一生懸命いろんな學課の勉强をしてゐた。

が、其の間にも、此のごく平靜な氣持を亂すたつた一つの事があつた。それは、母家の方がいつもよりは餘程客の出はいりが多くて、そして妙ににぎやかにざはついてゐる事だつた。母は、出來るだけ僕の氣にさはらないように自分にも又皆んなにも勤めさせて、僕にはごくやさしくしてくれながらも出來るだけ口數は少なくしてゐる位だのに、其の顏には憂への暗い色よりも寧ろ喜びの明い色の方が勝つてゐた。そして其のお客とはしやぎ騷ぐ聲がよく離れにまで聞えた。僕はうちに何にかあるんだなと思つた。そして、ふと、或日、母とお客との話しの間に『禮ちやん』と云ふ言葉を聞きとめた。

『禮ちやんがうちからどこかへお嫁へ行くんぢやあるまいか。』

僕は直ぐさう直覺した。さう云へば、いろいろ思ひあたる事もある。汽車で柏崎を通過した時、見覺えのある丈の高い頰から顎に長い鬚をのばした禮ちやんのお父さんが軍服姿で立つてゐた

『どうした。一緒に連れて來なかつたのか。』

『うん。ちよつと都合があるんで、少しのばして、親子一緒にやる事にした。』

父と禮ちやんのお父さんとの間にそんな會話が交はされた。

僕は何んの事とも分らない、此の親子一緒と云ふのにちよつと心を動かされながら、父の大きな黑いマントで白い病衣のからだを包んで、默つて禮ちやんのお父さんを盜み見してゐた。名古屋からどこへも寄らずに、かうして汽車の中を父と二人で默つて通して來た僕には、此の會話が多少氣になりながらも、發車したあとでそれを父に問ひただす事は出來なかつた。

それから、いよ／＼うちに着いた時にも、やはりそれと關係のあるらしい或る事があつた。

『おや、一緒に連れて來なかつたんですか。』

僕等の俥が玄關に着いた時、あはてゝ出て來た母が、父と僕とを見てがつかりしたやうな風で云つた。僕のほかに父が誰れを連れて來る筈だつたのか、其時には、僕はこれと柏崎での事を結びつけて考へる事が出來なかつた。

しかし、もう事は明白になつた。きつと近いうちに禮ちやんがうちに來るのに違ひない。そしてうちからどこかへお嫁に行くのに違ひない。僕はさう思ふと急に胸がどき／＼して來るのを感じた。もう長い間まるで忘れて了まつたやうに思ひだしもしなかつた、禮ちやんの事が、わく／＼と胸に浮んで來た。そして、どうしてもこれを確かめなければならないやうな氣持になつて、飯の時のほかめつたに行く事もない母家の母の室へ行

つた。

母はどこかの女のお客と話しながら、親子で女中してゐた二人の客に手傳はして、何んだか知らないが綺麗な模様のある布團に綿を入れてゐた。そして『ほんとに綺麗な模様ですわね』とか、『こんないゝ布團で寢たらどんなにいゝ氣持でせう』とか云ふやうな事を其の女中達が云つてゐた。

『誰れの布團？』

僕がはいつて行つた事にはまるで無關心のやうな顔つきをしてゐる皆んなの中へ、僕は誰れにともなくかう問ひかけた。皆んなが異常な親しみをもつて其の話題にしてゐる此の布團が、誰れのために、何んのために造られてゐるのか、實際僕にはちつとも見當がつかなかつた。

『お前、千田さんの禮ちやんを知つてゐるね。こんどあの子がお嫁に行くの。そして此の布團はね其時禮ちやんが持つて行くの。あしたはきつと禮ちやんがお母あさんと一緒にうちへ來るでせう。』

母の此の返事は一ぺんに僕の顔を眞赤にして了つた。僕は其の赤い顔を人に見られないうちにと思つて、急いで自分の室へ逃げて歸つた。そして室へはいると直ぐ、机の上に兩肱を立てゝしつかりと頭を押へて、今見て來た布團のはでな色を退のけようと思つて目を閉ぢてゐたが、其の目からはいつの間にかあつい涙がぽたり〳〵と落ちてゐた。

『人の戀人をうちで世話してよそへやるもひどいが　人の目の前で其の結婚の時の布團を縫つて見せるなんて實にひどい。』

ついさつきまではもう二三年も思ひだしもしなかつた、ほんの幼な友達の事を、かうして僕はまるで自分の戀人のやうに考へだしたのだ。そして、それを今よそへ取られるのだと云ふやうな氣持にまでもなつたのだ。

しかし其の翌日、果して禮ちやん親子がやつて來てからは、此の失戀に似た妙な氣持よりも、現に彼女と一つ家に生活してゐると云ふ喜びの方が、餘程强かつた。

彼女等は、僕の室の窓から二間程の庭を隔てた向ふの座敷を其の室にあてがはれた。其の窓からでも、彼女等の顔は、向うの障子のガラス越しに見えるのだ。彼女は來ると直ぐ、いづれ母から何んとか注意があつただらうのにも構はずに、僕の室を訪れてくれた。そしてひまさへあれば、と云ふよりも寧ろ彼女の母さんの隙を窺つては、僕の室へ遊びに來た。

彼女は今直ぐ嫁に行くのだと云ふやうな顔はちつともして見せなかつた。僕がそんな方へ話しを持つて行つても、直ぐ僕の

口をおさえるやうにして、話しをほかへ移して了つた。彼女はたゞもう殆んど治つた僕の傷だけを、始終氣にした。そして學校を退學された事に就いては、『いゝわ軍人よりももつとえらい人になりさへすればね』と云つただけで、却つて僕の將來を祝福してゐるやうにすらも見えた。僕も彼女には僕の將來の方針を打あけた。

『わたしなんか、學校の先生も師範學校へはいれつて勵めて下さるし、わたしもさうしてもつと勉强する氣でゐたんだけれどもう駄目だわ、あなたなぞは、これからが本當の勉强なんですもの。』

彼女はかう云つて僕を勵ましては、僕の少年時代の才能を賞めたて其頃の無邪氣ないろんな追憶に移つて行つた。僕も彼女が直ぐ結婚するんだと云ふ事も殆んど忘れて、戀人とでも話しするやう甘い氣持になつて、彼女と一緒に其の追憶に耽つてゐた。

或日僕は、彼女の室で、彼女親子と母とが何事が切りにさゝやき合つてゐるのにきゝ耳を立てた。

『どうして、おばさん、氣が變などころぢやあるもんですか。わたし、しよつちう遊びに行つてお話してゐるんですけれど、そんなところはこれつぱかしでも見えませんわ。そして、これからが本當の自分の勉强だと云つて、一生懸命になつて勉强してゐらつしやるんですもの。』

『さうかね。わたしは又、夜いつ目をさまして見ても、きつと離れの方で本の紙をめくる音がして、はゞかりへ行つて見ても離れでかん〳〵あがりが點つてゐるので、何んだか氣味がわるかつた位よ。』

『えゝさうして毎晩遅くまで勉强してゐらつしやるんだわ。そして近いうちに東京へいらつしやりたいですつて。これからの方針も何にもかも、もう自分一人でちやんときめてゐらつしやるんだわ。ね、おばさん、本當にしつかりしてゐらつしやるんだから、わたし榮さんに代つておばさんやおぢさんにお願ひしますわ、早く榮さんのお望み通りに東京へ出しておやんなさるといゝわ。』

『まあ、そんなに勉强してゐるんですかね。わたしは又、うちで少し氣が變だなんて云ふから、どんなに心配してゐたか知れないの。そして默つて見てゐるんだけれど、別にこれと云つて變なところもなしね、却つて變に思つてゐた位ですわ。體ちやん、本當に有りがたうよ。わたし、それですつかり安心したわ。』

僕は此の話し聲を聞いて、本を閉ぢて、一人でしく〳〵泣きながら、どんな事があつてもうんと勉强して、彼女のためにだ

けでもえらい人間になつて見せると一人で誓つた。

其晩は珍らしく禮ちやんが夜遊びに來た。が、其日の話に就いては、彼女も何んにも云はなければ、僕も又何んにも云ふ事が出來なかつた。僕はたゞ默つて、心の中でだけ彼女に感謝してゐるほかはなかつた。そして彼女はいつもと同じやうに、僕を慰さめ勵まして、幼な物語りに夜を更かして自分の室へ歸つて行つた。

其の翌日は、朝早くから、うちぢうが總がかりでごた／＼騷いでゐた。そして夕方に、女中共や子供達を殘して、皆んなが出て了つた。僕はいよ／＼禮ちやんがお嫁に行つたのだなと思つた。禮ちやんが何んにも云はずに行つて了つた事は隨分さびしかつたが、もう戀人を人にとられたやうな妙な氣持はちつともしなかつた。そして、たゞ彼女の上に幸あれと思ふほかに、きのふ一人で彼女に誓つた言葉を又一人で繰返してゐた。

二

それから四五日經つて、或晩僕は父と母との前に呼ばれた。父の顏にはもう僕を名古屋へ迎ひに來て以來の、難しさうな筋が一つも出てゐなかつた。母も僕がはいつて行つた時にいつもちよつとやる、其のはいつて行つたのを知らないやうな顏つきはよして、にこ／＼して迎ひ入れてくれた。

『これからどうするつもりだ。』

父は出來るだけ優しく、しかし簡單にたゞこれだけの事を云つた。僕は一人できめてゐただけの事をはつきりと、しかしやはり簡單に答へた。

『文學はちよつと困るな。』

父は僕の言葉を聞き終ると、ちよつと顏をしかめて首を傾けた

『文學つて何んですの。』

母は心配さうに父の顏をのぞいた。

『それ、あの桑野の息子がやつたやうなものさ。』

『あの、大學を卒業して、何んにもしないで遊んでゐる。あの方だ？』

『うん、あれだ。あんなんぢや困るからな。』

『さうね。』

僕は其の桑野の息子と云ふのがどんな男か知らなかつたが、母もさう云はれゝば、父に賛成するほかはないらしかつた。

『とにかく東京へ出して勉強はさせてやるつもりだが、文學と云ふのだけはもう一度考へ直して見てくれ。お前も七八人の兄弟の總領なんだからな、醫科とか工科とかの將來の確實なものなら、大學へでもやつてやるがね。どうも文學ぢや困るな。』

父は又顏をしかめて首を傾けた。

『でも、折角さうときめたことを今直ぐ考へ直すと云ふわけにも行きますまいし、もう一日二日考さして見たらどうでせう。』

母は父にさう云つて猶僕にも附けたして云つた。

『お父さんも東京へ出してやると仰しやるんだから、今晩はもうこれで室へ歸つて、もつとよく考へて見て御覽。』

僕はそれでもう僕の目的の七八分は達したものと思つて喜んで室に歸つた。

其の翌日は、多分父に賴まれたのだらうと思ふが、醫學士で軍醫の平賀と云ふのが來て、切りに醫者になれと勸めて行つた。これは子供の時から僕が始終世話になつてゐる醫者で、幼年學校の入學試驗の時にも僕の目の惡いのを强いて合格にしてくれた人だつた。が、僕にはどうしても醫者になる氣はなかつた。其後外國語學校を出た時にも、今の平民病院長の加治ドクトルが、其の息子の時雄君の連れとなつてフランスへ行つて醫學をやつたらどうかと勸めてくれたのだが、やはりどうしても醫者になる氣はなくつて斷つて了つた。そして更に其後、自然科學に興味を持つようになつてから、一その事あの時に醫者になつてゐればよかつたと、時々にそして今でもまださう思ふ事がある。

が、そこへ、もう一人、ちようどいゝ妥協論者が出てくれた。それは父が大ぶ目をかけてゐた森岡と云ふ若い中尉だつた。父は此の中尉にきつと僕の事を相談したに違ひなかつた。中尉は僕のところに來て、友達のやうにして相談に乘つてくれた。

『お父さんはどうしても文學は困ると云ふんだが、ほかに何にか方法はないものかね。』

中尉はうちの財政上の事からいろんな話をして、僕に再考を求めた。

『そんなら語學校へ行つてもいゝんです。』

僕は大學が駄目ならかうと云ふ、僕の第二案を打ちあけた。

『それやいゝ、それならきつとお父さんも贊成する。よし不贊成でわ、きつと僕が贊成さして見せる。』

中尉は、僕が語學校と云ひだしたので、急に元氣づいて贊成した。

當時陸軍では、殊に田舍の軍隊では、再歸熱のやうに時に起る語學熱が流行つてゐた。陸軍大學へはいれなくつても、多少語學が出來さへすれば、洋行を命ぜられたり要路に就かせられたりして、出世の見込が十分についた。森岡中尉も、やはり幼年學校出身で、フランス語をやつてゐた。そして其のフランス語を大成さすべく、切りに東京へ出て語學校へはいりたがつて

ゐたのだ。禮ちやんの花婿の隅田中尉と云ふのも、これは中學校出身で英語がお得意なので、やはり何とかして東京へ出て語學校へはいりたいと云ふてゐた。父も、以前にはフランス語をやつたりドイツ語もやつたりしてゐたが、其頃は新しく又ロシア語をやりだしてゐた。

そんな時なので、語學校を出れば何んになれるのかと云ふ事などはごくぼんやりと考へただけで、中尉のも父も直ぐ僕の第二案に賛成してくれた。が、僕は、語學校を出れば直ぐ大學の選科にはいれ、其の選科からは更に普通學の試驗を受けて本科に移れる事をよく承知してゐたのだつた。

とにかく僕は直ぐにも上京する事を許された。そして自分で元日の朝早く出發する事にきめた。

が、此の元日には俥屋が行かうと云はないので、仕方なしに翌二日に延ばした。

元日の朝は暖かいゝ天氣だつた。それが晝頃から曇り出して、夕方にはもう霏々として降る大雪の模樣になつた。其晩の十二時少し過ぎだ。もう三四尺積もつてゐる雪の中を、僕は橇に乗つて二人の俥夫に引かれてうちを出た。

『まあ、あんなに喜んで行く。』

母は一人で玄關のそとまで僕を送りだして、自分も矢張り嬉し泣きに泣いてゐた。

町はづれまではまだよかつた。が、町を出るともう橇は一歩も進む事が出來なかつた。俥屋のお神は豫めさうと知つて、ゆうべの間に一度とめに來たのだ。しかし僕がどうしても聞かないので仕方なしに一番屈強な男を二人選んで寄越したのだが町を出ると、雪ですつかり埋もつてゐる道は、其の俥夫の一歩一歩の足を腿まで食ひこんだ。そんな事で橇が引けて行けるものではない。それに、橇の上に乗つて、僕が其の中に座つてゐる箱は、時々横合ひから強い風を受けてひつくり返りさうになる。とう／＼俥夫等は立ちどまつて、『もうとても駄目です』と云ふ。

『それぢや歩いて行かうぢやないか。』と僕は云ひ出した。『君等の中の一人が眞先きに歩くんだ。其の足あとを傳つて僕が眞ん中になつて行く。其のあとへ又、君等の中のもう一人が僕の荷物をかついで行く。そして先頭のものと殿のものとは時々交代するんだ。僕だつて、時には先頭に立つたり、殿になつて荷物を持つたりしたつていゝよ。』

俥夫等は此の提案を喜んだ。

『わしらだつて、うちのお神さんや奥様とお約束して、なあに

大丈夫でさあつて引受けて來たんですからね。今更とても駄目でしたつておめ〳〵歸れもしませんよ。』

そして彼等は急いで其の橇を近所のどこかへ預けて、僕の云ふ通りにして歩きだした。

が、道は遠いのだ。北越線の一番近い停車場の新津へ出るのに、新發田からは七八里あるのだ。そして其の間には、半里も一里もの間家一軒もない、廣い野原を幾つも通り拔けなければならんのだ。雪は降る。眼前數歩の先きは何んにも見えない程に、細かい雪がおやみなく降る。降るばかりならまだいゝ。時々強い風が來ては、足もとの雪を顏に吹きあげる。そんな時には、たゞしつかりと踏みとゞまつて、其の風の行つて了ふのを待つてゐるほかはない。そして又、たゞほかよりは少し小高くなつてゐる道をあてに、一歩一歩腿まで埋まりながら重い雪靴の足を運んで行くのだ。

ちようど新發田と新津との中間の、水原と云ふ町の向ふの、一里ばかりの原に通りかゝつた時には、三人とも疲れと餓えとでへと〳〵になつて了つて、幾度其の原の中で倒れかゝつたか知れなかつた。そして五歩歩いては休み十歩歩いては休みして、漸く其の原の眞中の一軒家に着いた時には、皆んなもうまるで死んだもの〻やうだつた。

しかし、其の一軒家で大きな圍爐裡に火をうんともやして、一時間程其のまはりに轉がつて寢て、そしてあつい粥を七八はい掻つこんだあとでは、すつかりもとの氣分になつてゐた。

そして夕方近い頃に、一番の汽車に間に合ふ筈であつた新津に、漸く着く事が出來た。

東京に着くと直ぐ、僕は牛込矢來町の、當時から豫備か後備かになつてゐた退役大尉の、大久保のお父さんを訪ねた上京のたんびに僕は此の大久保のうちへ遊びに行つて、其の直ぐ向ひに下宿屋のある事を知つてゐたので、大尉の監督の下にそこへ下宿するように父に申し出てあつたのだつた。

若松屋と云ふ其の下宿には、幸いに奥の方に、四疊半の一室があいてゐた。そして僕は、正月の休みの間に探し歩いた、猿樂町の東京學院へ（今はもうないやうだが）、中學校五年級受驗科と云ふのにはいつて、毎日そこから通ふ事となつた。そこでは僕は自分の學力の足りないと思つた數學や物理化學に特に力を入れて勉強した。そして同時に又、或は四月頃になつてからだとも思ふが、夜は、其頃四谷の簞笥町に開かれた佛蘭西語學校と云ふのに通つた。これは、庄司（先年勞働中尉と呼ばれたあの庄司何んとか君の親爺さんだ）と云ふ陸軍教授が主となつて、

やはり陸軍教授の安藤（今は早稲田の教授）だの、何んとか云ふ高等學校の先生のフランス人だのが始めた學校だつた。

かうして僕は、東京に着く早々、何にもかも忘れて夜晝たゞ夢中になつて勉強してゐた。

が、何によりも僕は、僕にとつての此の最初の自由な生活を樂しんだ。直ぐ向ひには監督である保證人である大尉がゐるのだが、これはごくお人好の老人で、一度でも僕の室をのぞきに來るでもなし、訓戒らしい事を云ふのでもなし、又僕の生活に就いて何に一つ聞いて見ると云ふのでもなかつた。僕は全く自由に、たゞ僕の考へだけで思ふまゝに行動すればよかつたのだ。

東京學院にはいつたのも、又佛蘭西語學校にはいつたのも、僕は自分の存分一つできめた。そして大尉や父にはたゞ報告をしただけであつた。僕が自分の生活や行動を自分一人だけで勝手にきめたのは、これが始めてゞあり、そして其後もずつと此の習慣に從つて行つた。と云ふよりも寧ろだん／＼それを增長させて行つた。

僕は幼年學校で、まだほんの子供の時の、學校の先生からも遁れ父や母の目からも遁れて、終日練兵場で遊び暮らした新發田の自由な空を思つた、其の自由が今完全に得られたのだ。東京學院の先生は、生徒が覺えようと覺えまいとそんな事にはちつとも構はずに、たゞ其の教へる事だけを教へて行けばいゝと云ふ風だつた。出席しようとしまいと教授時間中にはいつて行かうと出て行かうと、居眠りしてゐようと話してゐようとそんな事は先生には何んの關係もないやうだつた。そして佛蘭西語學校の方では、生徒が僕のほかは皆な大人だつたので、先生と生徒とはまるで友達づき合ひだつた。一時間の間膝にちやんと手を置いて、不動の姿勢のまゝ瞬一つせずに、先生の顏をにらめてゐる幼年學校と較べればまるで違つた世界だつた。

僕はたゞ僕自身にだけ責任を持てばよかつたのだ。そして僕は此の自由を樂しみながら、僕自身への責任である勉強にだけたゞ夢中になつてゐた。

三

けれどもやがて、此の自由を憧がれ樂しむ氣持がたゞ自分一人のぼんやりした本能的にだけではなく、更にそれが理論づけられて社會的に擴張される機會が來た。ごく偶然に其の機會が來た。

僕は其頃の僕の記憶の一斷片に就いて、嘗つて『乞食の名譽』の中の一篇『死灰の中から』の中に書いた。

――僕が十八の年の正月頃だつた。（或はもう二三ヶ月かもつ

とあとの事かも知れない。)まだ田舎から出たてのしかも學校の入學試驗準備に夢中になつて、世間の事なぞはまるで知りもせず、又考へても見ない時代だつた。僕は牛込の矢來に下宿してゐた。或る寒い日の夕方、其の下宿にゐた五六人のW(早稻田)大學の學生が、どや／＼と出て行く。そとにも大勢待つてゐるらしいがや／＼する音がする。障子をあけて見ると、例の房のついた四角な帽子をかぶつた二十人ばかりの學生が、てんでに大きなのぼり見たいな旗だの高張提灯だのを引つかづいで、わい／＼騷いでゐる。

——『もう遲いぞ。駈足でもしなくつちや間に合ふまい。』

——『あゝ、しかし其の方が却つていゝや。寒くはあるしそれに此の人數でお一二、お一二で走つて行けば、隨分人目にもつくだらう。』

——『さうだ。駈足だ！駈足だ！』

——皆んなは大きな聲で掛聲をかけて元氣よく飛んで行つた。其時の『Y(谷中)村鑛毒問題大演說會』と筆太に書いたのぼりの間に、やはり何にか書きつけた高張りの赤い火影がゆらめいて行く光景と、皆んなの姿が見えなくなつてからもまだ暫く聞えて來るお一二、お一二の掛聲とは、今でもまだはつきりと僕の記憶に浮んで來る。これがY村と云ふ名を始めて僕の頭に刻みつけた出來事であつた。そしてそれ以來僕は其頃僕がとつてゐた唯一の新聞のY(萬朝報)新聞に折々報道され評論されるY村事件の記事を多少注意して讀むようになつた。

——Y村問題は直ぐに下火になつた。今考へて見ると、ちようど其頃が此の問題に就て世間が大騷ぎした最後の時であつたのだ。從つてY村に就いての僕の注意も一時立消えになつた。しかし此の問題のお蔭で、僕はY新聞のD(幸德)やS(堺)、M(東京每日)新聞のK(木下尙江)W大學のA(安部磯雄)などの名も知り、同時に又新聞紙上のいろんな社會問題に興味を持つようになり、殊にDやSなどの文章に大ぶ心を引かれるようになつた。そして其の翌年の春頃には、學校で『貧富の懸隔を論ず』なぞと云ふ論文を書いて、自分だけは一ぱしの社會改革家らしい氣持になつてゐた。

——僕ばかりぢやない。更に其の翌年、DとSとが其の非戰論のためにY新聞を出て一週刊新聞(平民新聞)を創めて、新しい社會主義運動を起した時、それに馳せ加はつた有爲の靑年の大部分は、此の鑛毒問題から轉じて來たものか、或は此の問題に刺戟されて社會問題に誘ひこまれたものであつた。

此の斷片は谷中村の鑛毒問題に就いて書いたものゝ中の一斷

片だ。從つて、勿論其の中には嘘はないのだが、多少一切を鎖毒問題の方へ傾けすぎた嫌ひはある。それを今後は、此の行を書いてゐる際中の自由と云ふ氣持の記憶の方へ、もう少し傾け直さなければならない。其の方が、少なくとも今は、本當だと思ふのだ。

僕はたゞ一番安いと云ふ事だけで萬朝報をとつた。田舍者でしかも最近數年間は新聞を見るのを嚴禁されて、世の中はたゞ軍隊の生活ばかりのやうに考へこまされてゐた僕は、其のほかにどんな名のどんな新聞があるのかも碌には知らなかつた。其の數年間の世間の出來事に就いても、僕が今覺えてゐるのは、皇太子（今の天皇）の結婚と星亨の暗殺との二つ位のものだ。皇太子の結婚は僕が幼年學校にはいると直ぐだつた。僕等は二人が伊勢へお參りするのを停車場の構内で迎へて、二人のごく丁寧な答禮にすつかり恐縮し且つ有りがたがつたものだ。それを思ふと、これは全くの餘談ではあるが、山川均君なぞは恐ろしい程の先輩だ。彼れは既に其頃キリスト教主義の小さな雜誌を出してゐて、此の結婚に就いての何にかを批評して、そして不敬罪で三年九ケ月とか食つてゐるのだ。星亨の暗殺は僕が幼年學校を出る年の事だつたが、僕はそれを學校の庭で、暫く星の家に書生をしてゐたと云ふ一學友から聞いただけだつた。そしてそれに對してはたゞ、劍客伊庭某の腕の冴えに感心した位のものだつた。星がどんな人間でどんな惡い事をしたかと云ふやうな事はまるで知らなかつた。

此の盲の手をほんの偶然に手引してくれたのが萬朝報なのだ。僕は此の萬朝報によつて始めて、軍隊以外の活きたいろんな社會の生活を見せつけられた。殊に其の不正不義の方面を目の前に見せつけられた。

しかし其の不正不義は僕の目には、たゞ世間の單なる事實として映り、單なる理論としてはいつた位の事で、それが僕の心の奧底を沸きたゝせると云ふ程の事はなかつた。それより僕は其の新聞全體の調子の自由と奔放とに寧ろ驚かされた。そして殊に秋水と署名された論文のそれに驚かされた。

彼れの前には、彼れを妨げる。又彼れの恐れる、何物もないのだ。彼れはたゞ彼れの思ふまゝに、本當に其の名の通りの秋水のやうな白刃の筆を、其の腕の揮ふに任せてどこへでも斬りこんで行くのだ。殊に其の軍國主義や軍隊に對する容赦のない攻擊は、僕にとつては全くの驚異だつた。軍人の家に生れ、軍人の間に育ち、軍人教育を受け、そして其の軍人生活の束縛と盲從とを呪つてゐた僕は、たゞそれだけの事ですつかり秋水の非軍國主義に魅せられて了つた。

僕は秋水の中に、僕の新しい、そしてこんどは本當の『仲間』を見出だしのだ。が、たつた一つ癪にさはつたのは、僕が水のしたゝるやうな刀劍を好きなところから窃かに自ら秋水と號してゐたのを、こんど別に秋水と云ふ有名な男のある事を知つて、自分の其の號を葬つて了はなければならない事だつた。

それと、もつと近くにゐて僕の目をあけてくれたのは、同じ下宿の直ぐそばの室にゐた佐々木と云ふ男だつた。彼れはもう二三年前に早稻田を出て、それ以來毎年高等文官の試驗を受けては落第してゐる、三十位の老學生だつた。いつも薄ぎたない着物を着て、頭を坊主にして、秋田あたりのズウ／＼辯で愛嬌のある大きな聲をだして女中を怒鳴つてゐた。其の顏も厳めしさうな八字髯は生やしてゐたが、兩頬に笑くぼのある、丸々とした愛嬌面だつた。友達のない僕は直ぐ此の老書生と話し合ふやうになつた。彼れは議論好きだつた。そして僕のやうな子供をつかまへても議論ばかりしてゐた。僕も負けない氣で、秋水の受賣りか何んかで、盛んに泡を飛ばした。

それから、此の佐々木の友人で、佛蘭西語學校で同じ高等科にゐた小野寺と云ふのと知つた。これもやはり、二三年前に早稻田を出て、其頃は研究科でたつた一人で建部博士の下に社會學をやつてゐた。少し出齒ではあつたが、からだの小さい、貴公子然とした好男子だつた。

或晩、學校からの歸りに、同じ生徒の高橋と云ふ輜重兵大尉が、彼れに社會學と云ふのはどんな學問かと尋ねた。

『たとへば國家と云ふものが、又其の下にあるいろんな制度がですね。どんな風にして生れて、そしてどんな風に發達して來たかと云ふやうな事を調べるんです。』

小野寺は得意になつて、やはり佐々木と同じやうに少々ズウ／＼辯ながら、多少演説口調で云つた。

『それや面白さうですな。』

士官學校の馬術の教官で、韁糸を一本手綱にしただけで自由に馬を走らせると云ふ馬術の名手の高橋大尉は、本當にうらやましさうに云つた。

社會學と云ふのは、又それがどんなものかと云ふ事は、これが僕には初耳だつた。そして僕も、高橋大尉と一緒にこんな學問をしてゐる小野寺をうらやましがつた。そして小野寺や佐々木に頼んで、社會學の本だの、其の基礎科學になる心理學の本だのを借りて、まるで分りもしないものを一生懸命になつて讀んだ。多分早稻田から出た遠藤隆吉の社會學であつたか、それとも博文館から出た十時何んとか云ふ人の社會學であつたか、

それとも其の兩方であつたかを讀んだ。又、金子馬治の最近心理學と云ふ心理學史のやうなものも讀んだ、そして次いでに、同じ早稲田から出てゐる哲學の講義のやうないろんなものも讀んだ。

小野寺は又僕に佛文のルボン著『民衆心理』と云ふのは面白い本だから讀めと云つて勸めた。それも僕は、字引を引き〳〵しかもとう〳〵碌に分らないながらも讀んで了つた。

學習院は缺員なしでだめ、曉星中學校もだめとあつて、其の四月に、僕はあとたつた一つ殘つてゐる成城中學校へ試驗を受けに行つた。が、願書を出す時には外國語をフランス語として出して受けつけたのが、いよ〳〵試驗の日になつて『こんどの五年にはほかにフランス語の生徒がないから』と云ふので無駄に歸されて了つた。

そして僕は九月まで待つて、どこか英語の中學校の試驗を受けなければならないはめになつた。それで僕は急に英語の勉強を始めた。そしてユニオン讀本の四が讀めさへすればどこへでもはいれると聞いて、ほかの學科の方は止して、其のユニオンの四を近所の何んとか云ふ英語の先生のところへ教はりに行つた。もう幾年かまるで英語の本をのぞいても見なかつたので、始めからユニオンの四にぶつかるのは實に無茶な事だつた。しかし僕は先生のところで其の講義を聞いて來ては、更にうちへ歸つて字引と獨案内とを首つ引きにして、それこそ本當に一生懸命になつて勉強した。そして一二月するうちには其のユニオンの四も大した苦にはならなくなつた。

すると七月か八月の幾日かに、突然僕は『母危篤直ぐ歸れ』と云ふ父の電報を受取つた。

葛西善藏作

小説 哀しき父

定價壹圓九拾錢

送料十七錢
四六判上製

最新刊

文壇獨特の境地を有する葛西氏の長編小説「不良兒」等を收む。愛兒の不良に惱める父の悶えと其の環境の情趣を描く、惱むにはあまりに悲しき慘苦に充ちたる哀れな父の運命と、その子の運命は眞に沈痛な此の世そのまゝの現在劇であることによつて我々に悲痛なる生存難の或一諦を寂しく暗示する。

東京芝愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

改造社出版目錄

◇文學博士醫學博士 榊保三郎著

學齡より丁年迄の 精神發育研究

定價四圓　送料廿七錢　四六倍版上製

四版

著者が十一ヶ年を費して研究した世界的權威の大册子で、六歲より廿一歲までの兒童の精神發育を研究した空前の大名著、小學校、中學校には一書を備付くる要がある。本書によりてのみ兒童精神の推移は判明すれば也。

◇片山潜著

自傳

定價壹圓八十錢　送料十五錢　四六版上製

四版

赤色露西亞に於てレニン、トロツキーと同等待遇を受けつゝあつた氏は最近第三インタナシヨナルの南北亞米利加の總指揮官となつた、我有史以來主義の爲めしかも無產者の味方として世界的活躍をなせるものは氏を措いて他にない。本書は氏の自傳だ。

◇理學博士 石原純著

(增補)アインスタインと相對性理論

定價貳圓貳拾錢　送料拾七錢　四六版上製

卅版

ニウトン引力を否定して、全科學界を革命せるアインスタインの相對性理論は既に絕對となつた。今までの物理學の公理、定義は根本から轉覆された。本書を一讀せずして敎育したら其生徒は殘らず時代後れとなります。

◇中澤臨川著

電子說から見た世界

定價壹圓八拾錢　送料拾五錢　四六版上製

改題六版

一代の文豪として雷名を轟かした臨川氏は實に東大出の工學士だ、本書は我國に於て類例のない理學的文藝品であり、藝術的滋味に富める科學的世界觀の大傑作、本著は「新社會の基礎」の改訂版である。

◇野上彌生子著

小說六つ

定價貳圓七拾錢　送料拾九錢　四六版上製

三版

綺羅星と並ぶ創作壇に赤輪唯だ一花、それは野上彌生子である、女流作家も多い、しかし野上氏に比すれば總ての作家は果して比較になるだらうか、氏の半生涯に於ける小說から特に六つを抽出して江湖に發表する。

◇文學博士 朝永三十郎著

カントの平和論

定價壹圓五拾錢　郵稅拾五錢　四六版上製

五版

著者は我國に於て哲學史專攻の第一人者だ、カントの平和論は近代平和論の根源であり、母體であることも一般周知の事だ、政治哲學を根本的に組織的に研究せんとするものは基礎哲學として本書の一讀を薦む。

◇文學士 板垣鷹穗著

新カント派の歷史哲學

定價壹圓五十錢　送料拾五錢　四六版上製

四版

本書は歷史哲學の入門書として書かれ、從來の歷史哲學が辿つて來た大體の徑路を瞥見し、新カント派の學說を中心として現代の歷史哲學を概觀したものだ、著者は若き哲學者として鐵中の錚々たる人である。

改造社出版目錄

◇賀川豊彦著
長篇小説 **死線を越えて** 前篇

定價參圓　送料拾九錢　四六版上製

貳百七拾五版

幾多の暗示と光明とを現代の人々に呼びかけた本書の價値は、本書を中心として囂々たることを以て明瞭だ。人類愛に燃え立ち、又は今後の世相と我身の將來を念ふ幾多の人々よ、一讀して本書の使命を諒解せよ。

◇賀川豊彦著
長篇小説 **太陽を射るもの** 死線中卷

定價貳圓八拾錢　送料拾九錢　四六版上製

百八拾版

前篇は我 に前例なき賣行を示せた。本書も 篇に劣らず出版後一ケ年に百八拾版の賣行きを齎らしたのは、百萬讀者の心と心とがピタリと本書と合致したからではあるまいか、敢て天下の青年士女に本書を薦む。

◇中澤臨川著
小説 **嵐の前**

定價貳圓　送料拾五錢　四六版上製

拾五版

情熱の思想家として文壇の一人者たりしニイチエの失戀を題材として描かれた涙ににじむ思想小説だ著者は我が論壇の麒麟兒として情熱に生れ、情に斃れたる理想的生活の持主として青年の憧憬を一身に集めた人である。

◇志賀直哉著
直哉傑作撰集 **壽々**

定價貳圓八拾錢　送料拾九錢　四六版上製

四版

秋の澄み渡つた朝空の如き透明な筆の持主である作者は何と云つても小説の大巨匠であり、最高權威である、日本の藝術を語るものは先づ氏のしみじみした作品を味ふべきである。そこに藝術の殿堂はある。

◇中西伊之助著
長篇小説 **赭土に芽ぐむもの**

定價參圓　送料拾九錢　四六版上製

九版

「こんなにも虐げられた人々もあるものか」と涙ぐませる、朝鮮と云へば我國だ、朝鮮人と云へば我々の同胞だ、その氷山、そのいぢらしい人情、その死刑囚の苦しみ、どの句章にも生々しい血の流れてをるこの深刻な小説を見よ。

◇尾崎士郎著
長篇小説 **逃避行**

定價貳圓參拾錢　送料拾九錢　四六版上製

七版

若き日の輝きに充つる一大雄篇を提供する若き社會運動家が、社會主義運動の裏面を赤裸々に告白し、自分は飄然として逃避するに至つた悲しき社會記錄だ。全篇火の如き熱烈さに充ち〳〵してをる感激多き小説

◇尾崎士郎著
長篇小説 **懷疑者の群**（逃避行第二部）

定價壹圓六拾錢　送料拾七錢　四六版上製

三版

若き社會主義者のその內面生活の素破抜きであり、その首頭連 裏面史であり、そして若き日の惱み多き戀の秘錄である、本書を一讀せずして我等社會主義者の內面生活を窺ふことは出來ない、本書は「逃避行」の續篇。

文藝管見

里見弴

第四章　内容と表現

第四節　内容（承前）

いまＡなる人が、他人の書いた本なり、他人の言葉なりから、一つの思想、Ｘを得たとする。それを讀み、または聞く以前よりも、その後の方が僅に進んでゐる。卽、ＡプラスＸの、Ｘだけ進んだわけだ。ところで、Ａに對するＸと云ふ二元的存在である限り、それは人格的進歩とは云はれない。さう呼ばるべくは、Ｘが解體してＡのうちに溶け込み、Ａが、Ａに非らざるＡ'に變つてゐなければならない。ＡプラスＸの間は、知つてゐる、知識としてもつてゐる、の狀態で、Ａ'となつて肇めて、思想であると同時に、感情に移され、血の如く肉の如く、彼の身について離れないものとなるのだ。

例へば、生あるものを殺すな、それは罪惡だ。——と云ふ思想がある。大抵の人はそれを本當だと思ふ。より少數の人は、本當のことだから守らなければならない、と思ふ。更に少數の人が、それをしない。そして、更に少數の人には、どんなにしやうと思つても出來ない。假令切つてかゝられても、相手の生命に關はるやうな抵抗などはどうしても出來ない。そこへ來て肇めて、殺生を禁ずる思想が、それを爲得ない感情となり、優和な人格の一要素となる。

以上はなはだ解り切つたことである。そこで、人としての尊さは、よい思想を、思想としてもつてゐる、卽知つてゐ

ることとか、或はまた、いつどんな突嗟の場合にでも、些の考慮するところなく行へるやうに、感情として、血とし肉として、身に體してゐることとか、この答も恐らく區々ではあるまい。從つて、そこから起つて來る二つの種類の行爲、——かくしなければならない理屈のものだ、を動機とした行爲と、同じことを、肚からしたくてしたのと、いづれを純とし、眞とするかも、論のないところだらう。

胸にいちもつあつて一萬圓恵まれるよりも、心からの情で、五十錢貸して貰ふ方を有難く感じるのが、あたり前の人情だ。肚の底から出てゐない行爲は、何事によらず、誠に氣持の惡いものだ。一口に云へば、嘘だからだ。

藝術は、云ふまでもなく人の營みだ、而も數ある營のうちでも、輝かるべき營の一つだ。その制作にあたつて、——文藝ならば、一言一句、肚の底から出ないでよからうか。

學問の場合なら、知つてゐると云ふだけのことを、人に傳へるもよい。藝術では、然しそれは利かない。知つた上に、感じてゐることが必須の條件となつて來る。云ひ換れば、常に必ず、AならA、BならBだけがそこに許され、AプラスXやBプラスYではならないのだ。——この意味に於て、藝術の內容が人格だ、それよりほかの何ものでもない、と云ふ言葉が成立つ。だから、內容の概念は、量的のものではなく、寧ろ質的なものでなければならない。

私が、靈がどうだの心がかうだのと云ふからとて、少しも神秘的でありはしない。以上の如く、はなはだ簡單で且明瞭である。世間普通の嘘は、藝術の內容とならず、肚からの眞だけが內容となる、と云ふだけのことで、小學校の修身よりも易いくらゐだ。智慧ではない、さうかと云つて感情ばかりでもない、もつと全的なものだ、——そこで靈と云ひ、それを現はすのだから、「現靈術」と呼んだまでだ。

第三章第二節、「他藝術との關係」で、系圖のやうなものを示したが、あのなかで、一番實際的、知的要素の多いものとして、文藝を末妹の位置に置いた。音樂や美術では、AプラスXのXを、持ち込みたくも持ち込み憎いから、謂はゞ思慮分別がついて、少しの誘惑には打ち克たれない姉娘のやうなものとして置いたのだが、文藝では、智的、實際的の要素が甚しく入込み易く、從つて、XやYの價値に眩惑されて、AならA、BならBと云ふ內容がおろそかにされる傾

が、作者にも、また讀者にも多く生じて來るわけだ。

七月以來述べ來つたところで、私の云ふ內容の意は、おほよそ解つて頂けたことゝ思ふ。そこで次には、內容となり得るものが、どう云ふ風にして用意されるべきかを、——ほんの私一箇の方法でもあり、また、云ひ得べからざるを云はうとするところから、大ざつぱに、概念的に傾く惧もあるが、少しく話してみよう。これも然し、結局內容の意味をはつきりさせる爲だ。

まづすべての經驗Xは、少しの成心もなく、虛心にうけとらるべきだ。入口でへんに形が歪められて了ふやうなことがあつてはならない。原形のまゝで、AならAと云ふ人格の鐵敷(かなしき)の上に載せられたXは心熱によつて燒かれ、勇氣と云ふ力が握り締めてゐる理智の金槌(ハンマア)で、打つて打つて、打ちのめされなければならない。この際、鐵敷がやくざだとか、熱度が低くいとか、力が弱いとか金槌がやわだとか、どこかに一つ故障があつてもならないわけだ。Xからは、火花となつて不純が飛び散る。さうして最後には、影も形もなくなつて了ふ。が、なくなつたのは、Xとしての形で、その精神と云ふかなんと云つたらいゝか、最も肝心な眞髓は、鐵敷のなかに打ち込まれて、量の增加と云ふよりも、質の變化を來たしてゐるのだ。卽、AプラスXではなくて、Aと成り變つてゐるのだ。この、AがAになる、これが創造でなくてなんだらう。その關係は、A乾板の上に、X風景があり、B圓板の上に、Y音樂があるやうなものではないのだ。ABC……それ〳〵世に二つとないもので、それにXが投ぜられると、Aに於てはAとなり、Bに於てはB″となり、Cに於てCはプラスXとなる、と云つた具合で、またそれ〳〵の全く別な創造となつて來る。

その有機的な變化が、藝術とか、或は自己表現の欲望とか云ふものになる。そして、文藝の場合ならば、これを文字に移す。決してXやYを表現しようと云ふものではない、XやYによつて變質されたA′やA″を表現するのだ。勿論そこには、X子の境遇や、Y事件が描きだされるとしても、それはAをほかにして存在するX子でも、Y事件でもない。A鐵敷の血や肉として、X子の精神もあれば、Y事件の眞髓も含まれてゐる。から云ふ關係でこそ、擧めて藝術の內容となり、「創作」であり得るのだ。AプラスXの關係に於て、AがXを寫しても、Xそれ自身に價値があつたり、一應ヴイヴイツ

ドに描かれてゐるからと云つて感心するやうでは、藝術のことが本當に解つてゐるのではない。たかぐ〜楠氏訣別の圖だからこの繪はいゝ、など云ふ連中に毛の生えた程度のものだ。

但し論者があつて、成程他藝術にあつてはそれでよからうが、文藝に限つては、もつと智的は要素がかゝつてゐるものだから、內容の範圍も人格とか、靈とか云ふやうな漠としたものでなく、第一に題材の如何を考慮しなければなるまいと云ふやうな說をたてるのならば、私は答よう、――それは君の勝手だが、私はさう云ふ小說なり戲曲なりを藝術とは呼ばないだけの話だ、これは藝術以外の小說だ戲曲だと云つてやる。仕事なら、無理にはそれを藝術の立場から云々しはしない。それには然し、初から非藝術作家として立つて貰はなければならない、と。トルストイやドストイエフスキイの偉大は、彼等の筆が大きな問題、復雜な事件に觸れたからではない。彼等の靈がさう云ふものによつて擣き鍊えられ、偉大な叡智を輝かした點にある。どんな立派な經驗をしたところで、それが作者の裏で、粉みぢんにされ、血となり肉となり靈となつた上で、その血なり肉なり魂なりによつて描かれゝばこそ有難いので、立派な經驗を、たゞそのまゝ人に解るやうに書いた、と云ふくらゐのものなら、歷史や新聞記事にも、のべつに大文藝が轉がつてゐる。

文藝の內容は、有ゆる經驗だ。たゞ經驗ＸＹＺ……そのまゝではなくて、Ａを滲透した、新しいX'ＹＺ……でなければならない。この意味で、抑々文藝作品に絡(まつは)るモデル問題ほど、馬鹿げきつたものはない。例へば、Ｘ子と云ふ實在の女をモデルとしても、それが眞の藝術品ならば、作中のＸ子は、作者Ａの鐵敷に打ち込まれた何百何千の女の心がいろ〳〵に働き動いてゐるところの全く新しい存在である筈だ。それに對してとやかう云ふ「モデルにされたと思ふ女」は云ふまでもないとだし、若のその愚痴や反對や抗議をとりあげて、いろ〳〵答辯する樣ならば、作者の足もとも甚あぶなつかしいと云はなければならない。眞の藝術ならば、そこには、どんな人物でも、どんな事件でも、どんな場(シイン)でも、作者の創造でないものは、一つだつてあり得やうわけがないのだ。若しモデルの不服にあつてたぢろくやうならば、その作者は、藝術の代りに、寫眞を撮つてゐたのに違ひない。云ひ換へればＡプラスＸ關係の、生な作品を公にしてゐたのだらう。

生(なま)が生でないか、それが肝心なことだ。思想を取り扱ふからいけない、と云ふのではない、主題(テエマ)を持ち出したから惡い

と云ふのではない、要は、それがA′プラスX關係の生であるか、或はAと云つてもよしX′と云つてもいゝが、兎に角或る全く新しい存在になつてゐるかどうかの點によつて決するのだ。澤山觀て、澤山忘れて、それからでなければほんとのいゝ繪は描けない、と云つたミレーの言葉の意もそこだ。「觀る」と云ふことは肝心だ。然しそれの次に「忘れる」と云ふ言葉が來てゐるところに面白味がある。Xは必要だ、然しXをそのまゝで置いてはいけない。「忘れ」て了へと云つたのだ。勿論「忘れ」るとは、言葉通りの「忘却」ではない。忘れたやうに、Xの原形を粉砕して了ふことだ。私の言葉で云へば、か鐵敷に打ち込んで了ふことだ。また、南畫の方に「背寫」と云ふ言葉があるさうだが、それも同じ意だらう。背いて寫すのだ眼からはいつたXを、肚の底まで呑みくだし、X′にして置いて、それから眼を内に向けて、肚の底のX′を寫生せよ。すなはち描かうとするものに面を向けずに、背を向けて描け、と云ふのだ。

最後に要言すれば、藝術の内容とは、その原形の名に於て呼ぶならば、あらゆる宇宙の森羅萬象だし、表現された形に就て看るならば、すなはち作者の靈である。

この調子で內容を說いてゐては、いつまでも切りがなさゝうだから、ひとまづこゝらでこの章を打ち切ることにして、續出の章で事これに觸れることに、補助的の說明を加へて行くことにしようと思ふ。

モスクバに於ける片山潜

紐育在　湖新三郎

珍らしく冷々とする靜かな晩だつた、私は、偶然の機會から最近英斯科から歸つた、米國の新聞記者である一人の青年に會つた。濃く太い眉をもつ、青年の口から靜かに辷り出る勞農露國最近の情況は、ひどく私の心を惹いた、そして、話が偶々片山潜氏のことに及むだ時一種の感慨なきを得なかつた、――が、私はいま、それ等の勞農露國の實情を語らうとするのではない、たゞ青年の殘して行つた話の中、何とはなしに、私の頭の裡から消し難い感じのする、セン・カタヤマ氏の物語について記そうとするのである。

* * * * * * * * *

そうです――ちようど片山さんが莫斯科についたのは、昨年の十二月全露ソヴイエツト大會の開かれる少し前でした。それは大へんな勢でした、莫斯科のステーションには赤衞軍は勿論各組合團體の連中で一ぱいでした、人波にもまれながら、慌しそうに握手攻めに會ふ片山さんを見た時何んとも云へん氣がしました。ソヴイエツトではその日の狀況をエハガキにして配つた位でした。それからすぐ、その月の終り即ち一九二一年の暮に全露ソヴイエツト大會が開かれましたが、その席上でカリニンが演壇に立つて片山氏を勞農國の國賓として歡迎すると云ふ演說をやつたのです。スルト場内は總立ちでフレー〳〵で三十分間も大騷ぎの歡迎をやりました、その後で片山さんが約十五分間の英語演說をやり、それをコロンタイの美しい口で通譯しましたが、實際その時の片山さんのの氣持ちはどうだつたらうと思はれます、迫害と窮乏とのドン底ばかりを忍むで來た過去を振返つたら、胸中無量の感に迫られたでせう、殊に女兒を抱いての、永い米國の迫害放浪の生活を追想したら、その餘りに急激な運命の變轉を想はずにはゐられなかつたでせう。

最近の片山さん!勿論色々な方面に關係してゐます、先づ第一にモスクワソヴイエツトの名譽評議員(今年の二月の選擧)に上げられてゐます、名譽評議員ですか、それは全體で四人切りです、而も他の三人――ペンギツロウ(米國)ジム・ラーキン(アイルランド)もう一人フランスの水夫で名前を忘れましたが共に夫々米國と佛蘭西との監獄にゐるので、事實上は片山さん一人の譯です、而し、ソヴイエツトのことですから、物質上の特權は何もありません、只一つ電車に乘る時に、他の人は後から乘るのですが、片山さん丈けは前から乘れるのです(モスコウの電車は二臺續いた電車です)でも片山さんは一度だつて前からなど乘つたことはないでしよう、矢張皆んなと一所に乘ります、が、一ツ面白いのは名譽評議員のパスです、それは貧弱な二ツ折の、表には勞農露國の象徵であるカマとクワとが畫かれた、ちやうど鐵道の乘

車劵の少し大きい位のものです、内側には片山さんの履歴である、一、職業、コック、一、位置、インテレゲンチュア、一、生レ、農夫、一、敎育、大學卒業一、人種、日本、一、現地位、第三共産黨同盟執行委員一、年齡、安政三年、(勿論西曆になつてゐます)、一、勞働運動開始、一八九八年、一、社會主義運動開始一八九八年、一、投獄、一回、一、撿索、一九二〇年以後、一、選擧團、モスクワ勞働組合、となつてゐるのです學校ですか、それは米國の大學です。生れが一八五六年ですから一寸面白いですね。

お存じか知りませんが、モスクワ郊外に有名な露國革命の發祥地として有名な、チベルと云ふ所があります、そこに赤衞軍と云ふのがありますが片山さんはそこの名譽學生と云ふのにもなつてゐます、これもソビエット全體で二人きりです、今一人は第三インタナショナルの總幹事をしてる優名なイーパラインです、一般の學生は勿論無產階級の中から有秀な人を選擇して入學させるのです、學校は之等の學生によつて支配されてゐます、尤も、敎授は多くブルヂョア出の人達です。そして、もう一つ、全露赤衞軍の名譽兵卒と云ふのにもなつてゐます、これも佛蘭西のラポポー――殺されたレーニンの實況との古くからの親友であり、同志であつた人で、六十歳位でしよう――との二人です、六十幾つかの老人二人が共に、名譽兵卒ですから、一寸と振つてゐます、赤衞軍の御大トロツキーに會つたら、二人の老名譽兵卒は、直立擧手の禮をやるのです。



最近の片山潜氏

トロツキーで想ひ出しましたが、今年の五月一日のメーデーの日でしたその日はちやうど五十萬人からの行列參加者があつて勞農露國初まつて以來の大行列でしたが、トロツキーは彼の威風堂々たる巨軀を、クリムリン宮外の赤色街に現し高い赤衞軍閱兵臺の上に八時間も突立つて、聲をカラして行列を指揮してゐました、丁度そこへ參加行列の最後である、第三インタナショナルの幹部組が通り過ぎようとする時、彼は突然その高い指揮臺の上から飛び下りるなり、人波をカキ分け、イキなり、短軀肥大の一日本人を抱きしめ强いキスを與へました、一日本人とは誰れあらう、勿論、片山潜氏その人です、人々はドット歡呼の聲を振つて、この突然のキスを祝福しました、彼が如何に片山氏を尊敬してゐるか

は、この一事でも判りましよう。實際彼は、どんな場合でも片山氏の姿を見出すと、必ずツカ〳〵とやつて來て、握手するのです。彼は常に片山さんを先輩として遇してゐます、而も面白いのは片山さんの態度ですそれ丈けに尊敬され、待遇されてゐながらも、片山さん自身には、レニンであらうが、トロツキーであらうが、全くの無智の百性であらうが、その態度に、寸毫の變りのないことです、だから露西亞人は、どんな田舎に行つても、センカタヤマを知らないものはありません、曾て、それは確か昨年だつたと記憶してゐます、共産黨の一日本青年（當時莫斯科にゐました）が、或田舎（勿論露西亞の）に行つて、同志と共に演説をした事があります、その時講演の司會者が最後に立つて、次のようなことを云つたと云ふ有名な話があります、……振返つて見ると、今から約十五年前、未だロシヤの革命運動が極めて貧弱だつた



勞農ロシア陸軍大學名譽學生の姿の片山氏

一九〇五年、即ちアムステルダムの大會の際、吾々は漸く、海外にゐたプレカノフを賴むで大會を開き得たその時、セン・カタヤマが吾々の大會に如何に力を盡したかを記憶しないものはあるまい、僅か十五年前、漸く海外に居たプレカノフと、日本人であるセン・カタヤマに依つてロシヤの民衆を代表して開き得た、アムステルダムの大會を想ふ時實に感慨無量である吾々は十五年前の昔を振返つて、セン・カタヤマに捧げる感謝を、此の一日本青年に捧ぐるの光榮を喜ぶ……と。だから、彼等は吾々の、センカタヤマと云つてゐるのです。

話は少し違つて來ますが、私が曾つて在米の一日本青年から數年前に聞いた話しですが、――その青年と片山さんとの議論が偶々日本の社會運動の上に移り青年が堺利彦さんの立場や思想の傾向に非難を向けた時、片山さんは、それを制して云つたと云ふことです、

……勿論、自分は堺君とは主義の相違で一旦分かれた、そして自分は千葉の監獄に入つたことがある、その時のことだつた、堺君は敦あつた同志すら及ばない親切を盡つて分かれた自分の上に注いでくれた、出獄して見ると自分の家族は、自分が世間にゐる時よりも、却つて幸福に暮してゐた、自分はその時、ほんとうの堺君を見たように思つた、——矢張り、將來の社會運動に、重きをなす人ではなからうか、……と云つて、泌々とされたと云ふことです、そして、今でも堺氏に對しては、友人以上の禮を以てされてゐるとのことです、こんなところが、好く片山さんの一面を現はしてゐるのではないでしようか。世間では共産主義者と云へば、血も涙もないものゝように考へてゐる人が多いようですが、事實は却つて反對ではないでしようか。殊に片山さんの性格位、血と涙に充ちたものは少ないでしよう。永い放浪迫害の悲慘な生活の裡に、どんなに子供のことばかりを考へられたかを知つてゐるものには、何とも云へぬ感がします、現在でも、時折り、風の便りに祖國に殘した女兒の安否を知り得た時、嬉しさにぢつとしてゐられないで、夜でも、夜中でも同志の日本青年を訪ねて、喜びを語られるとのことです。志を祖國の外に見出した片山さんも、その夢は兎角故國の女兒の上に飛び勝ちのことでしよう。

つい、話が外れましたが、片山さんは今云つたような性格ですからモスコウでも、ソヴイエツト政府の信用と尊敬は勿論ですが、一般の勞働者の信望は非常なものです、だから、若し一國の政治家に例へた大臣の器でなくて、寧ろ上に据へる大統領の器だと云つた方が適當でしよう。本年二月の極東大會でも非常な人氣でした、大會ではレーンと片山さんの像を表したメタルを作つて皆んなに配りました。アノ素朴温顔の片山さんのメタルを皆んな胸につけてゐました。日本の雑誌「改造」に自分の顔が出たのを見た時、おゝ俺の顔が出てゐると云つてニコ〱されたさうです、實際今の片山さんの顔はアノ木版畫よりは、ズツト若く見えます、一九二一年の一月元旦早々、時の米國政府が猛烈な共産黨撲滅運動を開始した時、その總入歯をとり、眼鏡を外して、スゴ〱と變裝の姿を紐育の停車場へ急いだ時の片山さんの顔と得意の絶頂にある片山さんの顔とでは、少くとも二十年位は違ひがあると云はれてゐます

いま、片山さんは、若い秘書官エルセ嬢(十八才です)を傍に置いて、毎日セツセとタイプライターを打つてゐます、約一年前位からやつてゐるので、もう本もののタイピストになりました、そして、毎日一生懸命に露西亞語の勉強をしてゐます、僅か一年餘り前の片山さんといまの片山さんとを思ひ浮べる時、云ひ知れぬ、大きな運命の動きを想はずにはゐられません——

* * * * * * * * * * *

語り了つて、青年は大きな息を吐いた、私も思はずホツト吐息した。もう餘程夜は更けてゐた、彼は最後に、二葉の寫眞を私に與れると、左様ならと云つたきり、默々として彼の下宿へ急いだ。(一九二二、八、)

心臓の旗印

或る應戰狀

佐藤春夫

「この手紙は恥を與へるのが目的だ」つて!?
いくら君の方に有り餘るからと言つて
そんな貴重な贈り物を
君から貰つたのじやもつたいないね。
折角だが、
君からの分配がなくとも、恥が
僕に必要なら僕は自辨にしたいものだ。
反省に忙しい筈の君が

僕の恥まで案出してくれるのぢや
何と御禮を申し上げよう？

君と僕と、なるほど
「神の目からは同じ」かも知れぬさ。
恐らくは、
獸の目からも同じだらう。
だが！
人間の(！)　人間の目からは違ふ
尠くとも
おれの目からは違ふ！

「五十步百步だ」と？
その五十步と百步とをこそ
人間は爭ふのだ

君が五十歩か？
おれが五十歩か？
神には神の正義もあらう。
同じく！
人間には人間の正義がある。

神でもないのに神の正義はよせ！

おれは石竹色の心臓を旗印にする
さあ　來い
まづ
人間の正義で戰はう！
神の正義は神にお任せしよう。
だが、おれは敢て拒まぬ──
君は今までどほり、

時にはニヒリストのタンク
時には言ひがかりのダムダム彈
突嗟の思ひつきの築城術
白つぱくれと三段論法との惡魔からの傭兵
突然　神の正義の航空隊
君の武器　君の味方は君の自由だ。

さうしておれは知つてゐる
君こそ必勝の戰士だ！
そこで聞くがね、　君——必勝の戰士、
神や惡魔とは隣人らしくもある君は、
けちな人間の良心といふ奴に
（尤もそんな兄弟はひどく足手まといだが）
そいつに、　君は今までに
どこかの拔裏ででも逢つて挨拶したことがあるか？

女を得るには愛の少いのがいい
高をくくつてだます事も出來るからね、
論爭には良心と近づきのないのがいい
うつかり同士打の亂戰はない
かくて勝利者なる君が、ひとり居る夕方
負けたる者よりも心が空虚でなかつたら
或はその空虚の心が平氣だつたら、
「おお超人よ」かう叫んで、その時こそ
おれは君のまへにひれ伏す。

その日まで　いつまででも
おれは君と對戰しよう
忍辱の塹壕のなかに！
さうしておれの戰將はたゞ一つ、沈默。

ダゞ詩三ツ

高橋新吉

ツンボ

蝸牛は外聴道を歩るいてゐた。
　鼓膜の中から誰か出て來た。
去年亡くなつた筈の蚯蚓だつた。
　前庭へヒツコンで了つた。
遇ふのが恥(はづか)しかつたんだろう

拙者は生(うま)れた事もなければ
太陽舐(ネブ)つた事もない。

メクラ

寄

眞黒（マックロ）
大根（ダイコン）、暗い
汚れた手、淫亂を生む牛蒡
　刺身のツマにやならぬ　死詩
　舐塵　眠る人
活動のヘネ
　凭木の銹釘女の太股
閲ぎ合ふ情慾　穴のあいた手套
　片つぼ落した。
埋沒々々々々々
々々郊電車々々
　々々々々
氷（コホリ）の如き火の地底
　白い白い白い・

それは白い
白いものはそれだけ
そしてそれだけが白い。

うるんだ鰯のやうな目
突き刺(さ)して
焼くべい。
空。

オシ

齒　齒
顎　顎
鴨居　閾
踵吸つて舌焼くな
汁粉は上に飛び跳ねる
たばこのダンス
鼻背が抜けた
頭を打ち割れ●

裁判官をやめた男の話

澤田撫松

一

札幌の親戚へ行つた序に、白石から輕便鐵道で定山溪へ行つて見た。札幌から白石までが十八分、白石から定山溪までが一時間と四十分かゝるから、札幌から、定山溪へ行くには、汽車に乘つて居る間がざつと二時間だが、白石で待合す時間を入れると、二時半もかゝつたであらう。晝飯を食つてから札幌をたつた私が、定山溪へ着いた時は、まだ陽が照つて居るのに、夕暮れの樣な冷たい風が吹いて居た。昨年の八月上旬、北海道を歩いた時、北海道の夏は涼しいと思つて、毛メリヤスや、セルの單物を鞄に入れて居た。それが北海道へ來て見ると、矢張り暑いので、毛メリヤスもセルの單物も、遂に用を爲さなかつたそれに懲りて、今年はさうした仕度なしで出發した、尤も今年は、昨年とは二十日ばかり遲れて居るから、どうかと言ふ懸念がないではなかつたけれど、九月になるには四五日間があるし東京は暑い最中であつたら、毛メリヤスやセルの樣な物は何も持たずに出た。それがどうだらう、札幌へ着いて見ると、昨年とえらい違いだ。札幌の人は袷を着て居た。

『札幌では、八月の十六日を盂蘭盆にして居ますが、盆前は矢張り暑いです。東京の暑さとちつとも變りません。それが盆すぎになりますと、忽ち秋風が吹いて、こんなに涼しいのです』

親戚の者はかう言つて、北海道の眞夏は一ケ月ぐらゐしかないと言ふ樣な話をして居た。昨年荷物で失敗した私は、今年も亦荷物で失敗して、メリヤスやセルの單物を親戚で借らねばならなかつたかうして借物のセルを着て居たが、定山溪へ着くと、それでも寒い樣な氣がしたから、早く宿へ着いて、熱い湯の中へ入りたいと思つた。汽車が定山溪へ着いて、停車場を出ると其所には印半纏を着た宿屋の番頭が幾人も立つて居た。『高山』と襟に書いた印半纏を着た男が、昨年來た時の顏馴染であつた

から、その男に鞄を渡した。

『明治の初年、岩村通俊が開拓判官であつた時、定山と言ふ修驗者が、山岳を踏破して札幌へやつて來た。そして、豐平川の上流、眞駒内(まこまない)を距る六里の溪谷に溫泉の涌出て居ることを岩村に語つた。すると岩村は定山を案內人として實地探査に行つたところ、定山の言つた通り、麋鹿が瘡痍を癒して居たから、其所に浴場を建て、定山にこれを守らして置いた。それでこの溫泉場を定山溪と言ふのだ』

かうした意味の話も、昨年この番頭から聞かされたのだ。番頭は、鞄を持つて、私と並んで歩いた。

『昨年は、暑い最中においでになりましたから、川の水に冷めたかつたのですが、今年はだいぶ涼しくなつて居りますから、水は餘ほど溫くなつて居ります。これで冬になつて、雪でも降る樣になりますと、川の水は全くお湯になりましたので寒さ凌ぎに村の者は川へ飛込みます。川からあがつて來ますと軀が溫まつて、そりやいゝ氣持ですよ』

番頭は、溪谷を流るゝ谷川が、夏は冷めたく、冬は湯になることを語つて居た。かうした谷川に、魚が死なずに、年々成長して行くのが不思議だと言つて居た、番頭　話をしながら歩いて居る中に、高山旅館の前まで來たが、旅館へ入るには、溪谷に架つた橋を渡らねばならぬ。ところがその橋は針金で釣つて釣橋であつたから、二人一緒に渡るのがあぶないので、一人〳〵渡つた。建物は古いが、居心地のよい溫泉宿で、昨年泊つた座敷へ通されたのが嬉しかつた。セルの單物で寒かつたから、座敷がきまると直ぐ湯に入つた。二階から降りて、右手の浴室へ入ると、暗い空氣が軀を包むだ。浴槽には誰も入つて居なかつたから、湯に入ると、軀を浮かして見たり、泳いで見たり、好きなことをやつて居た。然し浴槽獨占は長く續けて居ることが出來なかつた。暫くすると浴槽へ一人の客が入つて來た。近視眼の私が眼鏡をはづして居たのと、湯氣がたつて居たのとで、新來の客の顏がはつきり見えなかつたのに、

『澤田君じやないか』

と聲をかけられたので、傍へ寄つて顏を見ると、久しく逢はなかつた同窓のN君であつた。N君が北海道で判事をして居ると言ふことは校友名簿で承知して居たが、別に用事もないので逢ふ機會も作らなかつた、昨年來た時も忙しい旅であつたので逢はずに歸へつた。そのN君に偶然湯の中で逢つたのだ、

二

湯からあがると、私はN君を連れて自分の座敷へ戻つて來た

座敷の障子が開け放してあつて、縁側へ出ると、夏は水で冬は湯になると言ふ薄別川の流れが、眼下に見えるのであつた。

「御食事は、こちらで御一緒になさいますか」

若い女中が、N君の傍に片手をついて、その返辭を待つて居た。N君は私に氣をかねて。返辭を躊躇して居たから、

『こゝで一緒にやらうじやないか』

私はかうしたことを言つて、女中にビールを持つて來ることを命じた。

『お役人と言ふ者は氣樂だね、暑中休暇中はまるで遊びだから』

私が判事生活の氣樂なことを羨しさうに言ふと、

『僕はもう判事をやめたんだよ、紫が白になつて、今では辯護士さ』

N君は濡手拭で額の汗を拭いて居た。學校に居た時分から、俺は裁判官になる、辯護士は嫌いだと言つて居たN君が、希望通り裁判官となつてなか〳〵羽振りがよかつたのに、どうして又辭職したのか、私はそれが不思議でならなかつた。

『どうしてやめたんだ』

かうした質問を私がした時、女中が膳部を此所へ運んで來た二人の前に膳が並ぶと、水をきつたコップに、冷したビールを女中が注いでくれた。氣候は涼しくなつて居ても、湯あがりに飲むには冷めたいビールがうまかつた

『お話しのお相手が出來てよろしうございますね』

女中はビールを注ぎながらN君に話しかけて居た。N君は長逗留の客らしい。

『どうして判事をやめたかと云ふのかね』

N君は女中の話には應じないで 私の方へ話頭を向けた。

『そりや君ばかりじやない。誰でも、僕が判事の職を去つたことを意外に思つて居るよ。實際僕自身でも意外なんだもの』

N君の話が妙なので、判事をやめた理由と言ふものを一層聞きたくなつたから、

『何か壓迫でもされて、それを憤慨でもしてやめたのかい』

と、一寸油をかけて見た。

『司法官は獨立じやないが、壓迫なんかあつてたまるもんか それに僕の樣な、正直で、勤勉で、熱心な人間に誰が、壓迫なんかするもんか。僕が判事をやめた理由は、そんな淺薄な外面的な事柄じやないのだよ、何と言つてよいかなあ、僕の心の惱みとでも言ふかなあ、イヤ、一口に言へば判事と言ふ職務がこわくなつたのだ。司直の府に在つて人間をさばくと言ふことが恐しくなつたのだ』

N君は女中の注いだビールを飲み干すと、息をついだ。話が跡切れたので、

『美人でも死刑にしたんじやないか、そして一念發心と言ふのならお安くないね』

私はかうした半疊を入れた。

『さう行けば直ぐ君の材料だが、生憎と僕にはさう言ふ艶ぽいものがぶつ附かつて來ないよ。尤も僕の問題だつて君に話せば書くだらうがね』

N君は私の方を向いて笑つて居たが、直ぐ話を續けた。

『僕が判事をやめたほんとうの理由は、女房の外には誰にも話をしたことがないのだ。と言ふのは、僕の心事を理解しない人には、僕の心持が分らないからね、とんでもない誤解でもされてはいやだから、それで誰にも言はなかつたのだ。けれども、君なら僕の心持も知つて居てくれるであらうから、話をしても別條はなさ相だ』

N君はからになつたコップを取りあげて、女中にビールを注がして居た。

三

女中の注いだビールを飲むと、N君はコップをいぢりながら話を續けた。

「豫審から貰子殺しの事件が僕の方へ廻つて來たのだ。被告は坂口儀作と言ふ小樽宣教師で、六十四歳の老人だから、見たところ人を殺せる様な悪人と思はれないのだ。ところが、證據の擧つて居るのには驚いたね。尤もこの事件は警察が餘ほど骨を折つたものらしい。事件の發端から言ふと、かうなんだ。被告には五人の子があつたのだが、ちへから〳〵死んで行つて、一番したの娘だけが殘つたので、その娘を杖とも柱とも思つて育てゝ行く中に、娘が十五になつた春、被告の女房が死んでしまつたので、それからは男の手一つで娘を育てゝ行つたのだ。娘の名は澄子と言つて、なか〳〵美しい娘であつたから、澄子が娘盛りになると、あちこちから嫁に貰ひたいと言つて來るのであつたが、一人娘のことだから嫁にはやれないと言つて斷つて居た。すると、被告の友達で、矢張り宣教師をして居る谷口豐三と言ふ人の次男の嫁にほしいと言つて來た。然し、嫁にはどうしてもやれない娘であつたから、毎の口調で斷りを言ふと、それなら養子にやつてもよいと言つて來た。かうなると無下にも斷れないので、一應娘の思惑を聞いた上でと言ふことになつたが、相手の子息と言ふのが米國に居るのだから、澄子にしては返事のしやうがなか

つた　相手を知つて居ればよいとか悪いとの返事も出來るが逢つたこともない男を、夫にするともせぬとも、きつぱりした返事をすることが出來なかつたから、どちらとも附かない曖昧な返事をして置いた。被告にして見ると、友達の子息で米國へでも行つて居る位であれば、見込のない男でもなからう、それが養子に來てくれると言ふのなら、こんな仕合せなことはない。娘がいやだと言ふのなら仕方がないが、まんざら嫌つても居ない様子なら、養子に貰つてもよいと思つて居た。然し、そこは注意深い被告であつたから、先方へは養子に貰ふとはつきりした返事はして置かなかつたが、自分の腹の中では、相手の男が歸へつて來たら、養子にしてもよいと思つて居たのだ』

N君は話を切つて息をついだが、私が熱心に聞いて居るので直ぐ話のあとをつけた。

『事件はこれからなんだ。澄子が十九になつた春頃から、被告の家へ日曜毎に説教を聞きに來る瀧本春雄と言ふ青年があつた。春雄は東京の者で、父親は銀行員で相當の暮しをして居たのだが、春雄の三歳の時に女房が死んだもんだから、後妻を貰つて、後妻の手で春雄を育てさした。後妻になつた女は別に悪い女ではなかつたのだけれど、自分の子が出來てからは前妻の子の春雄を粗末にする様になつた。かうなると春雄の方でも氣が僻むで、性質は拗ける一方であつた。かうした家庭で成長した春雄は、疑い深い、僻み根性の、意地の悪い人間になつたのだ。けれども、春雄は生れながらにして眉目秀麗、貴公子の様な容貌の持主であるのと、涙もろい女の様な性質であるのとで、悪い根性は餘り人に知られなかつた。然し、家庭に於ける春雄は、繼母の言ふことは何事に依らず反抗し、繼母から受けた侮蔑虐待に對しては、事毎に復讐を企てると言ふ、頗る危險な人物であつたから、繼母と春雄との衝突は毎日の様に繰返へされて居た。春雄が子供の時分には春雄の肩を持つてくれた父親も、春雄が青年になつたのと、後妻の腹に生れた清子と言ふ娘が可愛ゆくなつたのとで、春雄と繼母とが喧嘩をする場合には、毎も春雄を叱りつけて居たから、春雄は父親をも怨む様になつて居た、家の中がこんなふうになると、春雄も親の家に居るのが面白くないので、春雄が二十一の年、親の金三百圓を持ち出して家出をしたのだ。親の家を出た春雄は北海道へ出て、函館に身を落ちつけたが、三百圓の金はぢき無くなつたので、働かねばならなくなつたもんだから、郵便局の雇になつたり、會社の事務員になつたりして、あちこち渡り歩いて居る中に小樽まで流れて來

たのだ、根が小利口な男のうへ、中學を卒業して居つたので小樽へ來ると小學校の敎員となつたが、被告の近所に下宿して居る關係から、日曜毎に被告の家へ說敎を聞きに來て居たのだ、東京者で男振りのよい春雄は、被告の家へ集まつて來る女信者の眼につかずに居る筈がない。若い女の信者が、春雄に接近しやうと努めて居ることが誰の眼にも見えた。澄子は、初の間は春雄に對し何の感じも持つて居なかつた。自分は宣敎師の娘であると言ふ責任感と、父の友人の子息で米國に居た男との緣談が未解決であることゝが、澄子の道念を堅くして居たのだ、ところが女と言ふ者は妙なもので、自分が何とも思つて居ない男でも、自分の眼の前でほかの女が大騷ぎをして、一人の男を幾人もの女が取合ひをして居るのを見せつけられると、じつとして居られない氣持になるらしいね男が自分の家へ來る信者であるだけ、それを外の女に自由にされると言ふことが、自分の尊嚴を傷つけられる樣な氣がしたので、澄子は自分の地位も米國の男のことも忘れて、我から進むで春雄に接近したのだ。信者の女連とはてんで比べものにならない美しい澄子に接近された春雄は、まるで乙姫さんに抱きつかれた浦嶋の樣に、身も心も澄子に捧げてしまつたのだ。初めは輕い嫉妬と同姓に對する反抗心に驅られて春雄に接近した澄子も、春雄から熱烈な愛情を浴びせられるとそこは初心な生娘だけあつて、恥も外聞も忘れ、春雄に血道をあげて居たのだよ。女と言ふものはのろいもんだね』

かう言つてN君は、ビールの酌をして居る、若い女中の顏を眺めた。

『マア』

と言つて、下を向いた女中は、まるで自分の噂でもされて居る樣に、薄化粧をした頰を赧くして居た。

四

一寸女中にからかつて見たN君は、私が眞面目に聞いて居るので話のあとを續けねばならなかつた。

『澄子と春雄の關係は、無論信者仲間の問題となつたさ。殊に春雄を張つて居た女中達はくやしまぎれに騷ぎ立て居るのだから堪らない。とう／＼、新聞にまで書かれたので、被告は牧師の面目を滅茶々々にされた。それで腹を立てゝ居るところへ春雄が澄子を嫁にくれと、自分で直接申込むで來たのだから堪忍強い被告も我慢が出來なくなつたと見え、春雄を散々に罵倒して、貴樣の樣な人面獸心の奴に、大切な娘はやる譯に行かぬと、手强どく拒絕した。そして、澄子を一室へ閉ぢ込め

嚴しい折檻をしたので澄子の啜泣きが隣の家にまで聞えたさうだ。翌晩になると、被告の家の裏手にある土穴で人の呻き聲が聞えた、それは兩隣の家の者が確かに聞いたのだ。さうした事實のあつた翌日から澄子の聲が聞えなくなつたから、どうしたのかと近所の者が不思議がつて居ると、それ切り澄子の姿が見えないので、變だと言ふ噂が高くなつた。かうなると警察署の方でも捨てゝ置く譯に行かぬから、被告を呼び出して、澄子はどうしたかと言ふことを糺すと、不埒な娘だから折檻して居ると、寢て居る間に逃げ出して、行方が知れないと言ふ答であつた。それで一先づ歸宅を許して置いたが、あれは父親が殺したのに違ひないと言ふ近所の噂が高かつたので、警察では再び被告に眼をつけた、そして刑事をして探らして見ると、澄子が居なくなつた前の晩に、被告の家の裏手にある土穴の中で呻き聲のしたのがどうもおかしいと言ふので、刑事の一人が穴の中へ入つて調べて見ると、穴は二疊敷ほどの廣さで、深さが五尺ほどある。底は石ころばかりで、中には何もなかつた。けれども老練な刑事は、懷中電燈で暗い所を照しながら、石ころを一個々々調べて廻つた。すると、隅の方に赤い物が見えるので、引き出して見ると、それは縮緬の女の腰帶であつた。所々斑點のあるのは血液らしい。有力なる證據物件を手に入れた刑事は、それを持つて警察署へ歸つて來ると、署長に見せて警察醫に腰帶の斑點を鑑定さした。鑑定の結果は正しく人間の生血と言ふことに決定したから、被告は再び警察署へ呼び出され、一應取調べの上檢事局へ廻された。檢事は無論起訴したさ。豫審の調べでは、被告が澄子に春雄のことを斷念さそうと思つて、嚴しい折檻をしたが、澄子がどうしても春雄のことを思ひ切らうと言はないのに業を煮やし、裏の穴へ連れ込んで又々折檻をしたところ、餘りに烈しく打擲した爲め、皮膚が破れて血が出たばかりでなく、とう〳〵息が絶えてしまつたので、死骸を海へ棄てたと言ふのだ。これに警察署に於ける聽取書と檢事廷に於ける訊問調書に基いて、豫審判事が殺人罪として有罪の決定を與へ、事件を公判判事たる僕のところへ廻して來た豫審終結決定書に書いてあるのだ』

N君もあんまり喋べつて草臥れたと見えて、ビールを飲むだり膳の上のものを食つたりして居たが、

『それからどうした』

と私が話のあとを促したので、N君は又話を續けた。

『僕の手に移つて、愈々公判となると、被告は犯罪の事實を全然否認した。自分は宣教師だ。人に道を說く地位に居る者だ

而かも親一人子一人の娘を何で殺すものか。嚴しい折檻をしたのは、娘が可愛いからだ。娘の將來を思ふからだと言つて眼に涙を溜めて居た。その樣子がどうも僞りとは思はれないので、僕も一寸迷つたがね。調書を調べて見ると、春雄から結婚を申込まれた時、非常に怒つて、春雄を罵倒したばかりでなく、澄子を打擲したこと、一室へ閉ぢ込めたこと、裏の土穴の中で呻き聲のしたこと、その翌日より澄子の居なくなつたことが、被告の犯人たることを充分に證明して居るので被告犯人に非ずとはどうしても認められなかつた。それで審理を進めて行くと、春雄から結婚の申込を受けた時、一時の怒りに任して澄子を打擲したこと、澄子を一室へ閉ぢ込めて折檻したこと、土穴の中にあつた女の腰帶が澄子のものであることは被告も認めて居るが、土穴の中で澄子を殺害したこと、その死體を海へ投棄したことは、どこまでも否認して居たのだ。尤も被告の多くは事實を否認するからね、被告が事實を否認したから犯人は被告に非ずとは言へないのだ。その爲めに證據に依つて裁判をするのだ。證據さへ備はれば、いかに被告が事實を否認しても有罪の判決を下すのだからね、被告の否認はたいして氣にとめなかつたさ。只問題は、被告が實子殺しの犯人であるや否やの證據の有無だ。調書に載つて居る、澄子を打擲したこと、一室へ監禁したこと、土穴の中にあつた血痕附着の腰帶が澄子のものであることの三點だけは被告の認めるところとなつて居るので、被告を有罪と斷定するには、死體をいかに處分したかと言ふ點を明にすればよいのだ。死體を處分した證據さへ明確になれば、被告が何と言つて事實を否認しても、犯人は被告にきまるのだ。その死體處分の調べに移ると、調書には西村新造、上田兼三郎と言ふ二人の漁夫が澄子の居なくなつた晩、濱邊で被告の姿を見たから、被告は死體を海へ投棄したのだと言ふことになつて居る。然し、これだけは有力な證據とは言へないから、西村上田の兩人を職權を以て公判廷へ證人として呼び出した。二人の陳述を聽くと、日は忘れたが、嵐のあつた翌晩、夜十二時過ぎに、二人が海の模樣を見に出ると、浪打ち際に人間が立つて居るから、身投げでもするのでないかと思つて傍へ寄ると、二人の近づくのを見て驚いて駈け出した。月の光で見ると、それは宣教師の被告であつたと言ふのだ。嵐の吹いた翌晩と言ふのは、澄子の居なくなつた晩に當るのだよ。この事實を被告が初めから認めて居れば、被告の不利益にならなかつたのだが、初めの中はこれを否認して居て、二人が證人として法廷に立つてから、仕方なしに事實を認めたので、被告

に對して最も不利益な證據となつたのだ。被告の辯解に依ると、娘を一室に閉ぢ込めて置いたのに居なくなつたから、身でも投げはしないかと心配でならなかつたので、海へ見に行つて見たが、娘の姿は皆無見えない。かうなると、親一人子一人の娘に見棄てられた自分が餘りに不見目なので、傍に人の居ないのを幸ひに、男泣きに泣いて居た。其所へ思ひがけなく人が出て來たもんだから、我れ知らず逃げ出したのだ。そしてその事をかくして居たのは、不品行をした娘に甘いと思はれるのがいやであつたからだと言ふのだ。被告の辯解も一應は理窟がある樣だが。總ての情況から推測すると、どうしても犯人は被告と見なければならぬのだ。そこで陪席の意見を聽いて見ると、これだけの證據があれば問題にならぬと言つて犯人の被告であることを疑はなかつた。それで僕も被告を有罪にすることに決心したが、次に起る問題は刑の量定であるが、被告が老人であるので、一等を減じて無期にしやうかと言ふ考のないではなかつたけれど、苟も道を說く宣敎師の職に在りながら、骨肉を殺すと言ふことは、全く人情に悖る大罪であつたから、刑事政策の上からも極刑に處すべきだと思つて、被告を死刑にすることにしたのだ』

N君の話がこゝまで進むで來ると、ビールを飲んだり、女中にからかつたりする餘裕は、もうN君に見ることが出來なかつた。

五

緊張したN君は、言葉の調子も嚴そかに、話のあとを語るのであつた。

『君、何が辛いて、死刑の判決をするほど辛いものはないよ、同じ人間が人間に死を與へるのだもの、いゝ氣持のしないのは當然だが、裁判官となつた以上は職務だから、いやでもやらねばならぬのだ。それでね、僕が被告に死刑の宣告をする時は、毎も被害者のことを胸に描くのだ。この被告が、あゝ言ふ慘酷なことをしやがつた。殺された被害者は定めし怨むで居るであらう、可哀さうに、それにつけても憎いのは被告だ。今俺が被告に死刑の宣告を下すのは、被害者の爲めに敵を討つてやるのだ。被害者の爲めに、この憎むべき被告を死刑にするのだと言ふ樣なことを胸の中に繰り返へして、それでやつと不安な心持を落ちつかすのた。この時もさうした心持ちになつて、判決文を讀むのだがね。それも普通の判決だと、先づ被告を懲役何年に處すと、判決の主文を先に讀むでそれから理由を讀みあげるのだが、死刑の判決となると、そ

れを逆に行くのだよ。先づなが〳〵と理由を讀みあげてね。最後に、被告を死刑に處すと言ふが早いか、くるりと後を向いてさつさと法廷を出て行くのだよ。それが、この時は、理由を讀みあげて、例の如く最後に被告を死刑に處すと言渡しをすると、横手の扉を開けて辯護士の事務員が手紙を持つて來て、辯護士に何か耳うちをした。すると、辯護士は、裁判長と、聲高に呼びかけて、被害者澄子が生存いたして居ります通知がまいりましたから、書面を讀みあげますと言つて、事務員が持つて來て手紙を讀みあげたのだ』

N君は女中に、自分の部屋に行つて、折鞄を持つてこいと言ひつけると、女中は廊下をばた〳〵と走つて行つたが、暫らくすると、黒い折鞄を持つて來た。N君はその鞄の中から手紙を取り出して、それを私の前へ置いた。

『僕は判事をやめた記念にするつもりで、辯護士に頼むでその手紙を貰つて置いたのだ、讀むで見たまへ。僕が判事をやめた理由がわかるから』

N君にかう言はれたので、私はその手紙を讀むで見た。

――未だ拜顏の榮を得ず候らへども一書呈上仕り候、拙者は貴殿の辯護さるゝ殺人犯の被告坂口義作氏の娘澄子の配偶者たる瀧本春雄と申す者に有之候、小生は幼少の時より繼母に育てられ候結果、頗る性質の拗けたる者と相成り。恩は常に忘れ勝ちに候らへども、怨は絶對に忘れ申さず。假令睚眥の怨にても之に報ひざれば氣の濟まざる惡癖有之、その事の非なるを心づかざるにあらず候らへども、自己に勝つ力を有せざる弱き小生は、後に後悔いたすことを承知しながら、常にこの惡癖を遂行いたし居り候處、たま〳〵澄子結婚問題起り小生自ら澄子の實父坂口義作氏に面會を求め、滿身の熱誠を披瀝して、結婚の許しを得んことを懇願いたし候處、同氏は無情にも之を斥け候のみならず、口を極めて小生を罵倒いたし候爲め、小生は例の惡癖むら〳〵と起り、澄子を奪ひたる上、同氏に怨を報ひんことを企て、甘言を以て澄子を誘拐し小生友人宅に潜伏せしめ、その夜小生は澄子の腰帶を持ち出し、之に小生の腕の血を注ぎ、それを持つて同氏宅の土穴に忍び込み、終夜呻吟を續け、恰も同氏が澄子を虐待死に致らしめたるが如く裝ひ、血痕附着の腰帶を土穴中に殘し置き、其場を逃走いたし候も、兩人同時に姿を隱し候時は、小生の惡計發覺の虞れ有之候に就き、暫らく澄子一人を隱し置き、小生はわざと小樽に於て就職運動をいたし居り候處、教職に在る身を以て、牧師の娘と私通し、その結果免職となりたる旨、新聞に公表されたる今日となつては、小樽に於ていかに運動爲

すとも就職口のあるべき筈なしと、先輩友人等より詰責的忠告を受けたるを好機に、澄子ゝ連れて青森に走り、更に東京に赴かんと存じ居り候處、偶々澄子熱病に罹り青森の客舎に病を養ふ中、同氏の殺人犯として檢擧されたる旨、新聞にて承知仕り、小生の企が正しく圖に當り、怨を報ゆることを得たるを密に悦び居り候らへども、若しこのこと澄子の知るところと相成り候らはゞ、如何に同人の心配いたすやも圖られずと、一念茲に至れば、心中聊る安からず候故、同人の病中なるを幸ひに、新聞を見せず極力秘密にいたし居り候も、早晩同人に知れる事柄に候らへば、その時の同人の歎きを思ひ候らへば、愛妻の父を斯る冤罪に陷れたる我が罪の恐しく、我れと我が犯せし罪を責めて、懊惱煩悶いたし居り候折柄、同氏の公判期日確定いたし、先生辯護の任に當らるゝ旨新聞に依つて承知仕り、小生の良心は日夜小生を苦しめて措かず。その苦痛に堪へ兼ね候て、茲に一書を拜呈仕り候次第に御座候。既に自己の罪狀を自白いたし候上は、如何なる刑罰をも甘んじて相受け可申決心に就き、只々一日も早く同氏の冤罪を雪ぎ、無事出獄いたす樣、御盡力のほど伏て奉懇願候。

追伸、此狀先生の御手に入る頃を計り小生は青森警察署へ
自首可仕候

私がこの手紙を讀み終ると、

『どうだ、わかつたらう、僕が判事をやめたのも無理はあるまい。二十年間の司法官生活は、その青年の手紙一本で蹂躙されたのだ』

N君はかう言ふと、深い溜息をついた。

「事件はそれだけで濟まないのだ。僕が死刑の宣告をした時、それを聽いた被告はふら／＼として倒れさうになつたのを、廷丁に支へられて後のベンチへ腰を下した。その時、辯護士が手紙を讀み始めたので、皆がその方へ氣を取られて居た。辯護士が手紙を讀み終つたから、僕は被告に訊ねたいことがあつたので、被告に起立を命じたが立たない。廷丁が傍へ寄つて立たさうとすると、驚くじやないか、被告はもう息が絶えて居るのだ大騷となつて醫者を呼んだが、人工呼吸もカンフル注射も何の役にも立たなかつた。被告は遂に死んだのだどうして死んだのかと言ふと、犯さぬ罪の爲めに死刑の判決を受けて、精神に非常な刺戟を與へ、極度に興奮さしたところへ、居なくなつた娘の所在が知れて、自分の冤罪なることが證明されたので、過激なる感觸が一時に腦中に起り遂に絶命するに至つたのだと、醫者は診斷して居た。孰れにしても僕の責任であるから、その日に僕は辭職をした。世間で誤判に對して僕が責を負ふて職を辭したのだと言つて居る。なるほど表面に現はれた事實はその通りだが、僕が判事をやめたほんとの理由は、そんな淺薄なことじやないのだ。今話をしたゞけの證據が揃つて居れば、僕でなくとも、誰だつて有罪の判決を下すよ、僕が判事をやめたのはそこだ。人間が人間を裁判すると言ふことは容易なことぢやいな。僕の樣な人間が判事になつて居ると言ふことは、實に恐しいことだと思つたから、僕は判事の地位を去つたのだ、二十年間の過去を顧みると、戰慄せざるを得ぬよ』

沈痛の語調でN君が話を切つた時、そともは暗くなつて、叢の虫が聲々に啼いて居た。定山溪はもうすつかり秋になつて居た。

豚に投げた眞珠

神近市子

一

『改造』の記者から、大杉氏が書いた『お化を見た話』に對して何か書いて見ないかと云ふ話があつたので、雜誌を送つて貰つて久し振りに大杉氏の文章をよんで見た。そして大杉と云ふ人は、どこ迄行つても自分を攫むことの出來ない馬鹿な人間か、又は虚欺を書く人間であると云ふことを私は又更に痛感させられた。

全體、私は多くの人の好奇心をそゝつてゐるあの事件に關しては、當事者たる私共はお互ひに何にも云はないがよくはないかと考へてゐた。猿が自分の尻が醜いことを知つてこれをかくさうとして樹の上に高く登れば登るほどその尻が益々露出して來る。人々が過失を覆はうとして多く云へば云ふほどその過失を露らはにする。私共は事件當時世間の物笑ひの種となりもう十二分にとりかへしのつかぬ損失を重ねてゐる。この上にもう損失を重ねる必要はない。既に凡てが過去のことゝなり、當時の興奮した感情も收まつてお互ひに新しく滿足し合つた生活を送つて居れば、又凡てを忘れて了ふことがお互ひに利益である。私の考はかうであつた。それで何度雜誌社の人に口說かれても、私はその問題に觸れることを差控へた。その爲めにはある雜誌の編輯者と喧嘩さへした。

けれど今度の大杉氏の『お化を見た話』を見ると、私は矢張り他人事として見過してはゐられなくなつて來た。それは大杉氏の記述してゐるところが月日が經つた爲めに記憶が漸れて了つたものの、乃至は自分を辯護して自分達の立場を安定的なものにしやうと云ふ意識した考によつての仕業であるのか、事實が甚しく歪められて報じられてゐることゝ

もう一つは徹頭徹尾私に對する惡意と反感とをもつて書かれてゐるとの爲めである。

私は大杉氏の記事を見て、大杉氏の卑劣な態度に腹立しかつたと同時に、その傲がりな傲頭不遜た親分氣質の態度か、一方に女である私にさへ見落せないほどにケチな狹量な分子を含んでゐるその矛盾が皮肉にも笑止にも思 たことをも白狀する。

全體、人間と人間とがあの種の複雜な關係に捲き込まれた時、一番多く苦しむのは一番人間らしい氣持を持つた人間である。私は辻潤氏を思ふ時に特にさう思ふ。辻氏は聰明な人である。あの愚劣を極めた戀愛鬪爭の渦中に引き込まれ乍らあのゴタゴタの上に脫出して了つて、最初から最後迄沈默を守りどんなに辻氏に親しく接したものでも、あの事に關する辻氏の眞の心の響がどの邊にあるものか遂に破綻を示されない。實際に辻氏が一方でだらしのない虛無の哲學に中毒した生活者に見える一方、他人に對して深切な思ひやりの好い非常な人間味に富んだ人であることを考へ合せて見ると、あの僞惡家の詭辯の裡に、ほんとの深刻な人生を藏した人であると云ふことを感じさせられる。恐らくあの事件に關連した五人の男女のうちで、一番男らしく人間らしかつた人は辻氏である。眞の人間のみが悲哀を正しく苦しむことが出來る。そして人世にあつて眞に人間であると云ふことより大きな勝利はない。

實際にあの戀愛事件當時の大杉氏の言動と行爲とは、醜惡なものであつた。まるで恥ぢを知らないやり方であつた。私がかう云つて憚らない理由は後に紙數が許す範圍で書いて見る樣であるが、ともかくも女である私でさへ眼を蔽ひたいと思つた程である。これは大杉氏のゑらがりな。自分と云ふものを立派なものに見過ぎた——大杉と云ふ人は自分は頭の好い仕事の出來る偉大な人間だと考へたがる人である——自分と云ふものを自分の靜かな心で反省して見ずに、他人の盲目的な稱讚か拍手で見た結果で、そこにその言動の凡てに誤算が生じて來たのであつた。そして過ちはそれで澤山だつたのだ。今更ことと新しく又その過失をあゝのかうのとひねり廻さずものことだ。

二

私は『改造』の記者から前月號の『お化を見た話』について何かを書くやうにと云はれた。從つてこの記事は私の側から前後の事情を詳細に書くことは許されない。他人の愚劣な戀愛事件なんか一度聞かされる丈けで澤山すぎる。二度饒舌されては讀者こそ助からない。私は只だ大杉氏の記事中の二三項について事實を糺し、それによつて大杉氏の如何にも眞しやかなあの記事が、實は眉唾ものであると云ふことは自分の手によつて讀者に印象することが出來れば滿足である。他の多くの事項については讀者の想像に任せるより外はない。

それでは、當時私はどうして大杉氏に對して余すところのない敵意を持つことになつたか、大杉氏に對して抑へることの出來ない反感を生ずることになつたか、私は何物を措いてもこの間に對して答へなければならない。

第一に、私は私に野枝氏に對する嫉妬の情が全然なかつたと云ふことを言明することを避けたい。然しその嫉妬は理想に燃え立つてゐた當時の若い私にあつては、制御できない程度のものでなかつたのは事實である。現に私は一度は全く無條件で完全に大杉氏から心を放して了つた。それを大杉氏がやつて來て、自分にさへ手に負へない例の虛僞な戀愛關係の中に於て引づり込んだのだ。私が大杉氏を憎み大杉氏を輕蔑するやうになつた動機は、そんな複雜な關係に引込んで私を飽く迄も利用し飽く迄も愚弄して恥ぢるところなかつた氏の虛僞な卑劣な心情に對する反逆と復讐の一念に外ならなかつた。

大杉氏の勝手主義は、當時も今も變りはない。性來パシヨネイトな私として失戀の苦痛が人一倍深いところに、彼の惡意と反感とには底がなかつた。彼はその間の消息を九月號の記事に『利用し過ぎたと迄は思はないが甘えすぎた又は無遠慮過ぎた』と無雜作に云つて居るが、大杉氏が正直であればあれは率直に『利用した踏みにじつた』と書き替へて置くべきである。

利用されたり踏みにぢられたりして何時迄も好い氣で大杉氏について居られたら問題はなかつたのだ。私にはそれが出來なかつた。踏みにぢつた者は踏み返へせ、蹴つた者は蹴り返へせ、私の道德はこれであつた。利用されたり蹴られたりし乍ら勇氣がない爲にグズ〳〵になつてゐることは恥づかしいことだと私は考へる。さうした場合、私が女として力

の弱い者としてあゝした態度に出たのは止むを得ぬことであつた。

さて、七年前の十一月七日午後三時位の汽車で逗子に出かけて行く時は、私は野枝氏が大杉氏と一緒であることも、大杉氏に金が入つて彼が札びらを切つてゐたと云ふこともよく知つてゐた。私は偶然のことがそれを聞き知つた。裁判になつてから私は野枝氏が一緒であつたことは少しも知らなかつたと云ふことにして通して了ひ、彼も今尚ほそれはさう考へてゐるやうであるが、私は前日のうちに凡て知つてゐた。

順序として私は自分として大變厭であるが、私共の間の金錢上の關係を少し書いて置かなくてはならない。兇行當時の記述に大杉氏が既にそれに觸れてゐるからである。

あのゴタ〱した關係の當初には、私は自分が彼に金をやることなんか考へても見なかつた。大杉氏は私より遙かに年長であり、遙かに有名であり、遙かに生活能力を持つてゐる人だと考へてゐたから、私はその種類のことは夢にも思はなかつた。又例へ云ひ出しても彼の方でそれは拒絶するだらうと考へてゐた。

その時分私はこの事件の爲めに日々新聞を止させられて了つた。けれども社内に種々と好意を持つてゐてくれた人があつて、手當金のやうなものを種々の名目の下に出してくれた。仕事の方も日々を止すると同時にもつと好い月給で仕事をさせてくれる社があつたので、經濟は一時的には却つて好都合になつてゐた。そして一方に米國から來てゐた二人の婦人記者に臨時的に通譯をしてやつてゐたので、更に都合がよくなつて來た。然るに彼の方は久しい窮迫のあと、戀愛事件が案外不評判で殆ど食ふや食はず、着るや着ずの狀態に陷つてゐた。

私は、日々新聞を止させられたと云ふ話をした時、大杉氏が私が困ることがあるやうな場合を想像して私の生活方針について考へて置いたと云つたことがあつたのを大變に徳としてゐた。それは（彼によれば）何でも自由戀愛を取り扱つてある（これについては、小說中に扱つてある戀愛の觀念と大杉氏のそれの間には非常な差異があると云ふこともこゝに論ずる余裕がないが）チエルニチエフスキーの『何を爲すべきか』を共譯にしやうと云ふやうな話であつた。が、何れにしても私は彼にその配慮があつたことを心から感謝してゐた。そして彼の窮迫を見た時、私は自分のところに節

約して餘つた部分を彼のところに廻す方がよくはないかと考へ始めた。

大杉氏に對する遠慮から、私はこれを云ひ出すことを久しく躊躇した。然し最後にそれを云ひ出した時、彼は、

『あなたさへ凌ぎがつけば借りませう。』と云つて無造作に受取つた。私は案外乍ら氣は易かつた。保子さんが困る、下宿で飯を出さぬ、云々、云々、と云ふやうな時に、私はその度に封筒に入れた金を持つて行つて、人に知れないやうに置いて歸つた。大杉氏は私から纏つた金を貰つたのは千葉に行つて一文なしになつて困つた時が始めだと云つて居るがそれは事實でない。恐らく大杉氏のところには當時の事情を明かにするやうなものは何にもない。然るに私の方には皮肉にもその當時の詳しい記錄が三部と大杉氏の手紙の全部と私の手紙の一部が殘つてゐる。今急にそれをとり出して見ると、事實は全然異つてゐる。故意であるのか又は事實記憶に誤を生じてゞあるか、彼が自分の明かな失敗をとり返さうとして焦つてゐる樣子が眼に見えるやうだ。

金は、大杉の電報で千葉に廿圓送つたのは、私が大杉氏に纏つた金を送つた四度目である。それ以前、五月の月だけで六十圓三度に分つて彼に渡してゐる。そしてその直ぐ後で、野枝氏が千葉を引上げることが出來ないと云つて、當惑してゐた時、その四十圓の金も私が造へた。二度の大阪行の旅費も私が造へた。（これは大杉氏も私に悪意があつてさうしたやうに女性的な邪推を加へて書いてゐる。）その他、何、何、――その時分野枝氏と下宿にゴロ〳〵してゐる大杉氏の身の廻りと小遣との一切を私が用立てゝゐた。

『僕達は君に口をあづけてゐるやうなものだ。すまない。』最初のうちは、大杉氏にもこんな風に云ふ氣持もあつた。けれどそのうちに時日が經つと、私共の間では段々と物事が汚くなり出した。そしてその後ある事實から（これも詳しく云つてゐると長くなるから止すが）、私は大杉氏が意識してゐるかどうかは知らないが實際上私を利用してゐると云ふ確證を攫んだ。そこで私はこれ迄金を出してゐたことが二人の間に誤つた關係を生じてゐると氣付いたので、氏の爲めに金策に奔走することを暫時は差控へたがよくはないかと考へた。實際にその頃私が得てゐた金は、一圓と雖も私の身體を勞せずには出來なかつたのに、數人の必要を充たさうと焦つたが爲めに私の身體は非常に疲勞してゐたし、文人

達にも借りられる丈けは借り盡してゐた。

私が金を持つてゐることが少なくなると、私の曲みもあつたであらうが、大杉氏の態度は急に冷かになつた。そして私は始終彼に辱しめられ面罵されるやうになつた。そして私は私で正當に爭つても自分に勝味のないことを知ると、默つて心に怨恨を蓄へ始めた。私は私の激した一言を出すが最後、『もうこれでお了ひだ。』と彼が云ひ出すことと、そしてさうした成行の責任を私に押しつけることゝをよく知つてゐた。私は彼の罠にかゝらぬやうに凡てを忍ぶことにした。私は彼にとつて丁度都合がよくなるやうな、そんな成行に私の態度が導いたのだとは彼に云はせまいと考へた。

三

前に云つた古い記録を繰つて見てゐると、私は彼が葉山に出かける三日前、十一月三日に彼と東京で逢つてゐる。彼は文士達の雜談會のやうなところに出席して歸途に私の方に立寄つたのであつた。九月號の記事にある通り、後藤新平氏に三百圓出させた後であつたのである。その晩私共はこんな會話を交はしてゐる。

『今月は少しお金が入つた。』大杉氏がかう云つた。

『さう、それはよかつた。どの位？』

『百圓ばかり。けれど五十圓は保子の處に行くし、下宿に廿何圓拂つたし、それに野枝さんが着物がないので三十圓ばかり出したりして、又一文なしになつて了つた。』然し實際には彼が書いてゐる通り、その時三百圓入つてゐたのである。大杉氏は三百圓貰つたと云つては私が幾分でも割前をと云ひ出すものと想像したのであらうか、又は人間を幸福にするよりも雜誌を出すことを大切に考へてゐたのであらうか、私には偉いとか何とか云ふ人の氣持は想像が出來ない。

金の話が出た時、私は苦笑ひした。その少し前大杉氏が秋雨の降る寒い日に浴衣より外のものがなくて起きることが出來ないでゐたことがあつた。私は見兼ねて、そして私にも十圓と云ふ纏つた金の持合せがなかつたので、その頃東京

で學生をしてゐた從姉の子に三圓だか出させて十圓にして彼にセルと袷羽織を質から出さした。そんなことがあつた後であつたから、三十圓で野枝氏の着物を質から出したと聞いた時、私は實際にいやな氣がした。

私はその時金が少しもなかつた。彼は一圓八十錢ほど蝦蟇口の中にあるからと云つて私に一圓渡さうとした。私は八十錢の方で澤山だ」云つた。すると彼は、

『まだ一圓位は宿の方にもあるだらうから。』と云つて一圓の方を私に渡した。二百圓は確實に殘つてゐた筈の時 私は一圓貰つた。そしてそれが半年近く絶え間なく働いて大杉氏を支へてゐた私への報酬であつた。

葉山に出かける時、私は既に自殺を覺悟してゐた。若い私が理想に燃え、より高いより好い生活にあこがれ、凡てを越えてそこに達しやうとしてゐた人間であつたことは前に云つた。その私に凡てはあまりに醜惡であつた。餘りに卑劣で餘りに稚氣を帶びてゐた。私は自分が最上の理想を逐はうとして最下の現實に落ち込んでゐることを知つた。特に彼の自由戀愛論は、私をヌキサシのならぬ破目に陥れてゐた。大杉氏が最初その變種した自由戀愛論を持ち出した時、私は友人も家族も捨てゝ了つて彼の主張に耳を傾け、彼に從つた。その、唯一の友人として頼んでゐた彼が、懊惱と苦悶との極にゐる私を理由なく惡罵し嘲笑して余すところはなかつた。そして少くとも私に對する彼自身の言動は出鱈目であり、よりどころがなかつた。云ふところと爲るところに少しの期待も信頼もかけられなかつた。

大杉氏の嘲笑をうけるやうになつたことは、私には全く意外であつた。私は彼に同情と思ひやりとをこそ豫期すれ、彼によつて嘲笑を加へられやうとは覺悟してゐなかつた。私はこの怨恨を長く默して魂の奥深く蓄へてゐた。

死を決した時、私は心がガラツとして此上もなく愉快であつた。世の中に何の思ひ殘すこともないやうな氣さへしたどうして早く決心がつかなかつたらうと私は自分自身を不思議にすら考へた。只だ殘つてゐる問題は彼を殺して置いて自殺をするか一人で死ぬかその問題だけであつた。

その日私が殺氣立つてゐたことは事實であつたらう。私は大杉氏が私を見くびつて心を許してゐることはよく知つてゐた。寧ろ意識してさうさせてゐた。最初私は彼の前で彼の罪を數へて殺す積でゐた。そして從姉の子の援助によつて

ピストルを手に入れた。甥は私に發射の仕方を教へる爲めに、ある晩私を程近くの青山の墓地に連れ出した。そして墓地の奥で私は大地に向つて發射した。けれどあの仰山な音響がタツタ一度で私の神經を極度に興奮させて了つた。私は手が震へて二度と發射することが出來なかつた。

これが私にピストルを斷念させて了つた。短刀では力のない私は寢てゐるところを殺すより外はないと考へた。さう極めると、彼の態度に動きのない處を見究める迄、目的を達する爲めには私は努めて彼の氣を迎へて置かなくてはならなかつた。私の仕事は二重に困難なものになつた。私は彼に服した樣子を見せ彼に氣を許させる爲めにも一層自分の怒を加へて行つた。

短刀は生毛屋のものであつた。私は特に念入りに刄をつけさせ、それを手提の中に入れてゐた。殺意を決してから窃かにそれを拔いて見ると、氷のやうなその新刄が人間の血を欲するものゝやうに、キラ〱と陽の光の中に喘いだ。私の心は急に決した。

八日の午後、私は日陰茶屋の裏山に登つて、念の爲めに刄を改め手許が狂はぬやう大型のハンケツをシカとその柄に結びつけた。

四

最後の夜を考へたので、私は湯に入つた。そして身體につけてゐた不潔な下着類は昔日が暮れてから運び出して海に捨てた。そして支度して行つてゐた淸潔なものに着替へて了つた。殘つてゐたことはもう一度彼の氣持を確かめて自分の殺意を決することだけであつた。大杉氏の記事が余りに事實と放れてゐるから私も當時のことだけ私も少しくわしく書くことにする。

床に就かうとする時、彼は非常に機嫌がよかつた。私に戯れやうと云ふ氣持さへ示した。或は殺氣立つてゐた私の無言の脅迫を感じたことが、一時的に彼をさう爲せたのであるかも知れない。彼が戯れやうとしたことは事實である。

然し私にとつては生と死との境目に當面してゐた場合であつた。私共の關係に總勘定をつけやう――それも後に與へやうとする復讐を氣づかれない程度のところでこの關係に決算をつけるやうな言葉なり行爲なりを彼から得やうと云ふ一生懸命の場合であつた。どんなに努めても輕い愉快な氣持にはなれなかつた。

私は默つて寢床の中へ入つた。彼もつゞいて床に就いた。私は蒲團の中で懷中してゐた短刀の鞘を拂つて、ソット敷蒲團の間に入れた。そして何氣ない顏をして話し出した。

『あなたは私に何か話をしたいことはありませんか。』私は彼にこんなに訊ねた。私は彼に殘つてゐる最後の一分の誠意の爲めにでも彼の命を助けたかつた。『何かの話』と云つたのは、大杉氏にこの頃ズーッとつゞいてゐた不誠實な行爲を何とか說明させると云ふ程のことの意味合であつた。前にも云つたやうに彼のその頃の行爲は出鱈目で矛盾に充ちてゐて少しも信が置けなかつた。けれど彼は何時でもそれを自分達に都合よくさも尤もであるやうに何人にも說明した。そして私は彼の一時的な辯解に滿足して深く追及もしなかつた。こんなことが可なり長く續いた後であつたので。私共の間ではそんな簡單な言葉が凡てを語つてゐた。もう『話す』と云ふ時には、彼の辯解を私共は意味してゐた。彼はこの時の私の問に對して反感を持つたやうであつた。

『あなたの方から何か話してくれることはないかと云ふ請求がある以上、何かあなたの方に聞きたいことがあると云ふのだらう。』彼はかう云つた。

『ありますとも。あなたは一人の男を挾んで二人の女が昨日からのやうな氣持で暮すことは淺ましくいやなことだとは思ひませんか。』と私は云つた。葉山についてからの野枝氏の態度に、私はかう云ふ理由を持つてゐた。

彼は、

『淺ましいと思ふよ。』私がその良心に觸れる時彼は何時も殊更に傲慢を裝つた。その時もさうであつた。

『淺ましいとほんとに思ふなら、淺ましくないやうにすれば出來るのではありませんか。あなたがしやうと云ふ意志さへ持つてゐるのなら、何でも出來るのですで。すけれどこの頃あなたは意志と云ふものをまるでお持ちにならぬやうに私に

は思はれる。』私はこゝまで一氣に云つて來たけれど、まだ彼の急所をついてはゐなかつた。

『私があなたに出した金があるからつて、私の云ふことを誤解なすつては困りますよ。どんな氣持で私が金を出したかそれはあなたも忘れはなさらぬでせう。あなたはこれ迄野枝さんと一緒にゐるのは二人とも金がないからで金さへ出來ればその日のうちにでも別になるのだと長いこと私に云つてお出でになつた。その金は一週間前に出來てゐるのに、あなたはそんなことは夢にも云つたことはないやうな風をして入らつしやる。あなた方が二人になりたいと考へて入らつしやるのを邪魔しやうと云ふ氣は私には小指の先ほどもない。私は何時でも一人になる積でゐるのです。けれどあなたは私がそのことを云ひ出すと、ムキになつて私に理解がないのだ、馬鹿だのと云つて極めてやらうとなさるので、私は怒つて了ふのです。一體私はどうしたら好いんです』私は彼に最後の好意でも殘つてゐて、自分の氣持を正直に話し、私に自分の道を選んで呉れと云ふならよろこんでさうする氣持でゐたのであつた。それで一縷の望をもつて最後だと思つて彼に愚痴を云つた。私は愚痴は嫌であつたから、どんなに苦しんでも愚痴は一言も云はなかつた。それが私の怨恨を更に深くした。彼は恐ろしい顔をして私を睨んで一言も口を利かなかつた。

疲勞と興奮との頂上にゐた私は、我れ知らずウト〳〵とした。眼をあけて見ると彼は雜誌をよんでゐた。私はもう一言云ふことを殘してゐた。

『あなたは仲直りをしやうとは云はないでせうね。』私はかう云つた。

『さうさ。自分が勝手なことを云つて他人を怒らして置いて、仲直りをしやうとは思はないかもないもんだ。もうあなたとの戀愛はお終ひだ。』彼はかう云つた。私はこれでよいと考へた。

『私の云つたことは、あなたにはそんなに勝手なことに聞えましたかねえ、けれどどうしてそんなに怒つて了つたんです。』

『何故怒るつて、君は金がどうしたかと云つたらう。僕に金の貸しがあるからさう云ふのだらう』

『それは違ひます。私は只だ金がない時に金があればあゝするかうすると云つていらしたことを、金があつてもあなた

にはする考がないのでせうと、あなたに確かめたかつたのです。』かう云ひかけた私の言葉を遮るやうにして、彼はおつかぶせてかう云つた。

『何にしても金の話迄出れば澤山だ。金は明日返す。』私は愈々最後が來たことを知つた。私は我知らず蒲團の下の短刀を探つた。

『好意を籠めて送つたものを、溝に捨てるやうに返すとは卑怯だ。よし、私はその金を永久にお前に負はせてやる！』

私は心の中でかう叫んだ。

　短刀を握りつめた儘、私は三時迄待つた。彼はスヤ〳〵とよく眠つてゐた。けれど私は思迷つた、一度私は起き出した。私は彼を起して今私の頭を往來してゐる氣持を話し、今迄の傲慢な人を見下ろした態度を捨て、もつと素直な氣持で正直に凡てを話し、その上で私と別れて了つて呉れないかと頼んで見やうかと考へた。けれどその瞬間私は彼の思上つた他人を侮蔑した態度を思ひ起した。長くそれに苦しめられ乍ら、まだお前、あの男の惡意を見定め足りないのか。

私の心がかう叫んだ。默し乍ら蓄へて來た怨恨がその時一度に爆發した。

　私は一度寢床に歸つて來た。その方が兇行を行ひ好いやうに思はれたからであつた。實際に刺した瞬間だけ私は失神してゐたやうで前後から記憶が絶たれて了つてゐるが、仰向に寐てゐる彼は唯だ一突きであつた。只だ私は動脈を思ひ誤つてゐたし、逆手に突いた爲め充分に力が入らなくて氣管にも動脈にも致命的な傷を與へるには今五分ほど傷口が足りなかつた。私はこれは後で聞いた。

　八王子の監獄に私と同じやうな事情で夫を殺して了つた女が入つてゐた。その人は一緒に歩いてゐる夫を背後から近づいて抱へ込んで腹を刺したと云つた。その女は四年の懲役であつた。

　その瞬間は私は自分は目的を達したと考へた。私は長いこと私の身體を包んでゐた憎憤をその時晴らしたと思つた。私はその短刀で直ぐに自分も自殺しやうと思つて、少しはなれて彼の死ぬ様子を見てゐた。すると、彼がフト眼をさました。そして、

『ウ、、』と云つて蒲團の中から手を出して傷口にあてゝゐた。そしてその手を電氣の光にすかして見て、それが血であることに氣がつくと、

『ウワ――ツ――』と云ふ魂の底から絞り出すやうな驚愕と悲しみとの聲を擧げ、つゞいて大聲で泣き出した。大杉氏の記事ではこゝが稍々新派の芝居がゝりで、

『待て――』と叫んだことになつてゐるが、事實は反對に彼は大聲に泣いてゐた。そしてこの瞬間に私はもうこれで好いと考へた。この男は今こそ自分でやつたことが何を價してゐたかを知つたのだ。私は彼の全心が私に加へた欺瞞に對して詫びてゐることを知つた。

私は彼に短刀をたゝきつけた、そして廊下の外に出た。彼は何の積りであつたか頻りに私に追ひ縋つた。新建の二階で私はもう一度彼の顏を明るい電氣の光で見た。死の恐怖と絶望との爲めにその顏が醜く歪んでゐた。白い寢衣の上には、血がだら〳〵と落ちてかゝつた。

目的を達したと思つた後、彼の全心が私に加へた欺瞞を後悔し詫びてゐると考へた後私は急に悲しく感じ出した。彼を、殺して了つたことを濟まなく考へ出した。私が、

『許して下さい。』と云つたと彼は書いてゐるが、私に少しもその記憶のないところを見れば、この時に無意識に云つたものでゝもあらうか。

更に以前の座敷の方へ引かへし時、私は便所の前に倒れて了つた。フト氣がつくと彼が尚ほ泣きじやくりをし乍ら、玄關の方の廊下をまがつて行くところであつた。私はその間にもうよほどの時間が經つたのだと考へて了つた。そして慌てゝ便所の前を一直線に風呂場へ出て、そこの北口の戸が造作なく開いたので、そこから戸外に出た。戸外には秋の雨が音もなく靜かに降つてゐた。私は庭に出て門をあけて街道へ出た。そして一直線に右の方へ走つた。けれど又ある家の垣根のやうなところに突當つて倒れて了つた。

こゝで半分意識を失つた儘、私は小一時間もゐた。氣がついて見ると、垣根の枝から雨垂がポー〳〵と顏にかゝつて

ゐた。急に思ひ起して私は宿の方にかけ出した。けれど彼は死んで了つたのであつたことを思ひ出すと、私は又すぐ逗子の方に取つて返した。その時にはもう海に投じてもと云ふほどには自殺の決心は強くはなかつた。

五

今、その時分の記憶を辿り乍ら書いて見ると、私の書いたものと大杉氏の記事との間には餘程の相違が生じて來る。そしてその相違たるや、一つの事實を二つの心をもつて見たと云ふだけの相違ではなく、事實そのものから餘程違つてゐることに驚かされるのである。特に兇行當夜のことなど、大杉氏は何によつてあんな不快な調子をもつて書かれたのであるか解釋に苦しむ位である。當夜私共の間に交はされた會話の主なるものは、極く限られた數であつた。そして私は兇行後に未決監にゐる時分辯護士のすゝめによつて當時のことを落ちなく手記して置いたものである。それを早く燒き捨てやうと思ひ乍ら行李の底に束ねて捨て置いたものであつたが、今それをとり出して一枚々々繰つて見ても『お化を見た話』に書いてあるやうな淫蕩な笑ふべき會話や卑屈な耻づべき會話を口にしてはゐない。そして又それを敢へてしたと云ふ記憶も私にはない。私が肉を求めたと云ふ事は虚妄も甚しい。

この外に大杉氏の『お化を見た話』には、間違ひもない氏の創作が大分ある。私に對する悪意の創作と見られるものもある。その一つは、私が計畫してゐた雜誌のことだ。私が山川菊榮夫人、宮島兼子夫人と雜誌を計畫して二人に拒絶され其無念を大杉氏の雜誌の計畫に反感として向けたと云ふのは僞である。私の雜誌の計畫を中止させたのは氏自身である。私にその創刊の爲めに三百圓の金の出る所が極まつてゐたのを知つてゐた彼が、自分の雜誌に金が不足なので一緒にやつてその金を廻してくれと依頼したのである。靜かに考へて見たらこの事は彼には直ぐに分る筈だ。

最初、私は『お化を見た』と云ふことも彼一流の、世間を面白がらせやうと云ふ虚妄な創作であらうと考へた。大杉と云ふ人は、稚氣と衒氣とに滿ちた野心家で、それに多分の低級な芝居氣を持つた人である。同年輩の思想家達と比較し

て、より多く政治家の素質を持つ人である。稍々古い、思はせ振りな九月號のその文章がよく彼の人物を表はしてゐる。

然し乍ら、更に考へて見て私は又彼が『お化を見た』と云ふ事に限つて事實ではあるまいかとも考へる。氏と雖も一度は正しい情熱に燃えてゐた敏感な青年であつた筈である。一たび燃えたことのある理想の心火は、ひそかな心の密室で必ず彼を訪れて、私に對して嘗て爲したその欺瞞と非道との爲めに彼を責むるに相違ない。

『犬に聖物を與ふるなかれ。豚に眞珠を投ずるなかれ。恐らく足でそれを踏み、振り返つて君を噛むだらう。』と云ふ豫言者の言葉がある。若かつたとは云へ人を見る明がなく、最も劣等な品性の人とあゝした關係に入つた丈けでなく、滑稽虚妄な彼一流の自由戀愛論に一時でも耳を藉して、青春の好時日と半生の情熱とを空費して了つたことは、私の生涯の恨事である。

現代婦人雜誌批判

婦人雜誌に對する希望

小泉信三

雜誌許り讀んでゐるといふのは感心した風潮ではない。雜誌許りが讀まれて、永續的の價値のある名著大著が閑却されるのは面白くない。併し今日のやうにかう雜誌の數が多くなつて、其定價も現在のやうに不廉であつては、これを忠實に讀まうとすれば、外のものに手を出す遑も餘裕もなくなるのが當り前である。此頃の日本人は年中雜誌ばかりを讀んでる國民のやうに思はれる。それでは其の多數の雜誌の各々に何か著しい特色でもあるかといふと、優等雜誌と劣等雜誌との相違はたゞ雜誌界の名士の名を掲げることの多いか少ないか丈けの違ひであつて名士中の名士は何處の雜誌にも名を掲げてゐるのである。一年中雜誌許りを讀んでゐるといふことが、讀者の爲めに計つて喜ばしくないと同樣に、年中雜誌に許り書かされてゐるといふことが執筆者に好影響を與へないことも亦想像するに難くない。そこで今日の雜誌をどうするがいゝかといふ問題を課せられゝば、第一に其數が少なくなることが望ましい。當事者に少し氣の毒だが、潰れても合併してもいゝ、兎に角數が減少するといふことが、一般公衆の利益の爲めには望ましいと答へなければならぬのである。さて今回課題の婦人雜誌の事には甚だ不案内であるが、右に一般の雜誌に就て云つたことはまた婦人雜誌にも適用することが出來やう。早く淘汰が行はれて、少數のいゝもの丈けが殘ればいゝと思ふのである。

第二段に淘汰に堪えて生き殘つた婦人雜誌には、何ういふ記

事の掲げられることを希望するかといふと、私自身の經驗から必要を感じてゐるもの丶一つは、自然科學諸部門に關する記事である。これは婦人の此方面に對する素養が概して男子よりも低いといふこともあるが、もう一つは子供の教育といふ差し當つての必要から來てゐる。子供は旺盛な知識欲を以て自然を觀察しては、時々刻々に質問を發する。これに對して今日の科學が認めてゐる正確な答へを與へて、其興味を刺戟することの出來ると出來ないとでは、子供の幸不幸は非常な相違であらう。子供の教育には母親許りが當る譯ではないけれども、其事の可否は別として、現在の實際では子供が父よりも母親に接してゐるときの方が遙かに多いことは爭はれぬから右の要求が起るのである。これは自分が社會科學を修めて、自然科學の方面に全く不案内であるところから、特に痛切に其必要を感ずるのかも知れないが、必しもそれ許りとは思はれぬ。まだ母親の膝下にある小兒には、自然を觀察する興味はあつても、人事に關する知識欲は殆ど全く起つて居らぬやうに思はれるからである。

自然科學の記事を掲げるならば、それを第一流の大家に賴むのがいゝ。年少氣鋭の學者の書いたものは(無論例外はあるが、)何?方面の學問に就いて見ても、讀者の力量を overestimath して、それに對抗するといふやうな態度が見えるものである。其結果作品の學術的の價値は高くても、教化といふ方面の成績は擧がらないことが多いのである。又相對性原理といふやうな大問題が起つたので、これ許りが素人に取つて面白いのだと學者は思ふかも知れないが、素人には學者が尋常普通の事として重きを措いて居らぬ事がどれを聞いても皆珍らしく面白いのである。專門家としての最高標準に立つてゐながら、同時に素人の知識加減を心得てゐるといふ人が此際最も必要である。醫學博士の小酒井不木氏の如きは確かに此呼吸を心得て居られるやうに思ふ。

若し斯う云ふ記事が盛んになつて、現在跋扈跳梁してゐる金棒引き的の記事を壓倒することが出來れば、婦人雜誌といふものは、今よりも遙かに眞面目な讀書界の感謝を受けるものになるだらう。匆々

サッカリン料理の婦人雜誌

山川菊榮

現代の婦人が精神上の糧を得る方法に二つある。その一つは學校の教育、他の一つは新聞雜誌を通じての智的訓練である。賢母良妻主義の教育が、奴隷としての婦人にいかなる種類の智識を與へるかは、今更こゝに繰返すまでもない。奴隷をして奴隷たる事實を覺らしめずにおくこと、その現狀を絕對の、永久的の、神聖のものとして、それに對する一切の疑義を許さず知足と盲從に終始させるのがその目的である。家庭の內部の日常の事務に直接密接な關係のある事柄の外、何ごとも知らしめず、婦人の興味を自己と自己の家庭に集中し限定するのが、女子教育の任務とされてゐる。

婦人にとつて第二の重要な智識の門戶たる新聞雜誌は、婦人の爲にどんな精神上の榮養物を提供してゐるか。

もしあの榮養硏究所の佐伯博士の献立の中に、男子用と女子用の二種があり、女子用のものは男子の副食物の殘りや屑許り集めた、榮養上の價値を無視した廢物で考察したので、たゞ舌ざわりをよくするためにサッカリンを惜しげもなく使つたゞけのものだとしたら、男子も、一般婦人もこれに對してどんな感じを抱くだらう。然し精神上の榮養物に就ては、現にこれと同じことが行はれて居り　何人もそれを怪まぬのみか、婦人自身、無用の好物として、それを嗜んで飽かずに居る。かくて彼等の精神は榮養不良に苦しみ、その消化機能は破壞されて一方で、その結果が女性に固有の如　に看做されてゐるあらゆる智的缺陷、迷信、偏見、ヒステリーなどの原因となり、それを助長する許りである。手法や手際に多少の相異はあつても、雜誌界を風靡する婦人雜誌の勢力は、全くこのサッカリン料理に基いてゐることは明白である。最も露骨な商業主義の我利々々亡者たる雜誌營業者は、婦人を榮養不良に陷れることは愚か、それが金儲けになるとさへ云へば、敢てその精神を毒殺することをすら辭しない。最も僅かの資本と勞力とによつて、最も多大の利潤を擧げるのが商賣の奧の手である。隨つて、雜誌の內容は

雜駁杜撰を極め、一ケ月も前の新聞記事の引延しや、曾て馬鹿孤蝶氏によつて、『長々亭主に煩はれまして』といふ女乞食の訴へに似てゐると批評された、眞僞とりまぜの辿々しい告白記事、化粧衞生問答等が金のかゝらぬ餌として、馬鹿な讀者を釣るために、仰々しく、物珍しげに並べられる。かくして讀者は年中同じ廢物利用のサツカリン料理を宛がはれて山海の珍味も叶はぬ高い税を取られてゐるのである。

婦人雜誌の編輯者、營業者の、雜誌の內容に對する無責任な態度は、曾て出版界の一大覇王たる博文館によつて證據立てられた。昨年八月、同館發行にかゝる『家庭雜誌』には『婦人も男子と同じ貞操權を要求せよ』なる、奇妙千萬な題名と內容とをもつた論文が、私の名を附して掲載されてゐた。夢にも覺えのないことで、直ちに同誌編輯者に照會してみた處、記者が私を訪問して談話筆記をとつたと詐稱したので、他にもさうした例のあつたことが明かになつた。記事の內容や論旨に一顧の注意をも拂はずに出たらめな戯文を麗々と掲載して他人の名譽を毀損し、社會を欺くことを憚からぬこの種の行爲は、緣日商人同然の婦人雜誌營業者にあつては尋常茶飯事であるらしい。私は廉月給で極度に酷使される結果、一種のサボタージユを企てた記者その人よりも、記者に一切の責任を轉嫁して、記者の處分を以て一切の問題の解決と考へてゐるらしい資本家の陋劣横着とに對する痛憤を、今なほ忘れることが出來ない。

かういふことは、必ずしも婦人雜誌に限つたことではあるまいが、婦人雜誌の場合には、特に編輯者側の無責任、無誠意が極端に、露骨に感ぜられるのである。要するに讀者が低級なだけ、營業者側で讀者を與し易く、愚弄し易く、頭から見縊つてかゝるので、讀者側が甘んじて是等の吸血鬼の喰物になつて居る限り、この狀態は如何ともし難いのであらう。婦人雜誌の愛讀者諸氏は、彼等の崇拜する『記者樣』の正體が、彼等を愚弄し切つてゐる吸血鬼であることに心づかずに居られるのであらうか。

此の世の中に殘酷な運命や、悲慘な生活の例の數多いことは、吾れ人ともに悲しまねばならぬことには相異ない。然しそれも地震とか洪水とかいふ天災の結果ならまづ諦らめるより外はなし、その他人爲的、社會的原因から來たものであれば、徒らに泣き喞つよりは、最善の對策を考へてその爲に鬪ふより外はない。單なる涙ながらの訴へ話や告白が、婦人の運命をどう開拓することが出來よう。悲哀の享樂、涙の耽溺、それらに暇を潰すには、現代の婦人は餘りに重大な形勢の中に居り、餘りに偉大な使命を帶びてゐる筈ではなかつたらうか。

賢母良妻教育と婦人雜誌、日本のブルジョア文化の一部はこ

れによつて代表されてゐる。婦人がこれらによつて注ぎ込まれる思想や教育に反抗せぬ限り、是等によつて代表される精神的鐵鎖を切つて放たうとせぬ限り、彼等は永久に奴隷である。

サツカリン料理の婦人雜誌が雜誌界を風靡してゐる間に、婦人自身が自己の解放のための雜誌をもち得ぬことは、心細い限りである。『女性同盟』も昔の『青鞜』ほどの實質すらなく、少流文學者の玉子によつて發行されてゐる同人雜誌『處女地』はよく／＼の不毛地の上に、肥料も耕作法も省みられぬ模樣であるから、雜草以外の收穫はむづかしいらしい。たゞ神戸の覺醒婦人會の機關『覺醒婦人』は、小さなものでもあり、內容も整つてゐるまでゞはないにせよ、とにかく新時代の婦人の生活に適應した內容を盛らうとする苦心だけでも、在來婦人の手になつたもの丶中では出色だと云はねばならぬ。諸方の婦人の中にこの種の雜誌が發刊されて、それが次第に充實して行つたならば、日本の婦人運動を促進する上に大に貢献するであらうと思はれる。

智識に國境なく、また性別もある筈がない。現代の社會に於ける婦人の利害を代表し、そのために戰ふ機關の外、營利の目的以外に婦人雜誌存在の意義はない。それの存在は智識の國に於ける婦人の特殊待遇を意味する。吾々はこの禮遇を辭して、人として社會の一員として必要な一切の智識の頒前にあづかるべく、進んで高級な雜誌、高級な書物を、苦しみながらも讀むことによつて頭腦を鍛練する習慣をつけねばならぬ。この努力こそは、婦人が精神的にまづ奴隷狀態より解放される第一步である。

感覺誘惑

室伏高信

私は、無論今の多くの婦人雜誌を讀んでゐるものではない。また讀もうともしてゐるものではない。できることなら、凡て

の男女が、今の多くの婦人雜誌、特に流行婦人雜誌を讀まない方がいゝと思つてさへゐるものである。多くの場合によく賣れるものは、讀まない方がいゝものであらうが、婦人雜誌において、特にこの最惡のものが最善に賣れるといふ原則を間違なく實現してゐるように思はれる惡しき意味でのヂャーナリズムは、人間性の弱點に乘ずることなのである。女は、この乘ぜらるべき弱點を、より多量に固有してゐるといふのは、女が男よりも人間としての價値に乏しいといのふではない。女には女の特質があり、それは男の企及すべからざるものであつても、女の特質なるものは、男のそれよりも、より多く乘ぜられる弱點だといふのである。ルソウは、男女の特質を論じて、男のそれは理智であり、女のそれは直覺であるといふことがあつた、直覺は、無論人間の寶である。理知は人間の目的を示すことができないが、直覺は、人間を靈的存在に導く唯一の力である。しかしこれとともに、直覺はまた原始的な力であり、或は動物もこれをもつてゐるから、たゞ女が直覺において勝るといふだけでは、女がまだ理知的訓練に缺けてゐるのだともいへる。近代の男が、科學の力によつて、理知的となり、從つて直覺力を痲痺させてゐるといふことができるが、女はまだこの科學時代にまで到達してゐないともいへる。從つて女の直覺は、尚ほ動物的である。少くとも動物的分子を多量に含んでゐる。昔から女は本能的であり、衝動的であるといはれてきたが、その本能的であり、衝動的であることは、尚ほ女がより多く動物的であるからである。こゝが女の美點であるとともに女の弱點でもある。そは理知的訓練を經てゐないから、事物を評量してゆく力がない。何がより重きか、何がより輕きかを判斷する評量の能力において、女は、少くとも今日の女は、遙に男よりも以下である。辯舌や、華美や、哀訴や、樣々な表面的なものが女を動かす力である。美が女の審美眼に訴へるのでなくて、けば〱しさが女の感覺を誘惑するのである。悲しみが女を感動させるのではなくて、悲しみの表情が女の感覺を刺激するのである。「女よ、お前は泣くために生れた、薔薇色がお前の頰から褪せるまで、搖籃から墓まで、女は泣くために生れたのである。」

そこで婦人ヂャーナリズムは、けば〱しさと、辯舌と、表面的な喜怒哀樂の表情があれば充分である。本質的な何ものもなくとも、今日の多くの女を動かすには、この表面的な責め道具泣き道具、矢釜しいほどぢよう〱しい辯舌がありさへすれば充分である。感覺的ヂャーナリズム、齒の浮きそうなヂャーナリズムによつて、女の感覺を誘惑するのである。

小說と名はついてゐても、藝術品ではなくて情話である。論文と稱せられてゐても、道話である。今日の婦人雜誌は殆んど凡て、その第一頁から最後の頁まで、情話と道話で滿たされてゐる。

ブルヂョア文明が進步すればするほど、こゝに「贅澤女」が生れてくる贅澤女は流行の女である。流行によつて支配される女である。流行を追ふことがブルヂョア婦人の生活である。生

活原理である。道德である。流行に後れたものを身に纏つてゐるものは、彼女等の特種の社會、即ち社交界に入つてゆく資格がない。入つてゆくものは禮儀を知らない女、道德を顧みないものとして擯斥されるのである。流行が道德を決定するのである。この程度までブルヂョア文明が發達するようになつてくると、婦人ヂャーナリズムは、流行の問題、衣服、帽子、靴の新形を爭つて掲げなくてはならなくなる。社交界に時めく婦人の消息を報くために、紙面の大部分を費さなくてはならないこととなる。西洋の婦人雜誌とは、主として流行雜誌である。流行月報である。流行製造者たる大商店、大デパートメントストーアの提灯雜誌である。日本の婦人雜誌はまたこの程度までは進んでゐない。評判の女優の寫眞や彼女の愛犬の寫眞を掲げることの代りに、貴族や物持ちの娘——多くは醜婦である——の寫眞などで滿足してゐる。流行の衣裳の代りに、澤庵の漬け方位で滿足してゐる。

日本の今日の婦人雜誌は、婦人の感覺に訴へるためには、西洋のそれに比べて一歩も引けをとらないだけの用意はもつてゐる。しかし日本の婦人の感覺が、まだ封建的であるだけに、日本の婦人雜誌も封建的である。忠君愛國貞女烈婦論は、流石にこの種の婦人雜誌でも下火になつてはゐるようであるが、まだ全然その舊裝を脱してゐるといふわけではない。偶々「死線を越えた女」といふようなものが出ることがあるにしても、また近頃の多くの婦人雜誌が、思想界の流行の餘香を舐めようとする傾向は明らかに觀取することができるにしても、婦人雜誌がとり入れることのできるのは、主としては宗教的なものである。宗教が本來保守的であるかどうかは別として、今日の宗教が非常に保守的なものであり、今日の秩序の維持、現狀の擁護、特權階級の擁護のために働いてゐることだけは一點の疑ひがないマークスが宗教とは人民の「阿片」だといふたことは、今日の社會では一點の疑ひもない。宗教の影にかくれて階級鬪爭の事實を蹈過し去らうとするのは、阿片によつて人間の意識を奪はふとする陰謀である。現代の宗教家とはこの種の陰謀隊の一團であり、支配階級の前衛隊として、人民に阿片を吸はせようと陰謀しつゝあるのである。その阿片毒は今日の流行思想となつてゐるのであるが、婦人雜誌でも、この種の阿片毒が盛んに傳播されてゐるのを見る。だから婦人雜誌がこの種のものに手を附けてゐるのは、それが流行を追ふようになつたと見るよりも、寧ろ現代の所謂流行思想なるものが阿片毒であるからと見た方が安全である。この阿片毒が流行思想である時は、如何なる保守主義の人も、如何なる特權階級の讃美者も、流行と一致するこ

とができるのである。

　そこで日本の婦人雜誌は尙ほ封建的である。ブルヂョアになりきらないでゐる。日本の女がまたブルヂョアになりきらないように、その婦人雜誌もまだブルヂョアになりきらないでゐる。封建的イデオロギーからブルヂョア・イデオロギーへの階段に立つてゐる。澤庵の漬方、襁褓の干し方、内職案内、家計簿のつけ方、一ケ月何十圓で生活ができるか。そうした題目が、矢張り今の婦人雜誌の一半を占めてゐる。流行婦人雜誌とは、この種の記事の機敏と豐富た雜誌であることを意味するのである。それがこの頃ではまたたん〳〵とブルヂョア・イデオロギーの方へ發展してきた。文化生活、文化住宅　小兒洋服の仕立方、婦人雜誌の目が、だん〳〵と現代文明に調和してきた。現代文明といふのは無論ブルヂョア文明のことなのである。文化生活といふこの頃の一つの流り言葉は、いふまでもなくブルヂョア文化生活である。それはブルヂョア文明の末期を表徴する一つの標語である。現代文明の末期を表徴する形式整調の要求としての文化生活は、必然に現代ブルヂョア階級の人々、特にその大多數であるプチ・ブルヂョアの人々によつて歡迎さるべき充分の可能性をもつてゐるのである。この使命を果すべき立役者がブルヂョア婦人なのである。その踊り手がプチ・ブルヂョア婦人なのである。

　今日の文明はこの意味で婦人文明である。日本でも半ば婦人文明の境に入りつゝある。日本の婦人雜誌がだん〳〵とこの點に目醒めてきてゐる。文化生活は、ブルヂョア文明の末期を紀念するための、そして婦人の手によつて劇轉される、文明生活の一段楷である。ブルヂョア文明は最後にその主權を婦人に渡し婦人の手によつて葬らるべき約束のもとに立つてゐるのである。この葬式の指揮者としての役目を、今日の婦人雜誌が引受けようと始めてゐるのである。マークスの言葉でいふとトーテングレーバアなのである。婦人雜誌の當分の使命はこの點にある。これを攻擊する必要はない。この階段は凡ての國民が一度はどうしても經過しなくてはならない。新らしい種子が取つて代るだけの力となるまでは、こうした末期的生活原理に支配してもらうよりほかに方法はないからである。でなくては婦人雜誌は自滅するよりほかにない。

　婦人雜誌の問題は決して小さい問題でない。婦人は、世界の進步した諸國では、「文化運動」の立役者である。書物雜誌の讀者の大部分は女である。男は、一日の勞苦のために、書物を讀む機會が殆んどない。偶々讀むものがあつても、自分の職業に直接に關係のあるものでもなくては、これを手にしない。男

が働いて女が讀む。女が話して男が聽く。耶蘇教がマドンナを通して女性を讃美する宗教であるように、「女性を讃美」したり、「女人を崇拜」することが、男の義務になつてくる。ハヴロック・エリスに從へば、昔の女は、男の機嫌を害なうまいとするために言葉を換へていへば、こうしたら男の氣に合ふだらうか。あゝしたら男の意に適ふだらうか。といふことの心配を中心として、昔の女は生活してきた。今の男は、如何にしたら女の意に迎合することができるかを考へるために、この世の中に投げ出されたかの觀がある。少くとも西洋の諸國ではそうである。日本でも藝術家がそうなりつゝある。女が文化生活の主人となりつゝある。女が道德の命令者の位置へと進みつゝある。書物、雜誌を讀むことが、だん／＼と女の仕事となりつゝある。藝術鑑賞の役目がだん／＼と女の仕事になりつゝある。婦人雜誌の發行部數は男のそれよりも數倍數十倍である。小說の讀者は最早や大半が女である。よく賣れる小說とは、疑もなく、よく女の讀む小說である。流行作家とは女向きの作家である。女にもてることが世の中からもてることである。「プロレタリヤ批評家」なぞが、幾らケチを附けて見たところで、ビクともしない。一番よく賣れるのは、一番悪しく月評される小說である。讀者――その大部分が女――はこの種の月評なぞを讀む人たちとは別世界に住むでゐる。それが主權者である。藝術家はこの主權者の方を氣にしてゐる。センチメンタルが支配する。藝術が情話になり、宗教的「阿片」になり、誇張となり、感覺誘惑の技術となる。讀者をほろりとさせる腕前がなくては洛陽の紙價は高まつてこない。理性に訴へるようなものは、若しくは高く靈的世界に訴へようとするものは、聽衆がなくなる。社會主義の書物だつて、それが感覺誘惑でない限り、卽ち「貧乏物語」でない限りは、聽衆は數へるほどしかない。聰明な著作家、怜悧な作家は「女人崇拜」者であり、凡ての女はマドンナだと公言するようになる女をほろりとさせることが藝術である。藝術は視聽の阿片と女の淚の間を游いでゐる。この阿片と淚が、藝術作品の「內容的價値」なのである。一人前の男は、最早や藝術鑑賞、若しくは藝術作品の「內容的價値」の鑑賞家としての資格をもつてはゐないのである。

そこで婦人雜誌の使命は非常に重大である。封建的感覺誘惑からブルヂア的感覺誘惑への進まなくてはならないのである。これからの流行婦人雜誌の使命は思ひ切つて封建的感覺誘惑を止めて、大膽にブルヂア婦人、つまりルクズムヴイブの、感覺誘惑に全力を注ぐことでなくてはならない。視聽、使徒パウロ、「阿片」、文化生活、淚、女人崇拜、末期文明を高唱する。女を文化の命令者の地位に祭り上げる。藝術家とヂヤーナリストを婦人文化の合唱者な地位に据える。――こういふ時代が最後まで、つまり行くところまで行かなくては、ほんとうのは生れてはこない。

氣銳の人新進の人

櫛田民藏氏の話

赤松克麿

櫛田さんのことに就いて書けと云はれて、先づ第一に頭に浮んで來ることは、僕が曾つて某雜誌上に書いた櫛田評に對する一部修正の必要である。僕は其の時、彼はマルクス學の造詣深くして、彼の恩師河上肇博士よりも一歩拔んでて居るとの評がある位だと云つたが、これは明かに失言の樣である。其の後、京都の水谷長三郎君（河上門下の英才）が僕の處を訪ねて來れた時、

「河上さんは君の櫛田氏評を讀んで、櫛田君よりは僕（河上博士）の方が勉强して居るよと云はれた。僕等（水谷君一派）もさう思ふ。櫛田さんは東京へ行つてから馬鹿にエラクなつたが、京都時代には我々はソンナには思はなかつた。」

と話した。京都時代には河上博士の聲望に壓せられて、櫛田さんも影が薄かつただらうが、東京へ來てから隱然重きをなしたのは確かである。またそれが至當であらう。然し兎に角、東京に於て如何に櫛田さんが重きをなしても、河上博士の壘を摩すること未だしといふ點は、河上博士並びに其の門下生諸君の證言に依つて明白であるから、僕は謹んで前言を取消さう。

櫛田さんは最近歐洲から歸朝されたが、彼の滯歐中の逸話が折々日本に傳つて來る。然し其の逸話たるや、いづれも彼が如何に妻君に對して忠實であるかといふことを立證するに役立つもののみである。彼がウイーンに行つて妻君の爲めにショールを買つた事や、妻君に賴まれて人形を買ふのに如何に肝膽を碎いたかといふ苦心談や、妻君がハイカラで自分がさうでないから日頃頭が上らなかつたが、今度の洋行で自分もハイカラになつたから、歸朝後は旨く行くだらうとの述懷談の如き、概ね妻惚者（サイノロヂスト）の本領を發揮したものである。

櫛田さんが學生時代に貧乏の味を嚙みしめた苦學力行の試練を經て、今日マルクス學の少壯學者として重きをなすに至つたことに就いては、誰も敬意を表するものであるが、然し今日の處彼は講壇社會主義者の域を脫しないことは確かである。ラデックが「科學的社會主義へと叫んで居る今日の時勢であるから、彼の生活に於ても何んとか局面の一展開を見ることは出來ないだらうか。かく期待するのは强ち僕一人でもあるまい。大原研究所、大學、我等社、――此の邊の緩衝地帶を彼はいつまでも游弋して居るのだらうか。

櫛田さんの顏は、色の黑い骨ばつた反つ齒の神經質の顏は、プロレタリアに親しみのある顏である。僕は彼がいつかは緩衝地帶を蹴にして、まつしぐらに社會主義運動の渦卷の中へ飛び込んで居ることを期待し、且つ確信する。

岸田劉生氏の事色々

椿貞雄

私が殆めて岸田サンに逢つたのは一九一六年一月七日で可なりの雪降りで私が油繪をやつて二三枚の自畫像を持つて行つて見て貰つた。そしてほめられて非常に喜んだ、夫から畫家として自分が始まる、思出は澤山あるが、又いつかの事にして、岸田サンの繪を初めて見たのはその前の年の「三人の水泳する子供」が出た時で田中喜八サンがやつてゐた田中屋でゞある。偶然學校からの歸途看板を見つめて會場へ這入つて壓倒されてしまつた。其後私は岸田氏の作は全部見てゐる。氏は現世に本統クラシックを出した人だ、眞を求む畫家は氏の感化に浴しないものはないであらう。私も殆ど氏に依て心眼を開ひた。氏の現在に至る道程を言ふと、リアリズムから出發して此頃はずう　アイデアリズムの色の濃いものになつて來てゐる。今年の五月の個人展覽會を見た人はそれを知つてゐるだらう。氏の繪を見　その畫論を讀んで感ずるのはその主觀の根深さだ、今の世の畫家の内で氏程鋭く深い美意識を持つてゐる人はないであらう。美に對してしつこい突込み方「飽く迄」と言ふ意力、そしてその頭の明徹さ、心の込め方に驚く。實に確かだ。世間が氏に對して剛嚴と思つたり、理屈ぽくて何となく息苦るしくて近かづけない感じを持つのはそう言ふ所から來るのだ。この事は全く當然起る現象だ。しかし岸田氏と席を同じうしたものは、その人がひどい馬鹿でない限り、氏の親しい温情を受けるので、意外な感を持つ人が多い様だ、日常の氏の生活を書くのも一興だと思ふから少し書いて見様。氏は去年から長唄を敎つて此頃はナカ〳〵うまくなつたなどゝ言つたらたいていの人はびつくりするであらう。三味線も敎つてゐる。舊劇は　に好きでいゝものがあればのがさず行く酒はあんまり多くは飲まないが非常に好きで本式に酒の味がわかるらしい。笑ひ上戸で、この頃は可なり强くなつたからだが先には醉つて床間の上に座つて壁と向ひ合つて獨りでゲラ〳〵笑つてゐた時などがあつた。少くとも私の知つてる範圍では非常な盛んで五題話など實にうまいものだ。ゴロ合せもうまい、歌を澤山知つてゐてよく歌ふ、役者のコハイロなぞもやる。非常な負け嫌ひな方で負けるものは決してやらないが角力丈は負けてもとる、それ位好きだ、何しろ此頃は十八貫ぐらひもあるし得手の技はつり出しだ、なか〳〵自信がある様だ。五目ナラベも自信があつて田舍初段ぐらひの事はあると自分で言つてゐるがどうだか。又非常な自稱物知で何んでも聞けと言つてゐる。例へば屁と言ふ字の出處に就いてと言つた様な事だ呵呵。兎に角物事をつきつめて考へる事の好きな人だ、それから非常に食物に好嫌があつて一時は牛肉ばかり食つてゐた様だ。で旅行したりした時には閉口するらしい。漬物なぞ絶對に付けないが料理やなぞで漬物を平氣で食つたりする矛盾が時々ある。いつたい非常な神經　でクシャミが一つ出ても大變な騒で冬などは六七枚も布團を着て未だ寒がつてゐる。全く理屈では行かない事を可なり持つてゐる、面白味だと思ふ。ガマや蛇なぞを見ると悲觀して頭痛がして來るらしい。「耐らないね〳〵どうしてあんな奴がゐるだらう」そして身慄ひしてゐる。別な事だが子供好きと來たら又大變だ、あんまり好き過ぎてしつこくからかふのでかえつて子供に嫌はれる。子供を追つかけ廻してゐる様と來たら一個の好爺々だ、すつぱぬきはこれぐらひにして。氏は實に自樂を得た人だ。自分の仕事の確信から來る落付きを持自己の道を樂しむ事の出來る様に

―なる事はなか〳〵の事だ。近來として日本畫を毎日描いてゐる。技巧は未だ日本畫家の人々にはかなはないだらうが、その感じの深さでは及ぶ人はないであらう。今年の秋にはきつとそれ等の絵を見る事だらう。人々は樂しみにしてゐていゝと思ふ。書く事は澤山あるが紙數がないのと頭の調子で呑氣な輕い一つの簡單な紹介としてこの一文を書いた。藝術觀は又いつかみつちり書く時があるであらう。（二二、九、四記）

木村泰賢君

高島米峯

木村君は初め曹洞宗大學に入り、後帝大學に入りて印度哲學を專攻し、卒業すると間もなく同大學に印度哲學の講師となり、次いで同大學教授の候補として外國に留學し、最近歸朝したのである。

木村君は「印度哲學宗教史」「印度六派哲學」等の著述によつて其の名聲を高くし、殊に「六派哲學」は學士院賞を受けることになり、氏の左うした方面の實力は、先輩に認められ、後進に崇められ、將來に期待されるやうになつたのである。

外國留學中、木村君は其の專門の研究の上更に一歩を進めて、印度佛教の研究をなした。先づ「原始佛教思想論」は學界の驚異として現に大に讀者を引付けてゐるし、此に前後して「阿毘達磨論の研究」と題する學位論文を提出して新學位令に基いた最初の文學博士の學位を贏ち得たのである。

斯かる經歴を有する木村君の將來は獨り印度哲學の權威として期待せらるるのみならず、佛教界に於ける新思想家として多大の望みを嘱され、又其の望に添ひ得る實力を有してゐるのである、

兎角、學者といふものは、煩瑣な、訓詁的な、骨董的な研究に沒頭するかに思はれるし又左した學風に生きる學者も多いが、從つて左うした學者は思想的に時代を導く點に於て物足らないのだが、木村君は左うした實力を有するに拘らず、最も豐富な思想と犀利な見識とを併せ有するため、佛教の思想を現代に順應せしめて行く點に於て殆んど獨歩の觀がある。

論壇に立つて最も優秀なる研究者であると同時に社會的に佛教の思想を振翳して活躍して行く上に於ても又少しからざる戰士である。

木村君の帝大に於ける印哲教授は高楠博士であるが、高楠博士はサンスクリット及びパーリー語の世界的權威であつて、且つ印度哲學及び印度文學の代表的學者である。在職殆んど二十年であるが、其の間、印度哲學の方面で木村君の如き、及び木村君と同期の出身である宇井伯壽博士の如きを其の門下より出し、サンスクリット及びパーリー語に於ても亦優秀なる後繼者を出してゐるのであるが、此の點に於て、高楠博士はよく其の教授としての職責を全うしたものと言はなければならぬ。

木村君の學界に於ける地位を憶ふと共に、高楠博士の功勞にも憶ひ及ばざるを得ない。

尚、木村君の研究は原始佛教思想論の次に小乘佛教思想論に移り更に進みて大乘佛教思想論に至りて一段落を告げ、然る後、更に新方面の開拓を見ることであらう。

無想庵のプロフイル

辻潤

これまでにも、無想庵に興、を持つた人達から、度々「武林さんと云ふ人はどんな方です？」などゝ聞かれる度に、―― その時分

の自分の勝手な氣持で、いい加減な棚卸しをやつてきた筈だ。しかし改まつて、活字にする爲めに、武林君の紹介をやるのはこれが始めてだ。武林君が、洋行などして、プチットマドモワゼルイヴオンヌなどを御土産にしてエッチラ、オッチラ」御苦勞にも「改造」の小説を書くために鮮居らずに——鵠沼あたりで心中でもやつてゐたら、——こんなお鉢は僕にまわつて來なかつたかも知れない、無想庵の口調を借りれば「一切これ因緣さ——」

忘却　來時道——混沌——猫と婆さん——An other Ken——般若——アーキンチャニヤ——鳩居堂——香茶——ウイスキイ——土瓶——深山聚落！！摩訶止觀——ヘルプ！ヘルプ！——アベロウキテシユペラアーライトモのチンチョウ——迅雷光、——燧石火——小式部——苦集滅道——六波羅密——ナウモフ——植物のやうに——などと、無數のボキャブラリイが僕の頭惱の一角にしまつて在Musōin Lexicon を繰ると出て來るが——こんな單語のやうなものをいくら並べ立てゝ見ても畢竟それは僕自身の獨り合點に過ぎなくなる。之れ等の單語をパラフレーズして、更に懇切叮嚀なデテールにわたるとなれば、僕も又第十何指かの方向へ歩るき出さなければならなくなるだらう、

いづれ武林君の寫眞でも載ることゝは思ふが、體量二十貫余りの、少し猫背の大男が自分の身體を少なからず持て余して、この暑さに机に獅嚙みついて、レギュラアな原稿生活をやつて居るのはよそながら、御苦勞にも思ふが——しかし、獨身時代のアンニュイからは幾分に解放されたことゝ——ひそかに僕などは慶賀してゐる次第である。

武林君の人生に對するスケプテイツクで、ニヒリステイツクな態度は、昔から少しも變つてはゐないやうだ——境遇からと云ふよりも寧ろ、持ち前のテンペラメントと云つた方が適切らしい、だが、何人に限らず、——一度この人生を突き詰めて考へたことのある人間なら——この世を厭はずにはゐられると云ふ方が、不思議な位に僕などには思はれる。

武林君は恐らく、この二十幾年間、絶えず同じやうな問題に惱まされて、そのために苦しんで來たにちがいない。そして、人並外れて强烈な自意識の所有者は實に、その苦惱をどれ程、深かく噛みしめたことか——それは恐らく當人、以外の人にはわかるまい。且つて座隅生活などと稱して、ミサントロープを眞向にふりかざした時でさへ、逆にどんなセンチメンタリズムがかくれてゐないと誰が保證することが出來るだらう。

だが、由來、人間の性格などと云ふものはいい加減、複雜なものだから、——特に近代人の分裂した心持は、さう一方に片附けることは出來ないから、——又見る人によつて、その觀察が自づから異つて來るのだから、さう簡單に定めることは出來ない。

武林君の書く物を讀んで、少しばかり學問のあるプチブルジョアのデカダンの醉拂ひが退屈まぎれに、原稿紙にいたづら書をして好きな手前味噌や、ノロケを羅列してゐるとしか思はない人もあるだらう、——無想庵もいいが、あの時々出て來る、摩訶止觀——や、野狐禪臭ひペダントリイにはあてられると云ふ人もあるかも知れない、第一態度が不眞面目だと、顔を顰めるモラリストもかなりあることだらう。みなそれぞれの立場からは尤もな說かも知れない。——だが、ニヒリズムの暖簾に腕押しは無益である。

現象即實在——煩惱菩提——色即是空なら、ニヒリストがいくら、アッペタイトが强く、色氣タップリで、案外、素敵な「ミエボー」だつたりしたところで一向差支ひはない筈

だ。そして、恐ろしく放膽で又神經質な無想庵は拾年一日の如く、「無爲徒食」をする程ウルサク氣にして、寧ろ、イヤミと思はれる程に、繰り返してゐる程、正直で小心なのである當然の結果、コンミユニズムに色氣を持つ。

僕は人と藝術とを區別して見ることの出來ない人間であることはこの前にもどこかで云つた筈だ。兎に角、無想庵は先輩としても友人としても、自分が大好な人物である、なぜなら、僕自身の多感を、彼の内に發見することが出來るからである。

指定の枚數を超過したからこれでやめて置くことにする。(八月、二十九日)

小牧近江君

平林初之輔

一寸見ると小牧君は貴公子然たるところがある。どこかの國のプリンスといつた所がある。併しそれはもつて生れた容貌だけに過ぎないことが一度あつた人にはわかる。實際彼は浮世の風にもあつたことのないぼつちやんのやうに見える紅顔の青年だ。そこで彼を知らない人は、一目見て彼を貴族趣味のハイカラなおまけに役人氣質の男と誤解するかも知れぬ。

又彼は一見感情家らしい。いつでも昂奮してゐるやうに見へる。談話が巧みで、さかんにジエスチユアをまじへる。手のとゞく範圍内に對手がゐると對手の背中をたゝく、時にはこつぴどくやつつける、對手の背中まで手がとゞかぬ時には自分の股の邊をたゝいてがまんしてゐる。

ところが實際に、小牧君はてんで貴族的でない。家だけは近來立派な家に住んでゐるが身のまはりのものなどは精細に檢査するとあまり上等なものは一つもないさうだ、酒は好きだが、カフエや料理屋のやうなところへは殆んど行かず、裏通りのおでんやとか繩ノレンのやうなところばかりをさがしてゆく。それだつて滅多には行けないらしい。それと同じく彼は感情家らしいに拘らず、意志の人であり主義の人である。骨の髄までのインターナショナルストであり、アンチ・ミリタリストである。それは彼の生命だ。彼からインターナショナリズムを引き去るのは彼を生きた屍骸にするやうなものだ。そこでフランスではクラルテ運動に投じ、日本へ歸ると「種蒔く人」の運動、世界主義文學運動を起した。血で血を洗ふ國際戰爭、その根源たる資本主義とブルジョア・パトリオチズムは彼にとつては不倶戴天の敵である。

彼の談話も巧みだが彼の文章にも不思議な力がある。メスのやうな鋭さがある。それは聽く人讀む人にとつてはペルシユアジーフだといふよりもレジスチーブルだ。その點で天成のプロパガンジストだと言へる。尤もフランスから歸つた當座は日本文がまづくて、幼な友達の金子洋文君などが直してやつたとのことだけれど。

併しこれ程の辣腕家も個人としての世渡りは下手だと見へていつでも貧乏しどほしらしい。講和會議には隠れた殊勲者であり、フランス語にかけては推しも推されぬ腕をもつてゐながら、官僚主義の霞ケ關では彼の手腕を認める上役もゐないと見えて一向出世をせぬらしい。月給なども二年間居据りだとのことだ(一寸外務省には内緒で素破ぬいてをく)。

彼の容貌、性格、氣質は父君そつくりだ。父君といふのは秋田縣土崎の名物男、前代議士近江谷井堂氏だ。此人は日露戰爭の時代のパシフイストとして、ポーツマスにゐた小村全權に祝電を打つた程の變り者である。以前には土崎きつての資産家だつたのださうだが、町のために築港を計畫して身代を棒にふつて

しまつたのださうで、今でも土崎町民は近江谷一家を尊敬すること非常なものださうだ。不正を憎む點、歴史の機關者となり、前衛となつて一時代にぬきんでゝゐる點は小牧君そつくりだ、たゞ違ふのは父と子との差、時代の差、社會進化の段階の差があるのみだ。

小牧近江といふのは假名で　近江谷コマキハコマキは馬へんに向といふ一寸活字などには無い字だ、本年二十九才、外務省の嘱托で勤務等か大勢、近く新婚の典をあげるといふことだ。

フランス滞在時代のアネクドートも大分あるらしいが紙面が無いから省く、兎に角天數羅の味は食つて見ぬと分らぬやうに小牧近江を知る早道は一度あつて見ることだ。

矢崎美盛君

江馬修

僕は自分が文士でをりながら、文士達とは餘り親しい交友が無い。そのかはり、どういふ譯か知らないが、僕の親しい友達と云へば阿部次郎君にしろ、矢崎美盛君にしろ、その外哲學者が多い。僕は特に哲學者を撰んで友達を持つやうに心がけた譯でもないが、兎に角事實はさうである。そして正直な所、僕は今の所謂文士達よりも、からいふ人達の方が本當に深い事も分るし、眞面目な話もできて嬉しいのである。

今も云つたやうに、矢崎君は哲學者であるそして僕は哲學の方には餘り素養のあるものではない。夫でゐて彼の事をとやかく云はうとするのは、少し具合が惡い。そればかりで無く、僕は彼といふ人間を個人的に餘りに知つてゐる。かうして斷片的に書くのが却つてむづかしい位に知り過ぎてゐる。だから僕は今こゝで少しも批評がましい事は云ふまい。唯僕が色々な話の中でよく矢崎君の事を云ひ出すやうに、何の纏りもなく二三言だけ書いてみやう。

僕がこの男と知合つて先づ感じた事は——非常に多くの人がさうだらうと思ふが、——非常に明晰な頭腦の持主だといふ事である。彼は實際に良い頭をもつてゐる、僕の知つてる限りでは阿部君と並んで素的に良い頭だと思つてゐる。そして彼があのとほりな歯切れの良い、はつきりした、力の籠つた調子でものを云ふ時、述べられた思想なり事柄なりがいかにも鮮やかに感じられる、それで僕のやうに哲學について專門的な深い素養の無いものでも、彼からカントやヘーゲルの話を聞くと、何だか非常に分り善いやうに思ふ。しかもそのためにカントやヘーゲルなりが淺薄なるものに見える恐れは少しもなく、寧ろ却つて一層奥ゆかしい、深いものとしてさうなのである。

哲學の事ばかりでなく、文學藝術についてもさうである。僕はこれらについても彼は一番に分りの良い、話せる人間の一人だと思つてゐる。隨つて僕は自分の創作なんかについても、阿部君と並んで彼の批評に最も信頼を置いてゐる、僕の作品が世間からどんなに非難されやうと、彼が認めてくれる限り僕は安心してゐる。又世間でどんなに賞められても彼が認めない時は多くの場合彼の方が本當だと思つてゐる。何故なら、彼はいつでも實によく創作を理解するのだ。だから悪口を云はれても少しも惡く云はれた氣がしない。

然し僕が矢崎君を信愛するのは、何も頭が良いからばかりでは無い。彼はなか〱辞良で、心情の優しい男だ。どうかすると、人は彼のもぢや〱頭と、むづかしげな顔付とを見て——普段は少しもむづかしい顔なんかしてゐないが時としてよく不機嫌らしくむづかしい顔をする、——強情で、きかぬ氣の、つき合ひにくい男のやうに思ふ。事實彼にきかん

坊でもあり、つむじ曲りでもあるが、どうかすると直ぐにほろりとする程氣の弱い、優しい所がある。實に情に厚い。僕は今でも長い間の彼の友情を思へば涙ぐまずにはゐられない位である。

彼にも面白い事が少くない。然し彼の事を話すのは、同時に僕自身の事をしやべると同じやうになる恐れが多分にあるので、今は餘計な話は控へて置く。

考へてみると、僕が初めて彼を知つたのは足掛もう七年の前の事だ、彼が未だ大學へ入つたばかりの時だつた。その頃から――こんな言ひ方は妙に先輩ぶるやうで氣になるが彼には分る筈だ、――彼が將來きつと立派なものになることは信じ切つてゐた。そこで彼の眞價が段々に世に認められて行くとは、僕にとつて大いなる愉快である。さりとて、今さら彼の將來について豫言めいた事をいふのは止めやう、そして彼の堅實な地味な努力の歩みが除々に彼自身を示して行くのに委せやう。（九月三日夜）

求婚廣告

=近藤憲二の印象=

大杉榮

今ではいが栗坊主になつてゐるが、つい先達までは綺麗な長い髪の毛を房々と長くのばして、それが額の上に垂れさがつて來るのを終始氣にしては五本の指で掻き上げてゐた。それを、何處かの演說會の騷ぎの時に、多勢のお巡り共に取り圍まれて手どり足どりはまだいゝとして、髪毛までもつかまへられて毆られたり蹴られたりしたのをひどく口惜しがつて、其の歸り路に安バリカンを買つて來て自分でガリガリとやつて了つた。そして人さへ見れば直ぐ其のバリカンを取り出して、君「そんな頭をしてゐちや損だよ」と宣傳しては、緣側に座らして新聞紙を廣げて其の胸に當てさせる。

これで大事な「怒髪衝天」の特徴はなくなつて了つたが、それでもまだ、奇峰のやうに聳え立つた肩と、大して大きくはないが炬のやうに光る眼と、口の右の角から上一寸程の鼻と並行してる何かの傷あととは、お巡り共をしり込みさせるには十分だ。

ことしのメエデエの時、彼れが友愛會かどこかの旗を奪ひとつて、其の鈴さきをふるつて單身警官隊の中に突擊して行つた光景の物凄かつた事は、今でもまだ仲間の間の話のたねになつてゐる。

が、彼れは好い男だ。僕が彼れと一緒に行つたカフエの女給共の間では、「あの好男子のかた」で通つてゐる位だ。從つて彼又よく女にほれられるのだが、女給にだつて冗談一つ言へない野暮天だ。ほれて來たつてちよつとよりつきようもない。そして大がいは例の眼でにらみ歸されて了ふ。

しかし、其の彼れにだつて、二三年前にはちようど彼れに似合ひの綺麗な若いゝ女があつたんだ、今だつて決して女嫌ひといふ譯ぢやない、「遊んだつていゝんだけれど、どうも僕は直ぐ夢中になつて參つて了ふ癖があるんでね。」と云つてゐる位だ。ついでに云つて置くが、彼れは今年二十八歳になる獨身者だ。

そんな風なので、そしてお負けに氣の置けない友人とのほかは隨分無口なので、敵や或はそれに似た人間共には大分近づきにくいやうだが、しかし友人の間ではなかなか愛嬌者だ。「もう三四年來、僕の名で出してゐる雑誌『勞働運動』の實際經營者なのだが、商賣用で行くどこの家にでも頗る評判がいゝ。「實におとなしさうな、しかししつかりしたいゝ人ですよ。」

と云ふのが、まあ定評だ。そして最近にはとう〱書店アルスの北原君に見こまれて、そこの番頭さんに住みこむ事となつた。が、彼れが『勞働運動』の經營者であり、編輯長である事には、ちつとも變りはない。やはり勞働運動社の合宿の中にごろ〱してゐる、

彼れは早稻田大學政治科の出身だが、學校では文學部の方へばかり顔を出してゐた、そして今では政治經濟の議論もちつともしなければ、文學臭い事もまるで云はない。社會主義同盟の時なぞに、其の執行委員の中の幹事として一番の働き手であつたのだが、それでも何一つ理屈らしい理屈を云ふた事はない。今でも、謂はゆる社會主義者等がボルシエキと無政府主義者とに分れて、いろ〱といがみ合つてゐるのだが、そして彼れは其の後者に屬してゐるのだが、彼れは默つて何んにも云はない。そして彼れがしたいと思ふだけの事をコツ〱やつてゐる。ボルシエキキの奴等はちよつと理屈が違へば個人としても敵のやうに思つてゐるが、彼れは其のボルシエキキを平氣でつき合ひもすれば往き來もする。

どつだらうこれで彼れに惚れて來てそして彼ににらまれない女はないものかな。

有三氏のこと

能島武文

確か大正九年がもう暮れやうとする十二月の末のことだつたと覺えてゐる、冬の休みが始まつて數日、私は歸省の挨拶に、夕方から有三氏の宅に出かけた。

その晩は歸省の挨拶の外に、丁度それから一ヶ月程前、ついこの九月「劇と評論」で私が發表した「波紋」の稿を書き終へて、讀んで貰ふやうにとお願して置いたその批評を聞く爲でもあつた。

挨拶が濟んで二人、あの二階の八疊の間に机を中にして坐つた。

その前々から有三氏は私にとつて苦い人であつた。

「さう遊び廻らないで勉強しろ。」

何かの序でに氏の口から出る詞はからであつた。その都度私は氏の苦い詞を自分への鞭として、有り難く聞きながら、矢張今日はどこ昨日はどこと遊び歩いてゐた。

その晩も氏の前へ坐るなり、つい一兩日前に出かけた、どこかの芝居の稽古場の話を始めたやうに覺えてゐる。默つて聞いてゐた氏は一言二言いつもの苦い詞を言ひかけて、直ぐ汚い物を追ひやるやうに、「まあそんな話はどうでも好い。それよりはこれだ。」

そう言つて「波紋」の原稿を取り出した。

「君には好い芽がある、が、今の儘では駄目だ。もつと深く自分を掘れ、自分の内に沈潜して自分を見ろ。ぢつと閉ぢ籠つて考へ給へ。」

詞はまだ長く色々だつたが、要するにかう言ふ意味だつた。私は内々自惚れてもゐた「波紋」のことには一言も觸れて呉れないのが悲しかつた。ぢつと見詰めて居た。机の上の茶の青い色を今でも私は覺えてゐる。「波紋」の原稿を抱いて、私は暗い心になりながらその頃ゐた雜司ヶ谷の宿へ歸つた。

が、その翌日東京を立ち、國へ歸つて獨りになつてぢつと考へてゐると、氏の詞がぴた〱と胸にこたへて來た。さうして私は氏に長い手紙を書いた。

それから四年の日が經つた。今年の八月一日、市村座の帝劇での初日の夜だつた。「俳奴」が濟んで、二人は中央亭の卓に向ひ合つた。而もまだ麥酒の來ない中に、氏の口から出たのは私に對する攻撃であり、非難の詞であつた。私が好い氣になつて雜文ばかりを書いてゐて

戯曲の創作をしないことの批難であつた。

　批難とばかり言つては眞實の意味が分らない程、鋭い痛いやうな詞だつた。私は何とか返辭をしながら氏と同じやうに麥酒を飲んでゐた。が、胸はさう言つて呉れる氏への感謝と自分の好い加減な行爲とに對して一杯になつてゐた。私は目の中の熱くなつて來るのをさへ感じた。

　この二つの、場合の前に二人の間に茶があり、後の場合に酒があつたのを、私は偶然の出來事だとは思へない。私はそこに四年間に於ける氏の動きを見る。よく人から氏のことを聞かれて私が「麥酒でも酒でも飲みますよ。」と言ふと大抵の人が不思儀さうな顏をして二三度訊き返すやうにそれ程世間では氏のことを四角四面の人のやうに考へてゐるらしい。しかし近頃の實際の氏は酒も飲めば麥酒も飲む、と言つた所でさう澤山ではない。が、奈良の宿では二人で麥酒を三四本も明けた程の酒量はあるのである。

　しかし酒を飲んだからとて話が變つたり何かするのではない。麥酒を飲んで、更に藝術の話に花が咲くのである。

　かう言へば氏自身は昔でも酒を飲んだと言ふかも知れない。しかし私はその他の場合のことも考へて、これを氏自身の人間的進歩の一つの現はれだと考へたい。「藝術は人間の顯はれ」だと說く氏に於て私はこれを人格に圓みを求めてゐる氏の現はれだと信ずる。

　有三氏の人間的發展は、「津村教授」から、最近の「指鬘緣起」に至る藝術的進展に伴うて最近一二年間特に甚だしいと私は考へる。

　少くも顏が人格の表現だと言ふ氏、また「後光」と言ふことを口にし、作品に於て柔かみを求め、味を出さうとする氏のことに思ひ到れば、頷くことが出來るであらう。

　しかも柔か味を求めてはゐても、中心を流れてゐるものは、常に「生命の冠」を描いた氏であつて、たとひ近しい間であつても、否近しい間であればある程不正は勿論、一點の妥協をさへ許さないのは、氏が一年一作、假りそめにもしない態度に見て首肯し得るであらう。

　作品に於ても「坂崎出羽守」から「指鬘緣起」に至つて、私は初めて氏自身の內なるものが、表現に於ても氏獨自の形をとつて現はれて來たのを感ずる。

　此の上はこの獨身のものに達した氏の藝術が、人格の進展と共に、どう伸びて行くか私の期待はそこに繫がつてゐる。

　聞けば此の頃は犬を飼ひ始めて朝夕の散歩につれて歩いて樂しんでゐると言ふ話だが、體を犬につれて歩かれて健康になるのは此の上もなく結構な話だが、どうか創作をもつれて行つてしまはれないやうに、來年の夏にならなければ創作の見られないと言ふやうなことのないやうに祈つて此の稿の筆を擱く。

板垣鷹穗君のこと

村田良策

　板垣君に就て書くのもいいが、難儀の人を引張り出すだけに中途半端なことを書けば當人は勿論私としてもいい氣はしない。しかし最近著書を二種も出したと故本當に君を知つて呉れる人が益すならば結構だと思ふのは私の氣持だ。當人は知己を自分だけで選んで持つてゐるだけに今更名前を明るみへ晒らすのは心外だと云ふかも知れぬ。まして私が君の知友面すれば妙な顏をしさうな氣がする。そこで貴重な品を鑑賞して第三者に「貴方は何う思ひますか」といふ位な程度で云はせて戴く。

　骨董品扱ひにして了つて濟まないが、氏は

クラシックを懐しく思ふ人だ。容貌風姿もさうだが、趣味性向何うしても自然主義なんかになじまない。高踏的と云へば云へる。貴族的な品位を悦んで格調の正しいものなら何んでも親しんで行く、云はゞ形式主義を苦にしない。その點から何時もキチンとした冷たさがないでもない。常人は無理にでも卑屈なお世辭やお叩頭はしないで過さうとする。それだけに世の中のざわめきなどは無關心でゐられる。つまり實際的行動的でなくして理想家であるし、世の中の所謂情にもろい側の人ではない。しかし自分と同じ軌道同じ心持の理解さへあれば必ず相抱き相語り興味になると云ふ風だ。氏の親しむ方面は人事でも思想でもその範圍が明確に劃されてゐる。氏は東京に生れ今だに東京のごく一小部分しか知らない。家を出て立寄る範圍は略毎日同じだ。白木屋に書籍部が出來て白木屋を知つた以來最近寄留地も増へたと云ふ具合だ。靜かな中野の書齋に書を讀み、樂を聽き、繪を味ふほかには何時も一定した軌道を歩く。亂ちき騷ぎも、花見遊山も恐らく知らない、靜かな明晢な頭腦の人であると同時に古典的な趣味の人である

　氏の頭腦は明敏すぎる、時として過敏だ。鋭く見ぬくと一緒に頭の中で論理的に整理する。だからざつくばらんな話も氏の耳に入つたが最後氏の神經と論理で始末つけられて流出す。往々にして吾々の放言が微妙に整理されて第三者に通ずるので放言の本元は大いにまごつく。つまりルーズな、散漫なことが氏の頭を通ると首尾整ふた形になつてのつぴきならぬ形になつて現はれる。まして氏自身に關することは殆んど凡て論理的な發展であり方法的整理を遂げた結果が現はれる。氏に親まれる人々も氏を中心にして、同化さる側と同化する側とにハッキリ分けて想像し得るのも面白いことだ。

　こう云ふことが氏の著書にも現はれる、艶をつけたり、やりつ放しの小細工は云はゞ脱線なのだ。だから素つ氣ない。多く知り盡してゐるのに必要のないことは惜し氣もなく切棄てる。これは明敏な頭腦でなければ出來ないことだ。脱線のない回轉車であると同時に、角度に補充の要らぬ結晶體だ。大きい光輝ある結晶となり、律の大きい點となることも遠いことではあるまい。

　氏の思想と云ふても未だ氏自身の系統ある話又は著書に接しない。唯勉學に倦まぬ精進の結果は必ず現はれることと思ふ。落付いて哲學に沈潜したいと何時も云ふ。もとより哲學思辨の人ではあるが、美術に關する造詣も葬て了ふのは餘りに惜しい。

　要するに學徒としてふさわしい態度を常に忘れることの出來ない人であるから、趣味の方面でも何でも屋にはなれないし、さうなることは恥辱であると思ふに相違ない。こうしたことから近頃は殊に一つに研究を限定しやうとする氣持でゐるらしい。氏の潔癖が學徒としての一つの道をきめるなら寧ろ夫れは悦ばしいことだ。もし趣味の方面から進んだ道が退くならそれはやはり豐饒な安息處として氏の情緒を充ふばかりでなく方法的に氏の哲學を滋はすことであらう。氏は一度起つた事件を棄てるにしてもその方法だけは忘れない人であるから。

「赭土」の中西君

堺　利　彦

　勞働運動者としての中西伊之助君はまだ疑問の中に在る。社會主義者としての彼は一層の疑問である。只だ「赭土に芽ぐむもの」の著者としての彼は、あざやかに成功を示してゐる。

　私は先づ社會主義者としての彼を知つた。

然し其の知り方は淺いものであつた。彼れの大きな體軀に頼もしさを感じ、又その存外やさしい笑ひ顏に親しみを感じながら、思想の徹底については幾許の知る所もなかつた。私は恐らく彼と共に英文の社會主義書を讀んだ事がある。彼が社會主義の理論を究める事と英文の讀書力を養ふ事とについて、可なり熱心である事だけは善くわかつたが、それが果してどこまで進み得たかは、十分私にわからなかつた。

或時、彼は一つの短篇小說めいたものを私の雜誌に投書した。私は直ぐにそれを雜誌に載せた。それは幾許の注意をも引かなかつたけれども、兎にかく私はそれに依つて、彼にそういふ文才のある事と、彼が曾て朝鮮に在つて何事かの爲に監獄生活をした事とを知つた。それまで、彼れの過去について何事も知らなかつた私は、只だ通り一遍の(そして社會主義的傾向のある)新聞雜誌記者とのみ彼を見てゐたが、その後は、漠然ながら彼れの背景に若干の興味を引かれてゐた。

兎かくする中、彼は勞働運動をやりだした。交通勞働組合理事長として彼れの名が世間に知られて來た、其の運動の經過や、成功や、失敗については、私は其の委しい事を知らない。いだ其の成功が餘りに早く、其の失敗が亦た餘りに早かつた事だけを記憶する。そして彼れの行動に對する善惡兩樣の批評を屢々聞いた。否、卒直に云へば、可なり惡い批評の方を多く聞いた。私はそれに無理がないと思つた。私自身が直接に彼から聞いた所だけから判斷しても、彼には可なり術策が多かつた、惡意の術策ではないにしても、勞働運動者としての純眞が足りないと感じられた點があつた。

然し彼は今、出獄の後に於ける新らしい勇氣を以て、そして又、近く再び來るべき入獄の前に於ける感慨を以て、更に別個の勞働運動をやつてゐる、その新運動がどんな徑路を取つてゐるか、どんな効果を示してゐるか、それはまだ私に分つてゐない。勞働運動界には又いろ〳〵彼に對する批評が起つてゐる。

そこで要するに、勞働運動者としての彼、社會主義者としての彼は、まだ疑問の中に在る私としては勿論、彼れの社會主義が大いに徹底して、彼れの勞働運動が純眞なものになる事を切望してゐるが、それは總て將來の問題に屬する。彼れの此の次の入獄は、蓋し此の將來を決定する爲に、甚だ有力であるだらう。

所で今度は彼れの文學的方面。彼が小說を書く爲に朝鮮に行つてゐると聞いた時。私は直ぐ先年の短篇小說を思ひだした。然し私は只、彼も亦た流行を追ふのかと思ふに過ぎなかつた。それから「赭土に芽ぐむもの」が發行されて、其の一部を寄贈された時、私は稍や冷笑の態度を以て、試みにそれを讀みはじめた。所が、どうだらう、私は直ぐに其の筆力に魅せられてしまつた。「實にうまいもんだ?
——私は屢々ひとりごとの嘆聲を發した、

尤も、私は「感服屋」である。「堺はマズイ物なら何んでも賞める」と、口惡屋の荒畑寒村から云はれてゐる程の男である。私が感服したからと云つて少しも、其の本の價値を定めるには足りないわけである。然し「赭土」はマズイどころの段ではない。寧ろウマすぎる。中西君にこういふ文學的のタシナミがあらうとは、實際わたしの思ひもかけない所であつた。

そればかりではない。私は「赭土」に依つて中西君の過去の生活を知つた。殊に私との因縁が、私の思つてゐたよりはズツト深く、ズツト古い事を知つた。即ち、私が彼を知つたより十餘年の前、彼は既に私等の「平民社」に遊びに來てゐたといふ事を知つた。彼が社會主義思想をその頃に植ゑつけたのは、決し

て新らしい事ではなかつたのである。

そこで段々「赭土」を讀んで行くと、其の思想感情の現はれ、其の觀察判斷の行方が、ピツタリ私の氣持に合してゐる。朝鮮人の悲慘な境遇と其の反抗心とに對する同情、亡國の山河に對する哀傷と感慨、其の山河の間に於ける主人公たる涉子の放浪の生活、總てが私の胸を跳らせるに足るものばかりであつた。

尤も、第一には珍らしいといふ事もあつた。朝鮮の事を書いた小說といふものは、「赭土」に、て始めて之を見た。柳絮の亂れ飛んでゐる間に、淡紅色の袴をつけた若い娘が鞦韆に乘つてゐたり、小娘の群が道ばたで鳳仙花を摘んで、指の爪を駒鳥の喉のような色に染めたりしてゐる所などには、飛びつきたいような美しさを感じた。噂に聞いてゐた妓生（キーサン）の姿も、初めてハツキリ私の頭に映つた「哀號々々」といふ泣き聲の使ひ方も、初めて分つた

然しそれらは單に小いさな情緒に過ぎない。全篇に漲つてゐる反抗の氣、叛逆の芽ざしが如何に強く私の心に響いた事よ。殊に獄中生活に於ける、極寒極熱の兩極を痛切に描寫しそれに關聯して遂に或る逆徒等の刑死を幻想した所などは、私の如き讀者をして、實に泣くにも泣けない心持を起させた。更に最後の一節、大同江に張りつめた厚氷が、底から通ふ脈々の春氣に侵されて、今や續々として潰裂する其の爆聲を聞きつゝ、曉の薄あかりに故國に向つて去らうとする所、如何にも力強い結末であつた。（私は今、「赭土」の現本を手元に持つてゐないので、原文を引用する事が出來ない。）

私は固より、小說に對する私の批評眼を信ずるものではない。それで私は只、私に取つては「赭土」は「非常に面白い」といふ事だけを多くの人に語つた。私の勸めに依つて「赭土」を讀んだ人は、大抵みな同じく「非常に面白い」と云つた。文壇批評について可なりの專門家もそれに承認を與へた。然し所謂文壇は殆んど「赭土」を無視してゐた。

けれども中西君、あまり早く「認められる」のけ決して有りがたいものではない。永い「無視」と戰つて遂にそれを征服する所に愉快がある、

數日前、私は又、中西君の短篇「不逞鮮人」を「改造」で讀んだ。同時にそれに對する生田長江君の批評を「讀賣」で讀んだ。長江君は中西君の不手際な點を惜しんだ後、それ「にも係はらず。」何處までもまともに生きて行からとする作者の著しい誠實と勇氣と熱情とは、囊中の錐の如く作品の表へ突き出してゐて、否、銃劍の如く突き出されてゐて、通りかゝつた總ての人々へ、「敵か？ 味方か？」と浴せかけてゐる慨がある」と書いてゐる。「無視」の何んのと云ひながら、中西君はもう流行兒になりかけてゐるのかも知れない。少し早や過ぎる。自重が肝腎だ。

恒藤恭

芥川龍之介

恒藤恭は一高時代の親友なり。寄宿舍も同じ中寮の三番室に一年の間居りし事あり。當時は恒藤もまだ法科にはいらず。一部の乙組即ち英文科の生徒なりき。

恒藤は朝六時頃起き、午の休みには洗濯をし、夜は十一時の消燈前に、ちやんと齒を磨いた後、床にはひるを常としたり。その生活の規則的なる事、エマヌエル、カントの再來か時計の振子かと思ふ程なりき。當時僕等のクラスには久米正雄の如き或は菊池寛の如き、天縱の材少からず、是等の豪傑は恒藤と遊び、酒を飲んだりストオムをやつたり、天馬の空を行くが如きは、或乘合自動車の町を走るが如き、放縱なる生活を喜びしものなり。故に恒藤の

生活は是等の豪傑の生活に對し、其規則的なるよりも一層規則的に見えしなるべし、僕は恒藤の親友なりしかど、到底彼の如くに几帳面なる事能はず、人並みに寢坊をし人並みに夜更かしをし、凡庸に日を送るを常としたり。

恒藤は又秀才なりき。格別勉強するとも見えざれども、成績は常に首席なる上、佛蘭西語だの羅甸語だの、いろ〳〵のものを修業しゐたり。それから休日には植物園などへ、水彩畫の寫生に出かけしものなり。僕もその御伴を仰せつかり、彼の寫生する傍らに半日本を讀みし事も少からず、恒藤の描きし水彩畫中、最も僕の記憶にあるものは冬枯れの躑躅を寫せるものなり。但し記憶にある所以は不幸にも畫の妙にあらず。躑躅だと說明される迄は牛だとばかり思つてゐた故なり。

恒藤は又論客なりき。——その前にもう一つ書きたき事は恒藤も詩を作れる事なり。當時僕等のクラスには詩人歌人少からず。「げに天才の心こそカメレオンにも似たりけれ」と歌たへるものは當時の久米正雄なり。教室の机によれば何となく怒鳴つて見たい心地するなり」と歌へるものは當時の菊池寛なり。當時の恒藤に數篇の詩あるも、亦怪しむを要せざるべし。その一篇に云ふ。

かみはつねにうゑにみてり
いのちのみをそのにまきて
みのれるときむさぼりくふ

かみのうゑのゆゑによりて
かみのみなをほめたたふや
はかなきみをむすべるもの

もう一度新たに書き出せば、恒藤は又論客なり。僕は爾來十餘年、未だ天下に彼の如く恐るべき論客あるを知らず。若し他に一人を數ふべしとせば、唯兒島喜久雄君あるのみ。僕は現在恒藤と會ふも、滅多に議論を上下せず。上下すれば負ける事をちやんと心得てゐる故なり。されど一高にゐた時分は、飯を食ふにも、散歩をするにも、のべつ幕なしに議論をしたり。しかも議論の問題となるものは純粹思惟とか、西田幾多郎とか、自由意志とか、ベルグソンとか、むづかしい事ばかりに限りしを記憶す。僕はこの論戰より僕の論法を發明したり。聞說す、かのガリヴアアの著者は未だ論理學には通ぜざるも、議論は難からずと傲語せしと。思ふにスウイフトも親友中には、必恒藤恭の如き、辛辣なる論客を有せしなるべし。

恒藤は又謹嚴の士なり。酒色を好まず、出たらめを云はず、身を持するに清白なる事、僕などとは雲泥の差なり。同室同級の藤岡藏六も、やはり謹嚴の士なりしが、これは謹嚴すぎる憾なきにあらず。「待合のフランクティオネンは何だね?」などと屢僕を困らせしものはこの藤岡藏六なり。藤岡にはコオエンの學說よりも、待合の方が難解なりしならん。恒藤はそんな事を知らざるに非らず。知つて而して謹嚴なりしが如し。しかもその謹嚴なる事は一言一行の末にも及びたりき。例へば恒藤は寮雨をせず、寮雨とは夜間寄宿舍の窓より、勝手に小便を垂れ流す事なり。僕は時と場合とに應じ、寮雨位辭するものに非らず。僕問ふ。「君はなぜ寮雨をしない?」恒藤答ふ。「人にされたら僕が迷惑する。だから、しない。君はなぜ寮雨をする?」僕答ふ。「人にされても僕は迷惑しない、だからする。」恒藤は又賄征伐をせず。皿を破り飯櫃を投ぐるは僕も亦能くせざる所なり。僕問ふ。「君はなぜ賄征伐をしない?」恒藤答ふ。「無用に器物を損すのは惡いと思ふから。——君はなぜしない?」僕答ふ。「しないのぢやない、出來ないのだ。」

今恒藤は京都帝國大學にシュタムラアとかラスクとかを講じ、僕は東京に文を賣る。相見る事一年に一兩度のみ。昔一高の校庭なる

書挽檔下を逍遙しつゝ、談笑して倦まざりし朝暮を思へば、懷舊の情に堪へざるもの多し。即ち改造社の囑に應じ、立ちどころにこの文を作る。時に大正壬戌の年、黄花未だ發せざる重陽なり。

我國エスペラント界の恩人
小坂狷二氏

川原次吉郎

世界の文化史は書き更へられつゝある。日本の文化史も當に書きかへられやうとしてゐる。書きかへらるべき文化史上の主要人物は從來の舊式な偉人傑士と全然別異の範疇に屬する人であるであらう。しかもそれは今や民衆の裡に民衆の力として確實に育まれつゝあるのである。日本エスペラント界の大立物として、將た日本エスペラント學會の總帥として十有幾年あらゆる艱難に打勝つて、今尙寸時もその努力の鋒を鈍さゞるのみならず、益々その熱意を醱めつゝ眞摯なる奮鬪をつゞけてゐる人類的平和の戰士小坂狷二氏の如きも亦實に新らしき文化史上に於ける新らしき範疇の人物であると云はればならぬ。「事の成るは成るの日に成る。」に非ずエスペラントが今日の隆盛を見るに至つたのは勿論内外幾多の先覺者の血のにじむやうな苦鬪と苦鬪、努力と努力との結晶であるが、就中我國の該運動に於ける小坂氏の健鬪は殊に日本人たる我々として到底忘れることの出來ない所である。「エスペラント」は人類平和の象徵である。正義と人道の大旆である。固陋なる侵略的帝國主義者偏狹なる似而非愛國ならばいざ知らず、苟くも人と人との相愛すべきを信じ、民族と民族との相助すべきを念ずるものならば、何人と雖も學ぶべく且つ護るべき新世界の樞機である。エスペラントの普及は實に人間一生を献げて沒頭するに最も意義ある價値ある事業たるを失はない。小坂氏一たびエスペラントの存在を知らるるやその瞬間「余の一生を托して成すべき仕事は正にこれなり。」との靈感と確信とを得たと云ふ。然し氏には一方に亦先天的にエスペランチストたるの素質が有つたのである。

氏の父君は小坂千樹氏、岩國の人である。横濱の兵學寮にあつた際、小隊長として奧羽戰爭に出征されたこともある。その後佛國に留學してサンルイ中學を經てサンシール兵學校、陸軍大學等に參謀學を專攻し、止まること十一年にして歸朝。歸朝後は參謀本部、陸軍大學等に職を奉じ、その間又外遊二回、齡四十二歳陸軍中佐として世を去られるまで殆んど半生は海外にて送られたのである。我國參謀學專攻者としては第一人者であり又陸軍葬式條例の構成者としても知られてゐる。因に陸軍葬式條例の最初の被適用者は氏自らであつたと云ふ。氏の沒せらるるや故山縣公も痛く氏の英才を惜まれ「小坂在して山縣兵を語らず」と嘆じたといふことは有名な話である。かく一生の半近くの年月を海外に送られし父の子として幼時から外國語に對する觀念が深く腦裡に刻み込まれてゐた我が小坂狷二氏が從來エスペラントによつて外國語問題に苦しめれらつゝある國民を濟度せんと發心されたことは決して不自然ではなかつたのである。次に氏の母君は今尙矍鑠として氏の夫人と共に氏の事業を援けてをられる。デップリ肥つた上品な溫顏、教養ある態度、新時代の子を育つるに最も相應はしき理解と同情との所有者。若きエスペラントの仲間は「日本エスペランチストの母」として心からの尊敬と思慕の念を献げてゐる。母堂の父親は西田明則氏、同じく岩國の人、凡に宇内の大勢に通

じ早くより漢字排斥洋學採用の議を藩王に建議し、ついに岩國藩をして天下に率先して英國人を雇はしめるに至つたと云ふ。四十歲の時陸軍に入り直ちに少佐に任ぜられた。氏も亦故山縣公の愛顧厚く、東京灣口の海堡の如き全く氏の建白とその優秀なる技能と劃策とによつて成就されたものである。甚だ進歩的な人で當時まだ珍らしかつた西洋料理を常食としたり、所謂「文化生活」の先驅をなして誠に明治新人の優であつた。その影響と教化とを受けたる猶二氏の母堂は我子に對しても亦、世の常の母と異なり最も理解ある教育をされたことは云はずも哉「私は初めから猶二のエスペラントには不贊成ではなかつたのですが、何分餘り熱心過ぎるものですから、猶二の體にさはりはしないかと思ひまして、それで二三度、少し控へ目にしたらとゆつてきかせたこともあります。それでもとう〳〵猶二の熱心には内のものも親類のものも皆感服させられてしまつて、後には私までが謄寫版やら發送やらの手傳で夜遲くまで一生懸命になつてやりました。」母堂のからした追懷談を聞くとき我等の眼にはいつの間にか淚が溢れるのであつた。人類の愛を正義の爲めに何ものも犧牲にして——健康までも意とせず——鬪ひ續けて來られた我が小坂猶二氏の尊き心よ、信念よ。

毎水曜日の夕、小坂氏の御宅で（學會の假事務所もこゝに置かれてある）東京エスペラント會の集りがある。色白の優しい若い奥樣は「ボーナン、ベスペーロン」と皆を迎へて下さる。そこへ御母堂が若きエスペランチストなる御孫さんの平和（パーツォ）君を抱いて來られる。「ボーナン、ベスペーロン」と母堂が云へば平和君も負けない氣で「ボー〳〵」と云ふ。「エスペラントの小父さん」ザメンホーフ博士の石膏像」を指したり、懷しき祖父君の大禮服姿の寫眞を顧みたりして下へ降りて行くと、女中さんが「ボンボールマンヂ」どうぞお召しあがれと云つて御菓子や御茶を運んで下れる。實に小坂氏の家庭は全家擧げてエスペラント化されてゐる觀がある。氏がエスペラントの取り持つた緣によつての夫人との結婚の披露式の時、天下の花嫁姿を惜しげもなくつゝ立つて「エスチマータイ、ゲシンヨーロイ：」とエスペラントで挨拶をしたといふ噂はどうも本當らしい。

氏は明治二十一年の生れである。未だ若いこれからの人である。これまでにもうあれだけの仕事をしてゐるのだから將來は愈々刮目して待つべきものがあるとは一般の評判。十三歲の時、東京陸軍中央幼年學校に入りロシヤ語を學んだ。氏が外國語を學んだ最初であると云ふ。明治三十九年病氣の爲一年間の休學を許可されて橫須賀の實家で療養中エスペラントなるものの存在を甫めて知り、それから今日まで「飯は食はない日があつてもエスペラントをやらない日はない」位に狂熱的な努力であつた。翌四十年八月病氣の爲め遂に陸軍を止め、志を工科に變更した。乃ち四十一年東京の正則英語學校に入り英語を甫めて始めた。時に年二十。一年間の學修で四十二年には日出度、天下の難關とされた一高の入學試驗を通過された。氏は、「これ一重にエスペラントのお蔭であつた」と述懷されてゐる。エスペラントは誠に英語其他の外國語の學習を容易ならしめる複效能があるからである。一高より大學時代までエスペラントの勉強の爲めに學校には許されたる最大限度に近くまでの缺席をしてまでも日夜孜々として勵まれた。大正五年工科大學機械科卒業、直ちに鐵道省に入り今日は工作局技師としてその透徹した頭腦に省内の重寶とされてゐる。

氏は理想家である。希望を遠く將來の理想社會に致し、その爲めに現實的な何ものにも

あまり意を介しない。貧も困も、富も名譽も服裝も社交も氏にあつては一片浮雲の散沫に過ぎない。實に氏は身裝は構はない十年一日の如く綠屋の染め出された夏冬毎に一かけづゝの色あせたネクタイ、舊式な中折帽。而もその心根や偉、その信念や壯、何のことはない往年の高山彥九郎を大正の今日見るが如くである。更に適切に云はしむれば「日本に於けるザメンホフの再現」である。氏に役所以外のどんなことでも氏のエスペラントの爲めの時間をさかしむることは出來ないと云つてをられる。「盆も正月もエスペラント」といふは正に小坂氏の面目を最もよく道破したものであらう。氏はエスペラントの爲めとて決して役所を休まない。土曜日の夜行で地方に出かけて日曜日にはエスペラントの講演をやつて直ぐ又夜行で歸つて翌朝の出勤時間には必ず役所の机に向つてゐる。これには同僚上役下役が皆が敬服措かざる所である。エスペラントの爲めならば二日や三日睡眠をとらなくとも平氣でゐられる程そんなに氏の精神力と熱意は偉大なのである。たま／＼病魔に侵されて床についても、醫者の忠告も家人の心配も同志の制志も退けて九度何分の高熱を八巻頭でなほし校正や編輯に寸時も休まれない。

人間の武事に對する熱心の最高潮はついに人間をして人間以上たらしめる。人類文化史が日本人小坂狷二の名を永久に忘れざらしめんが爲めにそのエスペラントに關する事の數頁を割くであらうことは必ず豫期し得られる所である。

氏は最近玉の如き第二子を舉げられた。名を由須人と稱する。ユストは正義を意味する。人類の平和と正義の爲めに氏の二人の愛子が、父の志を繼ぎ母光子夫人の希望の光に包まれて、將來必ずや次時代我エスペラント界の重鎭となられることであらう。

三木清君の印象

濱本野花

西田幾多郎博士の衣鉢を傳ふるものとして山内得立、三木清の兩君を數へた時も有た、然し乍ら山内君は年を經ると共に其の藝術的乃至感傷的傾向が著しく濃厚となり、既に性格的に師西田教授とは其の行跡を異にするに至つた。三木君の鋭敏なる感受性と旺盛なる學風は教授達や先輩の間にも特に認められて居たのだが、獨逸に渡つて後、從來大學院で專攻して居たカントの認識方面の研究を措てゝ新カント派の歷史哲學に赴かんとして居ると聞く。

西田博士の後繼者としては何人と雖も桑木博士の門下の田邊元博士に指を屈するであらう。扨て其の後に至る者が何人であるかは吾等門外漢の窺知する所ではないのだ。西田博士の門下には服部謙造、河瀨憲次、岡野留次郎、土田杏村、務臺理作、三宅剛一の新進哲人を數へる事が出來る。特に山内君と三木君とを舉げる所以のものは兩君が性格的にも學問的にも、異彩を放ち而も既に業を有せず業績の發表されたるものなく全くの未成品として將來に多大の期待を囑せられて居るためである。

三木清君は播州龍野の產で詩人三木露風とも何かの關係を有して居る、長野中學より首席にて一高一部に入り大正九年京大文科を出るまでに彼の天才は既に燦として光を放つて居た、殊に放逸なる性格は幾多の逸話を製造し彼は單に學業の優秀を以てのみならず文學生界の名物男としても知られて居たのだ。

彼の風采は甚だ振はない。まるで柔道部の選手とでも云つた武骨な體格に袖口の綻びた木綿絣を膝も露はに着たところは到底文科の

生とは見へない。大學を出ると一年志願兵として姫路聯隊に勤務したが平素の彼にも似ず細心に軍律を嚴守し模範兵として除隊になつたなどとは又彼の一面を語るものだ。除隊後、大學院學生として大にハイカルべき筈なるに彼は黒羅紗の將校マント一枚を新調したばかり、鐵縁の近眼鏡の下から覗く小さな瞳も髪の生際さへ明瞭にないほど顔色も何も彼も昔の三木君其の儘であつた。

或夜、智恩院境内で自動車に轢き倒された友人と二人と默々と歩いて居た背後から轢かれたのだ、肩を並べて居た友達は無事だつたのに彼は自動車の爆音も頭光も氣付かなかつたほど思索に耽つて居たものだ。そして暫く入院した。

今年の五月、渡歐前の彼は新調の脊廣服に新しい中折帽を冠つて師友の家に別れを告げて歩いた、然し何麼に慾目に見ても青年紳士とは見へず寧ろ北米行の移民勞働者としか見へなかつた。其れほど彼れの風采は、土臭かつたが思想は頗る鋭く新しかつた。

伯林に着いて暫くすると、留學生の淫蕩な生活と伯林の動搖せる空氣とは彼の性格にふさはないと云つて菩提樹の若葉美しき七月、去つて西南獨逸のハイデルベルヒに移つた尤も此の都の方が伯林よりも彼の研究に便宜が多いためでもあらう。歸朝後の彼は何麼にハイカラになつて來るか、そして何麼思想を輸入して來るか未知數だけに面白いのだ。

三木君が京都に在る日　彼は一高時代の朋友數氏と結んで一　のグループを作し、大學を中心とする文科學生の間に異彩を放つたものだ、彼等の一團は多く藝術家肌であつた、中には學校を離れて洋畫や彫型に走つた者もあつたが、其うした自由奔放な藝術生活者を三木君は好まなかつた、三木君はデカダニズムを惡魔のやうに呪つた、そして北白川の農家の二階を借りて孤獨の生活に入るやうになつたが、彼は机の下に一組の茶器と牛乳瓶を忍ばせて訪問者があると自ら紅茶を煮て客にすゝめた、其れは有難いが茶器は滅多に洗つた事がないのだ、先客の使用したカツプを其の客にも出す位いは平氣であつた、それを客の目前でやつて見せた。彼には、何處か東洋風豪傑の風態があつた、其の半面には極めて無邪氣なところも有つた、路傍の兒童が笛を吹けば道行く彼も歌つて舞ふと云つたやうな嬉しい所もないではなかつた。

要するに彼は未知數である、其れだけ此處數年の試錬に依つて何れだけ大をなすかが昨今の哲學界の謎となつて居る。

松岡駒吉君

饒平名智太郎

松岡駒吉君は日本勞働總同盟　の最高幹部だ、友愛會がその古い使命を果して解體し、日本勞働總同盟といふ新組織となつて現はれると同時に、鈴木文治君の名が影を薄くし、それに引きかへて松岡駒吉君の名は光り出して來た。

私は松岡君と、未だに一面の識だもない。只だ一昨年、三崎會館で建設者主催の演説會があつた時、初めて聽衆の一人として彼の顔を記憶し、それから去年は、芝浦の五月祭で彼の指揮者振りを見せられ、今年となつてからは、又たいつか丸善の洋品部で、彼の姿を見たことのあるくらゐだ。そして最初に彼を見たときの印象とても、最早私の記憶には、淡い夢幻のやうにしか殘つてゐない。身丈の高い、慓悍な凄い顔をした、力に充ちた戰闘的の人だといふやうな茫漠たる概念しか思ひ出されない。彼の話した内容が、何であつたかを、私は今、到底思ひ出すことは不可能だ。

二度目に芝浦で、彼をみた時の印象は、可

なりに鮮かなものがある。當日は、たしか、日本に於ける第二回目の五月祭だつたと思ふ。そして勞働組合同盟會の成立してゐた時のことだから、正進信友大進の如き左傾的組合もそこに參加してゐた。然るにこれらの左翼組合は、當日友愛會の提議した最低賃金制の確立、八時間勞働及び普通選擧實施といつたやうな宣言に對して、大いに議事の進行を妨害した。その時だ、司會者たる松岡君の態度には寛容を缺ぎ、まるで彼は、憤怒を面に表はしつゝ反對組合を叱咤してゐた。私は松岡君に狹量と思ひの外の專制の氣色を讀んで大いに失望させられた。職工出の最大の指導者だとして、彼に嘱目してゐた私は、聊か、彼の評價を輕減するの動機を與へられた。

それから丸善洋品部と云へば、當世流のハイカラのみの行くべき場所として觀念附けられてゐた私が、そこにプロレタリアの指導者たる彼れ松岡君を見出したときは、全く奇蹟の如くもあり、一種の皮肉とも感ぜざるを得なかつた。私は彼が、何を買ふかと、細心に好奇を寄せて眺めたことを容易に思ひ出す。

松岡君の勞働總同盟とまでは、未だ到達せないが、友愛會から勞働總同盟へと轉化した歷史の必然は、松岡君の如き、有爲なる純勞働出身の指導者を産み出したことに私は興味を持つ。この意味から云つて、松岡君は、たしかに新しい勞働を代表する新人物だと稱し得られると思ふ。

私は松岡君の人物評を草すべく、何等の材料をも持つてゐないことを遺憾とする。が、併し、彼の意見を裏書きする一事實を、私は誰からか聞いて知つてゐる。それは大正七年の春、友愛會内で、勞資協調の可能に就いて議論が上下されたとき、鈴木君の徹底協調論に對して、絶對の協調不可能論を主張したのが松岡君だつたさうだ。私は思ふ、當時の友愛會内の空氣にあつて、これだけの明があつたといふだけども、既に彼は見上げたものだつたと。

わが國の勞働運動界も、こゝ兩三年間に於て、凡ゆる思想を一通り吸收した。そして今や輕佻浮華の時代が去つて、堅實省察の時代が來た、その表徴として首肯されるものが最近に組合同盟側よりの主動によつて、再び成立した全國の聯盟だ。この機運を導くに就ては、如何なる人たちが中心となつたか、私はその間の消息に通ずるものではないが、兎に角、全國的の聯合が成立したといふことそれは、勞働運動史上に、新紀元を劃することになりはせぬかと、私は密かに喜んでゐる。この提案に當面して、最大の團体を代表する松岡君の活躍の舞臺が、一層擴張されたわけだ。だから松岡君が、緊褌一番して本當に活動すべきは、これからだとも云へる。私は松岡君に望むに、飽くまで志操を堅固に懐いて、職業的指導者の陷り易い誘惑に囚はれず"Slow and sure"の代りに"Quick and sure"に、わが勞働界のため、随つて新社會建設のために、健鬪して貰ひたいと思ふ。

竹内仁氏の事

生田長江

竹内氏が何時頃から、どんな物を書いてゐられたか、私は殆んど知りません。阿部次郎君の思想を批判された論文を、「我等」誌上に拜見したのが、氏の御名前を目にした最初であります。それから右の論文と密接な關係のある「新潮」誌上の論文をも讀んで見て、なか〳〵しつかりした事を書く人だなといふ感じを一層强めました。

偶ま改造社の山本さんに會つて、あんなしつかりした事を書く人には、早速何か御頼みになつて見ちやどうですと、餘計な差出口を

しましたのは、氏が井上仲氏の弟さんであり、現に帝大哲學科に御在學中であるといふやうなことも、まだ耳にしない時分の事であつたと思ひます。

本當を云ふと、竹内氏の紹介者たることの光榮を擔ふべく、私は今尚ほ十分の資格を具へて居りません。それでも構はないから、兎に角何か書けといふ、『改造』からの御下命を御斷りしかねたばかりです。

阿部君との論爭に於いては、阿部君が十年乃至十數年前の本流的思潮(勿論我が日本の智識階級の上層に於ける)を代表してゐたと殆んど同じ程度に、竹内氏が今日の最も進んだ、最も新しい理論を代表してゐたといふのは、大抵の人々から承認され得る事實でありませう。

そして論爭の態度の正々堂々としてゐる點から云つても、議論の内容が充實緊張してゐる點から云つても、結局竹内氏の方が少し立ちまさつてゐるやうに思ひましたが、いかがなものでせうか。

もつとも、竹内氏も以前阿部君の書いた物をだいぶ愛讀されたこともあるとのことで、共鳴點らしい物が今尚ほどつかに殘つてゐるやうでもあり、又何かしら先天的に共通な素質をもつてゐられるやうでもあります。

加之(のみならず)、斯う云ふ私の感じを忌憚なく展開することを許されるならば、阿部君にしたところで今時分大學を卒業する位に若かつたら、今日竹内氏が思想してゐる程度の事は思想し得たかも分らないし、竹内氏も阿部君と同年輩であつたなら、阿部君とあまり違くないやうな處へのこされてゐたかも分らないと思ひます。

これは一面阿部君に對する私の敬意を表白する爲めでもありますが、他面また、竹内氏に悉く感服してしまつてゐないことを言明する爲めでもあります。

竹内氏が秀才的に恐ろしく良い頭をもつてゐられるといふこと、秀才的にすばらしく立派な文章を書かれるといふことは、恐らく何人も否定し得ないでせう。しかし氏に對して所謂秀才以上の何物かを、嚴密に思想家的な、藝術家的な何物かを期待していいかどうかについては、阿部君との論爭その他、これまで私の目に觸れた限りの材料だけでは、殘念ながらまだ何とも云ふことが出來ません。

以上、わざ／＼人を紹介する爲めの物としては、隨分いかがわしい、そして甚だ失禮な事ばかり書いてしまつたやうですが、一體に私は、全然無名の人、もしくは非常に不遇な地位にゐる人に對してこそ、むしろ持ち上げ過ぎる位にも持ち上げたくなるのですけれど、例へば竹内氏位でも、そろ／＼有名になりかかつて來てゐる人に對しては、成るべく甘い言葉をかけないやうにと心掛けてゐますので、自然さう心掛けるやうになりますので、全くどうにも致し方がないのであります。

加之(のみならず)失禮ついでに思ひ切つて失禮な、けれども幾分根據のある忖度を逞(たくま)しうするならば、私が竹内氏に敬服してゐることの百分の一ほども、氏自身は私なぞを眼中に置いてゐられさうにありません。從つて私程度の人間からの毀譽褒貶は、氏にとつて全く何でもないものでありませう。

末弘嚴太郎君のこと

室伏高信

評判の多い人は必ずしも評判のいゝ人ではない。評判のいゝ人は必ずしも評判の多い人ではない。そこで大學の先生なぞの事では、評判の少くない方がいゝことだと思つてゐる人がある。世間の評判に上る人は俗人だと決

めてかゝる人がある。世間的の評判がよければよいほど、また多ければ多いほど、俗人だと考へるのである。

末弘教授のことは、私は評判を聴くこと久しくて、未だによく知つてゐない。が何處へ行つても評判の多い人だ。そしてまた評判のいゝ人だ。評判のよいのと多いのとを兼ねてゐる人だ。未だ一度でも末弘君に會つて見た人は、世間の「評判」といふものが噓ばかりを傳へてゐるものでないことを直ぐに了解ができよう。

一見して、極く平面的な人だ。明るみの多い人だ。貼りたての障子を見るやうだ。讀書する人の常として、赤味の少けない顔色ではあるが、何時も開けつ放しな、快活な、天眞爛熳な人だ。秋の野に放たれた小馬のような人だ。法律家でも、そうした法律家らしい灰汁がなく、學校の教師で御飯を食べてゐながら先生らしい寂し味もない。私はこの人の專門の學問、民法上の問題については無知識だから專門家としてのこの人の値打ちはたゞ人の評判に聽くだけだ。私はこの人とはたゞに、二三の雜談を交しただけだ。そのせいでもあらうが、學究的なところが微塵もなく、どんな問題でも、思つたことを思つたまゝ言つてしまう。多辯家でもなく、寡辯家でもない。歪められたところがなくて、「自由教育」で育てられた人のやうである。

私の最初に會つたのは今年の五月頃、慶應義塾で、私も一場の講演するために出て行つた時である。二度目は「改造社」の催しの時で村松正俊、平林初之輔、小牧近江なぞの「過激派」の諸君なぞと一所になつて、三十分も雜談を交へた。その日末弘君から同君の名前が「イズタロウ」と讀むのだといふことを敎へられた。會が終つて、末弘君や鹿子木、木村添野君等の間に大議論が闘はされたといふことであつたが、この日私は武林無想庵同文子の兩君から第二次會に招待をうけたので私は前記の過激流の三君とともに招待會の方へ行つた。

三度目は輕井澤で會つた。輕井澤の夏期大學へ講演に行つてゐた人や別莊持ちの人やの間で小さい集會が催された。島田（三郎）氏、平野氏、小野塚博士、鹿子木博士、杉森孝次郎氏、西村文化生活、それから末弘君なぞが集まつた。座談の間にも、末弘君の所謂ケースメソッドが實行される。學者としても、人としても、このうへもなく感じがいゝ。歸り途に、島田老と途中で別れてから、暫らくの間、話しながら歩るいた。背は私の首つたけ位しかないが、大股にそりかへつて歩るく人だ。小供の兵隊、ボーイスカウトが進軍する時のような歩き方だ。

陰氣な性格な人は深みのある人だと言はれてゐた。快活は輕薄の隣りのように言はれてきた。しかし一丈の井戸は暗く、晴れた空は明いく。

勞農ロシア承認問題批判

そんな事はどうだつていゝ問題ぢやないか

大杉榮

勞農ロシアの承認だつて！どうせ日本の政府にそれを承認させる方がいゝかさせない方がいゝかと云ふ問題なんだらう。そんな事は、殊にお互ひ等にはどうだつていゝ問題ぢやないか。

一たい、勞農政府が、無産階級の新國家がだね、ほかの資本家國家に承認を求めるなんて、あんまり矛とんな意氣地がなさすぎる話ぢやないか。もともと誰れが國交を斷絶させたんだい。ザアの帝國を倒し更にケレンスキーの民主國を倒して、其のあとに今のロシア社會主義聯邦共和國を起したレニンの勞農政府が、ザアやケレンスキイの各國に對する借金を踏み倒した事に始まるんぢやないか。尤も勞農政府は、當時、直ぐにも他のヨオロッパ諸國に、ロシアと同じやうな革命が勃發するものと豫想してもゐたらう。が、それがちよつと見こみが立たないとなつて、そして自分の國でもどうも思はく通りうまく行かないとなつて、自分までもこれ此の通りと國家資本主義にまで後戻りして見せて、どうです、よそ通り又つき合ひをしてくれませんか古い借金は幾分か證文で返しますからもう少し現なまを貸してくれませんか、それでないと、とても私のところの資本主義は復興して行けませんから、もよく云へたもんぢやないか。そんな風だから、どこでどう威張つて見せたつて、資本主義に降伏だなんて云はれるんだ。

尤も[illegible]ト何んとかのロシアとドイツとの講和のロシアの謂はゆる屈辱條約を見るがいゝ、今はどんなに頭を下げたつて、又どんな證文を書いたりどんな金を借りたつて、遠くない將來にはきつと各國に革命が起るんだから、其時に又うんと寢返りを打つてやるさと云ふ腹があつたところでだ。實際又公然とさう云つて憚りもしてゐないんだがね。其のロシアの國家資本主義への後戻りのざまはどうだい。何んだつて？ロシアではまだ共產主義を實行するだけに資本主義が成熟してゐないんだつて？そんな生はんかの唯物史觀論なんかよせやい。之？まだ何にか云つてるのかい。前進の前の後戻りだつて？そんな屁理屈はどうでもいゝやい。それよりか、勞農ロシア卽ち勞働者と農民とのロシアの足もとをもつとよく見ろよ。新經濟政策のロシアの勞働者と農民とがどんなになつてゐるか見ろよ。そして其の勞働者と農民とがしかも共產黨の中の勞働者と農民とが、レニン始め其の首領等を革命の裏切者として、革命のやり直しを叫んで居るのを見ろよ。何に？そいつらは精神錯亂だつて？馬鹿！どこの國で、本當の革命家等が、其の國の權力者から氣違ひだつて云はれなかつた事があるかい。勞農政府は、そんな七面倒臭ひ唯物史觀論だの妙な屁理屈を云つてゐる間に、其の謂はゆる資本主義の成熟だの後戻りのあとの前進だの、始まらない前に、此の氣違ひ共にぶつ倒されるんだ。そして革命のやり直しが始まるんだ。どうだい、これも唯物史觀論の必然かい。

ボルシエヰキ革命などと云ふ革命のにせ物に脅かされて、封鎖だの武力干渉だのとさんざんに手を燒いたあげくに、とう〳〵其の正體の分つた爲め、資本主義の各國は、早速此の新資本主義の勞農ロシアと手を握るがいゝぢやないか貸金の證文も取るがいゝぢやないか。そして又新しく資本を貸してやつて、其の新しい儲け口をつくるがいゝぢやないか。お仲間だよ。何んの遠慮があるものかい。そして此の新資本主義國家を助けて、それと一緖になつて、本物の革命の來るのを防ぐがいゝぢやないか。

おい等にはそんな事はどうだつていゝんだ。おい等はおい等で別にやらなければならない仕事があるんだ。

莫斯科及び全露の益友となつて經濟的協力を開始せよ

杉森孝次郎

一九一九年のはじめであつた。友人の中野正剛君が、パリからロンドンへ早く歸つて來て、日本政府は、オムスク政府援助の名義下に、出兵する方針らしいと、同宿のわたくしに聽かせてくれた。日本政府は實に、當時將軍コルチヤックの成功を信じて期待したのだ。

わたくしは中野君の通報談のあまりに不條理なるに驚いて、しばらくは、あいた口がふさがらない實狀であつた。しかし、中野君は、誤報でないことを確說してやまなかつた。わたくしは、同君にむかつて、日本政府が、ばかなことをするにも程があるといふ感情をのべた。それは、道德的判斷にもとづくといふよりは、科學的判斷にもとづいてであつた　すなはち、コルチヤックはまけるにきまつてゐる。かれが支持するオムスク政府などは、泡沫よりもはかない運命を持つてゐることは見え透いてゐる。問題として一瞬間たりとも考へて見る餘地もない。明白な運命だ。善惡正邪の詮義はしばらく措き、日本政府が、負け相撲と知れきつたものに、勝相撲だと誤診してのひいきを表することが、なんともいへずなさけなかつた。もしも、正義善德を目的としての行動なら、成敗利鈍はかならずしも問ふべきでないに一定してゐる。しかし　打算にもとづく利益を目的として行動し、その打算が全然狂つてゐたとするならば、はづべき不聰明ではないか不德に加ふるに無智をもつてするものではないか。當代の政治家に、かならずしも正、善に對する忠誠をば豫期しない。マキヤヹリ主義の信者にむかつて、獅子の勇もなく、狐の智もないことをば寬假する氣になれない。

大連會議も、目下進行中の長春會議も、わたくしは、あたまから深くこれを研究する興味になれずに今日に及んだ。空間的

に考へて極東シベリヤが、遠く露都莫斯科から離れてゐるといふ事實に、ない意味をつけて思ひ立つた仕事ででもあるやうに、日本政府が、腦中樞を相手どらずに、一二の末梢神經ばかりをめがけて、交渉を開始し、小利を盜み去らんとして汲々たる者の觀を引きつゞき呈し來たつたことを、わたくしは、日本の名譽のために遺憾に思うて來た一人だ。全露を相手に交渉開始する確信と成算とがない位なら、動かずにゐなくてはいけないと思ふ。輕擧と妄動が、しかるに、オムスク援助以來の日本政府の一貫した對露原則であり、對露方法であつた。

わたくしは、全露を相手とし、そして國際關係の正中位に進みいでて、全露の益友たる意思を、實行目錄と、具體的案件とを携へて表明することが、日本の一急務だと考へる。先づ現在の莫斯科政府を國際的に承認して、日本政府は、それと正式國交を開始する方途に進まなくてはいけないと考へる。政治組織經濟組織の上に於ける彼我兩國間の多少の差は、彼我國交を不可能にすべき事情ではなく、彼我國交の上に新機軸を必要とする事情だ。政治組織、經濟組織とならべては見たものの、問題とされる餘地がいくらかあらうと考へられる方面は、精確には、經濟組織の一方面を唯一方面とする。狹い意義に於ける政治組織方面の彼我兩國間の差は、眞實には、一顧をだも値ひしない。

日本國民及びその政府は、對露問題に於ても、誤解と迷信と無智を超脱して、政治、經濟、文化各方面に於いて、全露と國交を開始するための障碍を合理的極小限に近づけ、その便宜を合理的極大限に近づける努力を、この際切實に要する。

今のところでは、日本の精神がぬるい。態度が小さい。われら人類は、不幸にして、少數のものをしか信頼しえないかも知れん。しかし、すべてのものを愛すべきだらう。たとひわれらの現實的信頼を値ひする相手は滅多に見つからないとしても、われらの現實的友愛を値ひする相手は隨所、到所に發見される。新ロシヤの益友たる意思が、われらの品性に於いてあまりに不熟だ。對露難の致命的缺陷は恐らくはこゝにある。

最初に、偶然、中野君を引き合ひにだしたが、對露政策の立案者としては、同君は、從來、わが國に於いて、最有能の一人であつた。同君及び他の人々がすでに發表した意見のうちで、わたくしが同感であるやうな部分を、こゝに再産する勞をはぶく。

勞農露西亞承認問題と私有財產權

猪俣津南雄

一

勞農露西亞承認問題の擡頭および緊張は、各國が戰前の有無相通關係の復興の退つ引きならぬ必要に迫られた結果であるとするのは、たしかに、根據のある見方である。そして復興される有無相通關係に露西亞の參加することが何處までも必要であると各國が認め、または認めんとして居るといふことはもとより其の見方に含まれて居るのであつて、樣々な事實からたやすく證據立てる事が出來るのである。退つ引きならぬ必要といつたが、それは、企てられてる有無相通關係の成否如何には歐洲にいくつかの國民的集團をかたちづくる三億餘の人間の生死の運命がかゝつて居るからである。それ程の必要に迫られて起つて來た勞農露西亞承認問題は、しかしながら、恐ろしい紛糾を惹き起した。わけても面白いのは、それに對する世人の態度である。彼等は、そうした紛糾が極めて自然であると考へ、當に起るべき事の起つたもののやうに少しも怪む樣がないのである。もつとも、此の問題の事情に通じた者は、そのやうな世間の態度からが既に、敢て怪むに足らぬとするかも知れない。縱しんば其れが『過激派』を相手にした話で無かつたにしても、此の紛糾した問題の中心には、財產權の問題が橫はつて居ることに、着眼した者は――そして財產權の問題こそはあらゆる貴いものを打忘れ、打捨てて爭ふに價ひするかの如くに信じ、振舞ふ今日の人情、世態に氣づいて居た程の者は、どれ程、承認問題が紛糾しても驚かないであらうし、世間がそれを當然することに對しては、先づ以て、頷きの微笑を禁じ得ないに違ひないのである。

二

勞農露西亞を承認するといつても、それは、世界の經濟的復興に於ける一ト役を露西亞にも割當てる意味に外ならないのだから、其の役を勤め得る丈けの經濟力を露西亞に與へるのでなければ、承認といふことも無意味の限りである。天然の富源を

誇りとも力ともするのではあるが、七年にわたる戰亂と封鎖と飢餓の御陰で、生産力が極度に低下して居る現在の露西亞は、農業、工業、交通上の諸機械、諸材料、もしくは其れを代表する資金を切要して居る。さればこそ、共産主義戰線の退却をも餘儀なくされた次第であるが、切要するものを手に入れるには、それの供給力ある國の政府または私人と貸借取引の關係を結ばねばならない。しかも露西亞の現狀では所要の諸機械、諸材料其他の工産品もしくは資金を、多額に速かに手に入れるのでなければ、折角の潛勢的生産力を世界經濟復興の舞臺面に活現し得る見込が、當分立ち兼ねる。『速かに』、『多額に』が不可缺條件であるから、どうしても供給國側の政府の手を煩はさねばならない。少くとも、其の保證を煩はさねばならない。勞農政府が、『此の』承認を先決要求として居るのは無理もない次第なのである。

けれども、共産主義露西亞と資本主義諸國との間に取引關係貸借關係を成立たせやうとすると同一瞬間に現はれて來るのは財産權の問題である。これ迄のし來りでは、一切の經濟力は直接、間接、必ず財産權を通して作用することになつて居た。財産權を基礎として契約關係が生じ、取引も、貸借も行はれるといふ風になつて居た。然るに、勞農政府は、其の肝心の財産權の敵なのではなかつたか。財産權を呪ひ、壞つたものではなかつたか。共産主義を標榜し、私有財産主義を否定するものと取引、貸借關係を結ぶ爲めに、其の政府を承認するといふにも增して無分別な沙汰があらうか——。かういふ風な設問には、設問としての興味を既に感じ得なくなつて居る者も少くないに違ひないにも拘らず、泰西一流の政治家達が勞農政府承認を拒否する理由として力言する處は、畢竟、其の邊を出でないことを知らねばならない。彼等の眞意が必ずしも其處にばかりは無いことは略ぼ想像し得るにしても、其れを表面の理由として高く掲げる時に多數の支持を受けるのを見た丈けでも、財産權とこへ言へば、其のたゞの觀念すらが如何にリアルであるかに今更ながら驚かれるではないか。

三

例へば、米國の商務卿として令名あるフーヴァーであるが、彼れに依れば、『財産權は偶像に非ず、商、工業の要具であつて船舶の無くてならぬ如くに無くてならぬものである。外國人の財産權に十分な保證がなければ、一切の交易、投資は無益』であり、從て『共産主義を拋棄せぬ限り、勞農露西亞の承認は問題で無い』のである。これは、やがて、佛蘭西當局の主張であり英國日本の政治家の內にも多數の共鳴者を見出す主張である勞農露西亞の新經濟政策』表現（八月號掲稿參照）を資本主義への

降伏と認ひた宣傳の効果が現はれて以來、勞農露西亜に財産權無しといふ神話の魅力もまた衰へたのであるが、半獣でない迄にも依然として『誠意皆無のボルシェヴイキ治下の私有財産權がどうして當てに出來るであらうか。まして、彼等が外國人に許す財産權を！

けれども、私有財産權の安全は、どのやうな政府の下に於ても、これが絶對なものであり得ないことは常識圏内の眞理である。勞農政府が眞に資本主義諸國の商人、會社を切要して止まない以上、それらが露西亜に輸入する商品、露西亜で得た利權に關する財産權の安全の爲めに、勞農政府はあらゆる努力を惜まぬであらうといふ、これも常識圏内の期待は、ボルシェヴイキに誠意がなくとも利己心さへあれば、先づ裏切られた筈がない。少くとも、既に二ケ年余に亘る英國其他との取引に於て、そのやうな不始末のあつたを聞かないのである。それでも、私有財産權の夢魔は、ジェノア會議に於て、勞農露西亜に對する裁判上の治外法權の要求となつて現はれた。其の不面目な撤回は、勞農露西亜が、破産はしても尚ほ、往年の日本、現在の支那ではない事を證據立てたものである。現代資本主義國の歴々ともあらう者が、破産の露西亜に治外法權を強ゆることをようしなかつた程に――讓つて破産の露西亜に協力を求めねばならない程に、それ程歐洲資本主義經濟の病症は進んだのである。かうした際に、ひとり躍動する私有財産權觀念は、熱に浮かされた狂態を想はせる。『共産主義を拋棄せぬ限り……』といふに至つては、(財産の敵たる)勞農政府を倒さぬ限りといふのと均しく、難境のわが身の程を忘れつゝ過去四年間の苦い經驗に依て漸く消え失せやうとする不聰明な希望に尚ほも女々しく未練を殘す醜態である。それ程までに、私有財産權の妄執は現代支配階級の胸に喰くもまた深いのである。

四

ジェノア會議では、勞農露西亜に對して、尚ほ二つの要求が提出されてゐる。其の一つは、革命前に外國人の所有、經營に屬した諸企業及び諸財産を、舊所有者の手に返せといふのである。私有財産の原理から見て恐らくこれより正當な要求がまたとあらうか。この正當な要求に對して、傲慢にして沒分曉漢な勞農政府代表が答へて曰ふには、吾等は、産業の復舊をはかりて極大の生産力を出來る丈け速かに實現し度い希望から國有の鑛山、工場其の他樣々の事業を私人に貸付するに當つて、外國人の舊所有者は既に露西亜に於ける經驗に富んで居ることであるから、吾々は進んで彼等に優先權を與へつゝある。けれども、これら産業の處分方法を外國が指揮命令することは、明かに勞

勞農露西亞の主權を侵害するものである。また、舊外國所有者の權利の爲めに、既に農民の間に分配された土地を取返すことや、既に統一された新組織の下に公營されつゝある石油、石炭、電氣等の大工業の大部分を外國人の私營に引戻すことは、露西亞生産力の復活に死命的な障害を與へることなしには、實行不可能なことである……と。實際、露西亞の農民と無産階級は、既に、新制度の有機的構成部分となつて居るのであるから、今更、彼等の手から、土地を奪ひ、大工業を奪ふことは、露西亞を再び内亂の巷に化する所以に外ならない。佛蘭西、白耳義が上の要求を固執して讓らなかつた時に、英吉利は、勞農露西亞の主權の尊重すべきを強調して佛蘭西を戒めたが、巴里タイムスは之れに答へて、自國の産業を國有にすることの出來る各國政府の主權は、また、外國の資本家が國有とされた自己の財産に對して賠償を受ける權利を含むのだから、若し、該政府が賠償金支拂の能力のない場合には、據所ない——と言ふのである。ラデツクは、之れを評して、タイムスのいふ處は、「黄金のある所、權利ありで、これこそは、資本主義的「權利」の觀念の古典的な一例であるといつて居るが、『人間は、汝の額づくべきものは黄金なり』とは、吾々の平常讃仰するマキシムであるのであるし、取るべきものは取つてその人間的結果の如何を問はないのが、理想を本質とする私有財産原理の長所なのであるから、件の原理から見て佛蘭西の要求の正當なのは多く疑を挾む余地がないのである。

五

私有財産原理から見て、尚一層正當なのと見られるのは、露國舊債償却の要求であつた。此の要求に於ては、日本の代表すらも、英吉利を離れて佛蘭西と歩調を共にした程に其の正當は顯著なものであつたのである。協商國が勞農露西亞の負擔に歸さうとした舊債總額は、約百十億（金貨）ルーブルであつて、五ケ年後から年々約十二億五千萬ルーブルを支拂ふことを要求したのである。此の年額は彼のザーの政府が誅求の限りを盡して辛うじて支拂ひ得た年額の約三倍に當り、現在露西亞の國民所得に、舊時の三分の一に減少して居るから向ふ五ケ年間にそれが一躍九倍する時に初めて應ずることの出來る要求なのである。然るに、戰前二十年間に於て英、佛、獨の國民所得は僅かに六割の増加で即ち、一年平均三分の増加を示して居るに過ぎない。そこで、露國代表が、之に對して言ふのには、露西亞のソヴイエツト組織の下に於ては、西歐の資本主義の下に於けるよりも遙かに速かに生産力の増加を來たすと信ずる點に於ては、吾々は、正に協商國代表と意見を同じうするものであるから、吾が

造社

豫約募集

的驚異であるかがうかがはれませう。
かくの如き註文の狀態にては限りある人間の能力にては發送に多大の日數を用しますから至急御申込み下さい。配本は申込みの順序によつて發送致します。

アインスタイン全集概要（全四卷）

第一卷（特殊相對性理論）

相對性理論の最初の論文は實に一九〇五年にアインスタインの發表せる「運動物體の電氣力學に就て」と題するものです。この中に既に理論の發展に資する土臺が築かれてゐたのです。本卷にはこの歷史的に最も重要なる論文を始めとして、一九〇七年に書かれた「相對性原理並にそれから演繹せられた結果に就て」なる完全な說明、その外、特殊相對性理論に關聯せる一切の論文を集錄してあります。特にエネルギーの惰性を論じたものは注目に値ひします。（石原純博士記す）

第一卷目次

二四一 論
光量子の理論及び電磁的エネルギーの局所集中の疑問について
……蛋白光の理
一四六 一……か？
一部分溶解せる氣體内の音響傳播

第四卷（一般相對性理論）

特殊相對性理論から一般相對性理論への一大飛躍は蓋し最も困難苦慮を極めたものです。更にこの理論の應用として驚異すべき宇宙論を生み、又物質構成の理論への發展の計畫は、この卷に收められた諸論文から覗ふことが出來るでせう。之等はすべて一九一三年以後最近に到る時期に書かれたものです（石原純博士記す）
察から理論の完成に到るまでの論文は本卷内容の大部を占めるものです。その種々の考

第四卷　目次

發行所　改造社

東京芝愛宕下町
振替東京八四〇二一

國民所得の增加率はおほよそ戰前の二倍であることは豫想し得るが、それを六十倍と豫想する諸君は、少しく勞農露西亞を買ひ被る嫌ひがある。——と。これなぞも宣傳上手の勞農代表の言葉として聞き流すべきものであるかも知れない。けれども、金額の大小に關する議論は別としても、自國の經濟力の恢復の爲めに多額の資金の卽時借入れを切要して居る勞農露西亞に向つて、あべこべに舊債の支拂を要請するとは果して何を意味すると見るべきであらうか、不可能を强うるといふ點に於ては、治外法權の要求、外國人財產返還の要求と同工異曲な此等の要求こそは、勞農政府を窮地に陷れ、農民と勞働者と、政府の依つて立つ六十萬の共產黨員及び其の海外諸國の同志の間に其威望を失はしめることに依つて、勞農露西亞の降伏を馴致しやうと企てるものではないのであらうか。

六

此の企ては、しかしながら、これを企てる者の自殺、自敗とならない爲めには、既に余りに手遲れになつて居る。これが正氣な沙汰であるならば、勞農露西亞の經濟的恢復が世界經濟復興の一大要件であるといふ忘れてならぬ事を忘れたものに違ひない。露西亞に於ける勞農政府の地位に關する輿論を知るには、ボルシエヴイキ出現以來、排ボルシエヴイキ主義を奉じて嘗て其の節操を疑はれなかつた巴里タイムスの言葉を引用するに若くはない『勞農政府は、其の罪惡の數々にも拘らず、今日に於て露西亞の國民政策を指導し得るたゞ一つの權力である。勞農權力は內外の攻擊陰謀に對して國民的獨立を防護し、その言ふ處は正しく露西亞國民の名に於てなされるのである』と。これには、一つ以上のイムプリケノシヨンのあり得るのは言ふ迄もないが、表記價値で受取つた其の言葉の意味こそは、紛糾を極めた勞農露西亞承認問題の解決の鍵である——。勞農露西亞から勞農の二字を除くことは出來ない——、露西亞の協力を必要とする各國は、勞農政府の協力を求めねばならない——、のである。

七

吾々は、玆に、今一應、承認問題を紛糾せしめた如上の諸要求が私有財產權の原理からは極めて正當なものであることの含蓄を味ふ必要がある。それには、まづ吾々は、勞農露西亞承認問題が世界の經濟的復興の退つ引きならぬ必要に迫られた結果であることを、今一度想ひ起すと同時に謂ふ所の經濟的復興の企てとは、さし當り、九死の資本主義經濟に一生を得しめやうとする企てに外ならないことを十分に肯定しなければならない。そうすれば、自づから、其の企てにとつて不可缺要件である處

の勞農露西亞の承認を不可能にして居るものが、資本主義の依つて立つ財產權其のものであり、しかも其の正當な要求であることの教訓が自明とならう。資本主義發達の初期に於ては正しくに生活の要具であつた財產權が漸次に偶像化されて來た次第を熟知する者でも、今日、勞農露西亞承認の問題とからんで、及び其れが例示する他の多くの場合に於て、解體に瀕した資本主義救濟の企ての最大障碍をなして居るのが、偶像化された財產權そのものであることには氣づかないかも知れない。資本主義は已れを葬る穴を掘り進むといふ警句に信を置く者はたしかに其の數を增して來た。其の警句及び其れが暗示する一系の社會哲學をドグマと見る者の內には『日和見主義』者派の論理的可能に一身を托して、エキゾールテーションを賴みの武器に、在來支配階級の魂の入れ換へに衷心力を致すものも少なからぬことであらう。そして、そうした努力がもはや手遲れだと悟るものの心は、期せずして新興階級に嚮ふのである。

勞農露國承認の可否

堀江歸一

露國近代の財政家を以つて稱されたウヰツテが永く自國の經濟財政策を支配し、間接に政治上の方針にも自己の意見を實現して居つた。當時、彼は一方に外に向つて、經濟的帝國主義を實行すると共に內に於ては工業立國主義を進捗し、斯くて國をして工業化することに努力した。其結果として短日月の間に各種の工業は國內に勃興した。假令ひ其れは極端なる關稅政策の下に保護され恰も溫室內に咲いた花卉に類する所があつたとしても、現に俄露國に於ける工業の發達は刮目す可きものであつたのである。然し之を全體の經濟狀態から見れば、尙ほ農業立國の狀態を脫するを得なかつた。即ち外國から工藝製造品殊に其精巧なるもの又は優良なるものを輸入すると共に、外國に向つて農產物を輸出し、斯くて輸出入のバランスを得たばかりでなく、農產物の輸出超過に依つて、外國に負うた債務の元利金を決濟して居つたのである。

斯る狀態で露國の經濟生活が進んで行つたならば、國內の一部分は工業旺盛の地と爲ると同時に、他の一部分には依然として農業が命脈を保ち、農工業併立の事實を見るものと想像された一方に、露國が歐洲全體の經濟生活に對して持つ利害關係は其農業國として、他國に食料品や原料品を供給するの一事に繫がつたのであつて、斯る面積の廣濶であり、國民の多數が一身を農業に委ねて安んずる國のあつたと云ふことが歐洲の舊國に取つて、如何に有利であつたかは、論を俟たない。戰前に於ける露國經濟の狀況を示すに足る統計を擧げる。

(單位一千ルーブル)

	一九一一年	一九一二年	一九一三年
輸出			
食料品	九六八、五四七	七八八、六〇八	八〇七、三〇一
原料並に半製品	四七三、四八六	五七八、七八六	五五〇、三二三
動物	四五、八三一	三〇、〇六八	三三、九八五
製造品	二五、八七三	二九、五七一	三〇、四四六
合計	一、五一三、七三七	一、四二七、〇三三	一、四二〇、八五五
輸入			
食料品	一三四、一三四	一四〇、一九八	一六三、〇二四
原料並に半製品	五一七、〇四六	五二六、二六七	六〇〇、九〇六
動物	三、四五七	二、五八一	三、〇九九
製造品	三六八、〇六二	三七五、四五六	四三三、四八五
合計	一、〇二二、六九九	一、〇四四、五〇二	一、二二〇、四一四

更に外國貿易の內容を國別にすれば、獨逸から機械、毛織物を、英國から機械石炭を、合衆國並に埃及から棉花を輸入し一方に獨逸に穀物、鷄卵、木材、麻を、英國に獨逸と同一物品を、和蘭に穀物並に木材を、佛蘭西並に白耳義に穀物並に麻を輸出したのである。

故に露國の如き國の面積は如何に大であり、又其國內に包擁する產業の種類は如何に饒多であるとしても、上記の如く國際經濟の圈內に入り、他の諸國と密接の關係を結び來つた以上は國內自給の經濟生活を營むが如きは、到底出來難い所であつて、之を行つたならば、經濟生活上の破滅を招かざるを得ない。然るに聯合諸國の露國に對する經濟政策は實に露國に向つて、經濟的封鎖を行ひ、以つて國家自給の生活を强制しようとするものである。一旦國際共通經濟の圈內に入つた露國が遂に自給生活を强制されて何として之に堪へ得るであらうか、其道理は絕對にないのである。

一國が他國に向つて、經濟的封鎖を行つて可なる場合は、單に戰爭の際戰爭の終局を促進する手段として、之を利用するときに限られる。此時に於ても敵國全體に向つて、糧食を奪ひ生業の料を絕つの殘忍なること、其戰爭の目的を逸したものであると云ふことに於て非難の聲すら放たれる。唯戰爭と云ふ故も

殘忍なる事を速に消滅させる爲めに、姑く殘忍の度合の輕い所業を爲すことを忍ばうと云ふ點に於て、辯明さるるに過ぎないのである。

然らば今日聯合諸國は露西亞に對して、經濟的封鎖を行う確乎たる理由を持つであらうか。露國が聯合諸國の誼に背き、獨逸と單獨に條約を締結したことは背信の所業たるを失はなかつたけれども、肝腎の獨逸が既に聯合諸國と講和條約を締結した以上は、諸國が露國を咎責する理由は消滅し去つたものと認めなければならぬ。然らば聯合諸國は單に露國が共產主義を基礎とする勞農政治を行ひつゝあることを喜ばない、此形式の政治の世界に蔓延することを妨げるには、露國を經濟的に自滅させる手段に出でなければならぬ。自滅に近づく苦痛を體驗したならば、流石の露西亞も勞農政治を廢棄して、資本主義に復歸するものと考へて、遮二無二に露國に經濟的封鎖を加へて、渝らないと推測するの外はない。

然しながら一國が如何なる形式の政治を實行するか、其政治の下に於て私有財產制度を始何に尊重するかと云ふことは、純然たる內政上の問題であつて、他國の干涉容喙する限りでない。或は勞農政治の下に、外國人既得の財產權にまで侵害を及ぼしたならば、其侵害に依つて生じた損害に對して、賠償を求めることは出來るとしても、更に一步を進めて政治の形式に於ける變更を强要するが如きは、內政干涉の甚だしきものとせざるを得ない。殊に經濟的封鎖の行はれる結果として、露國の經濟組織は全く破壞されて、恢復の見込を得ず。彼の如き農業國であつて、尙ほ食品不足の爲めに餓死する者の少なからさるが如き、來たる悲慘事であらうか。更に露國の農業荒廢の爲めに、戰前同國から食料品原料品の供給を仰ぎつゝあつた諸國が、殆ど之を改めることが出來なくなり、露國と共に苦痛を頒たさる可からさるに至つたことは、悲慘事を越して、一の滑稽事であるとせざるを得ない。是れ亦國際經濟共通の原則に　違行した者の然蒙る可き刑罰である。

固より多年資本主義の下に培養され來つた經濟組織を一躍共產主義に移さうとするに就ては其處に種々の妨害の橫はることは論を俟たない。勞農政治の運用の始め圓滑ならさることに對しては、此政治の主張者自身も之を認めて居る。現にブカーリンの如き、一度び既存の階級間に於ける連鎖の絕たれた場合には、生產の全科程は一時中止することを免がれない、現に勞働者が同盟罷業を試みたり、鬪爭に從つたならば、何等の仕事◇遂に行はれないであらうし、技術的知識階級が怠業を行つたならば、生產の全科程は爲めに妨害されざるを得ない。無產者階

級が完全に政治機關の全部を掌握した場合に、始めて斯る計畫を根絶するを得るのであつて、其時の來るまで、生產は痲痺する外ない」と說明した。然らば露國に往年の革命の行はれて以來、社會は一時痲痺狀態に陷つたものであると云ふことは、之を認めよう。然し此狀態から何時覺醒して、民生をして其生活を樂しましめなければならぬ筈であるのに、今日に至るまで、其時に達するを得ない、國內の混亂生產の衰微食物の不足等諸多の方面に缺陷を暴露し來つたことは、必ずしも勞農政府に反對する者の宣傳する所ばかりに止まらず、實際の事實であると認められよう。然も諸外國は之を以つて勞農政治の失敗であるとし、自ら此點に就て、何等の責任を持たないと嘯き得るであらうか。反革命軍が從來露國に於て屢々蜂起したことは、勞農政治に對する大なる妨害であつた。而して如何なる國も是等の反革命軍に對して、何等の援助を與へなかつたと云ひ得るであらうか。過般のゼノア會議に於て露國委員が反革命軍の蜂起に依つて、蒙つた損害の賠償を聯合諸國に請求した一事の如き如何なる感動を人々に與へたであらうか。勞農政治の運用が不完全であると云ふ故を以て、勞農露國の承認を否定するに至つては、私は聯合諸國の所爲に甚だしき我儘があり、又一種の策略がありはしないかと考へる。勞農政治が如何に露國に行はれたとしても、國民生活に大なる缺陷の存せざる以上、之を承認して、國交を開始した所で、何の憂うる所があるであらうか。國民生活の缺陷を補正することを考へず、單に勞農政治を否認することのみに依つて、資本主義の政治を從來の形式通りに維持しようとするが如き、如何なるものであらうか、私の疑を挾む所である。

時評

長春會議の反響

山川均

一

五ケ月前に決裂した極東共和國と日本との會議は、九月四日から再び長春で開かれた。露西亞側では、貴方の方に一番御都合のよい外務省の鼻つ先の東京で會議を開かうと云ひ出した。所が日本側は、平に斷はれた。愈々奈欄の顏合せになると、君の方は紋附袴で御苦勞樣だが、僕の方は無產階級國に身分相應な、仕事着のまゝで御免を蒙る。時に會議には、無論新聞記者を列席させようぢやないか——卽ち全世界の民衆の環視の前で相撲を取らうぢやないかと云ひ出した。日本側では、そればかりはと一も二もなく斷はりを云つた。此立ち上がり際の張手で眼がくら〱とした次の瞬間に露西亞社會主義聯邦ソヴイエツト共和國並びに極東共和首席代表ヨツフエ、露西亞社會主義聯邦ソヴイエツト共和國並びに極東共和國代表ヤンソンといふ信任狀を披ろげられて、今度は頭がぽつとした。君、そんな子供の使のやうな信任狀では話が出來ぬぢやないか。小股すくひの宮相撲はよして四つに組んだ大相撲を取らうぢやないか。ヨツフエは斯う云ひ出した。そこで會議は謂ゆる『停頓』をした。

そこで日本側では、日本の外交史の一生一代の勇斷を振つて會議の豫備交渉に關する文書の一部を公表した。ところが生憎なことには、日本側の文書には『大連會議に於て略議了したる協定及其附屬文書を基礎とし』と立派に書いてあるが、露國側の回答には、『却つて斯くの如き一般的基礎條約は大連に於て既に凝議せられたるに鑑み……短期間に協定を遂げ得べしと信ず』とある。却ち露西亞側の回答には、大連會議の協定を基礎とするとは云はないで、却つて大連會議の協定の如き一般的基礎條約を、早速に協定しようとある。

然し外交文書の如きは、抑々末である。全てブルジアの外交談判は、決裂すれば相手方に誠意がなかつた爲めといふのが原則になつて居る。そこで露西亞側に誠意がないと云ふことになつた。九日の『東京日日』は『露國の恫喝外交』を攻撃し、『過激派政治家中には、恫喝を唯一の對外手段と心得……るものがある』とヨツフエに一大痛棒を加へ、『氣焔さへ吐いてゐれば無理が通り、道理が引込むものと考へ』て居るかと、『道理』の爲に萬丈の氣焔が吐かれてゐる。又た翌日の『萬朝報』には、露國の代表者は『極めて倨傲にして威嚇的高壓的なり、彼等は日本代表の體軀の矮少……を見て、其の心中之を輕蔑し所謂恫喝政略を以て、其求むる所の目的を達せんと企てた』と叫んでゐる。太刀山か大砲かを年寄から起こして、長春に送らなかつたのは千慮の一失であつた！ そこで記憶しなければならぬことは、斯ような主張の當然の結論として、日本が長春會議に於て、一歩たりとも露國代表の主張に讓歩した場合には、それは當然、日本は露國の『恫喝』に慄え上がつたのだと云ふことになる。

二

ところが玆に興味あることは、同じ九日の『讀賣新聞』は長春會議の停頓を評して、『露國の中央政府たる勞農政府を承認しないで、單に當方に都合よき問題のみを協定せんと欲する點に大なる矛盾がある。相替らず交際はせず睨み合ひのまゝではあるが、水だけは隣屋敷に汲みに行きたいといふ幾分の自分勝手がある。……其上日本側の主張は、日本に於て取急ぐ問題のみを此際先づ決定し、露國に取つて焦眉の急とも云ふべき承認問題は之を後廻しにせんといふのであるから、公平に云ふて幾分自分勝手を免れない。開會劈頭之が停頓し、危機を告げたのも敢て怪むを須ゐない』と云ひ、翌十日の紙上には、『所謂誠意とは何ぞ』と云ふ問ひを起して、『……若し交涉に應じぬならば、軍需品は浦鹽政府に引渡すかもしれないと、暗に威赫する如く見へないではない。初めから斯う云ふ我れの態度を以てして、果してそこに幾何の誠意があると認めらるべきであらうか。大連會議には撤兵といふことを以て、彼と交涉の武器に使つたが、今度は軍需品を以て、何かの交換條件とせんとするごとき、我國の所謂誠意なるものは、斯ういふ樣式に於て表示されねばならぬのであらうか。彼れの誠意を要求する以上、先づ我に於ても誠意を表示しなければならぬ……』と答へて居る。

長春會議の開かれる一二週間前の新聞には若し撤兵完了までに協定の纏まらぬ場合には保管中の軍器彈藥は、浦鹽政府に引渡すといふ記事があつた吾々は固より此の記事が、外務省側の宣傳であつたか、それとも參謀本部側の意向であつたかを知ら

ぬが、九日の『萬朝報』は『不安なる會議』と題して、『我政府は、浦鹽にある兵器を、相手方から我が撤兵完了以前に協約をもぎ取る爲の差押へ擔保品でもあるやうに言觸らしたが、果してそれが我政府の意中であるならば、見え透いた心事で、國の威信を失墜する仕方である……』と論じて居る。即ち『萬朝報』によれば、斯ような恫喝的の宣傳をした者は、誰あらう『我政府』なのである。そして『萬朝報』によれば、之は『國の威信を失墜する仕方』なのである。ところがこの熱心な『國の威信』の擁護者は、同じ日の夕刊では、忽ち居直つて次の如く怒號する。

『……然れども彼れに多くの求むる所あるを知れる我が日本は、如何にヨッフエ氏がウヰスキーの力を藉りて怒號するも、決して屈服するを要せざるなり、彼にして其の恫喝を繼續せんには、我が日本は須く浦鹽の彈藥を取て、之を我が好む所の者に與ふ可きなり、……日本の外交は、露國代表の口より吹き出す暴風の爲に、聊かたりとも其軌道を逸す可からず』。

『露國代表の口より吹き出す暴風の爲に』、聊か、聊かならずか、軌道を逸したのは誰れだらうか。

三

九日の『日々新聞』には、『わが國が、露國と親善關係を結びたいのは、露國と同樣である。それは前回の大連會議今回の長春會議を見ても分かる。露國に誠意さへあれば、兩國の親善關係は即時に打ち立てられる』とある。即ち長春會議の成否は露國の誠意一つで定まるものである。若し長春會議が――大連會議のように――破綻に終るなら、それが如何なる原因によらうとも、要するに露國の方に、相手方の如何なる無理、我慢、身勝手にも默從する誠意が無かつたからである。外交談判の不調の責任を、一切向ふ持ちにして呉れることは、確かにこちらは好都合であつて、斯ような相手方に對しては、何人も其誠意を賞讃するに違ひない。

然しながら日本の政府が、露國と親善關係を結ぶことにそれ程までの誠意を披瀝して居つたことが、少くとも『前回の大連會議を見て、それ程まで明白に分るであらうか。シベリア占領の四年間に於ける日本の對露政策が、日露の『親善關係』を結ぶ爲に、露國民に對する誠意の披瀝であつたらうか。コルチヤクを明け、セミヨノフを使ふ、ウンゲルンの糸を引くことは、日露の『親善關係』を結ぶ爲に、日本政府を露西亞の民衆に示した誠意なのであらうか。この誠意は、『前回の大連會議』にどれだけよく現はれて居るだらうが。九月九日の『讀賣新聞』は『若し日本政府が、今春の大連會議の時に、言ふべき事を言うてさへ置けば、懸案はモツト手際よく、疾くに解決されてゐた筈

である。其の當時日チ兩國の代表者間に意見の一致しなかつた點は、單に日本政府が撤兵期日を明言しなかつたといふ事だけである』と論じ、十日の『國民新聞』は、『浦鹽が勞農に統一されて居れば、武器の處分は問題にならなかつたのである。今之を反勞農に渡せば、勞農の戰爭を挑發するやうなもので、浦鹽に第二の尼港事件が起る惧れがある。尤も陸軍では正式に浦鹽政權に武器を引渡すのではあるまいか、事業がそうなれば、形式は問題にならぬ』と評して居る。そこで勞農に統一されてゐた浦鹽の政權を覆して、首尾よくメルクロフの反革命政府を押立てたのは、一體誰れの功績だつたらう。そして此の誠意ある日本は、同じ『國民新聞』の評論によると、『長春では日本は勞農側と談判してゐる。浦鹽では反勞農政權と交渉して居る』のである。

それでは長春會議では、露國と親善關係を結ばうとする日本政府の誠意は、どれだけよく現れて居るだらうか。九月九日の『東京朝日新聞』は長春會議に於ける露國側の態度を評して、『…何故露國側は、斯の如く寧ろ唐突ともいふ可き態度に出て來たか…。吾人の觀る所によれば、露國側が一般的問題の討議を第一條件とする理由は、豫備交渉に於ける誤解に由るといふよりも、寧ろ日本政府の一般問題審議に對する眞意を疑ふ事が、其の主因の一つなりと思はざるを得ない』、そして『日本政府は前記公表文書だけに就て見ても、今度の會議に於ては大連基礎案のみが日本の要望する所であるかの態度を明確に示してゐる』と云ひ、武器問題に就ては、『露國側が日本の政府の言質を疑ふが如き跡のあるのは何故か』といふ疑問に答へて、『率直にいへば、浦鹽に於ける、白軍に對する、我が駐屯軍の不謹愼の態度ありといふに因るのではあるまいか』と云つて居る。して見ればシベリヤ占領の四年間に於ける、日本軍と日本政府の行動は暫らく別としても、大連長春の兩會議のうちからも露國と親善關係を結ばうとする日本政府の『誠意』を檢出することは、それほど容易な事業ではないのである。

四

尤も日本政府が露國と親善關係を結びたいのは、露國と同樣であるのかも知れぬ。たゞ其の『親善關係』とは、『讀賣新聞』の言葉を借りて云へば、『相替らず交際はせず、睨み合ひの儘で水だけは隣屋敷に汲みにゆく』諒解を得ることに外ならぬ。それは日本がどこ迄も長春會議の基本にしようといふ大連會議の協定案を見れば直ぐ分る。協定案十五箇條のうちで、具體的の利害に關係した最も主要な條項は、何れも日本の利益を保障する爲の協定である。そして其他の條項は、文字の上では成るほど

双務的のものではあるが、實際に於ては、其の適用によつて利害を受けるのは日本側である。例へば、第四條により、『締約國の臣民は、國法に準擧して、良心の自由…を享有する』…と云ふ保證を與へられて見た所で、日本の國内で與へられる『良心の自由』が果してどれだけ有難いものであらうか。謂ゆる大連協定案なるものは、要するに日本の爲に作られたものであつて、當時極東共和國がこの協定案に同意を與へたのは、シベリヤから撤兵して貰ふことが焦眉の急であつて、何と云つても、脊に腹は替へられなかつたからである。そこで大連協定案なるものは、或る無邪氣な――乃至は無邪氣ならざる――識者の云ふやうに、『日露親善』の證文ではなくて、シベリヤ撤兵の代價に外ならぬ。

ところが露西亞側では、品物を渡しても代金が取れねば困るといふ、『誠意』のない心配をした爲に、この取引は不調となつた。

しかし其後の内外の形勢に餘儀なくされて、政府は『自主的』にシベリア撤兵に着手した。大連會議の決裂は撤兵期日の明言を拒んだ一事の爲めであつた。そこで今は撤兵を聲明した以上は、露西亞側では一も二もなく大連協定案といふ、隣屋敷に水を汲みに行く門鑑を差出すものと思はれた。そこでヨツフエが北京あたりで豫告的の聲明をしてゐたにも拘らず、政府は長春會議を樂觀し愈々開かれゝば、なんの四五日で片附くと云はれてゐたのである。

ところが日本の外務省は、少いさな事を一つ忘れてゐた。外でもない、日本の撤兵は『自主的撤兵』だつたと云ふ事である。自主的にやつた撤兵に對しては、固より代金を請求する譯にはゆかぬ。

しかし日本の外交家は用意周到である。シベリア撤兵の擔保は全くなくても、まだ浦鹽の武器彈藥がある。三億圓の武器彈藥が反革命の手に渡ることは、勞農露國に取つては由々しき大事に相違ない。反革命派の匪徒は、この火藥を以つて、日本が誠心誠意を以つて望んでゐる、シベリアの『政情の安定』を亂すに極まつてゐる。けれどもそれと同時に、日本が突然にでも内密にでもこの武器と彈藥とを反革命派の手に渡したなら、シベリアの政情攪亂の責任は、日本が負はなければならぬ。そして幾多の尼港事件を惹起すばかりでなく、國際的の一大問題を惹起すばかりでなく、全世界の勞働階級は、決して之を默過せぬに極まつて居る。

その上に、三億圓の武器彈藥が、必ずしも三億圓の價値を有するとは云はれない。種々雜多な性質の彈丸や火藥を掻き集め

たものがどの鐵砲にも大砲にも共他用ひられるとは、素人考にも思はれぬ。そこで三億の武器彈藥のうちで、有効に用ひられる物がどれだけあるかは疑問であり、從つて此の武器彈藥が實際に露國に與へる威嚇の力も疑問である。この疑問の威嚇に對して、露國が果して命ぜられるがまゝの代價を支拂ふ『誠意』を有するかは、更に大なる疑問でなければならぬ。

五

長春會議はどうなるか固より分らない。分らぬ事の解決を神に求めるように、豫測することの出來ぬ長春會議の前途をも、人には『誠意』と名づける神秘に一任しようとする。

しかし唯だ何人も疑はぬことは、日本側でどこ迄でも長春會議の性質を日チ會議にとゞめ、唯だ都合のよい時だけに勞農露西亞に顏を出させようといふ本來の計畫を棄てぬ限りは、そして長春會議が日露會議となり、そして其の締約の結果が事實上の勞農露國の承認とならぬ限りは、長春會議は見事に決裂すると云ふことである。日本が日露會議を恐れるのは、勞農政府承認の要求を持ち出される心配の無いと傳へられて居る。承認を伴はぬ通商條約に左程の効果のない以上は、露國側は或は承認の要求をするかも知れぬ。然し長春會議が、眞實に承認問題の爲に破れると思ふのは、皮相の觀察である。長春會議が若し承認問題で破れるなら、承認問題で破れる以前に既に會議は破れる可きものとなつてゐたのである。露國が正式承認の固執の爲に一切の實質上の利害を犧牲にするとは思はれぬからである。會議が眞實に承認要求の爲に破れると信ずる爲には、少くとも露國側で、日本の政府には、英米佛を出し拔いても、勞農露國を承認するだけの度胸があるものと、買ひ被つて居ることを必要とする。日本の政府が露國の承認を憚るのは、聯合國側の一致を破るからだと云ふことである。しかし世界の何處に、そんな一致があるだらう。ゼノアとヘーグの兩會議は、最早やこの一致の跡方もないことを曝露したではないか。日本が正直に有りもせぬ糸で縛られて居るのは唯だ滑稽といふ外はない。『國民新聞』が日本は率先して勞農露國を承認して、國際政局に新機運を打開する必要を叫んだのは卓見である。

長春會議が如何なる結果を見るかは暫らくおき何事もソツとして、觸らずに其場を濟まそうとする姑息な日本側の態度に反して露國の代表者の『恫喝』と『不誠意』とのうちに、却つて有ゆる障礙を突破して自己の存在を主張しようとする新に興るものゝ精神と努力を認めぬことは出來ぬ。（九月十三日）

産業資金の供給と金利引下問題

堀江歸一

諸銀行の金利歩合との間には、如何なる關係が保たれ可きものであるか、兩種歩合の孰れが高くして、孰れが低きやは、國に依つて自ら事情の異なるものがあるが、兎に角中央銀行の歩合が大體に於て市場に行はれる各種金利歩合を決定する規準と爲ることは、明白の事實であつて、今日東京市中諸銀行の割引日歩が日本銀行の公定歩合二錢二厘に對して、二錢六厘から二錢四厘の間を上下して居り、一方に倫敦の市中銀行割引歩合が英蘭銀行の公定歩合の三分であるに對して、一分八分の七から二分の間に居るが如き、細かく云へば日本では日本銀行の方が市中銀行よりも低い歩合を維持して居り、英吉利では英蘭銀行の方が市中銀行よりも高い歩合を示して居ると云ふような正反對の事相はあるとしても、尙ほ市中銀行の歩合は中央銀行の歩合に對して、或は少し高いとか、或は少し低いとか云ふ所に定められ、高低孰れにせよ、中央銀行歩合に對して、若干の利鞘を生ずるを常とし、其の利鞘の法外の程度に上ることは、何として

世界第一の高利國

今日我國は世界文明國を通じて、金利歩合の最も高貴なる國である。今私の机上に在る倫敦「エコノミスト」に據つて、諸國中央銀行の割引歩合を見ると、

英國	三分	西班牙	五分五厘
獨逸	四	佛蘭西	五
白耳義	四厘五	伊太利	五五
丁抹	五五	瑞西	三五
諾威	五	墺地利	七
芬蘭	九	波蘭	七
北米合衆國	四		

であるに對して、日本銀行の割引歩合は日歩二錢二厘であるから、年利に換算すると、約八分に當り、前表に掲げた諸國中一の芬蘭を除けば、日本が今日金利歩合に於て、世界を通じて、最高の國であると云ふことになる。中央銀行の金利歩合と市中

も事情の許さゞる所である。斯くて中央銀行の金利歩合が如何なる點に在るか、何時に爲つて上進するか、共れとも低落するかと云ふことは、一國に於ける金融の大勢を左右する所以とも爲り經濟社會の利害に重大なる關係を持つのである。

生產費の點から考へると、金利は共一部分を占めるものであるから、斯く金利歩合の高いと云ふことは、自ら生產費を加重せしめる所以と爲るのであつて、金利を高い儘に置くことは物價の調節を妨げる一原因たらざるを得ない。特に高歩の金利は必ず一國に於ける生產事業の振興に對して、大なる障碍と爲る昨今我國に於て諸地方の公共團體なり、諸會社なりが地方債や社債券を發行する場合に、其利子は如何なる歩合に上つて居るかと云へば、前者に於て七八分であり、後者に於ては八九分から、一割に近いものも亦少なしとしない。是れは一般金利の歩合の高い今日に於ては、已むを得ざる事實を以つて目される所であるが、斯く各種の金利歩合の高いことは、自ら有價證券の市價を壓迫し、今や相當の信用ある會社の株式にして、利廻りの一割内外に當るものも亦少なしとしない。然らば假に社會に或る高の遊金があつて或る方面に活用されようとして居つたとした所で、共れは新に事業を計畫する資金には供されない、遊金の所有者は之を新事業に投じて、何年かの間、利益金の皆無なることを忍んで、將來の利益を夢みるよりも、既設事業の投資を代表する株式や債券を廉價で買入れた方が遙に有利である勘定に爲るから、新事業の如きは、少しも實際に着手されるに至らない、斯して生產業は不振の狀態を續けざるを得ざることゝ爲るのである。

我國金利の高き結果

斯の如く諸外國と我國と相對して、金利歩合の點に於て、高低の差の著しきものがあり、而して互に國際經濟の圏内に在つて競爭を續けて行くものとしたならば、金利歩合高く生產費增嵩し而して事業伸張の力に乏しい我國の事業が總て正反對の狀況に支配されて居る諸外國の事業に比較して、概して不利益なる地位に立つことは免かれ難き所である。固より生產條件の優劣は單に金融歩合の高低のみに依つて、定まるものではない、假令ひ金利歩合は高貴であつても、天然の惠みが豐であるとか、人の能率が勝れて居るとか云ふような狀態が備はつたならば、金利歩合の高貴である爲めに生ずる不利益は優に之を償うて、餘りあるかも知れない。然し我國の現狀に於て、天然物や勞力を以つてして、能く外國の競爭に打勝ち得る自信があり、又資格があると考へられるであらうか。我國の天國の天然物の供給に於て限りあることは論を俟たない、一方に勞力の如き、

從來賃銀の低廉なることに依つて、能率の低き弱點を償い得たと稱された次第であるのに、近年に至つては、賃銀の名目額は著しく上進した結果、勞働費用の增加したことは勿論であつて、随つて賃銀の低廉なることに乘じて、外國と競爭するが如きは、一場の夢想に過ぎざるに至つたのである。斯る場合に金利步合の高貴を以つてすることは、益々我國產業の立脚地を薄弱ならしめるものであつて、其外國の競爭に堪へざるに至らしめる虞れ大ならざるを得ない。近頃我國の產出に係る物資の販路は外國に於て、如何なる狀況の下に居るであらうか。歐洲戰爭中諸外國の經濟社會の疲弊、諸種產業の衰微した際に乘じて、我國は世界到る所に物資の販路を擴張し、輸出貿易に著大の增進を告げた次第であるのに、戰後數年ならざる今日に於て、曩に擴張された販路は次第に諸外國に依つて奪還されて「貿易上の權勢の日に縮小する趣きを示しつゝある一方に、諸外國の物資は漸を以つて、我國に輸入され、何ものを輸入しても、輸入者に利益を與へる狀況と爲つたことの如き、其原因は果して如何なる邊に在るであらうか。我國の通貨政策に宜しきを得なかつたことの如き固より其一原因たるを失はないが、他の重大なる原因は我國の金利が高く、事業擴張の不如意であるに對して、諸外國に於ては、金利の低廉なるに乘じ、着々戰時に蒙つた經濟上の傷損を治癒してある一事になすものと認めなければならぬ。

如何にして金利を低からしめる

随つて我國經濟社會の局面を一新するに就て、何が必要であるかと云へば、金利步合の低廉を期するが如き、其一として缺く可からざるものであることは、萬人の異論を唱へざる所である。斯くて過日來金利步合低減の目的を達する爲めに、外資輸入論が行はれたことがある。内外國の利鞘の大なること、今日の如き場合に、新論の生ずるのもだ、敢て不思議とするに足らないが、歐米諸國の經濟社會が未だ安定の狀態に達して居らず、國內の事業を整理し生產力を培養するに就て尙多額の資本を必要とする際に、我國の金利步合に影響を及ぼすが如き、多額の資金を我國に供給することは、遽に之を望むを得ない。殊に、我國が內外市場に巨額の金貨を所有し、諸外國の金貨に缺乏しつゝある現狀を目擊しながら、金の輸出禁止を勵行し、諸國の急を救はうとしない場合諸國に就て我國が金融上の便宜を得ようと試みた所で、容易に其目的を達し得られるものではない。

過日大藏大臣が東西の有力なる實業家を招待して、經濟上の問題に關する意見を諮詢した際產業資金の調達並に金利步合の

引下と云ふ項目があつた。當時此會合に於て、如何なる議論が行はれたかは、私の全然與り知るを得ない所であるが、其前後から日本銀行利子下問題が世間の注目を惹起して居つたことは、隱れもなき事實である。然しながら私を以つて、之を見るに、金利步合の上進殊に異常なる上進は我國經濟の發達に有害である。隨つて其低落を希望すると云ふことは、頗る正當の事であるとしても、其目的を達する方便として、日本銀行に金利を引下げよと云ふことを望むのは、甚だ無理である、何故かと云へば、日本銀行の金利步合の高いこと、若しくば市中諸銀行の金利步合の高いことは銀行自ら好んで之を高くするのではなくして四圍の狀況自ら之を高からしめるものと見なければならぬからである。或は四圍の狀況は金利步合の引下を以つて、時機に適したるものとする場合に、日本銀行の當局者が甚だ不明であつて、殊更に金利步合を高步に維持し、銀行の爲す所をして市場の大勢に隔絕せしめることがあるかも知れない。今日は果して斯る場合に該當するものであるかと云へば、私はさうは考へない。日本銀行の金利が高い、市中諸銀行の金利も亦隨つて高い今日の狀況は決して銀行當局者の誤まつた考に基いて居るのではなく、我國經濟社會の狀勢に照して、正に然る可き所としなければならぬ。換言すれば日本銀行以下諸銀行の金利步合の高いことは、市場に資金を缺乏せしめる原因ではなくして、寧ろ市場に資金の缺乏し來つた結果であると解釋することを至當とするからである。

金利の高きに至る原因

何故に我國現下の狀勢に於て、金利の上進し金融の緊縮することを以て、當然の事相と考へ可きものであるかと云へば、私は之に對して、二個の原因のあることを信ずる。其第一は物價騰貴の趨勢であつて、其第二は政府の連續する公債募集である。物價と金利步合との間には、如何なる關係が存すると見る可きであるか資金の借入に當つて、物價が騰貴して居つたならば、如何なる事業家も、斯く借入れた資金を利用するに就て、自ら効果の微弱なることを覺へざるを得ない、隨つて以前と同樣の規模に於て事業を經營し、而して之を經營する爲めに、多額の資本を必要とする以上は、物價騰貴は勢ひ資金に對する需用を增進せしめる道理である。或は目下の我國に於ける如く物價騰貴しつゝ他の一方に不景氣の狀態の續く場合には、資金に對する需要は全體から云つて、減少するが如くであるが、尙ほ其減少たる生計難に基く貯蓄の減少に依つて、相殺されるであらうし、而して事業の規模を維持する爲めに生ずる資金の需要は依然として大なることを免かれないのである。更に物價の

騰貴が一時的事相に止まらず、又近き將來に於て、其趨勢を改め可きものでもなく、將來に亙つて繼續することの明瞭である場合には、金利步合に如何なる影響を及ぼすであらうか。此場合に先づ考へなければならないのは債權者の地位である。物價の將來引續いて騰貴する際には、其反面に於て貨幣の購買的效果は常に減少する道理である。然らば債權者は購買力の高い時に、貨幣を貸與して、其低く爲つた時に同一金額の貨幣の償還を受ける道理であつて、兩者の差は之を普通の金利步合に或る率を加重することに依つて、回收し、補償するの道を、求めなければならぬ。債務者が果して斯く加重された金利を負担するに堪へるや否やは一個の問題であるが、若しも債權者にして其領收する利子が貨幣價値の低落に基く差損を償うに足りるだけの高いものでなかつたならば、債權者は自己の有する資金を貸出資本として、他人に貸附けるよりも、寧ろ之を消費するを以つて、勝れりとするかも知れない、蓋し金利の低いことは、彼れをして資本運用から生ずる將來の利益に對して、望みを繫ぐに足ることを考へしめないからである。斯の如くして資本の供給が減少したならば、此點から結局金利步合を上進せしめる傾向を生ずるに至るのである。

今日の文明國に於て、資本に對する需要を決定する一要素として、是非とも勘定の内に入れなければならないのは、政府の公債募集である。蓋し今日國家の財政は頗る大規模のものであつて隨つて其募集する公債の金額も亦巨大であること、一年中間斷なく公債の募集行はれること、然も其募集の急を要する場合には、國家の信用の高い割合に。高步の利子を付するを辭さないことが原因と爲つて公債の募集は一國に於ける國民の消費金を之に對する投資に轉換せしめるに止まらず、進んで產業資金の一部を奪取せされば、已まざるに至るのである。

以上の道理を我國現在の事情に適用したならば、如何なる結果を生ずるであらうか、私は我國に於て、金利の騰貴することを以つて、必然の事相であるとしなければならぬ。即ち物價騰貴の勢は連年繼續し、今日に至つて變る所あるを知らない、政府の物價調節策の如きも、唯之を聲言するばかりであつて、何時に爲つて效果を現はすのか、又實效ある政策が果して施されるものであるか、殆ど不明である。然らば今日に於て商工業の實際に從事しつゝある人に向つて、將來物價の騰貴を見込むのが至當であるか其れとも物價の下落を豫想するのが正しいかと問うたならば、何人も其前者であることを答へるであらう。然らば今日現實に物價の騰貴して居ることゝ將來尙ほ續いて騰貴す可き事相の明であることゝに依つて、我國の金利步合に上進

の傾きを生ずることは、必然の數であるとしなければならぬ。加ふるに多年政友會が政局に當り、黨勢を地方に伸張する黨派的私心に促されて、積極的政策を濫行した一方に、最近に至るまで無意義なる西比利亞出兵を續けた結果年に多額の公債を發行しなければ歳計の均衡を維持することが出來なくなり而して公債の發行は金融市場を脅かして、金利引上の趨勢を已むを得ざるに至らしめることも金利の前途を案ずるに當つて、吾人の看過す可からざる所である。

日本銀行の利下は末なり

然らば今日斯く金利步合を上進するに至らしめた諸種の原因を等閑に付して、單に日本銀行をして金利步合を引下げさせたとした所で、如何なる結果を生ずるであらうか。日本銀行の金利が引下げられ、市中諸銀行の金利と比較して、大なる懸隔が生じたならば、諸銀行の取引先は爭つて銀行に金利の引下を求めるであらうし、銀行も亦同業者との競爭に制されて、金利を引下げるの已むを得ざるに至るであらう。然しながら眞に資金の供給が增進した爲めではなく、資金に對する需要の增加する事情の依然たる場合に、單に金利が引下げられたとした所で、果して其れに永續性を持ち得るであらうか。斯の如きは事實困難であつて、結局諸銀行共に金利の反動的引上を餘儀なくされなければならぬであらう。然らば一旦金利の引下げられた爲めに、之に刺戟されて、經濟社會の景氣が多少恢復したとした所で、其れは眞の恢復ではなくて、一時の中間景氣たるに過ぎない。斯くて上記の事情に依つて、引下げられた金利步合が引下げられた儘に維持され難く爲つて、再び騰貴するに至つたならば、中間景氣の時代に擴張され、計畫された事情の如きは、未だ其緒に就かざる間に非常の打擊を蒙らざるを得ない、金利を引下げ可き事情の備はつて居らない時に、妄に之を引下げる弊害の恐る可きことに就ては、篤と之を考へなければならないのである。

由來我國に於ては、金利步合の決定に就て、或る誤解がある。卽ち金利步合は或る程度まで銀行の意思に依つて、左右し得られるものとする考であつて、此考があればこそ、政府は日本銀行の金利步合改正に對して、認可權を持つて居つたり、又同銀行の營業に對して、監督權を持つて居つたりすることに乘じ、同銀行をして金利を引下ぐ可からざる時に、之を引下げさせて、以つて政府の欲するが如くに、金融市場の趨勢を導かうとする間違が屢々起つて來るのである。然しながら金利步合が銀行一個の意思に依つて、高低孰れにも定まるとするのは大なる誤解であつて、銀行にして如何に金融上に勢力ありとした所

で、金利歩合を決定するに就ては、資金に對する需要と其供給との赴く所を見て、之に順應する外に、他あるを知る可からざる譯であり、隨つて當今の我國に於ける如き、金利の高貴であることを當然とする事情の存する場合に、之を引下げたならば、必ず銀行の準備金を薄弱にし、銀行營業の基礎に缺陷を生ずるに至らしめることは、之を想像するに難しとしないのである。

不景氣時代に金利の高き所以

之を經濟循環期の學說に徵すると、或る年間不景氣が續いたならば、其後に於ては必ず景氣恢復の時代が到來し、之に次いで好景氣時代を迎へることを以つて、本則とするのである。何故に經濟的季節の循環すること、斯の如くであるかと云へば、不景氣時代に於ては、諸物價が低落し、人々は勤儉に力め、節約を事とする、斯くて生じた貯蓄金が次の時代に於て、資本として生產上に活用される爲めに、自ら新事業の興起を促す、一方に不景氣時代に當業者が事業の整理を企て、生產費を節減したことも亦自ら事業の經營を容易ならしめて、景氣の恢復を助長するに至るのである。隨つて之を金利歩合の趨勢から見れば、不景氣時代に於て、金利は比較的低く、景氣の恢復するに連れて、次第に上進するを常とする。然るに我國の現狀は如何であるか。不景氣時代の今日に於て殊に不景氣の勢の濃密ならんとする今日に於て、却つて金利歩合の上進を來して已まない、世間に之を引下げようとする希望の起るのは、不景氣と云ふ事實から見れば、當然であるやに思はれるが、引下げられた後の結果を考へれば、遽に之を贊成することを不可能とする。即ち我國に於ては不景氣であつて、尙ほ金利歩合の高いと云ふ經濟上の法則に外れた事實が行はれて居るのであるが、其原因たる、政府が第一に物價政策を誤まつて、不景氣時代に物價を高くして置いたり、第二に不景氣時代に財政を膨脹させて、顧みなかつたりすることに外ならないのであるであるから、金利歩合の低落を求める以上は、是等の點に就て從來の間違を一掃する考がなければならない。

政府は資金の供給者に非ず

日本では產業資金を調達しようとか、供給しようとか云ふ問題が起ると、直に政府に依賴して公債を償還して貰はうとか、預金部の資金を借出さうとか云ふような說が起る。政府が明年度の豫算案に於て、銀行業者の希望を容れて、減債金の復活を實現するが如きも、亦產業資金供給の一法であると考へるかも知れないが、斯る小策に依つて、供給される資金の如き、固より其分量に限りあつて、其大なるを期し得られないし、又深く重

きを置くに足らない。眞實資金の供給を豐にしようとする以上は低廉なる金利步合の下に、資金が確實に、又繼續して、調達される道を講じなければならず、其れには物價の低落を促し、他の一方に財政上に非募債主義を徹底せしめなければならぬ。物價下落を背景とし、又之を基礎とした金利の低落であつてこそ、始めて其れが或る期間を通じて、繼續するであらうし、其繼續に依つて、當業者をして安んじて、其れぞれ事業に當らせ、以て物資の產出高を增加せしめるを得るのである。諸外國に於ても一旦金利步合が下落し出してから、半途に於て挫折するようなことがなく、序を逐うて其低きに赴きつゝあるが如き、卽ち金利步合の正に引下げられ可き時に於て、引下げられた事實を語るものであつて、其間に何等の投機なく、又輕卒の處置なかりしことを明にするに足るであらう。

中央銀行の機能

一體諸外國に於ては中央銀行の金利步合は日本に比較すると、餘程頻繁に變動する、是れは中央銀行自ら、民間の取引先に接觸し、金融市場の大勢を利導しようと云ふ考を持つて居るからであるが、日本銀行の金利步合に於ける改正は餘程鈍重であると認められる。卽ち近年商業手形の割引日步に加へられた改正を見ると、

大正五年七月五日	一錢六厘
同　六年三月十六日	一錢四厘
同　七年九月十六日	一錢六厘
同　十一月二十五日	一錢八厘
同　八年十月六日	二錢
同　十一月十九日	二錢二厘

に爲つて居る。さうすると日本銀行も歐洲戰爭以來前後四回に亘つて、金利步合を引上げたのである。是れは戰時我國に於て勃發した投機熱を制する趣意に基いたものであらうが、投機熱の當時甚だしき程度に上つたことに對照すると、日本銀行の金利步合引上は甚だ物足らぬ觀なきを得なかつた。隨つて私の如き日本銀行に向つて、金利を引上げて、市場に警戒を加へることを必要とする意見を新聞紙上に發表して、當局者の反省を求めたが、其容るゝ所と爲らなかつたのである。蓋し當時は政友會内閣の全盛時代であり、原首相の下に、大藏大臣の職に居つた高橋是淸子は通貨の膨脹と物價の騰貴とは、直接に相關するものでないと云ふ奇說を把持する一方に、原首相は成る可く金利步合を低廉にして、世間の投機熱を刺戟し、外觀に好景氣を裝うて、黨勢を擴張しようとする私心の旺な人であつた爲め、相率いて金利步合引上の機を逸し、後に多少之を引上げても、其引上の効果を微弱ならしめ、遂に大正九年三月に至つて恐慌を誘致することゝと爲つたのである。是れ亦日本銀行の金利步合に對

して、政府の干渉の加へられる爲めに、生ずる弊害の顯著なる事例とするを得るであらう。今日から之を云へば、死兒の齡を數へると同じ愚なる話であるが、投機熱勃興の端緒に於て、卽ち大正六年から七年にかけて、日本銀行が巧に金利政策を運用し、通貨並に信用の過度に膨脹する勢を制限する一方に、當業者に警戒を與へたならば、彼の如き恐慌は之を回避するを得たかも知れず、又回避し得なかつたとしても、金利步合の一時急速に引上げられたことは世人の心に大なる警戒を加へ、恐慌の一過した後に於て、自然金利步合の引上げられた勢を馴致するを得たことゝ想像されるのである。金利を引上げ可き時期に於て、之を引上ゲなかつたことは、同時に其引下げの行はれ可き時期に引下げの行はれることを妨碍する所以と爲る。警戒の强かる可き時に、之を緩うしたことが原因と爲つて、我國の經濟社會は刺戟を受けなければならない時に、刺戟を受けることの出來ない狀態と爲つて居るのであつて、恰も今日不景氣と物價騰貴又は金利上進と云ふが如き經濟社會に矛盾した事相の並び行はれることの怪異であると、少しも相違する所のない不可思議の現象である。

財政の緊縮は絕對必要

政府が或る遣繰算段の下に、資金を調達して、之を民間に供給しようとするが如きは、事の末である、政府に其意があるならば、財政の規模を縮小し公債財源の事業を打切つて、公債政策を廢除し、高利なる公債の發行に依つて、民間の資金を奪取するに至ることを中止するのが當然である。而して一方に物價調節を眞面目に行い、物價低落の趨勢さへ現はれたならば、金利步合は求めずして低落する一方に、物價下落の爲めに、國民の生活が安易に爲り、貯蓄が行はれて、國民資本の增殖を見るに至つたならば、益々金利下落金融緩和の勢を顯著ならしめるであらう。產業資金は政府の手に依つて、供給され可きものでないが如く、金利步合も亦國家の干渉に依つて、左右され可きものではない。時機の熟せざる際に、政府に迫つて、日本銀行の利下を行はせようとするが如き、此點に於て大なる誤まりを爲すものである。而して政府が物價調節に依つて、眞實國民生活の安易と爲る可き道を講ぜず、國民に向つて節約せよとか、貯蓄せよとか云ふ訓示を出すのは、果して何の意であらうか。日本國民は今日國務大臣の訓示に依つて、始めて自己の生活樣式に於ける缺點を敎へられるが如き、幼稚なるものではない、大臣が自家の管轄する施政に關して當然爲す可きことを怠りながら、國民に訓示を與へるが如き誠に近來の滑稽事とせざるを得ないのである。

金禁輸問題に對する政府の聲明書

如何にして信を天下に繋ぐ

堀江歸一

超然内閣の政見發表

官僚内閣とか、超然内閣とか云ふものは、兎角不言實行を旨とし、自家の主張や、方針を發表しないで、之を秘密に付する悪癖を持つて居るものである。然るに現内閣は少し趣きが違い、色々の事を時々發表する。殊に大藏大臣市來氏は、就任と同時に、財政の一般方針に就て、意見を公にし續いて過般他の閣僚と共に物價調節に關する方針を示し、今回更に金禁輸問題に關する意見を聲明した。斯の如く着々自家の所信を世間に述べて、將來の方針に就き、國民をして據る所を知らしめるのは、誠に立派な態度であつて、前内閣の如き似非立憲内閣の閣員を凌駕すると稱しても、差支ないかも知れないが、一歩を退いて、吾人の考へなければならぬ問題がある。其れは外でもない。聲明書を發表するばかりが國務大臣の能ではない、重んず可き所は聲明書の内容と之を實行する力量の如何とであつて、若しも内容空疎であつたり、内容に如何なる美辭佳句が連られて居つても、之を實行するを得なかつたならば、一片の廢紙に異ならないのである。

聲明書の内容空虛

私をして忌憚なく評せしめれば、市來氏の聲明書は内容に於て、空疎である。一般財政に關する聲明に於ては、經費の節約に勉めるとか、公債財源の事業費を整理するとか云ふような事が掲げられて居つたが、其程度を示さなくては、恰も白紙を吾人の眼前に展べたのと異ならない。次に發表された物價調節に關する施設十九箇條が如何に曖昧なものであるかに就ては、既に世間に定評があり、殊に大藏省關係の事項に就ては、徒に小事に拘泥して、大局を遺忘した憾の著しきものがあつた、或は第二次の調節策が發表されたならば、右の缺陷も補足されはしないかと云ふことは、世間の一般に望みを繋いだ所であり、

而して第二次調節策に於ては、何を必要とするかと云へば、金輸出の禁止を解除する一事は最も重大なるものゝ一であると認められたのである。

政府も此問題の解決を等閑に附さなかつた。過日市來氏自ら東西實業家中の有力者を招聘して、會議を開き、此會議に金禁輸問題に附議したことの如き、確に愼重の態度を以つて、之に臨んだものと云へるであらう。而して其結果は今回の聲明書と爲つて、世間に現はれることゝ爲つたのであるが、私を以つて見ると、此聲明書は單に財政當局者たる市來氏が金禁輸問題の解決に就て、如何に思ひ惱んで居るか、思ひ惱んだ果に、手も足も出ない窮境に陥つたことを説明するに止まるのである。私は此聲明書の字句を逐うて、批評を試みよう。

內外經濟社會の狀態

市來氏は聲明書の劈頭第一に於て、

> 金の輸出禁止は元來戰時に採用せられたる變態的の措置なるを以つて、成るべく速に之を解除して、經濟の常道に復せしむ可きは、論を俟たない

と斷言して居る。是れは議論として、寸毫の疑を容るゝ能はさる所であつて、私の如き之に贊成を惜まざるものである。市來氏は此信念に基いて、颯々と金の禁輸を解除したならば、一個の見識を貫徹したものと云へるのであるが、頭腦の不純なる人の常として、直に岐路に彷徨し、「今日を以つて、此解除を行うに、適當なる時機と爲すや否やに、就ては、愼重の考慮を要するものがある」と自ら疑問を揭げ來り次いで

> 思ふに世界の經濟狀態今尙安定を缺き、多數諸國の金に對する政策未だ確定せず、金の國際的移動も未だ一般に自由に復するに至らざるのみならず、我國經濟界の現狀亦尙ほ充分の安定を告ぐるに至らざるを以つて、解禁の結果我經濟界の受く可き不利なる影響は敢て輕微ではないであらうと認む

と自答し斯くて解禁の尙早であることを聲明したのである。然しながら私を以つて見るに、以上の意見は大部分誤解に基いて立てられたものと認めざるを得ない。歐州諸國の經濟社會が戰爭の打擊に依つて、攪亂に攪亂を重ねて居るのは、實際の事實である。英國の如き戰前に於ては、世界を通じて、最も鞏固なる狀態に於て、兌換制度を維持し、又其鞏固であることに依賴して、多年金の自由市場たる地位を保持して居つた國であるに拘はらず、開戰後暫時にして金の輸出を禁止し、今日に至つて、尙ほ之を繼續して、憚らない。英國にして既に然る以上は爾餘の大陸諸國が通貨を狀態に就て、甚だしき混亂を極めて居ることは、疑を容るゝ能はざる事實である。

外國の實例を牽强附會す

然しながら之を以つて直に歐洲諸國と我國とを比較し、前者

が金の禁輸を續けて居るから、後者亦之に倣はなければならぬとするのは、大なる謬論である。歐洲諸國は何故に禁輸を續けるの已むを得ざるかと云へば。四年十一個月の戰爭を通じて、散々に經濟上に打撃を蒙り、今や正貨に對する紙幣並に銀行券に甚だしき低落を來し、兌換制度を復舊することも出來なければ、禁輸を解除することも出來ないのである。然るに「日本今日の經濟的狀況は如何であるか。往年の恐慌以來不景氣に襲はれ、容易に恢復の曙光を仰ぎ得ないことは、國民の最も苦痛とする所に相違ないが、一方に戰時に於ては、世界經濟上の局面に活躍して、諸外國から多額の金貨を吸收し、尙ほ其大部分を保持して、憚らないのである。此點から云へば、我國は歐洲諸國とは全然經濟上の地位を異にし、寧ろ合衆國に類似して居ることを掩うを得ない。隨つて正貨政策の方針に就て、外國に事例を求む可しとしたならば、歐洲諸國に倣つて、禁輸を繼續するよりも　合衆國に從つて、禁輸を解除することを至當とする道理であるのに、市來氏は殊更に、我國の經濟事情に就て、僻見を逞うし、以つて禁輸繼續の論據を得ようとした。その背理であることは、論を俟たないのである。

禁輸亦徹底を缺く

然らば市來氏は何處までも、禁輸に關する所信を貫徹する決心であるかと云ふに、必ずしもさうでなく、聲明書の一節に於て、

> 政府は今日輸出禁止を解除するを適當ならずと思惟するも、內外經濟狀態が今少しく安定し、解禁の爲め、我財界に急激なる變動の生ずる虞れなしと認めらるゝ時期到來せば、速に之が實行を期する筈である

と云つて居る。由來今回政府が實業家の會合まで、催ふして、此問題の解決に當らなければならないやうに爲つたのは、何の爲めであつたか。正貨政策が從來の如く、解禁とも、禁輸續行とも、方針不定の間に彷徨して居つては、當業者を困惑させる弊害が甚だしいから、孰れとも之を決定して、世間に安心を與へようと云ふ趣意に基いたのである。禁輸續行の可否は兎に角として、政府の方針が此事に決定したならば、民間當業者をして政府の方針に疑を挾ましめないだけの利益はある。然るに市來氏は本來解禁を至當であるとする思想の胸中に往來しつゝある爲めか、一方に禁輸の續行を聲明しながら、一方に今後何時でも之を解除するかも知れないと云ふ。其れでは我國の正貨政策は全然不定の狀態に居り、當局者の方寸に依つて、如何に解決されるか、殆ど之を測り知るを得ない。然らば政府が態々金禁輸問題に就て、聲明書を發表したことは、毫も當業者をして安んぜしめる所以とは爲らず、却つて彼等を困惑する種子を蒔いたのである。小供が親の命令で、他家へ使に行きながら、途中で口上を忘れると云ふ話があるが、市來氏の聲明書の如き、大分之に類する嫌はありはしないか、國務多端の折柄、私は切に同氏の健在を望まざるを得ないのである。

解禁に代る方策

更に市來氏が解禁を可なりとしながら、之を實行しない事情は聲明書の最後に於て頗る明瞭である。卽ち曰く

金の輸出禁止解除に關する政府の所見は右に述ぶる所の如くなるも、輸出禁止の爲替相場に及ぼす不利なる影響に就ては、別に考慮を拂ひ、將來在外正貨の低下を成るべく容易ならしむる方針であると。

從來の如く金禁輸の結果として、輸入爲替の相場を輸入業者に取つて、不利なる點に置き在外正貨の拂下げを行ふ場合にも、同樣の相場に據らしめたことは、禁輸の弊害として、最も大なるものであつて、此事が禁輸解除の有力なる理由と爲つたことは、論を俟たない。斯る弊害を除却するには禁輸解除を以つて、最良策とする筈であるのに、政府は此勇斷に出るを得ない爲めに、姑息にも在外正貨の拂下を自由にして、弊害を或る程度まで緩和しようとする。何たる彌縫策であらうか。在外正貨の拂下を自由にすると云つた所で、拂下げられる正貨には限りがあつて、其無限に大なることを許さないであらうし、一方に政府が輸入品の種類を甄別して、政府の認めて不利なりとする物資の輸入者には、拂下げの便を與へないような處置に出たならば、官憲の干渉に依つて、貿易の方嚮を左右すること〻爲り、當業者の困惑甚だ大なりとせざるを得ない。市來氏が斯る拔け路を案出して、解禁論者の非難を防がうとするに至つては、狡智を極めたものと評さゞるを得ない。

政友會の罪惡

然しながら市來氏をして斯る狡智を弄するに至らしめるのは實に政友會の罪である。政友會が高橋是清氏の如き似非財政家の金禁輸繼行論に支配され、之を以つて政友會の傳統的政策であるが如くに盲信し、政友會の御用實業家と呼應して、政府のを禁方針を實行することに妨害を加へた一事こそ、市來氏の所爲して曖昧ならしめた理由であると解される。「すまじきものは宮仕へと云ふ言葉があるが、誠にすまじきものは超然內閣の閣僚である。經費を緊縮して、積極政策を廢棄しようとすれば、政友會から異論が出る、物價調節に就て、斷乎たる方針を取らうとすれば、政友會が反對する、今又金の輸出解禁を行はうとすれば、政友會の妨害する所と爲る。若しも市來氏に多少の經綸があるとしても、斯る有樣であつて、能く之を實際に行ひ得られるであらうか。抑も亦一國の大藏大臣が當面に何等の責任を持たない政黨に操縦され、左右されて、自家の所信は總て之を犧牲に供するが如き次第であつて、何として世間の信望を繫ぎ得るであらうか。私は市來氏に一面の識すら持たない、氏が如何なる地位に居らうが、又如何なる境遇に立たうが、私としては全然關係のない問題であるようなもの〻大藏大臣が所信を施すを得ないような無力の地位に在るとすれば、國家の威信財政の信用を保つ上に於て、之を遺憾とする念を禁ずるを得ない。市來氏は主義所信の爲めに玉碎するであらうが、其れとも地位の爲めに、瓦全するであらうか、私は多少の興味を此點に繫ぐものである。

創作

百花村物語　佐藤春夫

暗夜行路　志賀直哉

窓　廣津和郎



百花村物語

佐藤春夫

大宋の仁宗の時代のことであるが、江南縣の首都たる平江の東門外に長樂村といふのがあつた。平江からはほんの二里ばかりのところである。その村に、姓は秋、名を先といふ一人の老翁が住んでゐた。もと農家の出で若干の田畑と一軒の住居とを持つてゐた。妻といふのは早く死んでしまつたので、男の子も女の子もひとりもなかつた。この秋先といふ人は若い頃から花を栽ることと果樹を育てることとが大變に好きでしまひには耕作のことは抛つてしまつて、ただもう自分の最も好きな仕事に身を委せてしまつた。この人がもし種の變つた花でも見つけようものなら、それこそ、まるで普通の人が寶でも手に入れたような途方もない歡び方で、だから何か大事な急ぎの用があつて道を歩く時だつて、途中で花や樹木に逢ひでもすると、他がそれを見せたがらうが見せたがるまいがそんなことには一向おかまひなしで相格を崩して近づきながら花を見せて欲しいとせがむのであつた。それで若しそれが

ありふれたものであるとか、でなくとも自分の庭にもあるもので自分のもそれと同じに今咲き誇つてゐる種類のものであると、それで滿足して立去るのであつたが、さてそれが自分に持つてゐない稀らしいものであるとか、それとも自分の庭にもあるにしても自分のはもう花の散つてしまつてゐるものであると、秋先は大切な用事などはすつかり忘れてしまつてその傍に立つたきりいつまでもいつまでも去り兼ねて、永い日を花のそばに立ち盡すのであつた。人々は彼のことを花痴——花氣違ひ——と呼んでゐた。それほどだから彼が花賣りに逢つて好い花でもあるのを見つけると、手もとに金が有るか無いかそんなことなどは考へるひまもなくどうしても買ひ取らないでは居られなかつた。金のない時には身につけてゐた著物を脫いで花の代(しろ)にと渡した。花賣は彼のこんな性分を知つてゐるから途方もないことを言ふ。けれども手に入れさへすれば値の高いなどは我慢をして買つて歸るのであつた。又、心がらのよくない輩(やから)はこの人がこのやうに花を愛するところにつけ込んで方々からいい花をさがし出して折つて來ては、折られた花の傷口へ土を卷いて彼を欺したりする。彼はそれをでも買つた。不思議なことにはそんなものでもこの人が植ゑたといふことになると種を蒔いたもの同然よく根を張るのであつた。それが月日とともにいつしか大きな庭園になつて來たのである。その庭はまわりを竹で編んだ垣根で取遶らしてゐたが、その垣根にはとりどりの蔓草がもつれ合つてからみついてゐたし、それの下にはまた隙間もなくさまざまの草花が種を蒔かれいろいろの灌木が生ひ茂つて、地上一めんは錦を敷き交へたさまであつた。垣根に纏つてゐるもの、垣根の下にこんもりしてゐるもの、垣根に沿うて立つてゐるもの。それらのものはその名も姿も形も千差萬別で、その無數な種類を一つ一つ數へ上げるといふのはとても出來ないことである——薔薇だとか木槿だとか棣棠、金雀、蜀葵、鳳仙、鷄頭、秋葵、罌粟、さては金萱、百合、躑躅、牡丹ぐらゐなものはまづわかるとしても、その外の大半はいづれ私たちの知らないものばかりである。花の季節になると垣根は刺繡した綠の帳にな

る。名ある花や珍しい花も幾足か歩いたただそれだけで見盡すことも出來た。一つの花が未だ散らうとはしないのにもう別の花が咲き初めて居る。兩開きになつた柴の戸のある門が南の方にあつたが、竹の小徑がそこから通うてゐて、その兩側の竹のあるところには別に檜の生垣もあつた。その生垣について曲ると、そこがささやかな草菴で、堂は草屋根だけれどもそれが却つてさわやかなくつろいだ氣持で、窓も明るかつた。堂のなかには誰の筆とも知れぬ一幅の小畫がかかつてゐて、紫木で出來た榻や卓や腰掛などは艶々しく浄められて床の上にも塵一すじとは落ちてゐなかつた。この堂のうしろには別にやや大きな精舍があつて臥室のあるのはそこであつた。そのどこから眺めてもやつぱり花のないところとては無く思ふ存分に繁つて、梅、杏、李、桃、山茶花、蓮、水仙、桂樹、柘榴、芍藥、海棠、茶、玫瑰花、杜鵑花、牡丹など、或るものはあでやかに或るものはすつきりとして或るものは疎らな雨をとほして見ると風情が深いし或るものは匂のほかは月の光のなかに溶け込んでしまふし或るものは朝日に照らされて色香を增すし、さういふわけだからどんな季節のどんな日にでも眺めるに花のないといふ時は決して無かつた。ここはいつまでも立てつづけの春であつた。垣根の門の外はちやうど朝天湖といふ大きな湖をひかへてゐるが、この水の眺めが春にも夏にも秋にも冬にも晴れた日にも雨の日にも人を慰めた。花園の主人である秋先はこの湖の岸沿ひに土手をこしらへて一面に桃と柳とを植えたから、毎年春が來ると紅と綠とが入り雜つて照り榮えた。さながら西湖の美しい景色である。この岸邊にはまた木芙蓉が植えつけられてあつた。それからこの湖は俗に荷花蕩――蓮の大池――と呼ばれてゐたくらゐで水のなかには五色の蓮があつた。その花が開く日ごろには湖上一帶がきらびやかな霞になつて、かんばしさが人を靄々と包んだ。小舟があちらこちらとゆれ漂ひながら菱を採る歌聲がすずしい。折からななめにすべる風がそよかに吹いて來たので、帆のある船はわれ勝ちに走り出して思ひ思ひに入り亂れた。柳の木かげには漁夫が船の用意をしたり網を干したりしてゐた。子供を相

手に戯れてゐるもの。網をつくろつてゐるもの。酔ひつぶれて船の上に臥てしまつたもの。水泅ぎの勝負を初めたもの。花を見る人のみやびた舫は音楽を載せて集つて來てゐた。水の上からの楽の音。岸邊の笑ひ聲。この絶え間のないものの音を聞くともなく洩れ聞きながら花痴の秋先もやはりにこにこしてゐるのは、花の咲きつづくこの頃の季節がうれしいからに違ひない。口には歌を呟いてゐた――

朝天湖のほとり水は天につらなる、
聞ゆるものは漁歌ならで採蓮の曲、
ささやかなる草の家ながら花はくさぐさ
主はいつもいつも花に對うて居眠る。

たそがれ時になつて舟が歸り始めると無数の遠い灯かげが螢火や星の影にまじり込んでどれを何とも區別しがたかつた。やうやく秋も深くなつてしまつて霜を呼ぶ風が吹き初める。楓の林が黄ばむで、痛ましいのは岸邊の柳と木芙蓉と――白蘋と紅蓼とにまじつてその衰へた面かげを水に映してゐるではないか。葦と蘆とのなかには雁の群が集つて、雲に向つて叫ぶその干高な聲が人の心に悲しく響き入る。冬の険しい氣候には、雲の上にまた雲が重なつて幾重にも隙間もない雲からちらちらと舞ひ落ちるものがあると、天も地も無限の一つの色に溶け入つてしまふ。――四季折々のこの水邊の趣をこれだけでもう先分に言ひ現したなどと私は自惚れてゐるわけではない。但もう言ひ現はすことはあきらめる。

さて秋先はといふと毎朝すがすがしいうちに早起をして、花のなかに散り込みなどしてゐる落葉を掃き淨めてから、水を汲んで來て一つのこさず木に水をかけてやる。夕方になると又もう一ぺん水をかけてやる。もし新らしい花が咲き

さうになつてゐるともう嬉しくてたまらない。そこで或は壺の酒を煖めたり或は甌の茶を煮立てたりして、花に向つて丁寧にお辭儀をする。さうしてその酒なり茶なりを注ぎ捧げて、「花萬歳」と三聲繰り返して、それからやつとその下へ坐つて、靜かに斟みながら仔細に嘗め味つた。酒がまわつて來て上機嫌になると彼は出まかせの唄をうたひ、疲れてくると石を枕にして木の根もとに横になつてしまふ。咲きかかりの蕾のころから開ききつてしまふまで決して傍を離れはしない。日かげの照りつける時には棲を淸らかな水に浸して花の上にそそぎかけた。月夜になつて來ると毎晩眠らなかつた。雨風の吹き荒ぶときには簑笠をつけて花の間を視てまわつて、たわめられた枝でも見つけると竹で支へをしてやつた。夜なかにでも幾度も起きて上つて見まわる。若凋みさうになつた花があると、毎日毎日溜め息をしてしまひにはきつと涙をすら流すほどであつた。そのもう散つてしまつた花びらごときをさへただ捨てては置けなかつた。それを優しく掃き集めて皿の上にのせて眺め入るのであつたが、もう乾からびてしまつたとなるとやつとそれを穢れのない甕のなかへ收めた。さういふ花びらが甕一杯になると再び茶や酒をその上にそそぎ祭つてどうしてもそれを捨て去るに堪えない有樣であつたが、やつと思ひかへしてその甕をうやうやしく自分で捧げて湖の土手の下深く埋めてしまふ。これが花のお葬ひであつた。また花びらが雨に打たれて泥のなかへ埋められるやうなことでもあると幾度も幾度も洗ひ淨めてからそれを湖上へ流すのである。これが花の浴であつた。彼は人々が花を折り取ることをむかしからひどく憎んでゐた。彼はそれに就て次のやうな意見を持つてゐた——一たい花といふものは一年に一度だけ咲くものだ。四季のうちたつた一つの季節だけで、その一つの季節のうちでもまたほんの五六日だけのものだ。三つの季節の冷淡な仕打ちを彼の女がぢつとこらへて來るのも、このほんの幾日かを世の中へ出て光や風に逢ひたいといふ一念からなので、だから風のまにまに舞ひゆれる花が見る人を迎へて笑顏をむけるさまは、立身出世をした人のやうな氣持なのである。不意にそれが

折り取られてしまふ。咲き出すのには長い辛苦で折り扭られるのはただ一瞬の手もない事だ。花はものを言へないけれども花だつてこれが歎かないでゐられようか。まして、咲いてゐる幾日かの間だとて初めは蕾だしあとになれば凋れはじめるし盛りと言へばほんの束の間である。蝶や蜂にだつて氣はゆるせないし、鳥や蟲と來てはてんで近寄らせられないし、日は燒きつける風は吹く露には包まれる雨には打たれる。花の身になつては手賴に思ふのは人間ばかりだのにその人間の手が花を拗ち折る。まるで心のやさしい妻を虐待する夫のやうなものだ。どうしたらまあそんなむごい事が出來るといふのだらう。芽から根になつて根から元木ができて勢のいゝのが大枝になり勢の惡いのは小枝になるのだが、一本の大枝、一本の小枝それが出來るためにはまつたくあだやおろそかの月日ではない。その枝の上に咲いてゐる花だ。やつと咲ける季節が來て人に見てもらはうと咲き出でた花だもの美しく無からう筈はない。まあ假りにあまり美しいから折り採る必要があるとする。花は枝から離れてしまつたなら二度と再びはもとの枝へは歸れはしない。枝は幹から折られてしまつたなら二度と再びはもとの幹へくつ附けられるものではない。死んでしまつた人間がまたと生きては來ないと同じこと、害を與へた人間にどんな刑をして見たところで折られた花にとつては何のつぐなひにもなるわけのものではない。花は物をこそ言へないが花だつて忍び泣きぐらゐはしもするだらう。一たい花を折る人といふものはきつと具合のいゝ大枝を見つけ出して花の繁つてゐるところを擇び取るものだが、それを座敷に置いてほんの一時の酒盛の興に供へたりさては女どもがただ一日の髮の飾りにしたりする。客をもてなすのなら花の下へ來て存分に醉うたがよからう。髮容をつくるなら手細工の器用なのがありもしよう。手のなかに一本折つてしまへば木では一本なくなつたのだ。人の手にある花はみんないとしい亡骸だ。今年一つの幹を伐つてしまへば來年はもうこの幹はない。命を延べて置きさへすれば年々の樂しみは盡きまいものを。未だ開かない蕾で花と一緒に折られて行くものもあるのだが、この枝の上で萎びてしま

ふ蕾などは、人間の子供のうちに死んでしまふのと何の違ひもない。なかにはもともとちつとも花が好きでもないのにただの氣まぐれにへし折つて、折つてからまた好ささうなのを擇りどりに捥ぎとつて通りすがりの人にくれてやつたり、道ばたへ擲り出してしまふ人さへある。ちつとも氣の毒などとは思つても見ないと見える。まるで無法な災難に殺されてしまつて無實の申開きも出來ない人のやうなものだ。花はものを言へなくとも何で恨まずにはゐようか。——と、まづこれがこの人の意見なので、だから彼自身ではむかしから一枝をも手折つたこともなければ一片をも傷けたこともない。それ故よその園庭へ行つて心を打ち込んだ花に終日見飽かずにゐる時に、庭の主が來て一枝上げやうと言つて折りさうにでもすると、彼は罪惡だ罪惡だと言ひつづけてきつぱり斷つた。また誰かが花を折らうとしてゐると、彼の知らない時は仕方がなかつたが、彼の目のとどいたかぎりはそれを思ひ停らせようとしてまづ口で幾度も幾度も理を說いて見る。口で言つただけで聞いてくれない樣だと彼は頭を地びたにすりつけるやうにして情に訴へて花の命乞ひをした。人々は彼のことを花氣違ひとは言つてゐるやうなものの、大抵の人は彼のこの眞心をいぢらしく思ふて手を引つこめた。すると彼はまた精一杯に御辭儀をして御禮を言ふのであつた。また子供などで花を折つて錢儲けをしなければならないものがあると彼は錢をやつて花を折らせないやうにした。また彼が留守の間に折り取られてゐることでもあると彼は顏色を變へて歎いた。さうして泥をつまみ取つて木の傷のよはりを塗り固めた。これを花の療治と呼んでゐた。こんなことをされるといふわけで彼は自分の庭へはなかなか容易に人を出入させなかつた、たまに身内のものとか近所馴染などが見たいと言つて來てどうも斷り兼ねるやうな時には、最初に先づ例の花に對する見意を納得させて置いてからやつと庭へ足を踏入れることを渋々で許した。けれども花が穢れに打たれるやうなことがあつてはならぬといふので只遠くからだけ見せることにして、花には人間を近づかせない。それでも言ふことを聞かないものがあつて、つひ氣なしに花か葉か

の一つをとつてしまつた事があつたが、すると老翁は額から首まで眞赤にして喉が破れるやうに叫んだ、叱鳴りながら捩つた。さうしてこの者をその場から庭のそとへ追ひ返してしまつた。この事があつて以來、人々は彼の性質を悶ることが出來たものと見えて誰一人として、彼の庭で木の葉一枚摘み取るものもなかつた。林の茂つたところや樹の深いところなどには得て小鳥が巣を喰ふものだが、木立が茂くてその上に花や果物があると來たら百も千も群をつくつてやつて來るものだ。果物をつつくだけならまだしも高の知れたことだけれど花や蕾をやられてはたまつたものではない。そこで秋先は穀類を空地へ蒔いてやつて小鳥たちにそれを食べさせるやうにする。さうして仕合せが惠まれるやうに小鳥に向つて頼んだ。小鳥にだつても性根はあるのだ――毎日存分に食べ飽いてゐるものだから花の間でおとなしく身輕るに飛び交ふてほがらかにこやかに啼き囀ることはしても、花びら一枚蕾一本だつてそこなふわけではなく木の實一個つばみはしなかつた、かういふわけで自づといろ〳〵の果物もどつさり出來る。大きくもあつたし味もよかつた。それが熟したとなると秋先は第一に天にそれを捧げ供へて花の神を祭つた。それから後では自分でも食べまた近所合壁へものこらず分けて初物を味ひ、それで殘りでもあると賣るのだが、一年のうちにはなにしがしかの利得があるやうなわけであつた。老翁は花と一緒に暮す人となりすましたが、若い時からこの年になるまで五十何年かの間、未だに飽きるといふこともなく體はいよいよ丈夫になり、粗末な衣物手輕るな食事好き氣儘ではあるが然も尠く餘つたものは村の貧しい人たちに洽く分けた。かういふわけで村中の人達は自づと彼を敬はない者はなく彼のことを秋公と呼んで尊んだ。けれども彼は自分では次のやうな詩をつくつて自事のことをただ灌園叟――「庭に水をやる爺」と言つてゐた。

夜明て園に水灌ぎ日暮れては水灌ぎ
水灌げばわが園の邊に百花はあざやか

花開いていつも見飽きぬうらみ
園をいとしみ見ては寝ようとも思はず。

話はかわるが、平江の町に張委といふ男があつた。これは官吏の身内の者であつたが、性根のねぢけた口賢い我儘勝手なむごたらしい男で、勢のいいのを笠に着てあたり近邊を欺したり嚇したり、自分の氣に喰はない人間にはきつと爭ひを持ちかけて相手の家が倒れるまでは手をひかない。手下には虎狼のやうな家來を使つて、外にも惡事に加勢をする同やじうな仲間に取卷かれていつも一塊になつては行くさきざきで人に禍を醸し出して、その害をうけたものは今までにもう數知れない程あつた。所が、或る日此男がはからずも一段上手(うはて)な男にとつつかまつて手もなく半殺しの目に會はされてしまつた。役人に訴へて出ると相手の惡智惠にかかつてここでもまんまと逆ねぢにまかされてしまつた。さすがに面目ないので車の幌を深く下してしまつて人には顔もみせず、ただ四五人の家來をつれ一味の惡仲間と一緒にしばらく田舎の自分の所領へかへつて憂さ晴らしをしてゐたのである。その所領といふのはちやうど長樂村で秋公の家ともさうかけ離れてはゐなかつた。或る日のことである。この張委の仲間が朝ぱらからの酒のなま醉ひ機嫌で村中を迂路々々と跦り歩いてゐたが、ふと來かかつたのが秋公の門のほとりである。見れば垣根には花ある枝が色香もあざやかに愛らしく、あたりの木々は枝をひろげて生ひ茂つてゐる。「やあこれは風流なところへ來たぞ。一たい何者のうちだ」と皆は口を揃へて言つた。すると家來の一人が答へて「これが秋公の花園です。あの花氣違ひといふ評判の高い男の秋公です。」そこで張委が言ふには「この里にはなんでもそんな老爺(おやぢ)がゐるやうなことは聞いてゐた。さまざまなものを植集めて喜んでゐ

るさうじやないか。ここがその住居といふことならば一つ這入つて見ずばなるまいて。」「ところがです」と家來が答へた「その爺といふのが何さま偏變木で人には一切見せないといふことなのです。」「それやほかの奴らには見せないかも知れない。だが我々にそんなことを言へるものか、おれが一つ門をたたいてやらう」張委が得意さうにさう言つた。

それは牡丹の花ざかりのころであつたものだから、秋公はいそいそ庭に水をやつてしまつてから、酒を一壺とくだものを二皿と用意して花の下へ來てひとりそれを酌みながら樂しんでゐるところであつた。まだ三杯とは傾けないうちに騒々しく門を敲く聲が聞えてきた。盃を投げ出して出て行つて見ると、そこには酒臭い息を吹きながら五六人の人間が突立つてゐる。秋公はてつきり花を見に來たなと感づいたものだから門に立ちふさがるやうにして尋ねた「これはお揃ひで、一たいどんな御用でございませう。」すると張委が言うには「こら老爺、お前はこのおれを知らないか。町でも名高い張公子といふのはおれのことだ。この邊一たいは張家の領地だ。おれのものだ。聞けばお前の庭にはなかなかいい花がどつさりあるさうじやがおれはわざわざ出掛けて見に來たのだ。」「飛んでもない。私どもにいい花などがございますものか。高が桃か杏みたいなものばかりで、それとてとてももう散つてしまつて今では花は一つもございません。」さう言はれたので張委は眼を怒らして叫んだ「怪しからん奴だ。おれがこんなに花を見たいといふのに無いと言つて追ひかへすつもりだな。おれが貴様の花を喰つてしまひでもすると思ふのか。」「いやいや私はうそは申しません。花は本當に無いのでございます。」突然張委は秋公を追しのけて胸ぐらを一つ突いた、よろよろとよろけて後ずだりをした間に、皆はどやどやと押入つた。事態が穏やかでないのを見て取つた秋公はただ相手のするにまかせて門の戸を閉めてから彼等の後について歩いて、花の下へ來たからさつきの酒とくだものとは取りのけて自分は隅の方に立つてゐた。皆はあたり一面のさまざまな花を見てゐたがその中でも牡丹が一段と盛りであつた。この牡丹といつても世間にありふれた玉樓春などとい

ふ類のものとは違ふ。黄楼子、綠蝴蝶、西瓜秋、舞青猊、大紅獅頭といふ變つた名前の珍らしいものが五種もあつた。一たい牡丹は花のなかの王とされてゐるものであるが洛陽に産するものが世に第一である。姚黄とか魏紫などといふものは一本の値が五千銀もする。なぜ洛陽の牡丹が第一かといふに、昔、唐に則天武后といふ女帝が居たがみだらでむごい方で男妾を二人も持つてゐたほどであるが、十一月の或る日、にわかに庭遊びを思ひ立つた「明日の朝わたしは庭に遊ぶ。大急ぎで春に布令を出す。花たるものは悉く明日の朝風を待たず今夜のうちに咲いて置け。」則天武后は地上のほんの當座の支配者だのに、そこを考へなかつたすべての花はその命令にそむくことが出來なかつた。一晩のうちに蕾が出て花が咲いた。あくる朝、女帝が飾り立てた帝王の御行もので花園に乘り入つた時にはわれ勝ちにと咲きみだれた花は色とりどりに目くるめくばかりであつた。そのなかにたつた一つ牡丹だけが女帝や寵臣などの命令に背かうともしなかつた。花どころか枝には葉一葉だつてつけてはゐない。これを見た則天武后は大へんに怒つてたうとう牡丹を洛陽へ流罪を申しつけてしまつた。牡丹の一ばんいいものはかういふわけで洛陽のやうな片田舎にあるのである。ところで秋公のこの庭では牡丹はあの草葺に向ひ合つて正面に植えつけられてあつた。さうして湖畔の石でまるく圍んで垣をしてそのうへ木の欄でしつかりと守り、上の方には布を張り渡して日除けにしてゐた。花の幹は高さが一丈ばかりもあつて一ばん低いものでも六七尺はあつた。花は大きさが盆ぐらゐもあつて華麗を極めたその五色は目に眩しかつた。人々は口を揃へて花を褒めた。張委はそこで石垣を踏み臺にして花の香を匂ふてみた。この無作法が秋公にはもう我慢がならなかつた「どうぞ少し離れたところから御覧なすつて下さい。そこへおよりなさらないやうにして頂きたいもので」

「何！」さつき素直に門を入れられなかつたのを根にもつてゐる張委は言ひがかりが欲しい折からである。「老爺、貴様はおれの領地の近所にゐながらこのおれの名前を知らないと見えるな。おれが花を見たいといふと花は無いと返答を

しをつた。匂を嗅がうと思ふとまたつべこべ吐す。かうして見ちや花が腐るとでも言ふのか。これや面白い。是非ともその説が聞かして貰ひたいものだ。」さういひながらたうとう枝を引きよせて花の上へ自分の顔をわざと突き出した。秋老人は傍にゐてそんなことをされたり言はれたりするのをぢつと聞き流してゐた。いづれ皆は花を見さへすれば歸つてしまふものと思つてゐたからである。誰だつてさう思ふじやないか。ところがこの意地惡るな男はまたこんなことを言ひ出した「こんないい花を見るのに一杯飲まないといふ法はない。」さう命じられた家來は驅け出して行つた。ここで酒盛が初まるのかと思ふと秋公はいらいらして堪らなくなつたので進み出て言つた「でんでん蟲の殼のやうな私のうちには皆様のお座りなさるやうな場所はございません。あなたさまはもう花をごらんなさるのはおやめにしてお酒はお屋敷へお歸りのうへになすつては如何です。」張委は地面を指さしながら「ここの地びたが結構だ。」「土の上はむさくるしうございます。あなたさまがお座りになれる筈はございません。」「心配するな、まあ毛氈ぐらゐは敷かずばなるまいがね、」そこで家來が毛氈を取りに走つた。程なく酒肴が來る。毛氈を敷く。みんなはその上へ車座になつてさまざまな聲を上げて呼び叫びながら拳を打つた。このしたりげな有様を見ながら秋公はたたきひしやがれたやうな氣持で片隅に坐つてゐた。すると、花の生ひ茂つたこの庭を見てゐるうちにむらむらと良からぬ考を出してこれを自分のものにしてやらうと思ひ立つた張委は、醉つぱらつたまなざしでぢろりと秋公を見やりながら言つた「これ、お前は老ひぼれの役に立たずだが出しやばらずに花をつくつてゐたのは氣が利いてゐるな。それに免じて一杯飲ましてやらう。」「こんなことを言はれて喜ぶ筈はない、秋公は腹立しげに返事をした「私は酒の飲めない性分です。御自分で召上つて下さい。」張委は更に言ふには「時にお前はその庭を賣る氣はないかね。」その口ぶりに秋公は飛んでもないことがもち上つたのに氣がついてびつくりして答へた「この庭は私の命です。どうして命が捨てられませう。」「命か命でないかそんなことは聞きや

しない。賣れと言ふまでさ。それにもしお前が行くところが無いとでもいふのならそつくりそのまま俺のところへ來てしまへばいい。庭のせわをして花さへつくつてゐれば何にもするには及ばぬ、どうだ、いやか。」すると一同の者は聲をそろへて言つた「爺さん。何と結構なことじやいか。そんな御思召を聞くからには早く御禮を申し上げなけや惡からう。」相手がぐるになつて一足一足と自分をおびき落さうとしてゐることに氣がついた秋公は、かつとなつて手足はしびれがきれたやうになつて來た。彼が返事をしないのを見てそこで張委が言つた「怪しからん奴だ。いやとか應とか返答をしろ。」秋公は答へた「いやだと申上げたじやありませんか。いつまで仰言るのです。」「よくも吐したな、もう一ぺん言つて見ろ、訴狀を書いて貴樣を役所へ突出してくれるから。」かつとなつてゐる秋公はこの無法な言ひ草に返答をし返してやりたかつた。が考へてみれば先は勢力のある人間だし、それに醉つぱらつてもゐる。こんなものを相手にしてはつまらない。暫く延して置いて復の成りゆきを見よう。さう思ひ返した秋公はたけり立つてゐる氣持をぢつとおさへて言つた「あなたが本當にお買ひになりたいのなら一日だけ返事は御待ち下さい。さうさう足もとに鳥が立つたやうなことをおつしやつても初まらない。」「なるほどこれは尤もなことだ。それじや明日また來ることにしよう。」皆のものは聲を揃へてさう言つたが、この時には皆はもうすつかり醉ひどれになつてゐた。そこで皆は立ち上つて、家來たちは先に立つて空になつた器を拾ひ集めた。秋公は彼等が花を折るかも知れないと思つたから用心をして花のそばに立ちふさがつてゐたが果して張委が歩みよつて來て石のかこひへ上つて花を折りさうにした。秋公は彼にとり縋りながら言つた「どうぞおやめ下さい。花は小さなものに過ぎないけれど花だつて長い辛苦をしたのです。さうしてやつとそれだけに咲いたのです。つい折つてしまつたのでは花が可哀想です。折つてしまへばたかだか一日か二日で散つてしまふだけのことにどうしてそんな罪つくりなことをなさらうといふのです。」「うるさい」と張委は叱鳴りつけた「何が罪つくりだ。貴樣が明

日になつて竊つてしまへばあとはこの俺のものだ。皆へし折つてしまはふと世樣の世話にはならぬわ。」張委は秋公を押しのけようとする。秋公は死んでも放すまいと縋りつきながら呼んだ「殺されたつてこの花を折らせはしません。」張委の仲間の者たちが言ふには「實に怪しからぬ奴だ。若樣が花を一本折らうと仰言るのが何でそんな一大事だ。こんな大業な眞似をして嚇したらおれたちに花を折れないとでも思つてゐやがるのだな。」皆は一度に進みよつてめちやくちに花をへし折つた。秋老人は思はず叫びを上げてその切なげな聲は天にまでひびくやうであつた。張委に縋つてゐた手を放した老人は命がけで花の前に立ちはだかつた。けれども一方を庇つてゐるうちに片方は空になる。かうして瞬くうちに花は殆んど捲ぎとられた。秋老人は心も體もふるへながら叫んだ「この惡者ども、人の家へよくも押しかけておれをわなに落したな もう命も何も入るものか」さう言ひさま彼は張委に飛びかかつた。頭でもつて胸を突いた。勢がはげしかつた上に張委はひどく醉つてゐたのでよたよたとよろめいたかと思ふとさかとんぼに打倒れた。花のなかからどやどやと家來たちが來て袋たたきにしようと秋公を引捉へた。しかしなかにいくらか思慮のある人間がゐて、秋公は老人の事でもありそんなことをして間違をしでかしてもしちやつまらないと皆をなだめて、倒れてゐる自分たちの主人を扶け起した。張委は突き倒されたものだから一層むしやくしやして、起き上がるや否や花の方へ進みよると咲いてゐる花をたたきつけた。花びら一つ枝に殘らなかつた花は地面一帶に撒き散らされたのを、張委はその上から踏みにちつた。せつかくの美しい花がこんなむごたらしい目に逢つて、綠の葉も愛らしい花びらもめちやにくだけてまるでひどい雨風のあとのやうに泥まみれになつてしまつた。そんなありさまをまのあたりに見た秋公は地の上に伏し倒れ、天に叫んで悲しみを訴へた。その悲しみの聲があたりに響きわたつて近所の人々は秋公の庭のさわぎに氣がついて皆馳けつけて來た。地面には踏み散らされた花が敷き亂れてゐるし、人々は秋公を取り圍んでいきまいてゐるところであつた。近所の人々は

驚いて、わけをたづねた。馳けつけた人々のなかには張委の小作人も二三人群つてゐたので、その男たちが秋公のために詫をした。それから張委を宥めすかしながら門のところへ送り出した。張委はその者たちに言ふには「こらあの畜生にさう言つけろ。彼奴があの庭をおれによこすならおれも勘辨はしてやる。もしいやといふことを半分でも言つて見ろ。思ひ知らせてくれるから。」くやしさうにそんなことを言ひ捨てて歸つて行つた。近所の人たちは張委がひどく醉つぱらつてゐるのを見て、ただ酒の上の話だと思つて氣にもとめなかつた。皆は引つかへして、今度は秋公を抱き起して家の階のところへ腰をかけさせた。けれども老人はいつまでも聲を上げて泣き叫ぶのを皆していろいろと慰めた上に庭の門を閉めてやつたりなどして歸つて行つた。

近所の人たちは道々とりどりの噂をしてゝ中にも秋公が日ごろから人に花を見せないのを面白からず思つてゐる者は、「こんな目に逢つたからにはあの變人もこれに懲りたらう」といふものもあつたさうかと思ふと、中には秋公を素直に同情する人もあつて、「そんな可愛想なことをいふものじやない。昔から、一年花を養つて見るのは十日といふ諺もある程ではないか。誰でも花を見て美しいとは思ふだらうけれども美しい花だと褒めながらもそれを育てた人の苦勞には氣がつかないでゐる。そんな苦勞の末にやつと咲かせたのであつて見れば大事に思ふのは無理もないではないか。」

秋公はこの散らされた花をそのままにして置くことが堪えられなかつた。落ちてゐる花びらに進みよつて手に拾ひ取つて集めた。踏みにちられてあの五色の色も褪せ傷いたものどもは泥土のために汚されてあつた。秋公の心は裂けがするほど悲しかつた。「花よ、私はお前をいつくしみ守つて今までに花びら一枚、葉一枚さへ傷けたことはなかつた。どう

して今日お前たちにこんなひどい目を見せてしまつたらう。涙が再び湧いて來て秋公はひとりで泣いてゐた。ふとその時うしろの方で人聲がして「お爺さん、どうしてそんなに泣いていらつしやるのです」と言つた者があつた。……

この話は未だ終ではない。ここが半分である。と言つたら何と退屈なことだと思はれる讀者もないとは限らない。私も同感である。この話は一たい「今古奇觀」卷第八なので、私にはそれがちよつとしたメルヘンの興味で讀めるのである。それで病床にゐる私はちよつと創作する氣持になりにくいので、この話を書き直して見ようと思つた。しかし別に加へるべき創意もないし、さうしたいとも思はなかつたので、氣輕るになるべく原文に近い氣持でこれを書き初めた。「今古奇觀」は支那で口語文で書かれた最初の小說だ、支那短篇小說のうちでは細かい日常生活的寫實が取柄だ——胡適の說——といふ事だがそのためだかどうだかひどくまわりくどい。書き直したら一さう散漫になつたのは、私も原文に倣つて柄になく俗に近い語調で書いて見たりしたことにも因るかも知れない。何にせよ我ながら不出來退屈だと思つて筆が澁つてゐるうちに〆切が來た。讀者はいやならば來月この退屈のつづきを見ないでも濟むが、筆者の方ではどうやら書きつづける義務があるらしい。困つたものだ。このやうな話でももう三年ほど以前であつたら私は相當の藝術的情熱をもつて書き上げることが出來たらうにと思ふ。つまり自分でも氣がつかないうちに私の空想趣味時代も去つたのであらう—これは餘計なことまで書いた。筆者附記



暗夜行路

志賀直哉

十七

十月中旬過ぎ、謙作は末松、水谷、水谷の友達の久世などと鞍馬に火祭と云ふのを見に行つた。日の暮れ、京都を出て北へ北へ、幾らか登りの道を三里程行くと、遠く山の峡がほんのり明かるく、其邊一帶薄く烟の立ちこめて居るのが眺められた。苔の香を嗅ぎながら冷え〳〵とした山氣を浴びて行くと、此奥にさう云ふ夜の祭がある事が不思議に感ぜられた。子供連れ、女連れの見物人が提灯をさげて行く。それを時々自動車が前の森や山の根に強い光りを射つけながら追拔いて行く。山の方からは五位鷺が鳴き乍ら、飛んで來る、そして行く程に、幽かな燻り臭い匂ひがして來た。町では家毎、軒前に——と云つても通りが狹いので、道の眞中を一列に焚火が竝んで居た。大きな木の根や、人の脊丈け程ある木切れで三方から圍ひ、その中に燃えて居るのが、何か岩間の火を見るやうな一種の感じがあつた。

焚火の町を出拔けると、稍廣い場所に出た。幅廣い石段があつて、其上に丹塗

の大きい門があつた。廣場の兩側は一杯の見物人で、その中を、裸一つに肩だけ一寸した物を着て、手甲、脚絆、草鞋がけに身を固めた向ふ鉢卷の若者達が、柴を束ねて藤蔓で卷いた大きな松明を擔いで、「最澄——祭禮」、これは本統ではないか）一寸左う聽きなされる掛聲をしながら、兩足を踏張り、右へ左へ踉蹌けつつ上手に中心を取つて歩いて居る。或る者は踉蹌ける風をして故と群集の中に火を突きつけたり、或る者は家の軒下にそれを擔ぎ込んだりした。火の燃え方が弱くなり、自分の肩も苦しくなると、一ト抱え程ある其松明を不意に肩からはづし、どさりと勢よく地面へ投げ下ろす。同時に藤蔓は撥けて柴が開き、火は急に非常な勢ひで燃え上がる。若者は汗を拭き、息を入れて居るが、今度は又別の肩にそれを擔ぐ。それも一人では迚も上げられず、傍の人から助けて貰ふのである。

此廣場を拔け、先きの通りへ入ると、其所にはもう焚火はなく、今の松明を擔いだ連中が「最澄——祭禮」と聽こへる掛聲をして、狹い所を行き交ふ。子供は年相應の小さい松明を漸と重さうに踉蹌けながら擔ぎ廻はつた。町全體が薄く烟り、氣持のいゝ溫りが感ぜられる。

星の多い、澄み渡つた秋空の下で、かう云ふ火祭を見る心持は特別だつた。一ト筋の低い軒並の裏は直ぐ深い溪流になつて居て、そして他方は又高い山になつて居ると云ふやうな所では幾ら賑はつて居ると云つても、其賑かさの中には山の夜の靜けさが滲透つて居た。これが都會のあの騷がしい祭より知らぬ者には大變よかつた。そして人々も一體に眞面目だつた。「最澄——祭禮」この掛聲のほかは大聲を出す者もなく、酒に醉ひしれた者も見かけられなかつた。しかもそれは總て男だけの祭である。

或る所で裸體の男が軒下の小さな急流に坐つて、眼を閉ぢ、手を合はせ、長い事何か口の中で唱へて居た。淸いつめたさうな水が乳のあたりを波打ちながら流れて居た。大きな定紋のついた變に暗い提灯を持つた女の兒と無地の麻帷子

を提げて持つた女とが軒下に立つて其男のあがるのを待つて居た。漸く唱へ言を終ると男は立つて、流れの端しに揃へてあつた下駄を穿いた。帷子を持つた女が濡れた體へ默つてそれを着せ掛けた。男は提灯を待たず、下駄を曳きずつて直ぐ暗い土間の中へ入つて行つた。これはこれから山の神輿を擔ぎに出る男であるといふ。

から云ふ連中が間もなく廣場の石段下に大勢集つた。其所には二本の太い竹に高く注連繩が張渡してあつて、其注連繩を松明の火で燒切つてからでなければ誰も其石段を登る事が出來ないとの事だ。然し繩は三間より、もつと高い所にあつて、松明を立てゝも其火は却々そこまでは達きさうにない。澤山の松明が其下に集められる。其邊一帶、火事の時のやうに明かるく、一緒に早くそれの燒切れるのを望み、仰向いてゐる群集の顏を赤く照らし出して居た。

やがて、漸く火が移り、繩が火の粉を散らしながら二つに分かれ落ちると、眞先に拔刀を振翳した男が非常な勢で石段を馳登つて行つた。直ぐ群集は喚聲をあげながら、それに續いた。然し上の門にもう一つ、それは低く丁度人の丈より一寸高い位に第二の注連繩が張つてある。先に立つた拔刀の男にそれを振翳した儘馳け拔ける。注連繩は自然に斷られる。そして群集は坂路を奥の院まで其儘馳け登るのである。

「どうだい、もう歸らうか」と謙作は末松を顧みて云つた。

「お旅でやるお神樂を見て行かうよ」

神樂と云ふのは四五人で擔ぐやうな大きな松明を幾つか、神樂の囃子に合はせて、神輿の周りを擔ぎ廻はるのである。

「大概もう分つたぢやないか。早く歸つて寢て置かないと明日の音樂會で參るぜ」

「何時(なんじ)だ――二時半か」時計を見ながら末松が云つた。

「これで京都へ歸ると丁度夜が明けるかも知れませんよ」と水谷が云つた。

「それぢやあ、歸るか」末松は未練らしく云つた。「神輿を下ろす時が却々勇ましいさうだ。坂だから段々早くなるので、太い綱をつけといて、それを女が大勢で逆に引張るのださうだ。此祭で女の出るのはそれだけなんだ」

「鬼に角歸りませう。夜が明けてから三里、陽に照らされて歩くのは想ひですよ」と水谷が云つた。

末松も納得した。焚火の町では、來る時、岩間の火のやうに見えて居たのが今は盛んに燃えてゐた。町を出ると急に山らしい冷氣が感ぜられた。四人は時々振返つて、明るい山の峽を見た。道は往きより近かく思はれ、下りで樂であつたが、矢張り皆は段々疲れて、無口になつた。

「睡むくて敵はん」一番先きに末松がこんな事を云つた。

「僕が腕を組んでつて上げるから、眠ながら行き玉へ」かう云つて水谷は末松と腕を組んで歩いた。

京都へ入る頃は實際水谷が云つたやうに叡山の後ろから白ら〳〵と明けて來た。出町の終點で四人は暫く疲れた體を休めた。間もなく一番の電車が來て、それに乘り、謙作だけは丸太町で皆と別れ、北野行に乘換え、そして秋らしい柔らかい陽ざしの中を漸く衣笠村の家に歸つて來た。

「旦那はんのお歸りどつせ」何かあわたゞしい仙の聲がし、直ぐ臺所口から出て來て、「お産がムりましたえ」と仙はにこ〳〵して云つた。

謙作の胸は理もなく騒いた。そして急いで玄關を上がると、前から産室に決めて置いた座敷へ入つて行つた。リゾールか何か、藥の匂がして、其所には蒼白い顏をした直子が解いた髮の毛を枕から垂らし、仰向けに――よく眠入つて居た。赤兒は其所から少し離した小さい蒲團の中に寢てゐたが、謙作はそれを見たいと思ふよりも直子の方が何となく氣遣はれた。若い看護婦が默つて叮嚀なお辭儀をした。小聲で、

「如何でした？」と彼は訊いた。

「お輕いお産で厶いました」

「そりやあ、よかつた。そりやあ、よかつた」

「ぼんさんで厶りまつせ」と敷居の所に坐つて居たお仙が云つた。

「さうか」彼は安心した。そして、枕元に立てゝある風呂前屏風の上から一寸赤兒を覗いて見たが、頭からガーゼを被せてあつて、顏は見られなかつた。

「何時でした？」

「一時二十分で厶いました」

「夜前早くに奥さんがお迎ひを出して呉れ、おいやして、直ぐ俥を出しましたんどつせ。お會ひしまへなんだつしやろな」

「うん、會はない。——兎も角あつちへ行かう。起きるといかん」謙作は先に立つて茶の間へ行つた。

前日、謙作が家を出る時、入れ違ひに夕刊配達の入つて來たのを覺えて居るが、それが中まで入つて來ずに、玄關に坐つて居た直子を眼がけ、新聞をほうつて行つた。新聞は靴脱ぎの上に落ちた。それを何氣なく手を延ばして取らうと屈んだ時に直子は腹に變な痛みを感じたと云ふ。そして間もなく又痛みが來て、自分でも氣附き、直ぐ仙に産婆、醫者それからS氏の所へも電話をかけさせ、自分は其間に丁度入らうと思つてゐた風呂に入り、身仕舞ひをすつかり濟まして待つて居たと云ふ。——それを仙が話した。

「そりやあ、偉らかつた」謙作は直子がさう云ふ時、案外しつかり、よくやつた事を愉快に感じた。

「Sさんの奥さんが女中はんを連れて來て呉れはりました。今、還られた所どつせ」
「左うか。——赤坊の方も丈夫だね」
「へえ、そら立派なや丶はんどす」
「一寸看護婦さんを呼んで呉れ」彼は赤兒の事をもつと精しく聞きたかつた。
看護婦は來て白い糊の利いた袴をふわりと廣く、緣に坐つた。
「どうぞ入つて下さい。——大分早かなかつたんですか？」
「い丶え。——でも七百五十日ですから、普通よりは幾らか少ないかも知れませんが、早產と云ふ程ではないと思ひます」
「ふむ、左う。——まあ二人共、心配ありませんね」
「そりやあ……」
「どうも、ありがたう」謙作は左う云つて、何氣なく頭を下げたが、心では看護婦よりも、もつと何かに禮を云ひたい氣持だつた。看護婦は產室の方へ還つて行つた。
着物を着更え、湯殿へ顏を洗ひに行かうとした時に、看護婦が「御樣がお眼覺めでムいます」と云ひに來た。
直子は仰向けのまゝ上眼使ひをして、緣から入つて來る彼を待つて居た。その疲れたやうな血の氣のない顏を謙作は大變美しく思つた。
彼は枕元に坐つたが、云ふ言葉が見出せず、
「どうだい」と無雜作に云つた。

直子は靜かに只微笑した。そして靜脈の透いた蒼白い手を太儀さうに出し、指を開いて彼の手を求めた。彼はそれを握りしめてやつた。

「苦しかつたか？」

直子は上眼で彼の眼を凝つと見詰めた儘、微かに首を振つた。

「左う。それはよかつた」

左う云ふ直子が謙作には堪らなくいぢらしかつた。彼は頭をなぜてやりたい衝動を感じた。そして握つた手を解かうとすると、直子は尚それを固く握りしめて離させなかつた。彼は坐り直し、疊に突いて居た方の手で頭をなぜてやつた。

「どんな兒？――いゝ兒？」直子は疲れから低い聲で云つた。

「未だよく見ない」

「眠つて居るの？」

「うむ。――あなたは未だ見ないのか？」

直子は點頭いた。

「御覽になりますか？」と傍から看護婦が云つた。そして返事を待たず。屛風を除け、被せたガーゼを取ると、割りに手荒く（と謙作には感じられた）蒲團を引き寄せ、直子の床にそれを附けた。

眞赤な變に毛深い顏で、頭の先がいやに尖り、それに長い眞黒な毛がピッタリとかぶさつて居た。眠つた眼の丸く腫上つて居るのも氣味惡かつた。謙作はこんな赤兒を初めて見るやうに思ひ、一寸失望した。

「男だからいゝやうなもの、少し變な顏だな」と彼は笑つた。

「どんな赤さんでも初めは皆左うでムいますわ」看護婦は謙作の言葉を非難するやうに云つた。

赤兒は指でも觸れたら、一緒に皮がむけて來さうな唇を一種の銳敏さをもつて動かして居たが、それを開けると、急に顏中を皺にして泣き出した。

直子は首だけ其方へ向け、手を差し延べて、綿入れの肩を指で抑し下げるやうにして見て居た。其眼が如何にも穩かで、そしてそれは如何にも、もう母親だつた。

「これが本統に變でなくなるかね」謙作には父らしいと云へるやうな心持は殆ど湧いて來なかつた。

「今はお顏が腫れて居ますが、それが干けると、それはお可愛いくなりますよ。立派なお顏立ちでムいますわ」左う看護婦が云つた。

「左うですか。そんならまあ安心だが、此儘大きくなられた日には大變だからね」謙作は漸く快活な氣分になつて、「奈良の博物館に座頭の面でから云ふのがゐるよ」こんな串戯を云つたが、直子も看護婦も笑はなかつた。そして、茶の間で膳拵えをして居た仙の「旦那さんの、まあ何をおいやす」と云つて笑ふ聲がした。

「色んなとこ、電報、まだだらう？」

「えゝ」

「そんなら直ぐ打つて置かう」左う云つて、謙作は直ぐ二階の書齋へあがつて行つた。

十八

總て順調に行つた。謙作は時々眠つて居る赤兒を覗きに行つた。然し、それは一種の好奇心のやうなものからで、これが自身の肉身の子であると云ふ事は、どうも、しつくり來なかつた。彼は何か危つかしい感じで抱いて見たいとも

はなかつた。直子の方はもう本統に母親になり切つて居た。乳の時間が來て、寢ながらそれをやつて居る時の樣子などには如何にも落着きがあつた。そして赤兒も安心し切つて顏を埋める位に吸ひついて居る所などを見ると、謙作はそれを大變美しい物のやうにも思ふし、又どうかしてそれが白い乳房にゑたいの知れぬものが喰ひ入つて居るやうな感じで氣味惡く感ずる事もあつた。それはこれ迄かう云ふ生れたつての赤兒を見る機會が彼に殆どなかつたからでもある。

敦賀の方からは誰れも出て來なかつた。母はもう少し後でなければ出られず、直ぐ飛んで來る筈の伯母は持病の神經痛で動けずに居ると云ふ便りがあつた。然し直子は別にそれを淋しがらなかつた。お七夜と云ふ祝ひ日が近づき、早く名を命けねばならなかつたが、却々氣に入つた名が浮ばず、結局直子の直と謙作の謙とを取つて、直謙としたが、赤兒には何か嚴めし過ぎて、氣に入らなかつた。「尤もいつまで赤坊で居るわけでもないから」と彼はそれに決めた。

一週間は至極無事に過ぎ、そして八日目の夜になつて、もう寢床に就いてから赤兒が泣き出し、どうしても、それを止めなかつた。乳首を含ませると一寸の間泣き止むが、直ぐ又泣いた。臍を調べて見たが、どうもなく、若し蟲にでも刺されて居るのではないかと、着物を總て取更へてみたが、それでも泣き止まなかつた。原因が分からないだけに神經に不安を感じた。熱を計ると、少し高かつた。

「どうだらう、Kさんに來て貰はうか」

「左うね。その方がいゝかも知れませんわ」直子は不安さうに云つた。

然し間もなく、赤兒は泣き疲れたやうに段々聲を落として行つて、仕舞に泣き止んだ。そして安らかな呼吸をしながらよく眠入つた。

「どうしたんだらう？」謙作はほつとするやうな氣持で直子を見た。直子は

「よかつたわ」と云つた。

「よ　夜啼きちう事をされるやゝはんがムりまつせ」と仙が云つた。そして仙は天井に「鬼の念佛」を張るといゝといつて、それを勸めた。

赤兒は續いてよく眠つて居た。皆は出來るだけ靜かに自分達の寢床へ還つた。謙作は獨り二階の書齋に寢ながら、矢張り却々眠れなかつた。そして直子も乾度眠れずに居るだらうと思つた。産褥に居る直子は晝間も時々眠つて居たから倚眠れないに違ひなかつた。然し赤兒を覺ます恐れから彼は降りて行く事も出來なかつた。

彼は氣を更える爲めに氣樂な本を讀んで居た。暫くすると、階下の茶の間でボン〳〵時計の十二時を打つのが聽こえた。そして赤兒は又泣き出した。直子と看護婦と何か云つてる聲がして來た。彼は二階を降りて行つた。

直子は床の上に坐つて赤兒を抱いて居た。赤兒は出來るだけの聲を出して泣いて居た。

「時計、どうか出來なくつて？　あれで眼が覺めたのよ」直子は謙作を見上げ、腹立たしさうに云つた。

「止めて置かう」

「えゝ、左うして頂戴。――あの時計、これから使はなくつてもいゝわ」と直子は云つた。

謙作は茶の間へ行つて時計を止めて來た。直子は切りと乳を吞まさうとしたが、赤兒は却々それを含まなかつた。

「兎も角、近所の醫者へでも一寸見せて置かうぢやないか。Kさんと云つても今からでは遠くて少し氣の毒だし、それに又直ぐ泣き止むだらうとも思ふし」

「えゝ……」

「そんなら早速、俺自分で行つて來よう」

謙作は臺所口から直ぐ戸外へ出た。戸外は風の少しもない、曇つた眞暗な晩だつた。彼は歩いたり、馳けたりしたから行つた。近所の醫者としては、彼は、五丁程ある御前通りに仕舞屋のやうな格子の塡まつた家で、只「醫」とした軒燈を出してある家きり知らなかつたので、そこへ行つた。二三度叩くと戸の内から、

「何御用」と云ふ女の聲がした。

「一寸、先生に來て頂きたいのです」

「どちらはんどす」

「此先の衣笠園の中です、赤坊の樣子が少し變なので診て頂きたいのです」

「一寸、待つてお呉れやす」左う云つて其儘女は奥へ入つて行つた。そして直ぐ又もどつて來て、

「衣笠園のどなたはんどす？」と云つた。

「時任です」

「へえ？」

「と、き、と、を」

「ときとう」

「左うです」

そして女は「ときとう」左う獨り言をしながら奥へ入つて行つたきり、何時まで待つても出て來なかつた。謙作は苛々して來た。

「どうか早くお願ひします」彼は大きい聲で云つたが、返事がなかつた。

暫くして女は漸く戸を開けた。

「お待たせ致しました」女は寢間着姿で、瘠せた脊の高い見すぼらしい女だつた。

醫者は中で着物を更えて居た。これも見るから見すぼらしい小男で、年は謙作よりも少し上らしく、薄い天神髯を欲しさうに生やして居た。醫者は帶をしめながら、

「どんな御樣子ですか？」と云つた。

「只無闇と泣き續けるだけで、原因が分らないのです」

醫師は今になつて、却つて忙しさうに出て來て、

「お待たせしました」と云つた。

「こんなに晩くお願ひして——」

「いや。それぢや直ぐお供致しませう」こんな風にしきりと調子よく仕ようとした。少し酒に醉つて居るらしかつた。

謙作には此醫者が如何にも賴りなく思はれた。氣の毒でも矢張りK氏を賴めばよかつた、と思つた。途々醫者は生後幾日目かとか、母親に脚氣の氣はないかとか、さう云ふ事を少し訊いた後で、何時から京都へ來たか、そして何の爲居に、と云ふやうな要らざる事まで訊き出した。謙作はなるべく左う云ふ話を避ける爲めに醫者よりも一ト足先に歩いた。小さい醫者はそれに遲れまいと息を切りながら、ついて來た。

醫者の診斷は結局不得要領だつた。醫者はおむつに着いて居る粘液から、矢張り一種の消化不良だらうと云つた。そして泣いて、なるべく乳を飲まさぬやうにと云ふやうな注意をして、間もなく歸つて行つた。

赤兒は夜中泣きとほした。――少なくも皆には左う感じられる程によく泣いた。泣き疲れて、時々は眠りもしたが、皆も一緒にうと〳〵とすると、直ぐ又泣き聲に覺まされた。夜の明けるのが待たれた。

漸く戸外が白み始めると、謙作は直ぐ家を出たが、いつも電話を借りる家はまだ寢靜まつてゐた。彼は馳けて北野まで行き、其所の自働電話で、K醫師の自宅にかけ、病院に出る前に來て貰ひたいと云ふ事を頼んだ。

一時間程してK醫師は來た。半白の房々とした口髯を持つた大柄な人で、前夜の見すぼらしい醫者とは見るから何となく頼りになつた。醫者に挨拶もそこ〳〵に赤兒の今までの經過に就いて色々訊ねた。赤兒は丁度乳を飲んで泣止んで居る時だつたが、醫者が一寸手を額に當てると直ぐ泣き出した。醫者は手を離し、泣いてる赤兒を凝つと暫く見て居た。其顏を又直子は寢たまゝ上眼使ひで凝つと見詰めて居た。

「兎に角、身體を一つ拜見しませう」醫者が云つた。

看護婦は障子を閉めてから、赤兒を受取り、小さい床に寢せて、何枚も重ねてある着物の前を開いた。

「それでよろしい」醫者は近寄つて、胸から腹、咽、それから足まで叮嚀に調べ、二つ三つ打診をしてから、自身で臍の緒の繃帶を解き、大きな年寄らしい手で下腹を押して見た。赤兒は火のつくやうに泣いた。

「一寸脊中の方を出して下さい」

看護婦は袖の外から赤兒のいやに力を入れて屈げてゐる小さな手を一つゞゝ出して、裸の赤兒を醫者の方に脊中を向け、横にした。赤兒は兩手を擴ぎ、兩足を縮めて、力一杯に喑泣いた。腹を波打たせながら泣く其聲が謙作には胸にこたへた。直子は怒つたやうな妙に可恐い眼をして默つてそれらを見て居た。

醫者は叮嚀に脊中を調べた。そして尻から一寸ばかり上に母指の腹程の赤い所を見附けると、尚注意深く其所を見て

居たが、やがてこごむだ儘、顔だけ謙作の方へ向け、

「これです」と云つた。

「何んですか」

「丹毒です」

「……………」

直子は眼を閉ぢ、そして急に兩手で顔を被ふと寝返りして彼方を向いて了つた。

「然し未だ廣まつて居ませんから、早く手當てをすれば御心配なく済みませう」こんなに醫者は云つた。看護婦は默つて赤兒に着物を着せて居た。

「急いで病院から薬を取寄せませう」醫者は椽で手を洗ひながら云つた。「近かくに電話を借りられる所がありますか？」

「此所の大家さんにあります。私で分かる事ならかけませうか？」

「分らん事もありませんが、自分でかけませう」

謙作は直ぐ醫者を大家へ案内した。

醫者は注射液、イヒチオール、油紙、アルコールその他を考へ〳〵必要な品々を云つた。

「昇汞はお宅にありますか？」醫者は振返つて云つた。

「多分ありますまい」

「それぢやあ、昇汞と、――誰れでもいゝから自轉車で大急ぎで持つて來てお呉れ。――大至急。――わかつたね」

二人は歸ると、二階で薬の來るのを待つた。階下では絶えず赤兒の泣聲がして居た。

謙作は明瞭した事を訊くのが恐ろしかつた。彼はさう云ふ不安と戰ひながら、それでも矢張り訊かすには居られなかつた。

「どうでせうか」

「せめて生後一年經つて居られると餘程易なのですがね、――然し早く氣が附いたから、どうか食ひ止められるかも知れません」

醫者は尙、丹毒は大人の病氣としても可成困難な病氣で、まして幼兒では病毒と戰つて仕舞まで肉體がそれに堪えられるか否かで問題が分かれるのだから、兎に角營養が充分でないと不可と云ふ事、それには母乳に止まれる事が何よりも恐しいから、出來る事なら、母親だけ赤兒の泣聲の聽こえぬ所へ離して置くやうにしたいものだと云つた。

「お母さんの方も産後さう動かす事は面白くないですが、あの泣聲を始終側で聽いて居られたら、乳は直ぐ止まりますよ」さう醫者は云つた。「勿論泣聲が聽こえなくとも、心配されるでせうが、其所は貴方が余程上手にやられないといけませんね。出來るだけ氣を樂に持つて、赤さんの事は心配要らん、と云ふ風な安心を與へん事には乳は屹度止まりますからな」

「えゝ」さう答へても謙作にはそれが不可能な事のやうに思はれた。醫者が、どうか食ひ止められるかも知れないと云つてゐる。それも信じられなかつた。醫者自身さう思つて居ないとしか考へられなかつた。

「幼兒の丹毒と云へば普通まあ絶望的なものになつて居るんぢやないですか」謙作は弱々しい氣持になつてこんな事を云つた。

「さあ、さうも決まりますまい。が、兎に角却々困難な病氣です。蜂窩式炎、それから膿毒症とまで進まれたら、これ

はどうも致し方ありますないな。然し左うせん内に出來るだけ一つ手を盡して見ませう」

謙作は默つて一寸頭を下げた。

「今、持つて來る注射液が病の進みさうな先へ先へ射して行つて、病の進行を食ひ止める積ですが、それがうまく行けば、大した事にならずに済むかも知れません」

「殆ど泣きづめに泣いて居ますが、矢張り痛むんですか」

「それは痛むのです」

「痛みを止めるわけには行かないのですか」

「一寸六ケしいでせう」

間もなく病院の使が來た。

醫者は緣に片膝立をし、注射器を消毒しながら、看護婦に、

「此昇汞を解いて、金盥に入れて置いて下さい。そして貴女もあとで手を消毒せんといけませんよ」と云つた。

注射は直ぐ済んだ。その上にイヒチオールを濃い儘に周圍から内へ向けて丹念に塗り着けた。醫者は其外側から内へ内へと塗つて行くやり方を看護婦に説明して居た。赤兒は絶えず泣き續けた。

「今日主人にも申上げましたが、赤さんの營養が充分でないと結局病毒に勝てん事になりますからな」醫者は金盥の昇汞水で手を洗ひながら直子の方を向いて云つた。「貴女は出來るだけ氣を樂に持つてお乳の止まらんやうお心掛けなさるですな。これが大事な事です。然し赤さんの方も早く手當が出來ましたから。——これからも多少は進むかも知れませんが、大した事には必ずならんと思つて居ります。——お解りですな」

直子は子供のやうな素直さで只點頭いて居た。

「それでね」謙作が云つた。「あなたの床は茶の間の方へ移すからね。お乳の時だけ此方へ來て飮ますのだ」

「えゝ」直子は小さな聲で微かに答へたが、其内急に聲を出して泣き出した。

間もなく醫者は歸つて行つた。

「あなたは余程氣をしつかり持つて居ないと駄目だよ。あなたが幾ら心配した所で、直接病氣の爲めには何にも出來ないんだからね。それより乳がよく出るやう、出來るだけ其方には呑氣になる心掛けをしてなければいけないよ」

直子は泣腫らした眼で、そんな事を云ふ謙作の顔を睨むやうに見て居たが、

「隨分無理な御註文ね」と云つた。

「幾ら無理でも。あなたが病氣になつて居て與れねば困る事は分つてゐるね」謙作も不意に亢奮しながら、早口に云つた。

直子は默つて眼を伏せて了つた。謙作は前夜一睡もしなかつた所から亢奮し易かつた。それに、かう云ふ降つて湧いたやうな不幸が彼には變に腹立たしかつた。

「子供が病氣になつたのを呑氣にして居ろと云ふのが、無理な註文くらゐ初めから分つた事だ。それを無理でもさうしなければ、乳が止まるからさう云つてるんだ」

「どうかさう云はないで頂戴。私にもよく分つて居るの。——實は實家の近くで、丹毒で亡くなつた赤ちやんがあるのよ。それを知つてゐるので、何んだか心配で仕方がないの。——だけど、本統に私、出來るだけ病氣の事、忘れるやうに心掛けますわ。貴方が心配して居らつしやる所にそんな事を云つて悪かつたわ」

「うむ。そんなら、それでいゝけど、——その赤ちやんの病氣は何時頃の話だい」

「もう四五年前」

「左う。それぢやあ、今日の注射液の出來てない頃だな。その時分からは左う云ふ方も乾度進んで居るだらう。Kさんも早く氣が附いたから、大丈夫だと云つて居るのだから、あなたは本統にその氣で居る方がいゝよ」

「えゝ」

「それに林さん（看護婦）がいゝ人で大變幸だ」

「本統に、私も安心してお任かせして置けるわ」

玄關に誰れか來たらしいので、謙作は直ぐ自分で起つて行つた。赤兒が眠つて居る所で玄關には先に看護婦が出てゐた。來たのは前夜頼んだ近所の醫者だつた。看護婦は前夜その醫者が來た時から、變に輕蔑を示して居たが、今日はそれより、もつと反感を現はしてつけ／＼何か云つて居た、消化不良ではなく丹毒と云ふ事、營養が大事だから乳は成べく充分に飲ますやうと云ふ事だつた、など、先にこたえる事を立續けに云つた。

「はゝあ、いや、それはどうも、おいたわしいですな、……」こんな事を云ひながら、小さい醫者は引つ込みのつかぬ形で弱つて居た。

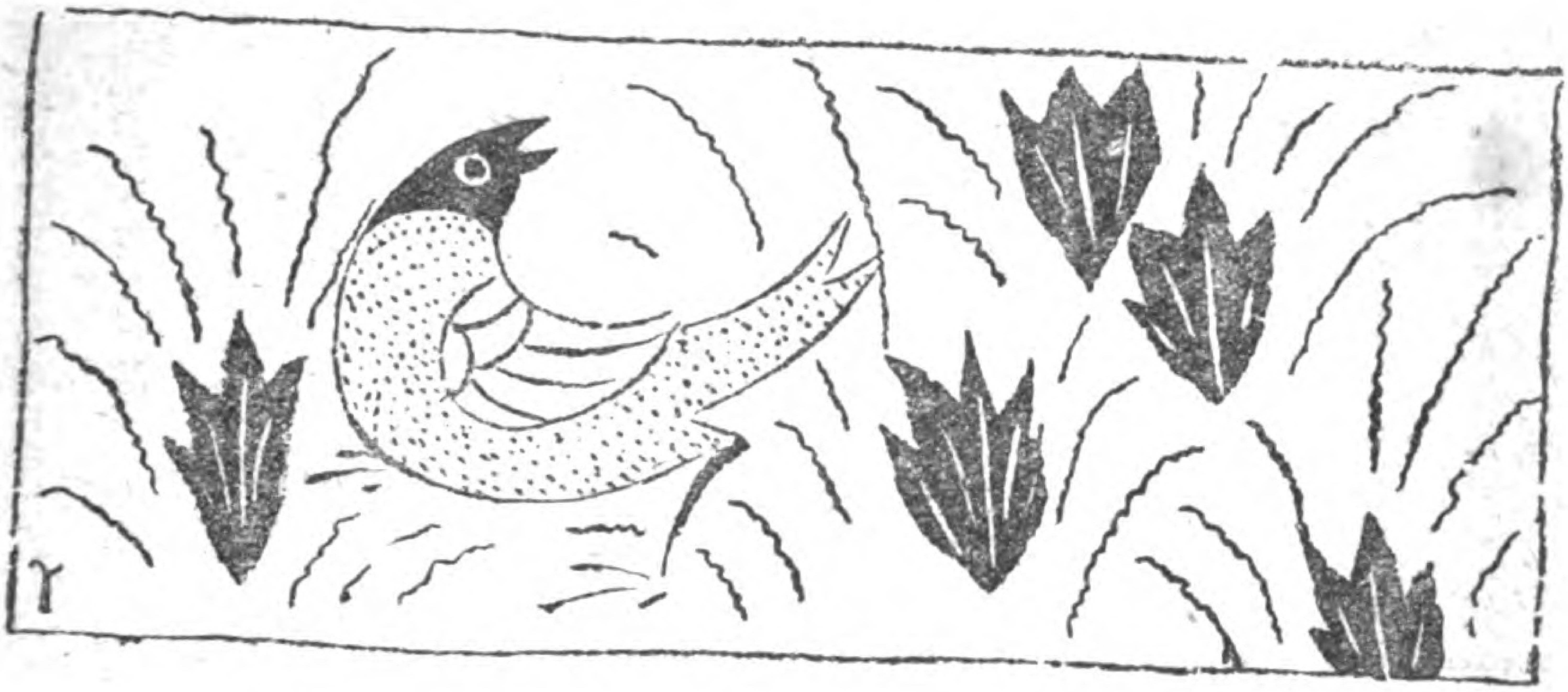
「實はつい此先の病家まで來たものですから、どんな御樣子かと思つて……」醫者は具合惡さうに謙作の方を向いて云譯けをした。

謙作は醫者が氣の毒でもあり、それにどう云ふ場合、簡單な事で又頼まぬとも限らぬ氣がしたので、

「折角ですから、貴方にも、もう一度診て置いて頂きませうか」と云つた。

「いや。K先生のお診斷でしたら、決して間違ひは厶いません。では、まあお大事に……」

かう云ふと小さい醫者は逃げるやうに歸つて行つた。



窓

廣津和郎

一

峰川貞雄が或一つの遊戯――彼はそれを『唯一の慰め』と云ふ言葉で呼んでゐたが――！を發見して、それに耽るやうになつたのは、何から何までが一切合切、最早どうにもかうにもならなくなつてからであつた。

彼は丁度六ヶ月程前から、山の手の町の或る下宿の二階の四疊半――天井が低くて、何の風情も裝飾もない、あの下宿屋の部屋――に蟄居してゐた。どうにかして一人前の小説家になりたいと思つて、初めの中は一生懸命机に向つてゐたが、書く原稿も書く原稿も何處でも買つては呉れず、先輩達に頼んで見ても、何處にも紹介して呉れない事が度重なるにつれて、もう物を書くのにも厭氣がさして來てゐた。そこで彼は、毎日その四疊半の部屋に寢ころんで暮してゐたが、彼がその下宿に來た時に持つてゐた金は直ぐ盡きて、もう四ケ月程、宿の拂ひも出來ない有樣になつてゐた。

氣の弱い貞雄は、玄關の側の帳場にひかへてゐる宿の主人夫婦の眼に止る事を恐

れて、外へも滅多に出て行かなかつた。外に出ても、又何處にも行くところがなかつた事も彼が部屋に引つ込んでゐる理由の一つではあつたが。

もう九月の末に近かつた。所在なさに彼は部屋の窓を開けて、そこに凭れて、ぼんやり外の町を眺め下ろしたり、空を眺め上げたりしてゐた。その邊は小さなカフェイ、ミルクホール、雜誌店、文房具店、さう云つたやうなものが狹苦しく並んでゐる學生町で、總てが薄汚くて、雜然としてゐた。だから、さうしたものの上に眼をやつてゐても、少しも彼の眼を樂しませる事はなかつた。唯初秋の青く澄んだ空だけが、それをぢつと見上げてゐると、彼の心に一種の感慨を誘つた。——彼はぼんやりと自分の身の上の事などを思ひ出してゐた。

六ケ月前、丁度此下宿の此部屋に蟄居するやうになる直ぐ前、彼は今までの職業を擲つて、彼の一家を一時解散したのである。

彼は五年ばかり前、未だ二十二の時に、或職業婦人と結婚した。その時分、殆んど苦學同樣の事をして、乏しい學資で或藥學校に學んでゐた彼は、妻が少しでも收入を持つ身であるといふ事が、何よりも心強かつた。彼に自分が妻に十分な愛を持つてゐるかどうかといふ事を、心の中で吟味しなかつた。尠くともそんな事は第二問題となつてゐた。おまけに性來腺病質だつた彼は、その少し前から、結核の宣告を受けてゐた。幸ひ進行性のものではないから、醫者は養生さへすれば取止めると云つてゐた。腺病質、つまり結核質であるだけ、それだけ病菌に體質が馴れてゐるので、却つて抵抗力を持つてゐるといふ事だつた。けれども、午後になると屹度來る微熱と疲勞、さういふ場合に、彼、は安靜に寢てゐられる小さな家庭と、親身になつて世話して呉れる柔い手とが必要だつたのである。

そこで、彼と同い年で、或會社につとめてゐた一人の女性が、彼に手をさし出した時、彼はそれに應ぜずにゐられな

かつた。

二年前に彼は學校を卒業した。そしてその年、妻は男の子を生んだ。子持ちになつた妻は、もう會社にはつとめられなくなつた。藥學校を出たばかりの若い藥劑師に、一家三人の生活を支へて行く事は、どんなに難かしい事だつたらう。――彼と妻とは同鄕の人々の好意によつて、東京の或場末の町に、小さな藥店を開いた。が、市場通ひの野菜車が、朝と夕方とその前を長い列を作つて往復する外、人通りの尠いそんな郊外の通では、さういふ店は成立たなかつた。月々若干の缺損つづきだつた。病身の彼を長い間助けて來た氣な妻は、その勝氣ゆゑに今度は彼を罵り出した。

『あなたと云ふ人はほんたうに甲斐性のない！　あたしがゐなかつたら、あなたは學校だつて出られやしなかつた意久地なしよ！』

『…………』

彼は妻の言葉に畏縮して、ぶるぶると唇を震はしたが、何とも答へなかつた。身長の低い、首の短い、鼻の低い、しよぼしよぼした無表情な眼の女、彼は妻の様子や顏の一つ一つが、初めて氣がついたやうに、眼にはつきり映つて來た……何と云ふ醜婦だらう、と彼は腹の中で忌々しげに呟いた。金の事ばかり口にする、肉慾の強い彼女が、何とも云はれない嫌惡すべきものに彼には思はれた。

妻のさうした態度に相手になる事を、彼は自分の心持の上から好まなかつた。それで店に出て行つて、勘定場の側の小机の上に原稿用紙を擴げて、子供の時から好きな小說や詩を書かうとした。

そんな時、まるで故意に妻が泣かせでもするやうに、赤ん坊が火のつくやうにわつと泣き出す事があつた。

『お前はお父さん似てみいみい泣虫だね』こんな事を腹立ち紛れに叫んでゐる妻の聲が聞えた。――子供の事となる

と、流石に彼もじつとはしてゐられなかつた。が彼の一言は彼女の十言に依つて直ぐ報ゐられた。結局彼は、自分の心持の調和の上から、やはり默つてしまふより外仕方がなかつた。

……そしてそんな事の度重なつた末に、彼は思ひ切つて文學で立たうと云ふ決心をした。さういた事は藥學校に入らない前から、始終考へてゐた事ではあつたが、氣の弱い彼はその勇氣がなかつた。けれども、現在のままでは、とても見込みがつかない。一層思ひ切つて、たうとうさう決心したのである。

そんな場末の店でも、併し權利と云ふものがついてゐた。それを賣ると四百圓ばかりの金が手に入つた。暫くの間故鄕に歸つてゐる事を承諾した妻に、その中の二百圓を渡し、後の二百圓を持つて、彼は此下宿に脫れて來た。――何も彼も新規蒔直しだ、そんな風に心の中で叫びながら。そして薄暗い係累から自由になつた事を喜びながら。

二百圓の金が小遣を加れても、二ケ月の宿料には十分だ。二ケ月の中には、屹度創作も出來るし、それが屹度何處かの雜誌に買はれる事になる。――そんな自信を持つて、彼は一生懸命に書き、一生懸命に奔走した。

ところが、さういふ豫想は無論實現されるわけがなかつた。何處に行つても拒ねつけられ、何處に行つても斷られた。彼は今の作家の發表する作物と自分のものとを比較して見た。どんな風に考へても、自分のものが劣つてゐるとは思はれなかつた。――實際、さういふ彼の自信は單なる自惚れとは云へないかも知れなかつた。けれども、そんな風に、彼が思ふやうに簡單には物事は運ぶものではなかつた。

書いて書いて、歩いて歩きまはつた彼は、自分の熱心も自信も、世間では少しも顧みて吳れないと云ふ事を知ると、急にぐつたりしてしまつた。――そこに持つて來て、ひけめになつた時とか、衰弱した時とかにやつて來る例の持病が、又そろそろその勢を盛返して來た。午後の發熱が、近頃はかなりひどくなつて來た。

何處までも遠く深く澄み切つてゐる空を眺めてゐる中に、貞雄は自分と云ふものが、心細い、哀れな、此の上なく淋しいものに思はれて來た。――文壇と云ふものの樣子なども、だんだん解つて來てゐるが、併しおいそれと出られるものではないらしい。自分と同じやうにして、出よう出ようとあせつてゐる人間が、幾百人ゐるか幾千人ゐるか解らない事などが、頭に浮んで來た。その中で年に一人出られるか出られないか、それさへも覺束ない。――失望する必要はないにしても、併し十分の忍耐と努力とが肝要だ。……けれども、その間も生活をしてゐなければならない。若し健康體でさへあつたら、どんな事でも出來る。併し病身な自分に、どんな事が出來るだらう。――何處かの藥屋に雇はれる。醫者に雇はれる。が、想像しただけでも、さうした骨折りが今の自分には出來さうもない……

彼はへんにセンチメンタルになつて來た。六ケ月前に、家を解散した時の光景が浮んで來た。あの強情な妻、彼の無力を始終罵つてゐた妻、あの妻でも、考へて見ると、やつぱり良人としての自分に信頼してゐたのだ。――彼が、ほんたうにその時は自信と勇氣とに充ち滿ちてゐたのであるが、自分に商賣などの向かない事、結局自分に藝術家に生れついてゐるのだと云ふ事などを、熱心に說き出すと、藝術などに何の理解も持たない彼女は、案外、彼の云ふ事をすつかり承諾した。一二年經てば、屹度一人前になつて見せると云ふ彼の言葉に對して、彼女はほんたうにさう信じられると云つたやうな、信頼と畏敬の眼付をした。――『さうね、あなたにはさういふ事が向くんですわね、屹度成功してよ、屹度成功してよ』かう彼女は云つた。

赤ん坊を紐繩で負つて――その恰好は下女か何かのやうにしか見えなかつた――彼女が東京驛から立つて行つた時の事を覺えてゐる。

『それではね身體を大切にね！　屹度成功してね、成功して！』そんな事を車窓から首を出して、プラットホームに立

つてゐる貞雄の方を向いて、幾度も幾度も云つた。さうした揚句、女らしく涙などを浮べてゐた。今から思ふと、さうした事がはつきりと浮んで來るが、併しその時の貞雄は、唯自由になれる喜びで、早く汽車が出て吳れればいいと云ふやうな事ばかりを考へてゐた。『重い、重い！』彼女の涙や言葉の總てが、彼の心を唯から呟かしてゐた。

彼は急に妻が哀れに思はれて來た。と云つて、別段會ひたいやうななつかしみは覺えはしなかつたが。――こんな風な今の狀態にゐる自分の成功を待つて、そして祈つてゐる妻、それが哀れに思はれたのだ。

そんな風な事を考へて、心がだんだん暗く陰氣になつて來た時、貞雄はそんな考を頭の中から振拂はうと思つて、彼はふと町の向うに眼をやつた。そして彼の眼は或ものを認めた。丁度その雜誌店だの、文房具店だの、安洋食屋だの、ミルクホオルだのの並んでゐる町を越して、差し渡し一丁ほど離れたところにJ女學校の寄宿舍が立つてゐる。それは丁度貞雄のゐる下宿のやうな粗雜な木造の建物だつたが、あたりが小さい建物ばかりなので、その長い細い二階建てが妙に際立つて大きく見える――その町を間に置いて、その寄宿舍の窓々と、貞雄の下宿の窓々とが、丁度向ひ合つてゐるのである、貞雄が眼を止めたのは、その窓の一つだつた。その窓の一つに一人の女學生が現れて、ぢつと此方を見つめてゐた。

そんな事は今までにも度々あつたに違ひない。貞雄はいつでも氣に止めてゐなかつた。今も彼は、初めは何の氣もなく、唯暑中休暇の間、ちつとも見えなかつた女學生が、近頃又姿を見せ始めたな、と云つたやうな事を思ひながら、そこに眼をやつたのである。ところが、その窓の女學生が、餘りにずつと此方を見つめてゐるやうに思はれたので、急に彼も彼女に注意を集めて見る氣になつたのである。

彼は割合に好い目を持つてゐた。それでその女學生の方を見てゐると、彼女が確に此下宿を目標として見つめてゐるといふ事だけは直ぐ解つた。——彼女の顔かたちは無論よくは解らなかつたが、年が十八九位だと云ふ事と、細面らしい事と、肩のすらりとしてゐる事とだけは、だんだん明かになつて來た。彼はいつまでも窓から離れなかつた。彼女もやはりいつまでも向うの窓から離れなかつた。——どうやら彼女が自分の方を見てゐるやうに彼には思はれて來た。物の十分か十五分も、彼はさうして彼女の方を見つめてゐたに違ひない。彼女もその間やはりさうして顔をこつちに向けたまま、立つてゐた。貞雄は何となく愉快に明るい氣持になつて來た。今まで考へてゐたやうないろいろの重い、暗い思は、何處かへ消えて行つてしまつた。——何か合圖をしてやらうか、そんなやうな輕い心にまでなつて來た。

臆病者の彼は、扨て合圖と云つても、なかなかその勇氣が出なかつた。彼に相手から身動きと思はれれば思はれる程度に、身體を少し動かす途端に、右の手を右の方から左の方へゆらりと動かして見た。女はやはりぢつとしてゐた。彼は今の手を今度は左から右の方へ又ゆらりと動かした。そんな事を三四回繰り返した末に、少し大膽になつて、ゆらりと緩慢に動かしてゐた手を、少し迅速に二回程左右にさつ、さつと振つて見た。

すると、その途端に、急に女が少し身體を動かしたやうに思はれた。と思ふ間もなく、いきなり彼女はハンケチを出して、それを大膽に、露骨にかざしながら、ひらひらと振つた。それが西日に映えて、白いと云ふよりもキラ〳〵光るやうに見えた。——！貞雄は少々呆氣に取られた。自分の意久地のない臆病さが、その少女の大膽さに比較して、恥しくもあつた。彼も何かハンケチのやうなものでも振つて、それに應へようと思つて、袂を探つてゐる間に、少女はにこにこと笑つて——確に彼女が笑つたやうに彼には思はれた。——それを最後に、ぴつしやり窓の鎧扉（よろひど）をしめてしまつた。

その敏捷で輕快で、彼がもじもじしてゐる間に、さつさとハンケチを振つて、彼が尚も愚圖々々してゐる間に、どんど

ん鍵扉を下して姿を消してしまつた少女の振舞は、何か出し拔かれたと云つたやうな「置いてきぼり」を食つたと云つたやうな不氣味さを貞雄の心に起させたが、それでも彼は嬉しかつた、何かひとりでに頰笑まれて來るやうな氣がしながら、彼は窓を離れて、部屋の中に仰向けに轉がつた。胸がわくわくしてゐた。——實際そんなやうな心持は、彼が未だ生れて經驗した事がなかつたと云つてよかつた。子供の時から貧乏と病身とに惱んでゐた彼は田舍から東京に出て來て、藥學校に通ふやうになつてからも、貧と病苦とを持拔つてゐた彼は、自分の見すぼらしさを始終反射的に心に思ひ浮べてゐた彼——さうした彼は、都會の女學生などと近づく術は知らなかつたし、又自分が近づく資格がないもののやうに思つてゐた。同郷の今の妻が、彼女の方から彼に愛を求めて來たと云つても、それは彼の心をときめかすやうな華かなものでも、都會的のものでもなかつた。みじめで、陰慘で、へんに薄暗いものだつた。

ところが、今都會の女學生が、彼に向つてハンケチを振つたのだ。全くそんな事が自分に起つて來ようとは、思つて見た事もなかつた。——貞雄は何とも云はれない甘い陶醉に包まれて行くやうな氣がした。彼は取止めない空想にそれからそれへと耽り始めた。

一體どんな少女だらう。遠くてはつきりとは解らないながらも、あの細面と云ひ、すらりとした姿と云ひ、屹度美しい女に違ひない。たとひ美しいとは云へないとしても、確に醜くない女に違ひない。——さう思つた途端に、彼の頭にはちらりと妻の顏が浮んで來た。彼は急いで、それを頭の中から振拂つた。何と云ふ醜い顏だらう、と彼は妻の事を忌々しさうに、かう腹の中で呟いた。——

その少女は何處かで自分を知つてゐるだらうか。往來か何かで自分を見かけた事があるのだらうか。——と彼の空想は又續いて行つた。——だが　どう考へて見ても、それは少々自惚れ過ぎる。自分の樣子が少女の注意を惹き得ようと

は、どんなにひゐき目に見ても考へられない。やつぱり自分が偶然窓に凭れたやうに、彼女も偶然窓に凭れてゐる中に、つい、こんな風に兩方で見つめ合ふ事になつたと云ふだけかも知れない。それとも、年頃の若い娘の物淋しさ、物欲さから男性が澤山ゐる此下宿の方を、ああやつて眺めてゐるのかも知れない。……けれども、そんな事は、結局どつちだつて好かつた。……彼は自分に向つてハンケチを振つた少女があると云ふ事だけで、十分幸福だつた。

貞雄の思ひは、いつの間にかその少女が、此部屋に訪ねて來るやうになる光景などを心に描き始めた。少女特有のもの優しさから。彼がどんなに貧乏だつて、そんな事を輕蔑するやうな事は乾度ないに違ひない。そんなやうな物質的な娘ではないに違ひない。乾度彼女は文學が好きだらう。藝術家が好きだらう。——貞雄が小說で世の中に立たうとしてゐる人間である事を、彼女は理解と尊敬との念を持つて、乾度喜ぶだらう。彼女がさうして毎日たづねて來る。そして此机の側にぢつと坐る。——それだけで、自分はどんなに慰められるだらう。どんな悩みも、どんな苦痛も耐へ得られる勇氣と力とが、自分に湧くだらう。……妻を故郷に歸してから、もう半年の間、彼は女と云ふものに近づかなかつた。彼は別段妻に對して貞潔を守らうなどと云ふやうな事を考へてはゐなかつたが、併し彼の生活にはそんな餘裕がなかつた。殊には彼の病氣がさう云ふ性質を帶びてゐるためでもあらうが、なやましい異性についてのほしひままな空想や幻が、彼を夜通し苦しめる事などもあつた。——ところが、今向ふの寄宿舍の窓に見えた少女は、不思議な事に彼にさういふ想像を浮べさせなかつた。

『妹のやうに自分の病苦と失意とを慰めてくれる娘』そんな風にばかりその少女の事が思はれた。

その翌日、やはり前日と同じ時刻になると、例の寄宿舍の例の窓に、前日の少女の姿が現はれた。それは丁度一日の學課が終つて、寄宿舍の部屋に歸つて來る時間であるらしかつた。——貞雄は影から彼女の姿の現れるのを、今か今か

と待ち通してゐた。それで早速窓から首を出した。彼は前日よりもずつと大膽になつてゐた。少女の振らない前に、自分の方からハンケチを出して振つた。少女はぢつと此方を見つめてゐるらしかつた。そして二十分ばかりぢつとしてゐた末に、昨日と同じやうに、いきなりハンケチを出して、それを高くかざしながら、大膽に、露骨に、ひらひらと振つたかと思ふと、昨日と同じやうに、にこにこと笑つて、それを最後に、ぴつしやり鎧扉を下ろしてしまつた。

その又翌日もやはり同じ時刻になると、同じ事が繰返された。その又翌日もさうだつた。その又翌日もその翌日も……一日一日と貞雄の喜びは増し、貞雄の空想は豊かにされて行つた。まるで何かの生甲斐を發見した人のやうに、彼は毎日毎日、快活に明るくなつて行つた。

此話の冒頭に、貞雄が或遊戯――彼に云はせると『唯一の慰め』――を發見して、それに耽り始めたと作者が書いたのは、つまり此事だつたのである。

二

その年は潤年だつたので、夏から暑さが九月の二十日近くになつても、なかなか去らなかつたが、或晩不意に嵐が來た。そしてその翌日から、急にめつきり涼しく――と云ふよりも、寧ろ寒くなつてしまつた。

或日、貞雄は郊外の或町を歩いて行つた。空は霽れ切つてゐて、日當はかなり暑くあつたが、蔭へ這入ると、何となく底寒い感じのする日だつた。――往來で會ふ人々は、もうみんな黑い着物を着てゐた。中にはセルなどを着てゐるものもあつた。さう云ふ間を、貞雄の薄汚れた白地の浴衣の重ね着は、一際目立つて哀れげに見えた。――彼は季節々々の着物は、最初ちやんと用意してゐたのであるが、四ケ月の無收入の間に、みんな彼の手許から消えてしまつてゐたのである。

ぽつりぽつりと、家が出來るに從つて、番地を順々に後から後からとつけて行つた郊外の町では、彼が探してゐる番地がなかなか目つからなかつた。二千何百番地と云ふ側に、いきなり三百何番地と云つたやうな番地があつたりした。けれども、方々たづねた末に、彼はたうとうその家を目つけた。それは十二三間もあらうかと思はれるやうな、割合に大きな家で、開き門から玄關まで、兩側に植込があたつりした。貞雄は玄關の前に立つたが少し氣がひけて、躊躇した。――が思ひ切つて、柱のベルを押して見た。

小走りに疊の上を歩いて來る柔かな足音がして、品の好い、十六七の小間使らしい娘が、障子を開けて、丁寧にお辭儀した。――小間使だつて、自分の女房とは比較にならない、そんな考が、一瞬間貞雄の頭に閃いた。

『I先生はいらつしやいますか？』と彼は云つた。

『はい、いらつしやいますけれども、併し今日は面會日ではございませんから……』と小間使は氣の毒さうに云つた。併しその小間使は、彼のなりをじろじろと見て輕蔑の眼付をするやうな、そんなはしたない所を見せなかつた。伏目になつたまま、言葉だけはつきりと、それも感じの好い聲で語つてゐた。――それが、貞雄のみじめな氣持を輕くした。

『ほんの一寸で宜いのですけれども。……實は先日原稿を先生に見て頂きたいと思ひまして御送りいたして置いたのですが、それを見て頂けましたかどうですか、それだけの事を伺ひに上りましたので……』

『一寸お待ち下さいまし』さう云つて小間使は立上つて、奥に引つ込んで行つた。

貞雄の胸は轟いてゐた。――どうせ望みはないと思ふ間にも、若しやと云ふ微かな光がない事もないやうな氣がした。彼は今までにも毎日のやうに下宿屋の主人やおかみから下宿料を催促されてゐたが、今朝はたうとう嚴談をされたのである。それで今まで訪ねなかつた二三の作家を――彼は澤山の原稿を澤山の作家のところに持つて行つたり、送つたり

してゐたのだ――苦しまぎれに訪ねようと思ひ立つたのである。今まで會つた作家達の印象から推しても、とても望のない氣はしてゐたけれども。併し萬一を恃む氣は、外に出ると彼の心にかなりに湧いて來てゐた。

やがて、小間使は再び現れて來た。そして、

『未だ拜見してないさうでございます』さう云ひながら、封も切つてゐない彼の原稿を、彼の方へ差し出した。『旦那樣は大變お忙しいので、只今拜見して居りますお暇がないさうでございますから、兎に角一時お返しいたせとの事でございます』

氣の毒さに、小間使は云ひにくさうにこれだけの事を云つた。

貞雄はこの原稿を受取つて、丁寧にお辭儀をして、それからしよんぼりと外へ出て行つた。みじめな氣持で胸の中がいつぱいになつてゐた。彼は今受取つて來た自分の原稿をふところから出して見た。それは彼が丹念に原稿用紙を帖つてこしらへた封筒のままで、その封筒にはM・I先生と彼がその時書いたままの字が、やつぱりそつくりそのままになつてゐた。郵便局の消印が若しなかつたなら、二ケ月前に彼が、それをポストに投り込に持つて出た時と、少しも變りがなかつた。

貞雄はそれを書いた時の事を覺えてゐる。その時分には、彼は未だ熱心と野心とに燃えてゐた。自分の書くものが、今の文壇のどんな作家の書くものと較べたつて、劣るものかと云つたやうな十分な意氣込みを持つてゐた。彼はその小說の中で、自分、父の事を書いたのだ。父は一種ロマンテイツクな野心家だつた。彼が未だ六つの時、父は彼の一家を率ゐて、彼の故郷である中國の方から、北海道の開墾に出かけて行つた。が、そこで失敗すると、今度は朝鮮に出かけて行つた。がその底抜けの人の好さのために、何處までも失敗した。どんなに失敗しても、彼は嘗て人を恨み、人を

戻つた事がなかつた。その朝鮮での失敗後、母の懇請によつて、又中國の故郷に歸つて來たが、その後やはり持つて生れた性癖のため、今度は家族を故郷に殘したまま、單身樺太に出かけて行つた。そしてそこで病死してしまつたのである。それは貞雄が十五の時であつた……

貞雄はその小説にその父の事を書いたのである。始終大きな事ばかり空想して、その癖何處までも人の好かつた父、いつでも何かに憧れるやうに、どんなに失敗した時でも、眼の中に夢のやうな光を帶びてゐた父……

貞雄は沈んだ、暗い氣持になつて行つた。小説家I氏の屋敷はかなりに廣かつた。門から貞雄が歩いて行く道に沿うて、ずつと垣が延びてゐた。貞雄の眼は、生垣の間から、その庭を覗き込んだ。芝草の庭には、午少し過ぎの太陽がいつぱいに當つてゐた。その芝草の向うの、硝子のはまつた緣側には、若い美しい女が腰をかけて、書物か何かを讀んでゐた。貞雄は雜誌の口繪で見た事のあるI氏夫婦を思ひ出した。――二階はやつぱり硝子戸がはまつてゐたが、多分そこの書齋にI氏はゐるのだらう。澤山の書物の中に埋まつて、紫檀の机か何かに向つて、立派な家具類に取りかこまれながら。

明治の法曹界に有名だつた人を父に持つて、子供の時から豐かに育てられ、何不自由なく大學を卒業すると、若くして直ぐ文壇の最高位置に飛び上つて行つたI氏を貞雄は想像した。寫眞で想像しても、未だ三十を四つも出たぐらゐだらう。さうすると自分とやつと五つ六つしか違はないのだ。――何と云ふ幸福な日の下に生れた男だらうと貞雄は思つた。自分のやうなこんなみじめな氣持は、あの男は知らないのだ。美妻と金と名聲とを、生れながらにして持つてゐるのだ。下宿屋で責められた經驗もなければ、餓を忍んだ經驗もないのだ。そして健康なのだ。

その時になつて、初めて、むらむらとした憤りが貞雄の腹の中に込み上げて來た。――原稿を封も切らずに突つ返さ

れた時には、彼は却つて頭からぶちのめされたやうな氣がして、憤る餘裕もない程、心がひしやげてゐたのだ。――けれども、封も切らずに、そのまま突つ返すとは何と云ふ深切氣のない事だらう。いくら、苦勞を知らないと云つても、何と云ふデリカシイのない事だらう。彼は鼻の下にチヨビツと髭の生えた、利口さうな眼をしたIの顔――寫眞で見たIの顔に、唾でも引つかけてやりたいやうな氣がした。

貞雄はそれからS、Yと云ふやうな作家のところを廻つて見るつもりでゐたが、もうその元氣が失くなつてしまつたと云つて、此まま下宿に歸つて行くのも厭だつた。

ふと、彼はT氏を思ひ出した。T氏のところには、今までも二三度行つて見た事があつた。

『僕にはとても人の原稿を推薦出來るやうな力はないんだよ。――雜誌社でなかなか僕などの言葉は重く見てくれないからね』こんな事を頭から云つて退けて、自分が今の流行作家と比較しては、文壇の地位の非常に低い事を、自分から承認してゐるやうな人だつたが、併し何處にも推薦はして呉れなくとも、いつでも貞雄の原稿を深切に讀んで、深切に批評して呉れた。

その郊外からそれ程遠くは離れてゐない。市内と云つても山の手の、淋しい町にT氏は住んでゐた。それはI氏などとは比較にならない見すぼらしい家で、格子戸のはまつた二軒長屋の一軒だつた。

案内を乞うた貞雄の聲を聞いて、主人みづからが立つて來て云つた。

『やあ、峰川君か、上り給へ』

書齋兼客室の八疊間に通された。

『君、顔色が惡いね。――健康は益々惡い方かね？』

『ええ、それ程でもないんですが、好い方でもないんです』と貞雄は云つたが、此親しみ易いT氏の前では、何も彼も云つてしまひたいやうな氣持が急に起つて來た。『實は今かなり不快た目に會つたのです』

『ほう、どうしたんだい？』

『いえ、云つてしまへば、つまらない事なんですけれども、實はIさんに原稿を見て頂かうと思ひまして、二ケ月ばかり前に送つて置いたのです。それで今日その事でIさんをたづねて見ますと、面會日でないから會はれないと云ふ上に讀む暇がないからと云つて、女中にこれを』と云つて、貞雄はふところから原稿を取り出して見せて、『僕に返せと云つて渡したのです。――それだけなら好いんですけれど、見ると、封も切つてないのです。それですつかりみじめな氣持になつてしまつたのです』

ああ、そんな事か、と云つたやうにT氏は笑ひ出した。

『それや君の憤慨するのも無理はないが、併しIだつて、それは無理がないんだよ、君。――見給へ、僕のやうな者のところにだつて、これ、この通りなんだ』さう云ひながらT氏は、本箱の抽斗を開けて、澤山の原稿の積み重ねを掴み出して見せた。『これがみんな讀んで呉れと云つて、未知の人から送つて來た原稿なんだ。僕は折角だから出來るだけ讀まうと思つて……僕にもさう云ふ經驗があるから、送つて寄越す人の氣持が解るからね……やつて見るが、君の前だけれども、それや一仕事だよ。なかなか讀めるものぢやないよ。この中にだつて半年からそのままにしてあるのがあるんだからね』

貞雄はT氏が掴み出した原稿に眼をやつて見た。短いの長いのを合はせて、二三十篇あつた。

『だからT氏のやうな流行作家になつたら、どの位の原稿が月々方々から讀んで貰ひたいと云つて送つて來るか解らな

いからね』と云つて、T氏は又笑ひながら、『それだから、さうするのも無理はないよ。封を切らずに返すと云ふのは、却つて徹底してゐる位だよ』

『…………』

貞雄は何千何百人ゐるか解らない文學青年の洪水が、眼の前にわつと押し寄せて來るやうな氣がした。——その中の自分も一人に過ぎないのだ、と思ふと、急に恥しくなつて來た。

『それにね、君、近頃は益々文壇には出にくくなつて來るよ。二三年前だと、景氣の好いにつれて、雜誌が無暗と出來たからね、それで作家が足りないので、矢鱈に新進作家を作つたのだよ。——ところが、此不景氣で、雜誌はばたばたと倒れる。今年になつてからだつて、もう三つ四つ倒れてゐるからね。そこで僅か殘つた雜誌は、世の中に定評ある連中の作ばかりを載せようとする。とても無名の人のを載せようと云ふやうな冒險は、やつてゐられない。無名どころではない、二三年前の雜誌界の全盛時代に出たいはゆる新しい作家達。文壇に相當に名の聞えた新進作家達でさへが近頃はだんだん需要がないので困つてゐる位なんだよ。現に僕などだつて、それを考へると心細い次第なんだからね』T氏はさう云ひながら、正直に淋しさうな笑ひ方をした。

『まあ、三四年君達は持久戰をやるんだね。——さうすれば時代の變り目が來る。その時まで、ゆつくりと、あせらずに修養するんだね』

三四年——と貞雄は腹の中で呟いた。三四年とは何と云ふ長い間だらう。それまで自分の健康が持つだらうか。進行性のものではないにしても、此貧乏とこれから來る寒さと、その他いろいろの惡い狀件とで、いつ自分の肺患が惡化して來ないとも限らない。とても三四年などは生きられさうもない。一層故郷に歸つてしまはうか。故郷に歸れば、自分

などに向く職業もある。……併しあの姿の前に、どうしてのこのこと跟つて行かれるだらう。と云つて、東京で何處かの薬店とか醫者とかにつとめたら、益々此健康が保たないに違ひない。……暗澹たる前途が眼の前に浮んで來た。

その途端に、

『君、散歩をしよう。好い天氣ぢやないか』とT氏が云つた。

二人は外へ出た。途々T氏はやはり文壇の事をいろいろ話してゐた。――貞雄は聞けば聞く程、自分の六ケ月前の決心が早まつた事のやうに思はれて來た。たとひ缺損つつぎであつても、郊外の、あの市場に通ふ青い車が陸續として列をなして行く街道に面してゐた小さな店が、なつかしく思ひ出されて來た。あの邊も少しづつ開けて行つてゐた。家も次第に多くなつて行つてゐた。後一二年經つたなら、あの店も成立たない事は決してなかつた。何だつて、後先の考もなくあの店を手放してしまつたのだらう。

『一寸珈琲でも飲まう』とT氏が云つた。

淋しい屋敷町から少し賑かな通に出ると、小さなカツフエがあつた。未だ起きたばかりと云つたやうな、お白粉もつけない給仕女が二人の側にやつて來た。

『もう何でも出來るかね？』

『ええ、出來ます』

そこで料理を二三品注文してから、

『此邊は夜は二時までも三時までもやつてゐるものだから、晝は遲いんだよ』そんな事をT氏は云つた。

晝飯を食べてゐなかつた貞雄は、T氏の思ひやりの深さに、心の底から感謝してゐた。

そのカツフエを出て少し歩いて行くと、

『それぢや、此處で失敬する。――へんな事を訊くが、君は黑い著物かセルかを持つてゐるの？』とT氏が訊いた。

『ええ、持つてます』

『持つてますけれども、手許にないんだらう』とT氏は優しい調子で笑ひながら、『それぢや、これで何とかし給へ』

見ると、T氏は貞雄の手の中に五圓札を丸め込まうとしてゐた。

『いや、そんな事はどうぞ……』

『まあ、好いから持つて行き給へ。僕は昨日丁度原稿料が入つたので、餘裕があるんだよ』

辭退する貞雄に、無理やりに金を掴ませてから、T氏は『左樣なら』と云つて、あつさりした調子で歸つて行つた。

――貞雄は涙ぐましい氣がした。そして自分も歩き出しながら、時々T氏の後姿を振返つて見た。自分よりも二つ三つしか年の上でないT氏、深切なT氏、そのT氏が先刻T氏自身も口にしたやうに、もう文壇では餘り重きを置かれなくなつてゐる。さう云へば、いはゆる一流と云はれてゐる雜誌にT氏の名が見えた事がない。T氏がよく書いてゐた雜誌は、ほんたうにばたばた續いて倒れて行つてしまつた。

『餘り生活も樂ではないだらうに……』と貞雄は手に握つた五圓紙幣を、袂の中に移しながら考へた。――そしてもう一度感謝のつもりで振返つて見ると、とぼとぼと歩いて行く、三十になるかならずの、中肉中丈の青年作家のT氏の後姿も、思ひなしか淋しく見えた。

三

好い鹽梅に、帳場には主人の姿もおかみの姿も見えなかつた。貞雄はその隙に、急いで自分の部屋に這入つてしまつ

た。そして疲れ切つた身體を、疊の眞中に、仰向けに轉がらした。やつぱり廣い東京ぢゆうに、自分の住むところは、此四疊半の外にはないのだ、さう思ふと、自由に手足を伸ばせる氣がした。

けれども、主人やおかみの眼に、うまく觸れずに濟んだと思つたのは、間違ひだつた。彼が仰向けに轉がつて間もなく、廊下に足音がして、唐紙がすうと開いた。

越後もののおかみは、さういふ場合には、しんねりむつり口を利いた。

『もう二三日待つて下さい』

『もう二三日、もう二三日で、始終お待ちして居りますが、それでは、峰川さん、何かしつかりしたアテがあるのですか？』

『……………』

『今朝ほど、午後まで待つて吳れとのお話でございましたが、今日は主人が、はつきりした事を聞いてまゐれと嚴しく申しましたので……』

『……………』

貞雄は默つてゐるより外はなかつた。先刻T氏から貰つた五圓、あの五圓だけでも出してやらうかと思つたが、四ヶ月の代金を考へると、五圓ばかり出すのも何だか變挺だ。——彼はおかみの脅かすかと思ふと愚痴まじりになつて來るくどくどした言葉を長い間聞いてゐた。——結局、こんな場合には、相手が喋り草臥れるまで待つより仕方がないのだと云ふ事を、貞雄はよく知つてゐた。——『どうしてもお拂ひ下さいませんならば、出て行つて頂かなければなりませんと云ふやうな事を度々云ふが、併し今までの金に未練があるのか、いさとなると極端な事はしない。……さういふ

事も貞雄は知つてゐた。

『それでは、今度こそアテにして居りますから、二三日中には、たとへ一ケ月でも立しうございますから、お入れを願ひます』たうとう根が盡きて、おかみはかう云ひ殘して、出て行つてしまつた。

『やつと嵐が濟んだ』と思ふと、やれやれと云ふ氣がした。が、實際に、考へて見れば、一體どうしていいのか貞雄には解らなかつた。文壇に出ろなどと云ふ事は、全く望みのない事だ。と云つて、T氏の云ふやうに三年も四年も待つてゐるわけには行かない。それまで生きられさうもない。どころか、現在一體どうしていいか解らない。

『どうにでもなれ！』と貞雄は絕對的に呟いた。

彼は眼をつぶつて、そんな事を考へてゐた。が、やがて、再び眼を開けて、ぼんやり天井を眺めてゐる中に、ふと窓の外の靑空が眼に這入つた。紺靑に澄み切つた空だ。もう午後も四時近くなつてゐるだらう。――ああ、いつもあの時刻だ、と彼は急に思つた。今日は外を歩いて來たり、今おかみに責め立てられしたりしたので、すつかりその事を忘れてゐた。

貞雄は急に元氣が出て來て、飛び起きて、窓から顏を出した。すると、今日は少女はもう既に、向うの寄宿舍の窓に立つてゐた。彼はいつでも、向うの窓が開くのを待つゐてるのだが、彼女の方から先に出たと云ふ事は、今までに一度もなかつた。彼は何だか約束の時間に戀人を長く待たして置いた、とでも云つたやうな氣の毒さを感じた。

彼はもう一切の事も忘れてゐた。直ぐハンケチを出して、力委せにそれを振つた。すると、少女は身體を動かすやうにした。――それは彼女が確に笑つてゐるに違ひなかつた。

貞雄は夢中になつて、ハンケチを振つてゐたが、毎日々々唯ハンケチを振つてゐるだけでは物足りなくなつて來た。

何かもう少し此方の意思を、向うに傳へる方法が欲しかつた。もう十月近くもハンケチを振り合つてゐるだけでは、何の變哲もない。——そこで彼は、新聞紙に、墨で何か書いて、そしてそれを向ふに見せようと考へた。

彼は硯を取つて、新聞紙に、『いらつしやい』と筆太に書いた。それを窓から兩手で擴げて見せた。すると少女の身體は又揺れた。——彼女は笑つてゐるに違ひなかつた。

彼は今度は別の紙に、『貴女のお名前は？』と書いて、それを擴げて見せた。少女はやはり笑つてゐるらしかつた。——此遊戯は一枚一枚、書けば書く程、貞雄には面白くなつて行つた。もう少女は十分に親しみを覺えてゐるのだ。どんな事を書いたつて、自分に向つて氣を悪くするやうな事はなささうだ。或は自分の意思の表示を、待つてゐるのかも知れない。

『僕の妹』と彼は書いた。それを擴げて見せると、彼女はやはり笑つてゐた。その次には思ひ切つて『愛！』と書いて見た。少女はやはり笑つてゐた。初めのやうに時々笑ふのではなくて、今は打つ通しに笑つてゐた。貞雄は益々大膽になつて、たうとう『戀！』と云ふ字を書いた。彼はそれを兩手で擴げて見せた。それは最後の言葉だ。それ以上の事はもう書く事が何もなかつた。

少女は今は明かに身體をゆするやうにして、ハンケチを口に當てて笑つてゐた。——かなり道化た感じを彼女に與へてゐるのかも知れない。併し彼女を笑ませる事は、それ自身で彼には何とも云はれぬ愉快でもあり、滿足でもあつた。

彼は最後の言葉——『戀』——と云ふ字を書いた新聞紙は、隨分長い間、擴げてゐたので、兩手が痛くなつて來た。それでそれを引つ込めようとした途端に、その新聞紙の上にパラパラと何か白いものが降つて來た。何だらうと思つてよく見ると、それは卷煙草の灰だつた。

吃驚しながら、彼は窓から首を出して、上を仰いで見た。すると、まあ、何と云ふ事だらう、彼の部屋の眞上——三階の部屋の窓にも、やつぱり新聞紙が擴げてあつて、卷煙草をくはへた男の顔が、にゆつと突き出てゐた。——そしてもつと注意して見ると、彼が呆れた事には、彼と同じくあの女學校の寄宿舎の方へ向つた二階三階の方々の窓々からはハンケチだの手だのが出て、それが一切に向ふの寄宿舎の窓の少女の方へ、何や彼やの合圖をしてゐた。

貞雄はそれを見ると、一遍にぷつと失笑してしまつた。あの少女を目アテにかうした合圖をしてゐたのは、自分ばかりではなかつたのだ。自分ばかでりないどころか、それは複數——いや、群、合圖者の群なのだ。

彼は急いで首を引つ込めて、暫くの間、くつくと聲を出して笑つてゐた。が、それと同時に、何とも云はれず腹立たしくなつて來た。自分の『唯一の慰め』！　それがすつかり奪はれて、蹂躙されて、臺なしにされてしまつたやうな氣がした。此の下宿の青年達——學生や勤人である青年達は、他に慰めや樂しみをいくらでも誘す事が出來る。彼等はカツフエエにも行けば、遊廓にも行く。——それたのに、そんだ事の到底出來ない自分には、あの少女が唯一の慰藉だつたのだ。それがすつかり奪はれてしまつたのだ。

彼はぢつとしてゐられない位癇癪が起きて來た。……が、その腹立ち、その癇癪も過ぎ去ると、今度は弱い男の、しひたげられたやうな苦笑が、その蒼白い顔をゆがめてゐた。（終）

編輯だより

◇アインスタイン教授の來朝もいよ〳〵近まつた、滯日中の講演、日割け來月號を以つて發表する、しかし帝大で講演する十八時間の長講は、聽講者を約三十名と限定します、そして此の講演に限り通譯しないことにしてあります。獨逸語を解する專門的用意のある方に限ります。しかし哲學、數學の方も歡迎します。希望者は本社まで申込み下さい。聽講料は此講演だけは無料のつもりです。

◇ア教授の身邊に關し二三の新聞にいろ〳〵報道されていますが氏は大元氣です、唯だ教授は故ラテノウ外相と莫逆の友であつたそうです。我々は偉大なる教授の一路平安を祈つてゐる。

◇メキシコの文部省が發刊してゐる月刊雜誌「ヘエル・マエストロ」の七月號に、ガンチが法廷での供述が載つてゐる。一體この雜誌は國内の教育家、若くは特別社會教育や德育に趣味を持つてゐる人々に政府から無代配布してゐるものだ

◇そして右の供述には、印度のこのパシフィスト・リーダー(平和主義的指導者)たるガンヂの是等の言葉は、メキシコの凡ゆる學校の生徒に讀ますべきものだとの民衆教育大臣ヴアス・コンセロス氏の推賞的前書きがしてある。同じ東洋の未來だ、我々は我當局たるものに雅量あらばと思ふことが幾回もある。

◇月號あたりには我社が手に唾して待つている原稿も到來する。ラツセル教授の「相對性原理」は見逃すべからざる一大論文だ、哲學の巨擘は「相對性原理」を何と見る。

◇佛教會の同寅と稱せられ、又斯界が有する唯一の新人と稱せらるゝ木村泰賢氏は滯歐中も、歸朝後も絶えて筆を執らなかつたが、遂に本月號に有益な論文を寄せた、佛教家以外にも重要な論文だから大方の一讀をお奬めする

◇本誌の兄妹誌「女性改造」もいよ〳〵生誕した、思つたより豫想外に賣行きもよく、世間への印象も深かつたと云つて女性子は喜んでいた。

◇賀川氏は「死線」の下卷執筆中だ、賀川氏の「一近代の戀愛觀」も近く出版されるそうだ。今秋の讀者界は嘸ぞ賑はされることであらう。

◇ロイド・ジョウジ君の「思ひ出」は、此度の議會さへ無事に切り拔くることが出來たら來春は全部脱稿できるとのことだが、その版權勿驚!六十萬圓以上だとのことだ。然るに彼には、多少良心があつたと見え、それを自分のポケツトに投ち込む代りに、大戰の犧牲となつた人々の遺族の救濟資金に充てるとは、近頃殊勝な話だ。

◇東洋の最前衞に立つてゐるわれ〳〵の同胞、土耳古の青年黨は、久しく萎靡したその新鋭の氣力を以て希軍を敗つて歐洲の天地を震駭せしめつゝある。その統率者に、レニン及びガンヂと共に大戰後の産んだ三大人傑と云はれるケメル・パシヤだ。われ〳〵は世界の回教徒と共に彼の健在を祈るものだ。

改造定價

冊數	定價	郵税
壹冊	八十錢	貳錢
半ケ年	五圓六拾錢	郵税不要
壹ケ年	拾壹圓廿錢	郵税不要

注文の注意

本誌一頁廣告料　一等 百圓　二等 七拾圓

◎本社販賣取次所　博文館　東海堂　日本雜誌通信社

◇特價號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す

◇注文は凡て前金とす

◇前金切れの際は發送を停止す

◇外國發送の注文は(但し支那を除く)郵税貳拾四錢を申受く

◇見本は發送せず

◇郵税は切手代用は壹割増のこと

◇拂込みは振替によらるゝが最も便なり

大正拾壹年九月廿日印刷納本
大正拾壹年十月一日發行

東京市芝區伊皿子町四十番地
編輯兼發行兼印刷人　平川賢一郎

東京市京橋區西紺屋町廿七番地
印刷所　秀英舍

發行所　東京芝區愛宕下町二ノ三　改造社
電話芝(長)二六三八
芝二八五四
芝四三〇三
振替東京八四〇二

ロシア飢饉救濟寄金

（第二回報告）

壹〇、〇〇円	東京	渡邊、山本、淸野、岡東、大畑
四、四〇	滋賀	琵琶湖夏期學校
貳、〇〇	京城	宮地辰三郎
壹、〇〇	仙臺	引地義男
五〇	石川	狩野保壽
參、五〇	東京	石丸秀雄
三〇	沖繩	名嘉山
四、〇五	大阪	大阪立市岡中學と内 市岡學生基督敎靑年會
五、〇〇	東京	矢崎美盛
四四	兵庫	釘本春雄
壹、〇〇	名古屋	無名
壹、參〇	愛知	關辰雄
貳、〇〇	横濱	千田初江
五〇	東京	菊地リヽ子
八、〇〇	大阪	大阪遞信局電信試驗讀書會
一、〇〇	新潟	酒殿須與
三七、〇〇	東京	水野廣德
三、〇〇	島根	山根官
三、〇〇	北海道	松本稻次郎
三、〇〇	山形	高橋、本間、岡田
二、〇〇	茨城	中村庸
一、五〇	樺太	梶原豐子
五〇	靜岡	海野菜
五、〇〇	大阪	天野菜
一、一〇	大阪	田島浩三
三、〇〇	東京	及川宮喜志
五〇	淡路	奧野直義

LECIONO IV. EN LA NALO.

Ĝoje kantas paŝtisteto.

Sonorado, mortkantado
Nun eksonis tra l' silento.
Haltis knabo en kantado
Kaj aŭskultas kun atento.

En la tombojn de l' monteto
El la valo ĉiu venos.
Ankaŭ vin, ho paŝtisteto,
Oni tien iam prenos.

〔單語〕 atenti 注意する。ho おゝ〔間投詞〕。

〔譯〕 上の方、山の上に立つてゐる
默然とした禮拜堂。
谷の中、泉のほとり。
陽氣に牧童が歌つてゐる。
鐘のひゞき (sonor'ado), 死の唱歌 (mort'kant'ad'o)
今沈默を通して鳴りひゞく。
歌ふのを少年は止めました。
そして注意して耳を傾けました。
小山のお墓のなかへ

来ることでせう。何時のことでせう。

〔註〕 la tutan tagon 全日間（時間など數量を示す目的格，前節の註參照）。tie'n 其處へ（方向を示す目的格）。

Li pensas longe pri tio. Nun la sonoriloj eksilentas, la homoj jum ne estas videblaj sur la vojo. Eble ili nun estas en la tombejo. Sur la kampo la ŝafoj trankvile pastas, kaj la hundeto kuras ĉirkaŭ ili. La knabo kun dolĉa, tremanta voĉo ekkantas malgaje:—

〔單語〕 longa 長き。tio それ、その事。nun 今〔副詞的助辭〕。trankvila 靜穏な。dolĉa 甘い（菓子）、好い（聲）、かわい、（顏など）（英語の sweet）。tremi ふるへる。voĉo 聲。

〔譯〕 彼は永いことそのことに就て考へてゐます。今は鐘もハタと沈まる (ek'silent'as)，人々ももう道の上には見られ (vid'ebl'a) ません。多分彼等は今墓地に居るのでせう。野の上では羊だちは靜かに草を喰んでゐます、そして小犬は彼等のまわりを走つてゐます。少年はかわいゝ、然しふるへてゐる (trem'ant'a) 聲でうら悲しげに歌ひ出します (ek'kant'as)：—

Supre staras sur la monto
La silenta kapeleto.
En la valo, ĉe la fonto,

は彼は近頃 (lastajn tagojn) ひどく病氣だつたのだから。

〔註〕 supr'e 上方に, supre'n 上方へ〔前述の運動の方向を示す目的格〕, supren'iri 登つてゆく。en la tombejo 墓地内に (在る位置); en la tombejo'n 墓地の内へ (はいつて行く, 運動の方向を示す目的格)。lastajn tagojn 最近の數日間 (時間、其他數量を示すのにも目的格が用ひられる。) kiu'j＝kiu の複數 (前に述べた疑問代名詞及關係代名詞)。

La juna knabo pensas pri lia familio, liaj infanoj. Estas jam multaj tomboj ĉirkaŭ la kapelo, sed ĉiuj homoj malsupre en la valo, ĉiuj venos iam en la tombejon. Ankaŭ lin, la junan knabon, kiu kantadas gaje la tutan tagon, oni prenos tien. Kiam?

〔單語〕 pensi 考へる。pri......のことに就て〔前置詞〕。familio 家族。infano 子供。jam 既に。sed 然し乍ら〔接續詞〕。ĉiu 各の、あらゆる, ĉiuj すべての. 皆。iam いつか (不定の時を示す副詞的助辭)。kiam 何時......か (疑問の助辭)。tuta 全き。preni 取る (英語の to take)。tie 其處に。

〔譯〕 若い少年は彼の家族, 彼の子供達の事を考へる。もう禮拜堂のまわりには澤山な墓があります, 然し下の, 谷の中のすべての人々は, 皆いつかは墓場へ來るのでせう。彼をも, 一日ぢう (la tut'a'n tag'o'n) 陽氣に歌ひつゞけてゐる (kant'ad'as) (所の kiu) 若い少年をも亦人がこゝえ (tie'n) つれて

のです。彼は歌ふのを止めて（歌ふこと kant' ad'o に於て停止する）そして耳を傾けました。彼はまた悲しげな唱歌を聞くのであります。

〔註〕 aŭdi（音が耳に入つて）聞こえる、聞く（感覚の無意志動詞，英語の hear）。aŭskulti（耳をかたむけて）聴く（意志動詞、英語の listen）。

Li ekvidas malproksime sur la vojo al la monteto multajn homojn, kiuj supreniras malrapide. La knabo ekkomprenas: Iu mortis en la valo, kaj oni portas lin supren en la tombejon. Eble la panisto mortis, car li estis tre malsana la lastajn tagojn.

〔単語〕 vidi 見る。vojo 道。al……へ，の處へ〔前置詞〕。kompreni 了解する、わかる。iu どれか、誰か。morti 死ぬ。porti 運ぶ。pano パン。car 何となれば……であるから。sana 健康な。lasta 最近の。tago 日。

〔譯〕 彼は遠方に小山へゆく道の上に、しづしづと登つてゆく (supr'e'n'ir'as) 多くの人を目にとめます (ek' vidas)。少年は悟ります (ek' komprenas)：誰か谷で死んだのだ，そして人が彼を墓地へ擔つて登つてゆく (supr'e'np'ort'as) のだと。多分 (ebl'e) パン屋さん (pan'isto) が死んだのだ。と云ふの

的助辭]。proksima 近き。goji 喜ぶ。gaja 陽氣な、氣の浮き浮きする様な。kanti 歌ふ。

〔譯〕 彼は牧童 (paŝt' isto) なのです，彼は羊の群 (ŝaf' aro) を牧養してゐます，そして彼はまた犬を持つてゐます，その犬は (kiu) 若し羊達 (彼等 ili) があまり遠くへ走りすぎると (ならば se) 羊の番をするのです。少年は嬉々として居り，そして彼は陽氣に歌ふのです。

〔註〕 目的格 -n にはまた運動の方向を示すのに用ひられることは既に第二課で述べた。Mi iras Londonon = Mi iras al Londono. 私はロンドンへ(を指して)行く。Mal'proksim'e'n 遠方へ。比較: malproksime 遠方に (在る，位置を示す)。

Subite li ekaŭdas muzikan sonon. La malnovaj sonoriloj de la kapelo sonaras malrapide kaj malgaje. Li haltas en kantado kaj aŭskultas. Li ankaŭ aŭdas malgajan kantadon.

〔單語〕 subite 急に，不意に。aŭdi 聞く。muziko 音樂。sono 音。nova 新しい。sonori (鐘が) 鳴る。rapida 速き。halti 停まる。aŭskulti 聽く。

〔譯〕 不意と彼は樂の音を耳にしました (ek'aŭdi)。禮拜堂の古い鐘 (sonor' il'o) はゆるやかにそして陰鬱に鳴りひゞく

limo 境界。l' 冠詞 la の略。bela 美しい。fonto 泉、源。el……の中から（外へ〔前置詞〕（英語の out of）。ŝpruci 噴く、迸る。akvo 水。freŝa 新鮮な。pura（交りけなく）清らかな、純な。tra……を通して、貫いて〔前置詞〕（英語の through）。vidi 見る。juna 若い。knabo 男の子。veni 來る。ofte 屢々〔副詞的助辭〕。trinki 飲む。tie 其處に。

〔譯〕下の方，牧場の上，森のはづれに，美し泉が石の間、地の中から迸り出てゐます。その水は新鮮で．清らかで且つすき透つてゐます（tra' vid' ebl'a）。若い少年が屢々そこに飲みにやつて參ります。

〔註〕定冠詞 la は母音で終つてゐる前置詞の後では之を l' と省略してもよろしい。例へば de l' arbaro. 但し此の時の發音は前の母音と合して：

でぇ　あぇばーろ。

又韻文ではなほ此の外母音に始まる語の前に la が來た時之を l' と略してよろしい。la obstina＝l' obstina ろぶすてぃーな。

Li estas paŝtisto; li paŝtas ŝafaron, kaj li ankaŭ havas hundon, kiu gardas la ŝafojn, se ili kuras tro malproksimen. La knabo estas ĝoja, kaj li kantas gaje.

〔單語〕ŝafo 羊。hundo 犬。kiu どれ、誰？〔疑問代名詞〕（それは何々してゐる）所の（者）〔關係代名詞〕（英語の which）。gardi 番をする。kuri 走る。se 若し……するならば。tro 餘り……過ぎる〔副詞

あります。その山は低いのです。それはほんの岡にすぎません。

Supre, sur la monteto, staras kapelo. Cirkaŭ la kapelo estas tombejo. En la tombejo estas multaj tomboj kun ŝtonoj kaj arbetoj. La kapelo kaj la tombejo estas silentaj sur la monteto.

〔單語〕 supre 上方に、上部に。stari 立つて居る。kapelo 祠、禮拜堂。tombo 墓, multa 多くの。kun……を持つたる、と共に〔前置詞〕(英語の with)、ŝtono 石。silenta 沈默せる、静寂な。

〔譯〕 上の方, 岡の上には. 禮拜堂が立つて居ります。禮拜堂のまわりには墓地 (tomb'ejo) があります。墓場の中には多くの墓が石や灌木 (arb'eto) と共にあります。禮拜堂と墓地とは小山の上に默然としてゐるのです。

〔註〕 silentaj は kapelo と tombejo との兩方を形容するのであるから複數語尾 j を附してある。

Malsupre, sur la paŝtejo, ĉe la limo de l' arbaro, bela fonto elŝprucas el la tero inter ŝtonoj. La akvo estas freŝa, pura kaj travidebla. Juna knabo venas ofte trinki tie.

〔單語〕 ĉe…… の處に〔前置詞〕(場所、時の一點を示す。英語の at)。

Leciono IV. En la Valo.

「谷　間」

En la valo estas kelkaj vilaĝetoj tre malgrandaj. Ĉirkaŭ la vilaĝoj estas kampoj, kie la homoj laboras por kulturi la teron.

〔單語〕 valo 谷。kelka 數個の、若干の。vilaĝo 村。tre 甚だ〔前詞的助辭〕。granda 大きな。ĉirkaŭ……のまわりに〔前置詞〕。kampo 野、畑。kio 何處に？〔疑問の助辭〕、（其處には……してゐる）所の〔關係代副詞〕（英語の where に當る）。homo 人。labori 働く。por……する爲め〔前置詞〕。kulturi 耕す、教化す。tero 地。

〔譯〕 谷の中にはたいそう小さな (mal'granda) 小村落 (vilaĝ'-et'o) がいくつかあります。その村のまわりには畠があり、そこには人々が地を耕すために働いて居ります。

Estas ankaŭ arbaro kaj paŝtejo apud monto. La monto estas malalta. Ĝi estas nur monteto.

〔單語〕 ankaŭ も亦〔副詞的助辭〕。arbo 木。paŝti 牧畜す。apud……のそばに〔前置詞〕。monto 山。alta 高い。nur 唯……のみ、に過ぎぬ、しかない〔副詞的助辭〕（英語の only）。

〔譯〕 また山のそばに森 (arb'ar'o) と牧場 (paŝt'ej'o) が

国際語

エスペラント講座

工學士 小坂狷二講

學習者諸君へ

◎ エスペラントの普及は最近世界的に一大進展をなした。今開かれつゝある國際聯盟にエスペラント教授に關する提案が豫定の如く出された事は讀者諸君は既に新聞紙上で讀まれた事と思ふ。

◎ 吾人の意を强ふするに足る報道が到着した。それは近來佛國政府がエスペラント普及に對して明らさまに妨碍を始めた事である。唯一の國際語、外交語として佛語が自他共にゆるされてゐる自負してゐた佛政府、人工語何すべきぞと眼中にも置かなかつた佛の官僚は此のエスペラントの大發展を見て、愕然として佛語擁護の上からその阻止に取りかゝつたものである。然し乍らエスペラントはあまりに多く既に各國の民族間の正義を愛する人々の胸に根を下ろしてゐる。既に『事實』となつてゐる。一政府の力などはその歩みを阻むことは出來ぬ。

◎ 十月十四日から四日間第十回日本エスペラント大會が開かれ、十五日午後一時から神田の明治會館で公開普及講演會が催される。

◎ エスペラントに關し質疑を寄せられた方が澤山ある。習語上の問題は一般讀者諸君に有益であるから本誌の此の餘白を借りて解答を發表して行きたいと思つてゐる。

靈の王國

東京芝區愛宕下町

定價壹圓五拾錢
◇送料十五錢◇
◇四六版布製◇

室伏高信著

本書は、ラーテナウの思想の精髓を傳へたるものである。彼は現代獨逸に星の如く輝く最高の政治家、豫言者、哲學者であり、科學者である彼は、科學と主知哲學を地の卑さに墜した、獨逸改造の全責任者として彼は、人の心から、崇高なるものを抽き出す事が、人生の目的だといふた。獨逸に二人しかない大金持の彼は、世界に二人とない鋭い社會主義者であつた。資本家も、勞働者も、人も物も、現代の一切のものは魂を喪つた奴隷制度である、と彼は論じた。靈の王國を建てよと彼は叫んだ。魂の夜明の時代がきたと彼は豫言した。

忽五版

改造社　振替東京八四〇二

相對性の通俗解説

理學博士 石原純編著

相對性理論の諸斷面

第一輯定價八十錢
書留送料十一錢
（全五輯以下續刊）

アインスタイン全集と共に今回石原博士によりて企劃されたるパンフレット「相對性理論の諸斷面」はアインスタインの學説を研究するものの何人も一讀すべき有益の書であります。尙ほ本パンフレットは五册よりなり一册百頁より百五十頁位までとして定價は八十錢内外です、尙石原博士がその[illegible]について説明されました趣意書を御一讀ください。

相對性理論の奥ぶかい内容を解り易く説明することは至難の事がらです。たくさんの世に行はれてゐる書物のなかには或は誤りて説き或はその説明に觸れないものもないではありません。私は現時の諸大家の書いたものゝなかから、適當なる言葉を抽き出して之を系統に綴り、一の相對性理論に對するいろ〳〵な解き方を照させて、その諸斷面を讀者のまへに掲げて見やうと思ひます。之れ等が最も信據すべきものであるばかりでなく又之を詳細に味ふときはそれぞれの諸家の面目特質をもその言葉に聞くことが出來る點に於て興味多いことであります。

（著者）

東京 改造社 發行

LA REKONSTRUO MONATA REVUO DE
POLITIKO, LITERATURO, SOCIAJ AFEROJ, KTP.
PREZO: UNU EKZ. OKDEK SENOJ, JARE DEKDU JENOJ.
OFICEJO: KAIZOŜA, 1 ATAGOSITAMAĈI, ŜIBA, TOKIO.

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可
大正拾壹年十月壹日發行（毎月一回一日）　大正拾壹年九月廿日印刷納本
第四卷第十號　十月號　定價金八拾錢